第４章　井辺１号墳の調査成果

第１節　調査の目的と方法

（１）調査の目的

井辺地区は和歌山市井辺に所在し、岩橋丘陵南西部の大日山から南に派生する尾根の先端部に位置する（図 29）。分布調査の結果、43 基の古墳が確認されており、墳形別の内訳は円墳 35 基、方墳７基、円墳または方墳１基である（第３章参照）。岩橋千塚古墳群の他の地区と比較して方墳の割合が高く、丘陵裾部の緩斜面に古墳が密集していることが特徴である。

井辺１号墳は、地区内最大の古墳であるとともに紀伊地域最大の方墳であり、地区を代表する首長墳である。昭和 40・41 年（1965・1966）に関西大学考古学研究室により埋葬施設である横穴式石室の発掘調査が実施されており、７世紀初頭前後に築造された終末期古墳であることが分かっている。令和２年度の確認調査では、井辺地区のさらなる性格の解明に向けて、測量調査を実施して古墳の分布状況を把握するとともに、地区を特徴づける古墳である井辺１号墳の墳丘部分の規模及び構造の把握を目指し、古墳群の価値付けを検討するにあたっての基礎的情報を得ることを目的とした。

（２）既往の調査

井辺１号墳は、前述のとおり、関西大学考古学研究室によって石室部分の発掘調査が行われ、あわせて墳丘部分の測量図が作成されている（図 30、関西大学考古学研究室 1967）。その報告で

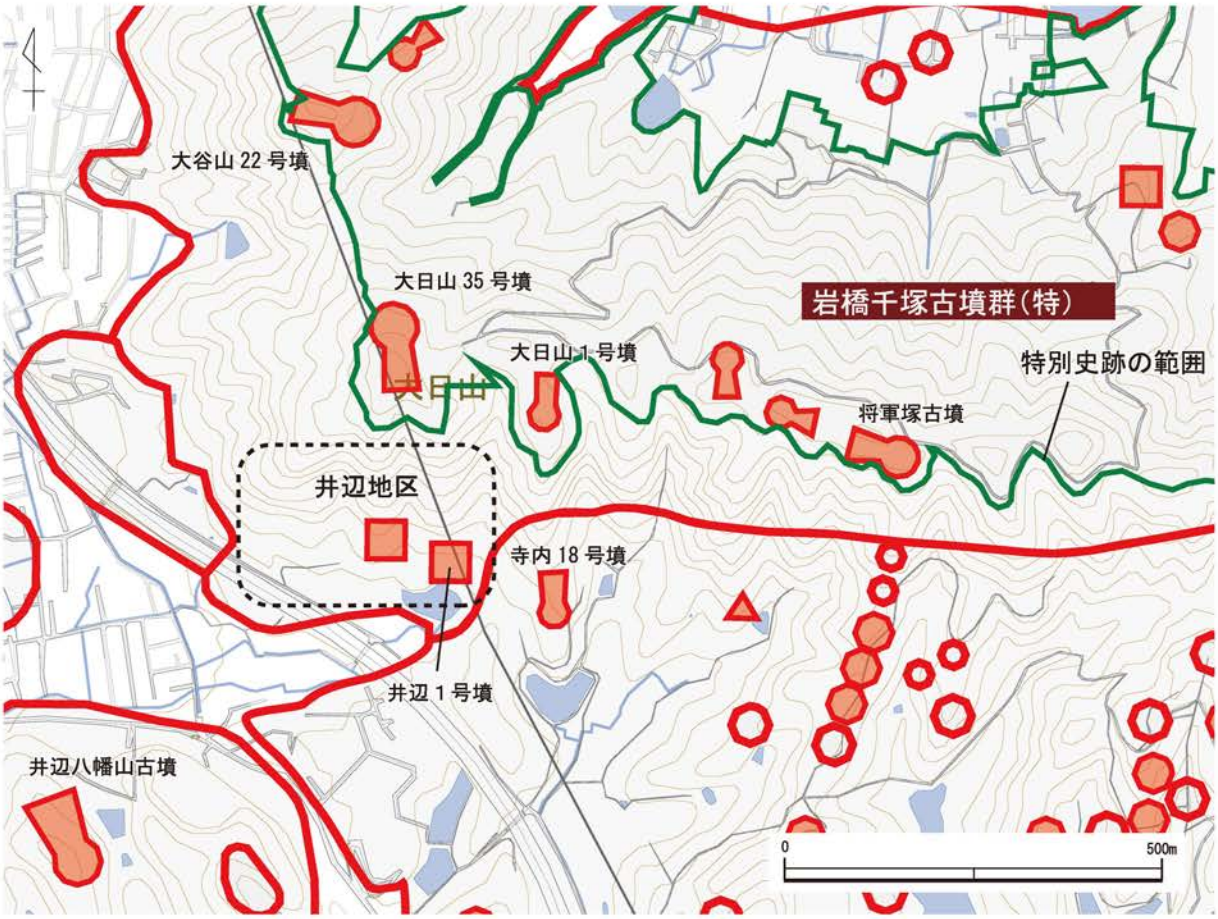


図 29　井辺地区の位置（和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図に加筆、S=1/10,000）

は、井辺１号墳は東西に溝状の加工がみられる台形状の方墳であり、墳丘の南側に「前庭」という平坦面を有するとされている。また、墳丘北側の丘陵部分を切断しており、墳丘の形状をより明確にしている。規模は測量図をもとに南辺 40m、北辺 28m、東辺 39m、西辺 38m、前庭幅 5m、北辺の高さ 1.75m、南辺の高さ 14m と報告されている。また、外表施設として埴輪及び葺石は確認されていない。

埋葬施設は結晶片岩を積み上げた横穴式石室であり、南北方向に構築されている。平面形は両袖式で玄室前道及び羨道を有する岩橋型横穴式石室である。すでに過去の盗掘により、天井石の大部分は失われているが、玄室奥側及び玄室前道部分において残存している。玄室奥壁に石棚が１枚みられ、近接して羨道側に石梁が１本確認できる。石室の平面規模は、長さ 4.15m、幅 2.7m、玄室前道の長さ 1.1m、幅 1.23m、羨道は前室と前庭部で構成され、長さ 5.08m、幅 1.73m である。床面は盗掘により攪乱を受けていたが、玉石が厚さ 10cm で敷かれていたことが報告されている。また、玄室の奥側に結晶片岩の棺台が東西方向に設置されており、支石２枚の上に長さ 2.0m、幅 0.8m ～ 1.0m、厚さ 17cm の板石がのせられている。排水溝は石室中央を南北に通り、断面が V 字形になるように掘削して側壁を設置し、蓋石を置いている。羨道の入口部分では長さ約 1.2m の範囲で閉塞石が詰められている状態が確認されている。

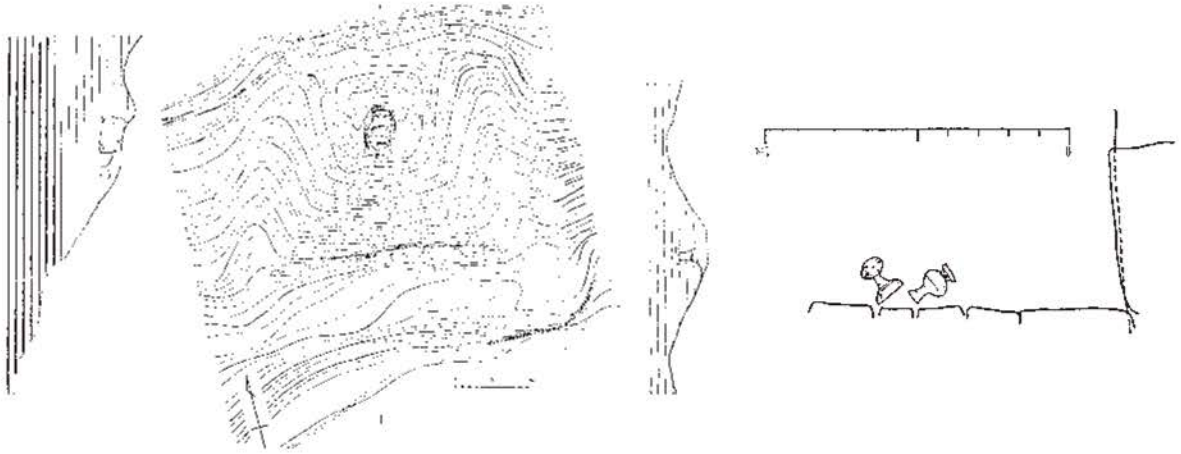
出土遺物は、玄室の南西部、側壁付近から須恵器瑞と台付長頸壺が見つかっている。また、東側の側壁付近から土師器皿が出土している。棺台周辺の黒色土層から鉸具、鉄鏃、不明鉄製品が見つかっており、玄室の攪乱土層から責金具や輪状銅製品が出土している。羨道部においては、土師器の壺、甕、椀が出土しているほか、排水溝の蓋石上の攪乱土層から金環が見つかっている。その他、石室内に流れ込んだ土層から埴輪片及び須恵器片が出土したことが報告されている。築造年代は出土した須恵器から、６世紀末ないし７世紀初めごろとされ、さらに、各地にみられる終末期古墳との比較から、被葬者が政権中枢に近い位置にあった人物であることが想定されている。

以上のとおり、井辺１号墳の石室部分における発掘調査の結果、石室の構造及び築造年代については詳細が判明しているが、墳丘部分については発掘調査が実施されておらず、正確な墳丘規模及び段数が不明であった。そのため、調査にあたっては、墳丘規模の確定及び構造の把握を行うことを第一の目的とし、また、全体構造の解明にあたって、墳丘前面にある「前庭」と呼称される基壇状の施設が墳丘に付随するものかどうかについても検証するとともに、墳丘周囲をとりまく丘陵部分と周溝との接続関係も明らかにすることも目的とした。なお、昭和期の調査で「前庭」として報告されている部分については、本報告においては、以下「基壇」と呼称する。

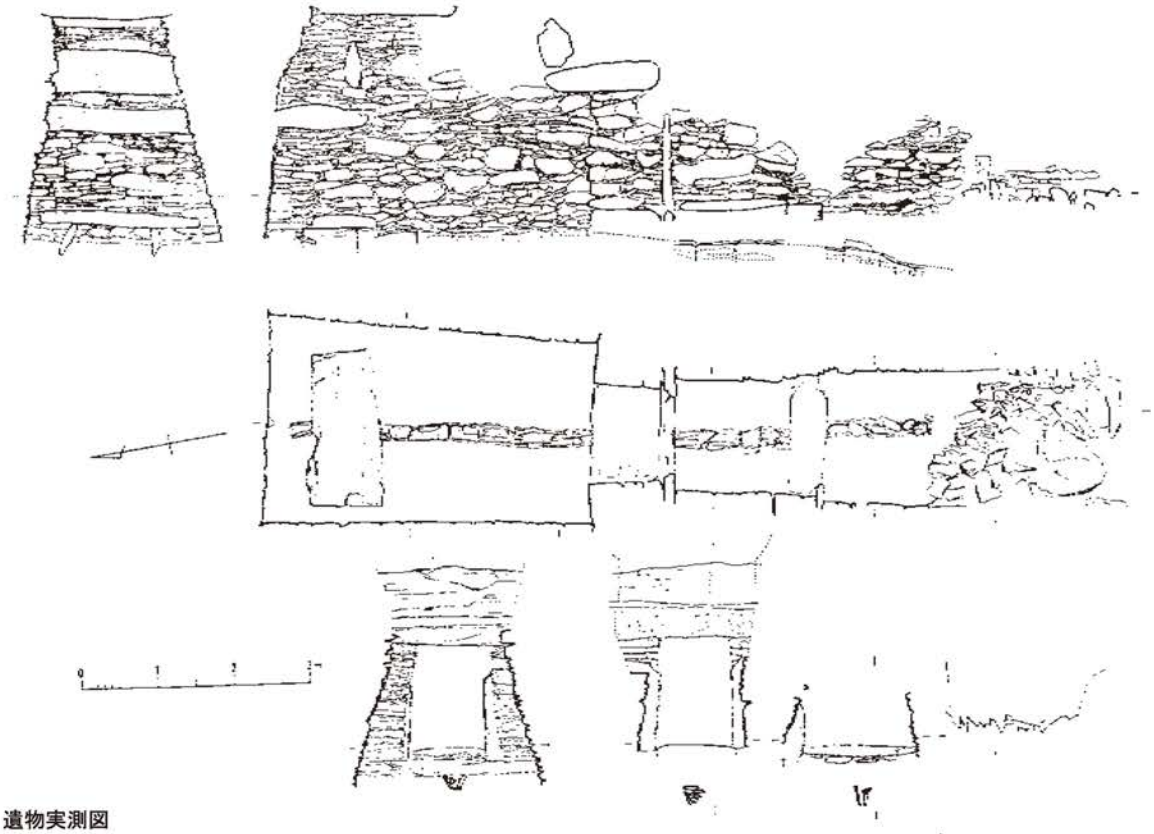
（３）調査方法

調査にあたって、レーザー測量により 1/100 の地形測量図を作成した。コンターラインは 20cmごとである。また、墳丘及び周囲の地形の縦断面図、横断面図及び斜め方向の断面図の作成を行った。調査の主軸線は、現在露出している石室の天井石及び石梁から石室の中軸線を割り出し、それをもとに墳丘の南北方向に設定した。トレンチは、測量図を参考に地形観察を行いながら、墳丘の東西南北の隅部分の検出及び周溝、基壇部分の構造把握を目的に 1,2,5,6 トレンチを設けた（図 31）。また、墳丘前面及び基壇部分の構造把握を目的に３トレンチを主軸線に沿って設け、墳丘背面から北側の

写真７　現在の石室の状況（南西から）



石室実測図



遺物実測図

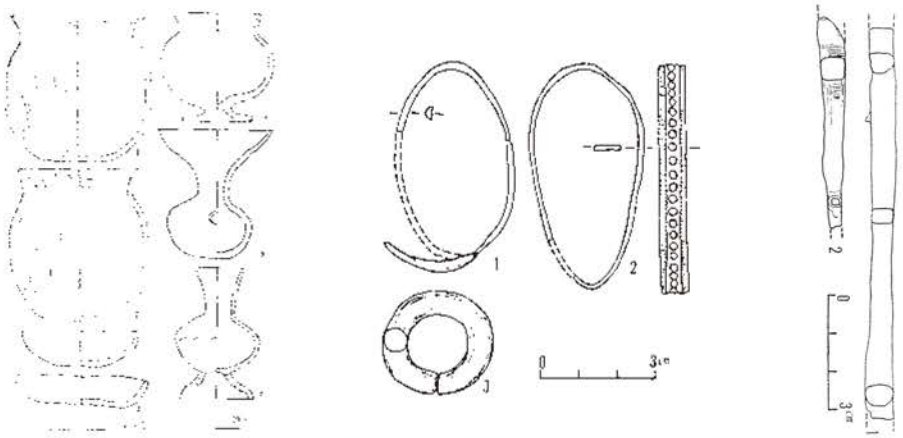


図 30　関西大学考古学研究室による発掘調査の成果（関西大学考古学研究室編 1967）

丘陵部分にかけて４トレンチを設定した。また、墳丘東側の側面から周溝、丘陵尾根部分にかけて、墳丘形状に直交する方向で７トレンチを設定した。掘削は人力により行い、各トレンチにおいて、1/20 の平面図及び断面図を作成し、１トレンチにおいては立面図を作成した。写真撮影はフルサイズデジタルカメラにより行った。埋戻しにあたっては、遺構面の保護のため不織布を敷いた上で、掘削土を用いて行った。基準点測量にあたっては、測量業務において設定した４級基準点を用いた。

（４）基本層序

調査における基本層序は次の４層に大別した。細分層は各トレンチ間において対応しない。

第１層：現在の地表面である表土層。過去の掘削に伴う掘り上げ土も含む。

第２層：古墳築造後に堆積した流土。埴輪、須恵器及び近世以降の遺物を含む。

第３層：墳丘及び基壇を構成する盛土であり、埴輪及び須恵器を含む。

第４層：地山、岩盤層である。１トレンチにおいては古墳構築前の旧表土層も含む。

第２節　調査成果

（１）測量調査

既往の調査により、井辺１号墳は南辺が北辺よりも広い台形状の方墳であり、南辺が東西方向

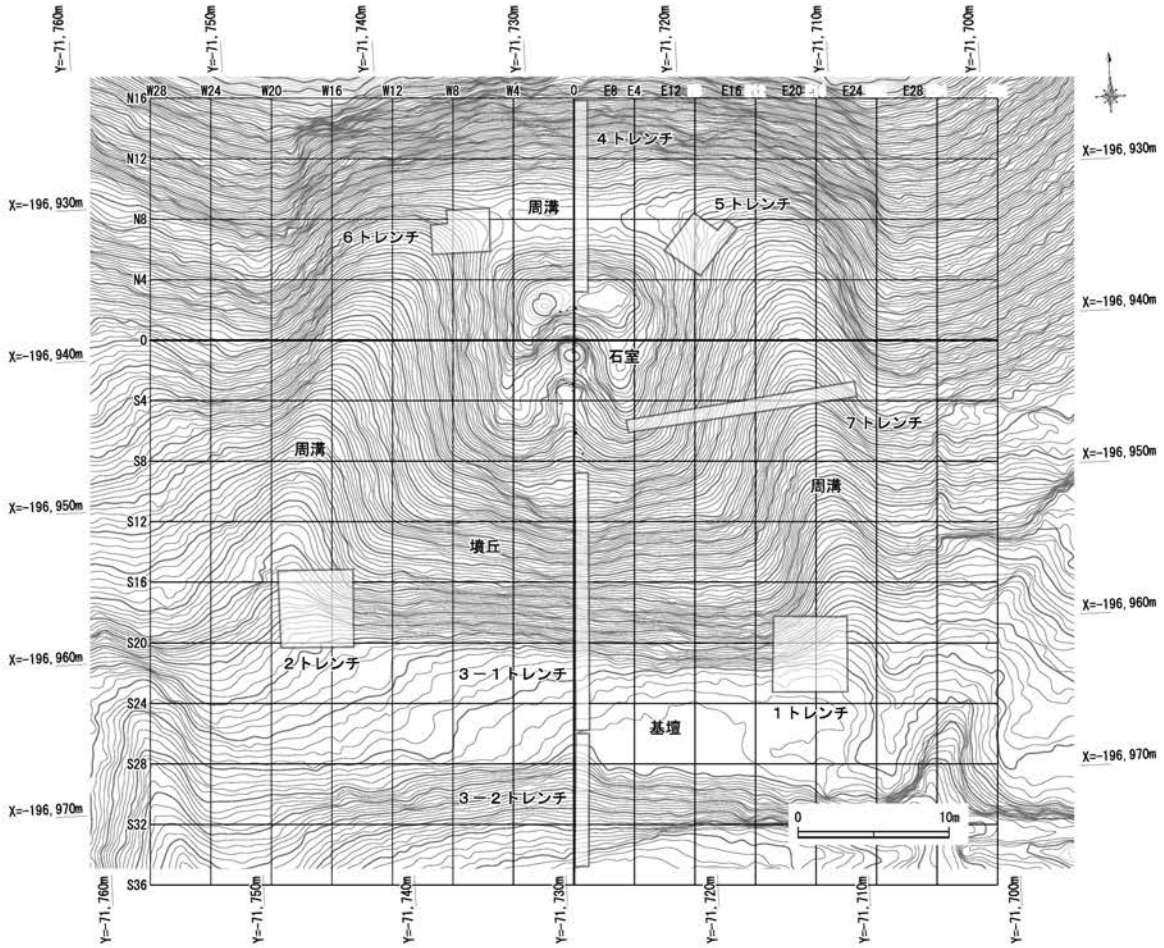
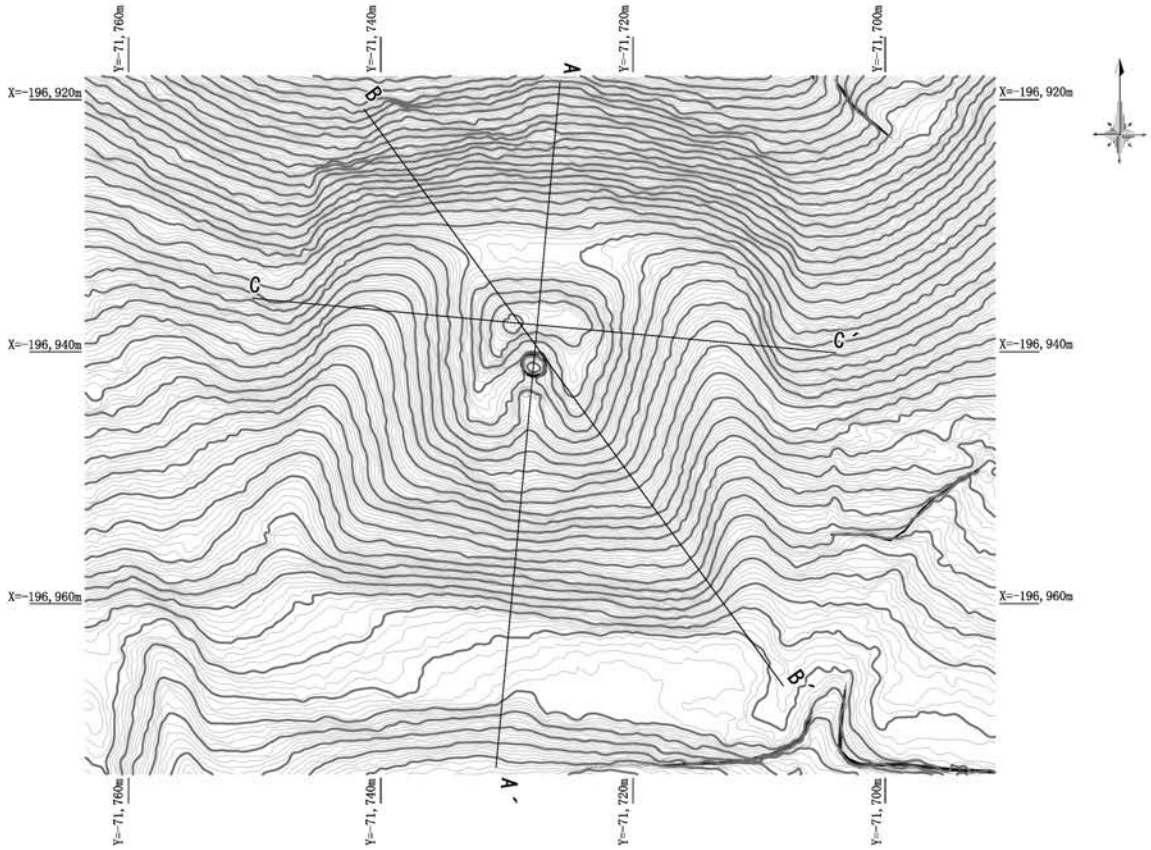


図 31　井辺１号墳　トレンチ配置及び調査グリッド（S ＝ 1/500）



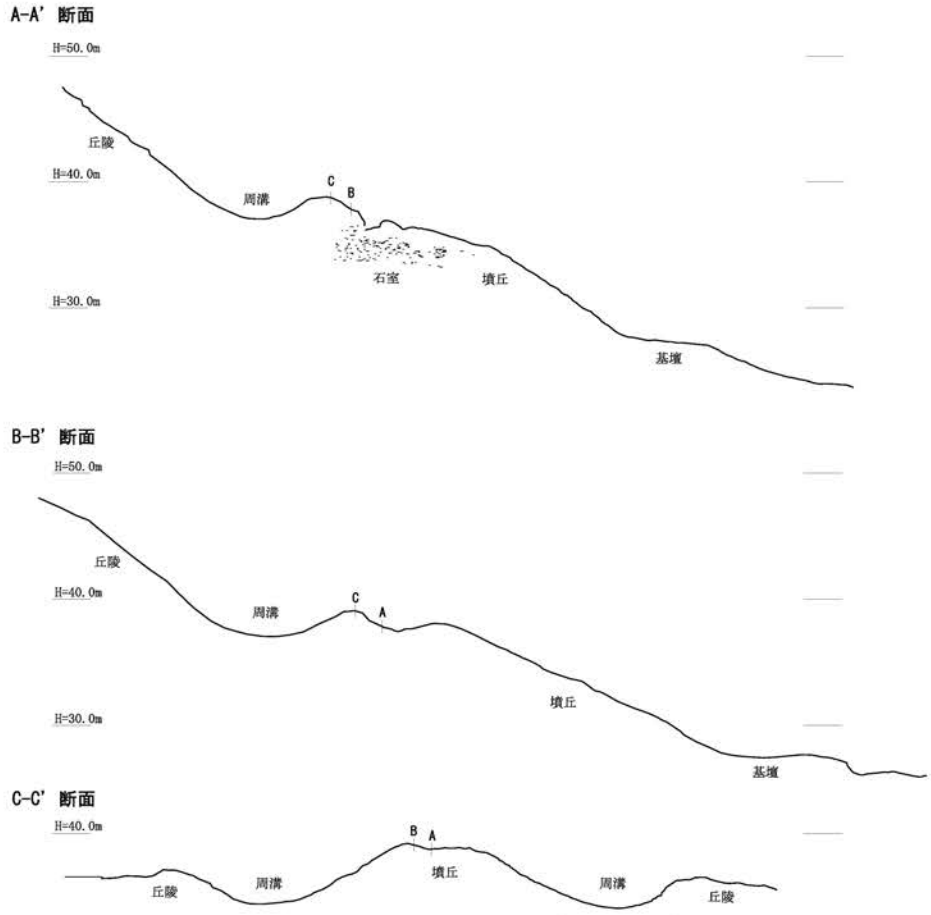


図 32　測量図及び地形断面図（S=1/600）

となるように築造されていることが分かっているが、測量図を作成した結果（図 32)、古墳の南北方向の主軸は、座標北よりも東に 5 度振っている。主軸線に沿って作成した断面図（A-A' 断面）からは、地表面との比高差でみると北側が低く、南側が高く構築されており、丘陵の斜面を有効に利用していることが分かる。地形上は幅約 50m の尾根の先端部に位置しているが、横断方向で作成した断面図（C-C' 断面）からも分かるとおり､尾根の中央部分を掘り込むことにより、東西の周溝を形成しており、墳丘の形状がより明瞭となっている。また、現状の地表面の観察から墳丘斜面の角度が緩やかになる部分が 3 箇所確認できるが、主軸部分の断面図では、墳丘前面はふくらんだ形状となっており、主軸上においては傾斜変換が不明瞭となっている。墳丘前面にある基壇部分については北から南にゆるやかに下がる平坦面が形成されている。墳丘の南辺及び平坦面のコンタ―ラインからは､西側から東側に向けてゆるやかに低くなっていることが分かり、これは旧地形に起因するものと考えられる。

（2）墳丘南東隅部分の調査（1 トレンチ）

墳丘の南東隅部分において、南北 5.0m、東西 5.0m の方形に 1 トレンチを設定した。墳丘の南東隅部分の検出、周溝及び基壇の構造を把握するために設定した（図 33 ～ 36)。まず、表土を除去したのち、墳丘面の検出を行うため、北西側におて墳丘上に堆積した流土を見極めながら掘削を行った。その後、しまりが強く、結晶片岩の破片を多く含む層を確認したことから、墳丘面であると判断し、全面的に検出を行ったところ、墳裾付近において結晶片岩で構成される面状の層を検出した。長径 15cm ～ 35cm の大きさに細かく割れており、一部で乱れたような状況がみられるが、結晶片岩の片理面がそろっており、下部に流土がまじらないことから岩盤層であると考えられる。産業技術総合研究所が公開している「地質図 Navi」では、井辺地区は苦鉄質片岩から泥質片岩に切り替わる位置に相当し、岩盤表面の観察からは風化が進行しているようにみえる。検出した岩盤層は、トレンチ南西部の基壇部分において、斜面から水平に傾斜が変換している。トレンチの北半において検出した墳丘面は、色調や含有する片岩の多寡により平面的に細分が可能であり、後述するように墳丘部分で行った断ち割りの結果、これらは細かく水平に堆積していることが分かり、盛土であると考えられる。また、墳丘の前面において基壇の平坦面を検出するとともに、東側において周溝の底面を検出した。

墳丘の南東隅と考えられる屈曲点は、トレンチ南東の方部から西へ 1.1m、北へ 2.2m の地点において検出した。墳丘前面は南に面した東西方向の墳裾となっているが、屈曲点からは北側に墳丘面が曲がっている。また、トレンチの北西－南東方向に設定したアゼに沿って基壇部分で断ち割りを行った結果、平坦面から深さ 14cmで岩盤に由来する礫を多く含む土層（第 4-7 層）を検出した。そのため、墳丘南東部分における岩盤面は、北から南に下がって傾斜するとともに、西から東に向かって下がっていると考えられる。また、基壇上面を構成している第 3 層から埴輪片が出土した。井辺 1 号墳は埴輪をもたないことから、基壇面を構築する際の盛土中に埴輪が含まれていたと考えられる。

また、東側の周溝部分では、流土である第 2 層に近世の陶磁器が含まれており、礫と焼土を検出した（写真図版 24 － 2)。他のトレンチにおいても、近世期の遺物が出土しており、当該時期に付近への人の出入りがあったことが分かる。記録作成後、さらに掘削を進め、各所で断ち割りを実施した。周溝部分では、トレンチの中央部東側において東西方向に断ち割りを行った結果、粘性の高い土層（第 4-9 ～ 11 層）を検出した。岩盤の下に位置しており、古墳構築前から堆積していた自然由来の土層と考えられる。また、トレンチ北東部分における断ち割りにおいても、古墳構築前の旧表土層（第 4-1 層）と考えられる褐色の層を検出した。これらのことから、東側、南東側においては、結晶片岩の岩盤が途切れていると考えられ、墳丘構築前に旧表土となっている部分まで削った上で一部を盛土して基壇及び周溝を構築していることが分かった。また、墳丘

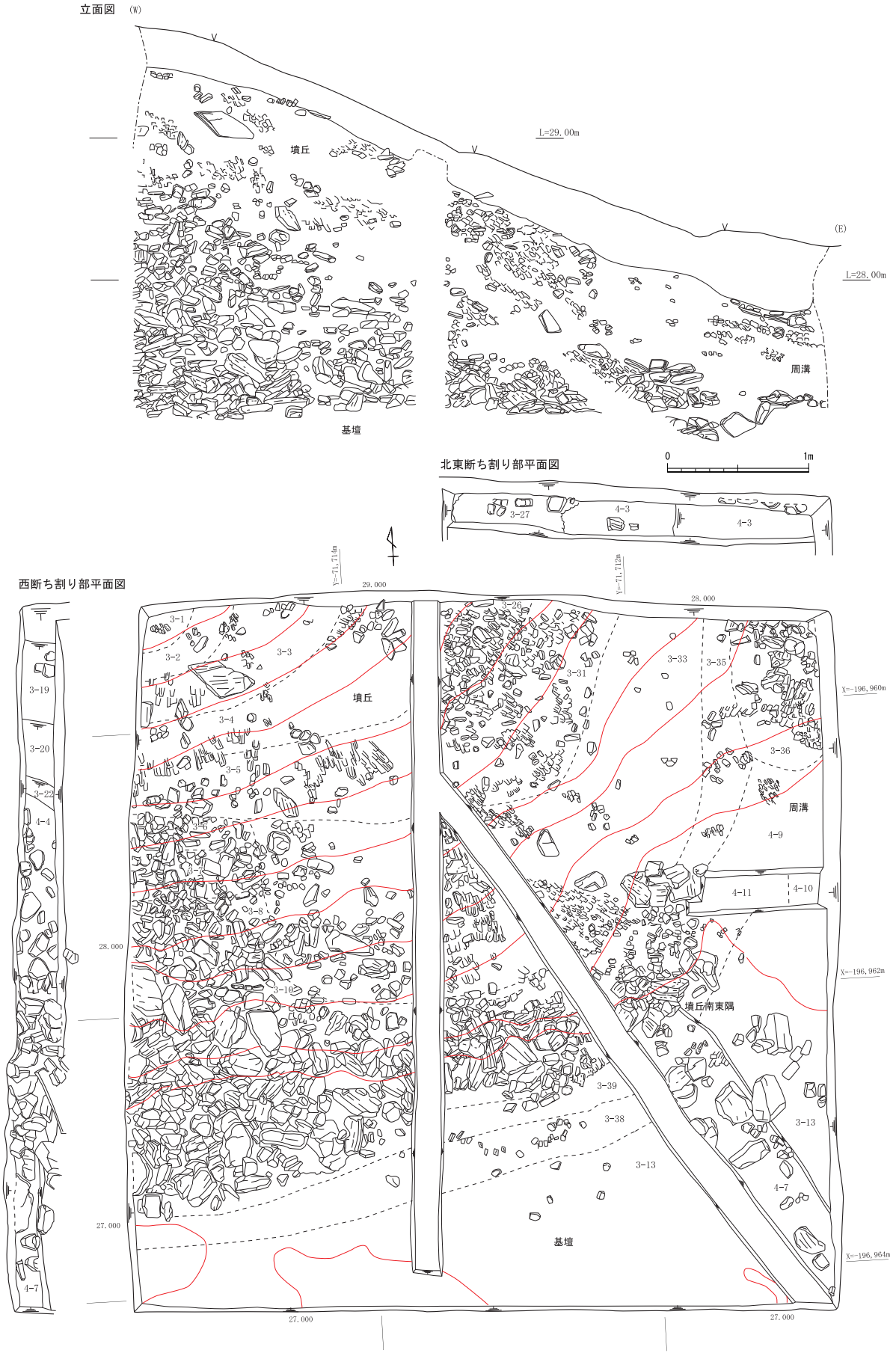
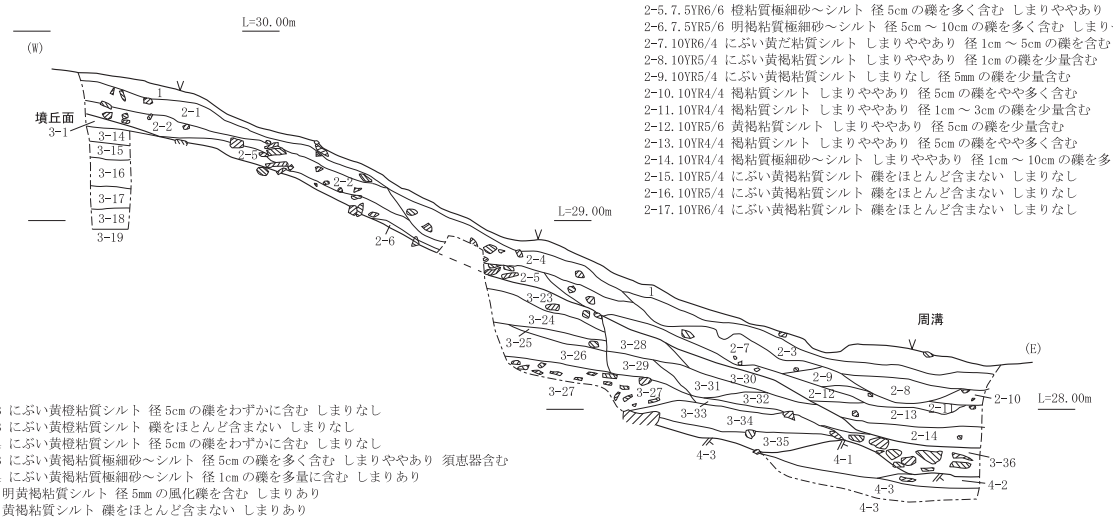


図 33　1 トレンチ　平面図及び立面図（S=1/40）

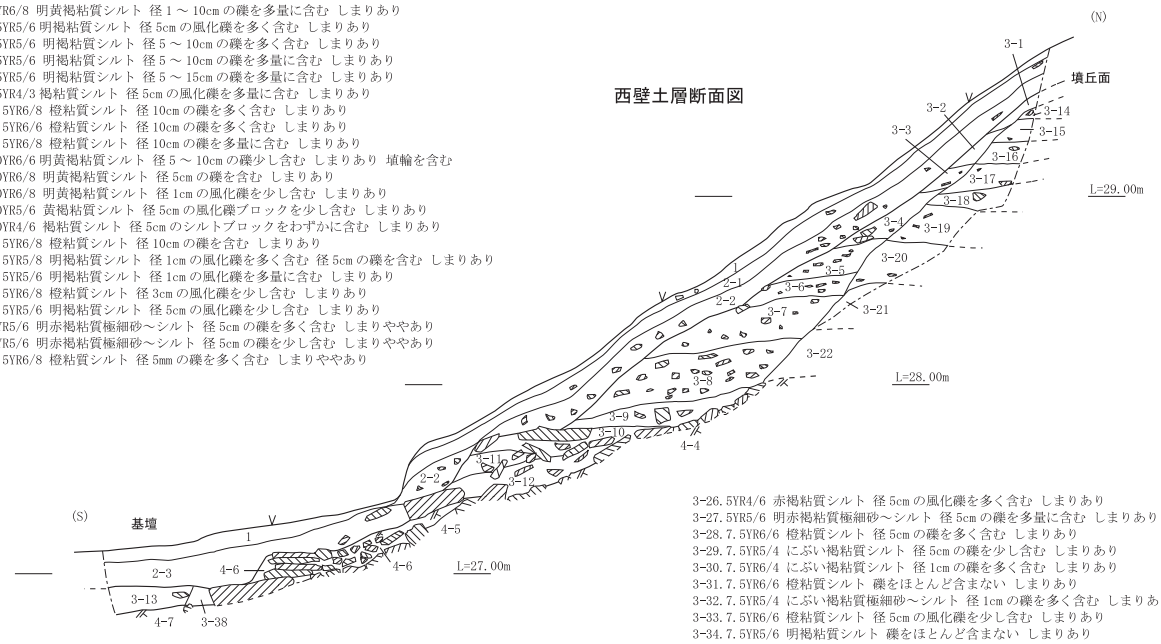
1.10YR4/2 灰黄褐粘質極細砂～シルト しまりなし
2-1.10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト しまりなし 径 2cm ～ 5cm の礫を少量含む
2-2.10YR6/6 明黄褐粘質シルト しまりややあり 径 5cm の礫を多く含む
2-3.10YR7/4 にぶい黄橙粘質極細砂～シルト しまりやや強い 径 1cm の礫少量含む
2-4.10YR6/6 明黄褐粘質シルト 径 5cm ～ 10cm の礫を多く含む しまりやや強い
2-5.7.5YR6/6 橙粘質極細砂～シルト 径 5cm の礫を多く含む しまりややあり
2-6.7.5YR5/6 明褐粘質極細砂～シルト 径 5cm ～ 10cm の礫を多く含む しまりややあり
2-7.10YR6/4 にぶい黄だ粘質シルト しまりややあり 径 1cm ～ 5cm の礫を含む
2-8.10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト しまりややあり 径 1cm の礫を少量含む
2-9.10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト しまりなし 径 5mm の礫を少量含む
2-10.10YR4/4 褐粘質シルト しまりややあり 径 5cm の礫をやや多く含む
2-11.10YR4/4 褐粘質シルト しまりややあり 径 1cm ～ 3cm の礫を少量含む
2-12.10YR5/6 黄褐粘質シルト しまりややあり 径 5cm の礫を少量含む
2-13.10YR4/4 褐粘質シルト しまりややあり 径 5cm の礫をやや多く含む
2-14.10YR4/4 褐粘質極細砂～シルト しまりややあり 径 1cm ～ 10cm の礫を多く含む
2-15.10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト 礫をほとんど含まない しまりなし
2-16.10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト 礫をほとんど含まない しまりなし
2-17.10YR6/4 にぶい黄褐粘質シルト 礫をほとんど含まない しまりなし

北壁土層断面図



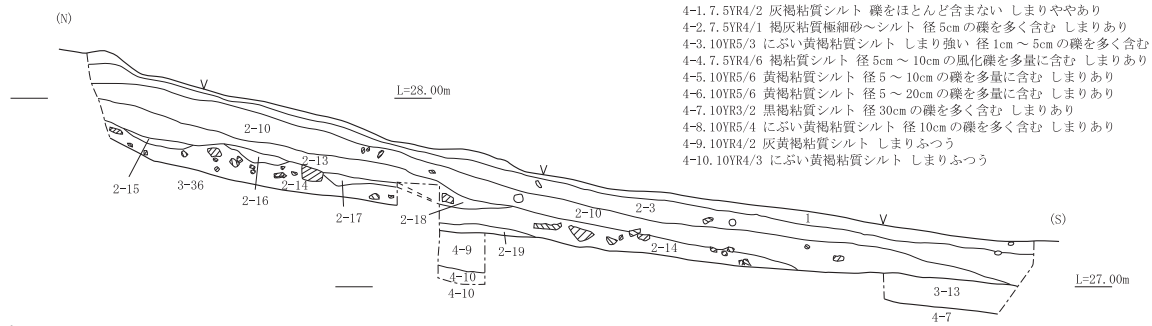
2-18.10YR6/3 にぶい黄橙粘質シルト 径 5cm の礫をわずかに含む しまりなし
2-19.10YR6/3 にぶい黄橙粘質シルト 礫をほとんど含まない しまりなし
2-20.10YR6/4 にぶい黄橙粘質シルト 径 5cm の礫をわずかに含む しまりなし
2-23.10YR5/3 にぶい黄褐粘質極細砂～シルト 径 5cm の礫を多く含む しまりややあり 須恵器含む
2-24.10YR5/4 にぶい黄褐粘質極細砂～シルト 径 1cm の礫を多量に含む しまりあり
3-1.10YR6/6 明黄褐粘質シルト 径 5mm の風化礫を含む しまりあり
3-2.10YR5/8 黄褐粘質シルト 礫をほとんど含まない しまりあり
3-3.10YR6/8 明黄褐粘質シルト 径 1cm の礫を多く含む しまりあり
3-4.10YR6/8 明黄褐粘質シルト 径 1 ～ 10cm の礫を多量に含む しまりあり
3-5.7.5YR5/6 明褐粘質シルト 径 5cm の風化礫を多く含む しまりあり
3-6.7.5YR5/6 明褐粘質シルト 径 5 ～ 10cm の礫を多く含む しまりあり
3-7.7.5YR5/6 明褐粘質シルト 径 5 ～ 10cm の礫を多量に含む しまりあり
3-8.7.5YR5/6 明褐粘質シルト 径 5 ～ 15cm の礫を多量に含む しまりあり
3-9.7.5YR4/3 褐粘質シルト 径 5cm の風化礫を多量に含む しまりあり
3-10.7.5YR6/8 橙粘質シルト 径 10cm の礫を多く含む しまりあり
3-11.7.5YR6/6 橙粘質シルト 径 10cm の礫を多く含む しまりあり
3-12.7.5YR6/8 橙粘質シルト 径 10cm の礫を多量に含む しまりあり
3-13.10YR6/6 明黄褐粘質シルト 径 5 ～ 10cm の礫少し含む しまりあり 埴輪を含む
3-14.10YR6/8 明黄褐粘質シルト 径 5cm の礫を含む しまりあり
3-15.10YR6/8 明黄褐粘質シルト 径 1cm の風化礫を少し含む しまりあり
3-16.10YR5/6 黄褐粘質シルト 径 5cm の風化礫ブロックを少し含む しまりあり
3-17.10YR4/6 褐粘質シルト 径 5cm のシルトブロックをわずかに含む しまりあり
3-18.7.5YR6/8 橙粘質シルト 径 10cm の礫を含む しまりあり
3-19.7.5YR5/8 明褐粘質シルト 径 1cm の風化礫を多く含む 径 5cm の礫を含む しまりあり
3-20.7.5YR5/6 明褐粘質シルト 径 1cm の風化礫を多量に含む しまりあり
3-21.7.5YR6/8 橙粘質シルト 径 3cm の風化礫を少し含む しまりあり
3-22.7.5YR5/6 明褐粘質シルト 径 5cm の風化礫を少し含む しまりあり
3-23.5YR5/6 明赤褐粘質極細砂～シルト 径 5cm の礫を多く含む しまりややあり
3-24.5YR5/6 明赤褐粘質極細砂～シルト 径 5cm の礫を少し含む しまりややあり
3-25.7.5YR6/8 橙粘質シルト 径 5mm の礫を多く含む しまりややあり

西壁土層断面図



3-26.5YR4/6 赤褐粘質シルト 径 5cm の風化礫を多く含む しまりあり
3-27.5YR5/6 明赤褐粘質極細砂～シルト 径 5cm の礫を多量に含む しまりあり
3-28.7.5YR6/6 橙粘質シルト 径 5cm の礫を多く含む しまりあり
3-29.7.5YR5/4 にぶい褐粘質シルト 径 5cm の礫を少し含む しまりあり
3-30.7.5YR6/4 にぶい褐粘質シルト 径 1cm の礫を多く含む しまりあり
3-31.7.5YR6/6 橙粘質シルト 礫をほとんど含まない しまりあり
3-32.7.5YR5/4 にぶい褐粘質極細砂～シルト 径 1cm の礫を多く含む しまりあり
3-33.7.5YR6/6 橙粘質シルト 径 5cm の風化礫を少し含む しまりあり
3-34.7.5YR5/6 明褐粘質シルト 礫をほとんど含まない しまりあり
3-35.7.5YR5/8 明褐粘質極細砂～シルト 径 5cm の風化礫多く含む しまりあり
3-36.7.5YR4/4 褐粘質極細砂～シルト 径 5cm ～ 15cm の礫を多量に含む しまりあり
3-37.10YR4/1 褐灰粘質シルト 径 10 cm～ 20cm の礫を多く含む しまりややなし
4-1.7.5YR4/2 灰褐粘質シルト 礫をほとんど含まない しまりややあり
4-2.7.5YR4/1 褐灰粘質極細砂～シルト 径 5cm の礫を多く含む しまりあり
4-3.10YR5/3 にぶい黄褐粘質シルト しまり強い 径 1cm ～ 5cm の礫を多く含む
4-4.7.5YR4/6 褐粘質シルト 径 5cm ～ 10cm の風化礫を多量に含む しまりあり
4-5.10YR5/6 黄褐粘質シルト 径 5 ～ 10cm の礫を多量に含む しまりあり
4-6.10YR5/6 黄褐粘質シルト 径 5 ～ 20cm の礫を多量に含む しまりあり
4-7.10YR3/2 黒褐粘質シルト 径 30cm の礫を多く含む しまりあり
4-8.10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト 径 10cm の礫を多く含む しまりあり
4-9.10YR4/2 灰黄褐粘質シルト しまりふつう
4-10.10YR4/3 にぶい黄褐粘質シルト しまりふつう

東壁土層断面図



南壁土層断面図

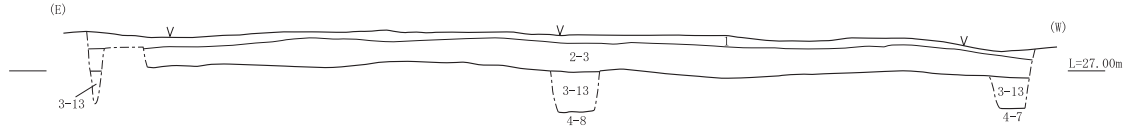
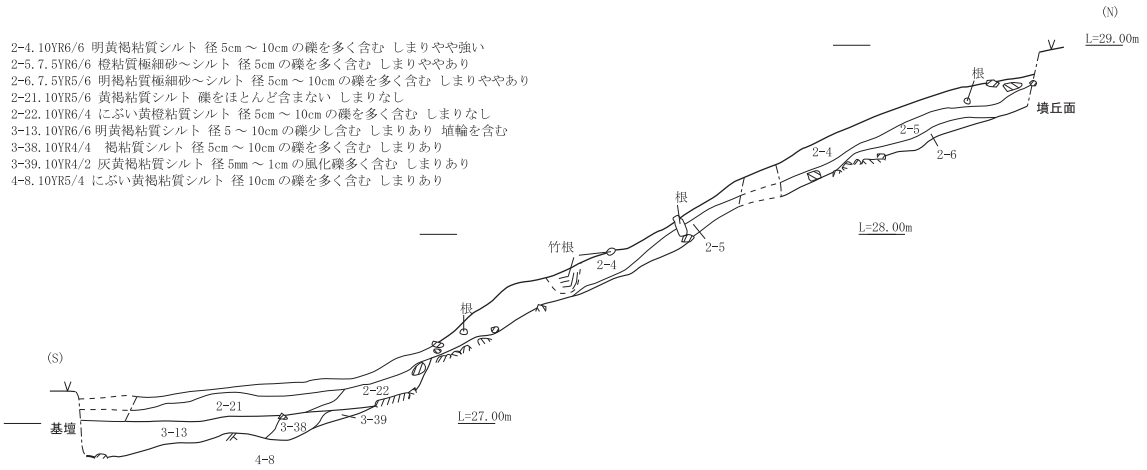
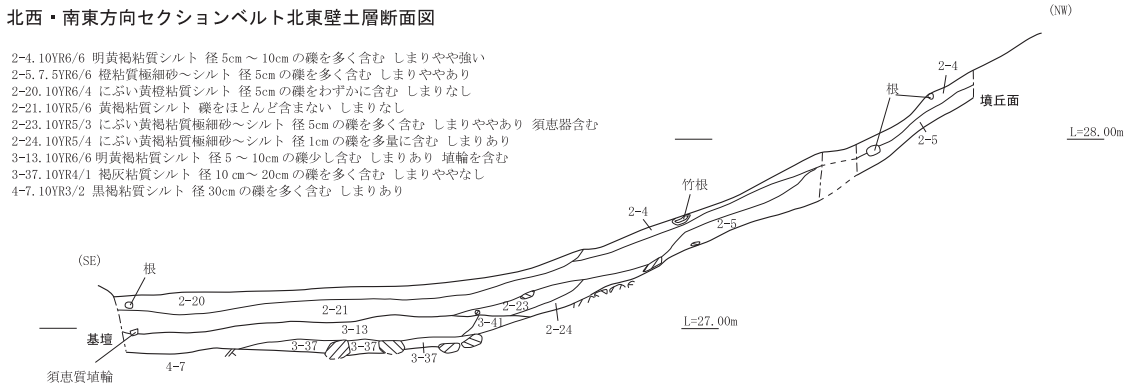


図 34　1 トレンチ　土層断面図 1 （S=1/40）

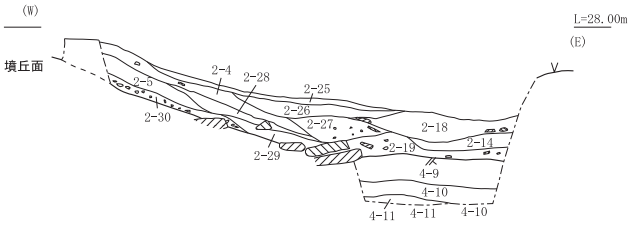
南北セクションベルト東壁土層断面図



北西・南東方向セクションベルト北東壁土層断面図



東西断ち割り部北壁土層断面図



2-4.10YR6/4 にぶい黄橙粘質シルト しまり弱い 径5cmの礫を少量含む
2-5.10YR6/4 にぶい黄橙粘質シルト しまり弱い
2-14.10YR5/3 にぶい黄褐粘質シルト しまり弱い
2-18.10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト しまり弱い 径5cm～10cmの礫を含む
2-19.10YR4/3 にぶい黄褐粘質シルト 径1cm～10cmの礫を多く含む しまりやや強い
2-25.10YR6/4 にぶい黄橙粘質シルト しまり弱い
2-26.10YR6/4 にぶい黄橙粘質シルト しまり弱い 径5mmの礫を少量含む
2-27.10YR6/4 にぶい黄橙粘質シルト しまりやや強い 径1cm～10cmの礫を多く含む
2-28.10YR5/3 にぶい黄褐粘質シルト 径1cmの礫少量含む しまり弱い
2-29.10YR5/3 にぶい黄褐粘質シルト しまりやや弱い 径5cmの礫を含む
2-30.10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト 径1cm～5cmの礫を多く含む しまりやや強い
4-9.10YR4/2 灰黄褐粘質シルト しまりふつう
4-10.10YR4/3 にぶい黄褐粘質シルト しまりふつう
4-11.10YR4/4 褐粘質シルト しまりふつう

図35　1トレンチ　土層断面図２（S=1/40）

前面の墳裾部における断ち割りの結果、基壇平坦面を構成する盛土層（第3-13層）の下から岩盤層を検出したことから、トレンチ南西部の墳丘及び基壇は岩盤層を削り出しつつ、岩盤が下がっているところでは盛土を行って墳丘斜面と基壇の平坦面を形成していると考えられる。

さらに、墳丘の構築方法を確認するため、トレンチの西側及び北東側において断ち割りを行った。その結果、墳丘の内側部分を水平に土質を変えながら細かく盛土を行い、その後、墳丘前面部分に向かってさらに墳丘面を形成しながら水平に盛土を行って構築していることが分かった。

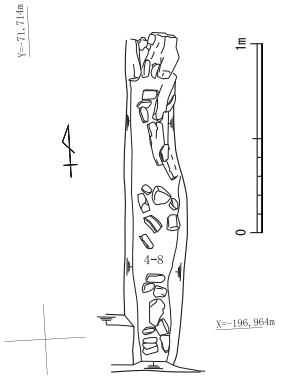


図36　1トレンチ　基壇中央断ち割り平面図（S=1/40）

（3）墳丘南西隅部分の調査（2トレンチ）

墳丘の南西隅部分において、南北5.0m、東西4.8mの方形に2トレンチを設定した。墳丘の南東隅部分を検出すること及び基壇部分の構造を把握することを目的に設定した（図37・38）。表土を除去したところ、1トレンチよりも流土の堆積が薄く、黄褐色～明黄褐色を呈する墳丘面を検出した。また、中央付近で長径1.5m、短径1.3mの黒色化した攪乱土坑を検出した。なお、関西大学が作成した墳丘測量図において、同様の位置に円形の陥没がみられ、同じものであると考えられる。かつてこの部分に木が生えていてことに伴う根攪乱と考えられる。墳丘面をトレンチ全体において検出し、南西隅の屈曲点は、トレンチ南西の方部から東へ1.0m、北へ1.2mの位置にあたると考えられる。また、トレンチの南東部分において断ち割りを行ったところ、深さ8㎝で1トレンチの墳丘裾部分で検出したものと同様の岩盤面を検出した。周溝部分に堆積した土層から円筒埴輪が出土し、上方から流れてきたものと考えられる。

（4）墳丘前面中央部分の調査（3トレンチ）

墳丘前面の主軸に沿って南北0.9m、長さ26mの大きさで3トレンチを設定した。墳丘前面における段数の把握及び基壇の構造確認を目的とした（図39）。なお、墳丘部分から基壇平坦面にかけて設定した部分を3－1トレンチ、基壇平坦面から基壇の斜面に設定した部分を3－2トレンチと分けて呼称する。

3－1トレンチは、北側の長さ17mの範囲である。北側の墳丘部分においては、墳丘面の検出を行いながら掘削を行ったが、北端部から中央付近にかけて過去の掘削に伴う土砂（第1-1～1-3層）が堆積していることが分かった。墳丘前面のコンターラインがふくらんでいるのはこの堆積土を反映しているものと考えられる。また、トレンチの北端部において、関西大学考古学研究室による石室調査時の掘方と考えられる輪郭線を検出した。また、墳丘の傾斜角度は32～37度であるが、墳丘裾部から北側に5.2m、8.3mの地点において、傾斜が緩やかになり平坦面となる箇所を検出した。周囲の墳丘表面の観察からも同じ高さの位置において傾斜の変換が確認できることから、それぞれ下から1段目、2段目のテラス部分であると考えられる。なお、3段目部分は石室の入口付近にあたるがと考えられるが、当トレンチにおいては、明確なテラスは現在の土層の堆積状況からは確認できなかった。また、墳丘表面の土層の観察から、裾部において岩盤層を検出し、墳丘面において水平に堆積する盛土の単位を確認したことから、墳丘が盛土により構築されていることを確認した。基壇部分においては、1・2トレンチで検出した基壇と同様の平坦面を検出した。

3－2トレンチは、3－1トレンチとの間に設けた幅20㎝のアゼをはさんだ南側の長さ8.8mの部分である。斜面部分においては、1トレンチの墳丘裾部と同様の礫で構成される層を検出し、礫層で斜面が構成されていることを確認した。これらの礫は細かく割れているが、片理が通ることから、岩盤層であると考えられ、基壇部分の斜面部は削り出しにより形成し、平坦面部分では岩盤層の上に盛土を行って、基壇の平坦面を設けていることが分かった。

（5）墳丘背面部分の調査（4トレンチ）

墳丘背面から背後の丘陵斜面にかけて南北方向に設定した（図40）。幅9.0m、長さ12.6mのトレンチである。墳丘背面において、墳丘面を検出した結果、墳丘前面でみられるような傾斜変換点はみられず、1段で構築されていることが分かった。盛土の単位が確認でき、墳丘の最上段部分は盛土により構築している。また、背後の丘陵部分は、角度が38度であり、急峻である。土層の観察の結果、尾根部分の山土及び岩盤層が確認され、背後の丘陵部分を意図的に切断するいわゆる背面カットを行って周溝を形成している。トレンチ中央の周溝部分においては、北側の地山が南側にもぐっていき、その上部に盛土して周溝を構築していることを確認した。

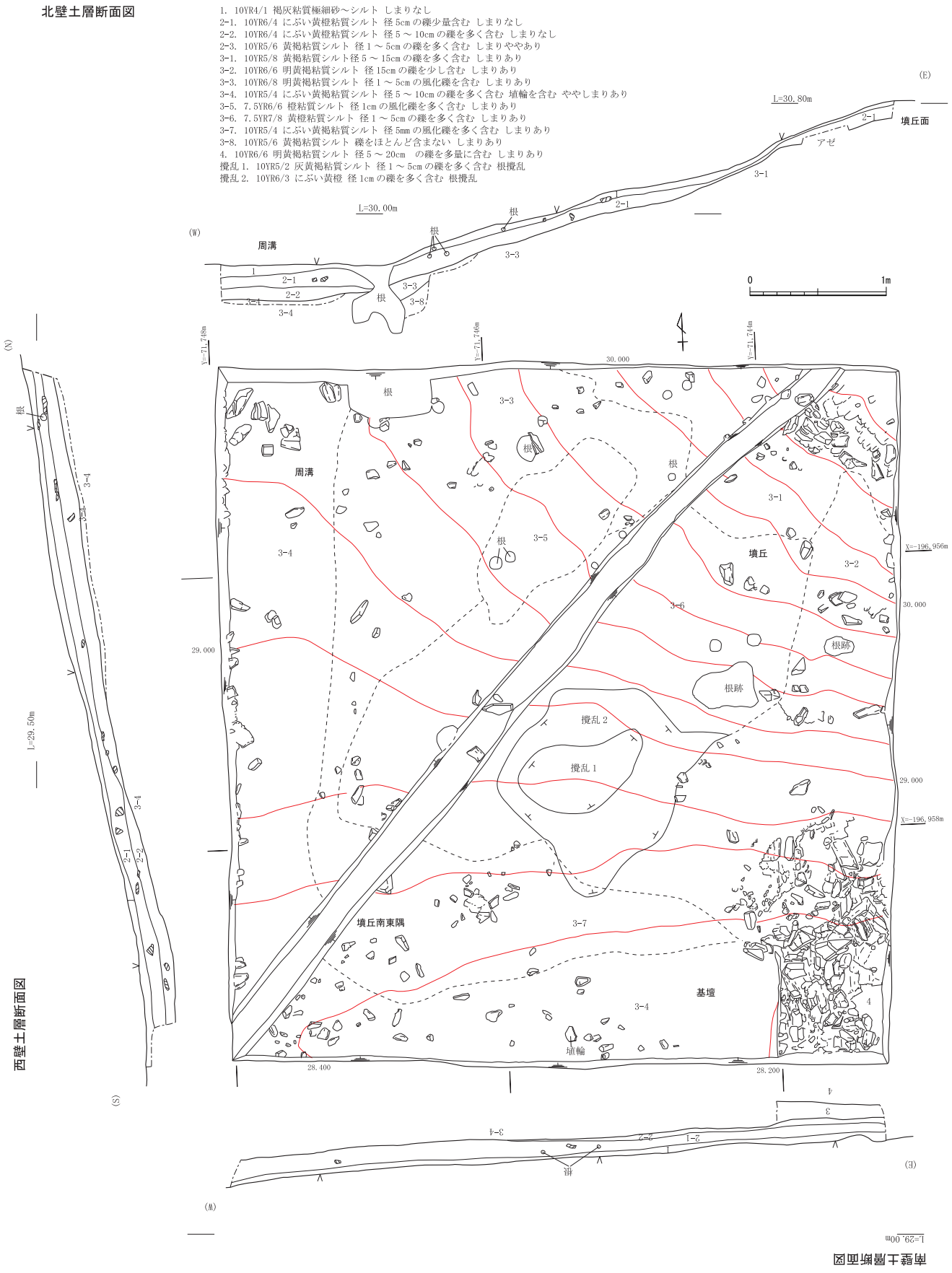


図37　２トレンチ　平面図及び土層断面図１（S=1/40）

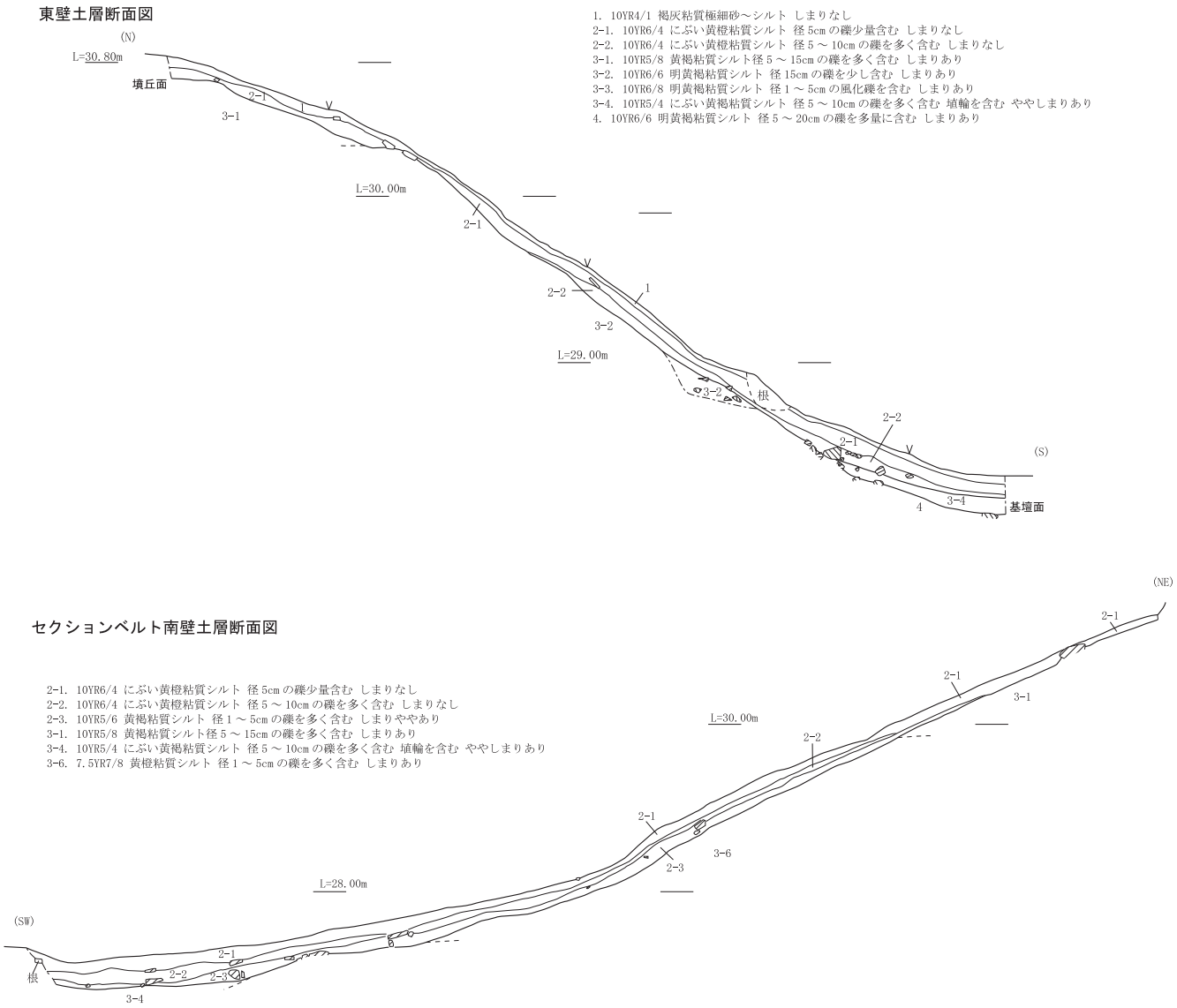


図 38　２トレンチ　土層断面図２（S=1/40）

（６）墳丘北東隅部分の調査（5 トレンチ）

墳丘の北東隅部分において、南北 3m、東西 2.9m の方形に 5 トレンチを設定し、その後、調査の進展にあわせて、北東側において幅 0.9m、長さ 0.8m の大きさで拡張した。墳丘の北東隅部分の検出及び周溝の構造を把握することを目的とした（図 41）。トレンチの中央付近に杉が生えており、トレンチの南西端から、東へ 1.0m、北へ 2.4m の地点において、墳丘北東隅の屈曲点を確認した。墳丘裾部は岩盤層であり、岩盤を削り出してコーナーを形成している。また、周溝部分も削り出しによって形成していると考えられる。周溝の底面から、埴輪片が出土しており、上方から流れてきたものと考えられる。

（７）墳丘北西隅部分の調査（6 トレンチ）

墳丘の北西隅部分において、南北 2.8、東西 3.7m の方形に 6 トレンチを設定した。墳丘の北西隅部分の検出及び周溝の構造を把握するために設定した（図 42）。5 トレンチと同様に、墳丘部

1-0　10YR4/1 褐灰粘質シルト　しまりなし
1-1　7.5YR6/8 橙粘質シルト　径 5mm の礫を多く含む　しまりなし　掘り上げ土
1-2　7.5YR6/8 橙粘質シルト　径 5mm の礫を多く含む　しまりなし　掘り上げ土
1-3　7.5YR5/6 明褐粘質　極細砂～シルト　径 5mm ～ 15cm の礫を多く含む　しまりなし　掘り上げ土
2-1　10YR5/3 にぶい黄褐粘質シルト　径 3cm の礫を少し含む　しまりなし　旧表土
2-2　10YR6/4 にぶい黄橙粘質　極細砂～シルト　径 5 ～ 10cm の礫を多く含む　しまりなし
2-3　10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりなし
2-4　10YR6/4 にぶい黄橙粘質シルト　径 5 ～ 10cm の礫を含む　しまりなし
2-5　10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト　礫をほとんど含まない　近世以降のものを含む
2-6　10YR5/3 にぶい黄褐　粘質細砂　しまり弱い
2-7　10YR5/3 にぶい黄褐　粘質シルト　しまり弱い
2-8　10YR5/4 にぶい黄褐　粘質細砂　しまり弱い
2-9　10YR5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　長さ 5mm 程度の片岩粒含む　しまり普通
2-10　10YR5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　しまり強い　径 1 ～ 2cm の礫少量含む
3-1　5YR6/8 橙粘質シルト　径 5cm の風化礫を多く含む　しまりあり
3-2　7.5YR7/8 黄橙粘質シルト　径 5mm の礫を少し含む　しまりあり
3-3　7.5YR6/8 橙粘質シルト　径 5mm の礫を多く含む　しまりあり
3-4　7.5YR6/6 橙粘質シルト　径 1 ～ 5cm の礫を多く含む　しまりあり
3-5　7.5YR6/6 橙粘質シルト　径 5mm の礫をわずかに含む　しまりあり
3-6　7.5YR6/8 橙粘質シルト　径 1 ～ 10cm の礫を多く含む　しまりあり
3-7　10YR6/3 にぶい黄橙粘質シルト　径 1cm の礫を少し含む　しまりあり
3-8　7.5YR6/8 橙粘質シルト　径 5cm ～ 10cm の礫を多量に含む　しまりあり
3-9　7.5YR7/8 黄橙粘質シルト　径 5mm の礫をわずかに含む　しまりあり
3-10　7.5YR6/8 橙粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりあり
3-11　10YR5/4 にぶい黄褐極細砂～シルト　径 5 ～ 15cm の礫を多量に含む　しまりややなし
3-12　10YR6/6 明黄褐粘質シルト　径 1 ～ 5cm の礫を多く含む　しまりややあり
3-13　10YR6/8 明黄褐粘質シルト　径 1mm ～ 5mm の礫を少し含む　しまりややあり　埴輪を含む
3-14　10YR5/8 黄褐粘質シルト　径 1cm の風化礫を少し含む　しまりややあり
3-15　10YR4/4 褐　粘質シルト　しまりあり
4-1　10YR4/3 にぶい黄褐　粘質シルト　しまりあり
4-2　10YR5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　長さ 2 ～ 3cm の片岩粒含む　しまりあり
4-3　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　粘質シルト　長さ 3 ～ 4cm の片岩粒含む　しまり強い
4-4　2.5Y3/2 黒褐　粘質シルト　しまり弱い
撹乱 1-1　7.5YR6/8 橙粘質極細砂～シルト　径 5mm の礫を多く含む　しまりなし　関大調査掘方
撹乱 1-2　5YR5/6 明赤褐粘質シルト　径 5cm の礫を含む　しまりなし　関大調査掘方

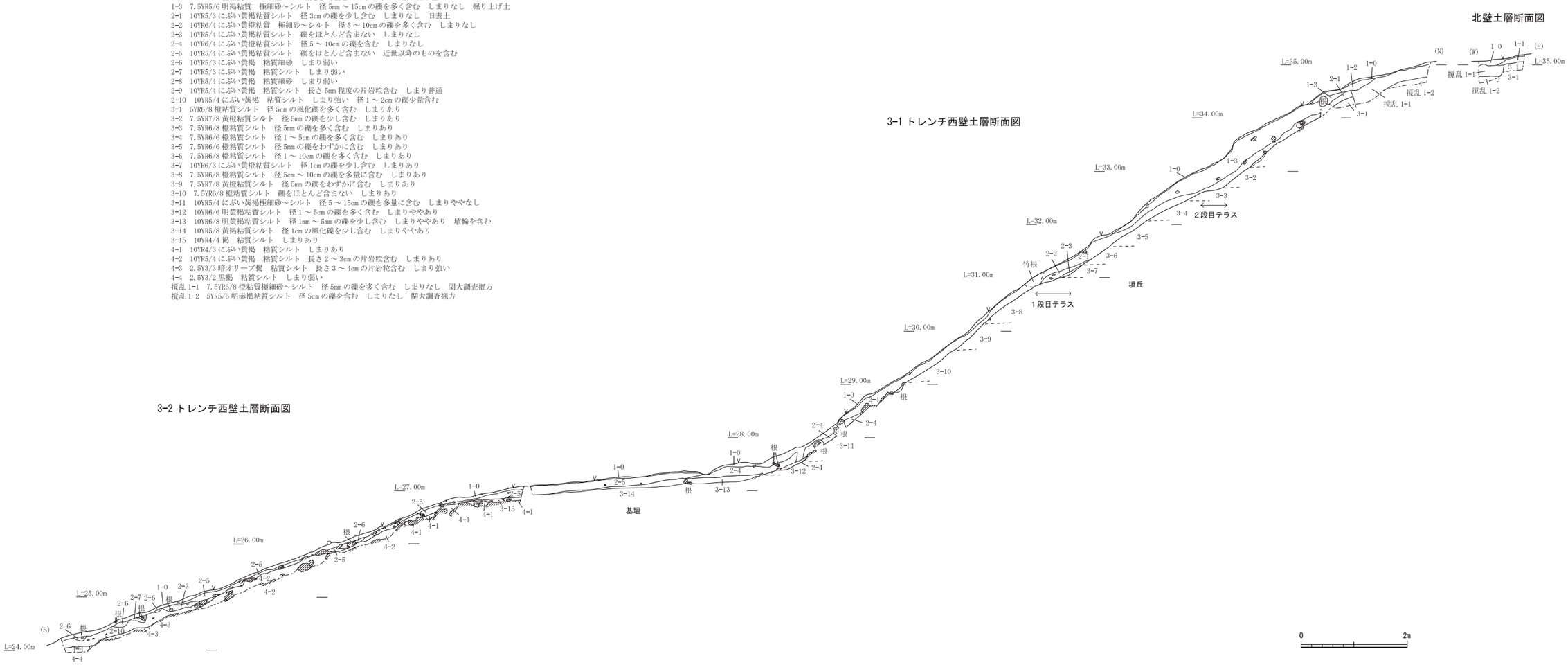


図39　3トレンチ　平面図及び土層断面図(S=1/80)

1-1.　10YR4/1(褐灰)粘質極細砂～シルト　表土　しまりなし
1-2.　5YR4/4(にぶい赤褐)粘質極細砂～シルト　φ5cmの礫多く含む　玉石を含む　過去の掘り上げ土か　しまりなし
2-1.　10YR5/4(にぶい黄褐)粘質シルト　φ5cmの礫を少し含む　ややしまりなし
2-2.　10YR6/6(明黄褐)粘質シルト　φ5cmの礫を少し含む　ややしまりなし
2-3.　10YR5/3(にぶいお黄褐)粘質極細砂～シルト　φ5～30cmの礫を多く含む　しまりなし
2-4.　10YR6/6(明黄褐)粘質シルト　φ5～20cmの礫を多く含む　ややしまりなし
2-5.　10YR5/8(黄褐)粘質シルト　礫をほとんど含まない
2-6.　10YR6/6(明黄褐)粘質シルト　φ5mmのっ風化礫をわずかに含む　しまりなし
2-7.　10YR4/2(灰黄褐)粘質シルト　礫をほとんど含まない　ややしまりあり
3-1.　10YR5/8(黄褐)粘質シルト　φ5cmの礫を少し含む　しまりあり
3-2.　5YR5/6(明赤褐)粘質極細砂～シルト　φ5cmの風化礫・ブロック混じる　しまりあり
3-3.　7.5YR5/6(明褐)粘質シルト　φ5mmの風化礫を少し含む　しまりあり
3-4.　7.5YR5/4(にぶい褐)粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりあり
3-5.　7.5YR5/6(明褐)粘質シルト　φ5mmの風化礫をわずかに含む　しまりあり
3-6.　7.5YR6/8(橙)粘質シルト　φ2cmの風化礫を少し含む　しまりあり
3-7.　7.5YR6/6(橙)粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりあり
3-8.　7.5YR5/6(明褐)粘質シルト　φ1cmの風化礫を少し含む　しまりあり
3-9.　10YR6/8(明黄褐)粘質シルト　φ5cmの風化礫をわずかに含む　しまりあり
3-10.　10YR6/6(明黄褐)粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりあり
3-11.　10YR4/1(褐灰)粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりあり
3-12.　10YR5/4(にぶい黄褐)粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりあり
3-13.　10YR6/6(明黄褐)粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりあり
4-1.　10YR6/6(明黄褐)粘質シルト　φ1mmの風化礫を多く含む　φ10～15cmの礫を多く含む　しまりあり
4-2.　10YR6/8(明黄褐)粘質シルト　φ1cmの風化礫を多く含む　しまりあり
4-3.　7.5YR5/6(明黄褐)粘質シルト　φ3cmの風化礫を多く含む　しまりあり
4-4.　10YR6/6(明黄褐)　岩盤層　しまりあり
4-5.　10YR5/3(にぶい褐)粘質シルト　φ5cmの礫を多く含む　しまりあり
4-6.　10YR7/6(明黄褐)粘質シルト　φ1～3cmの風化礫を多く含む　しまりあり

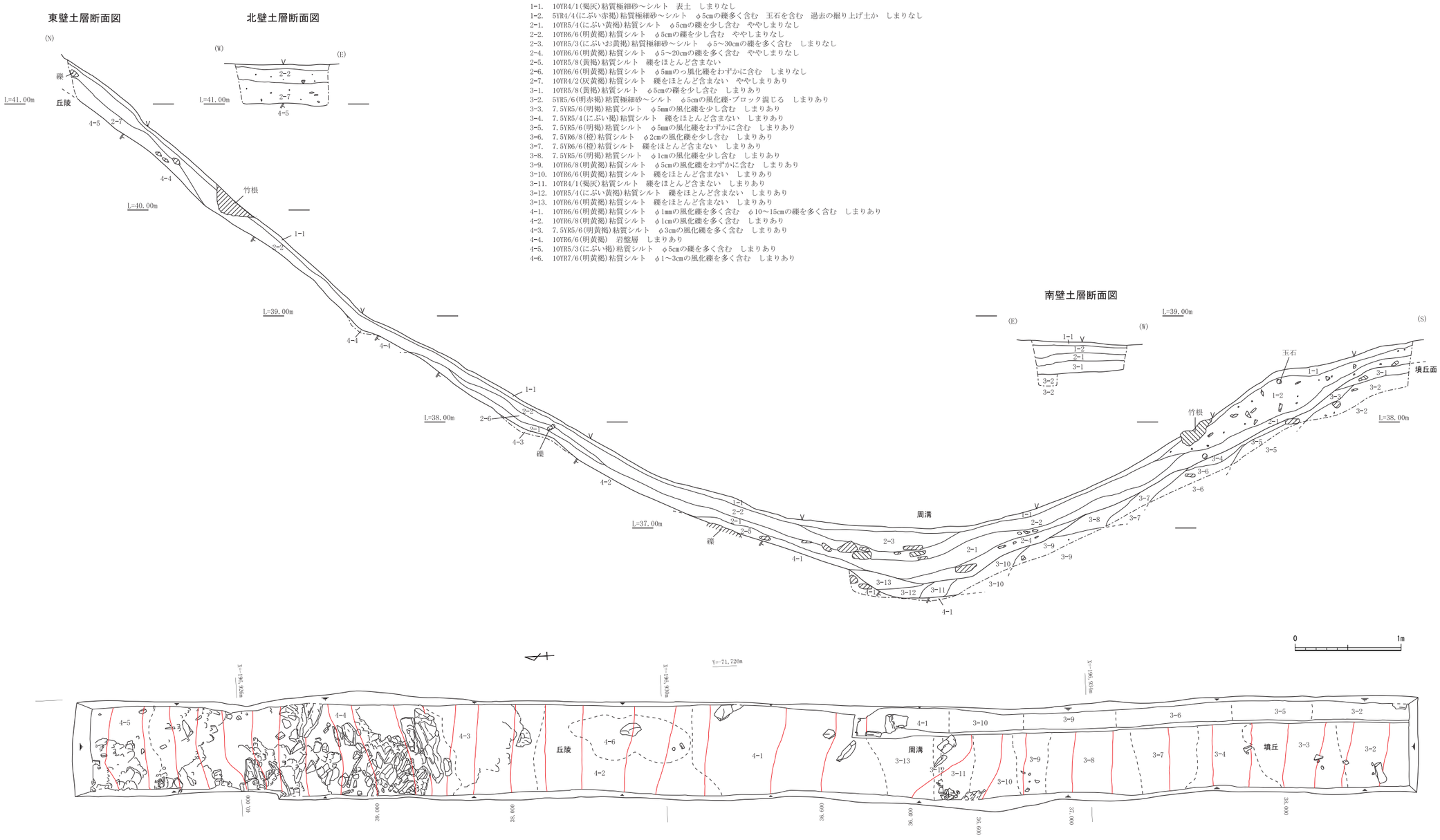


図40　4トレンチ　平面図及び土層断面図(S=1/40)

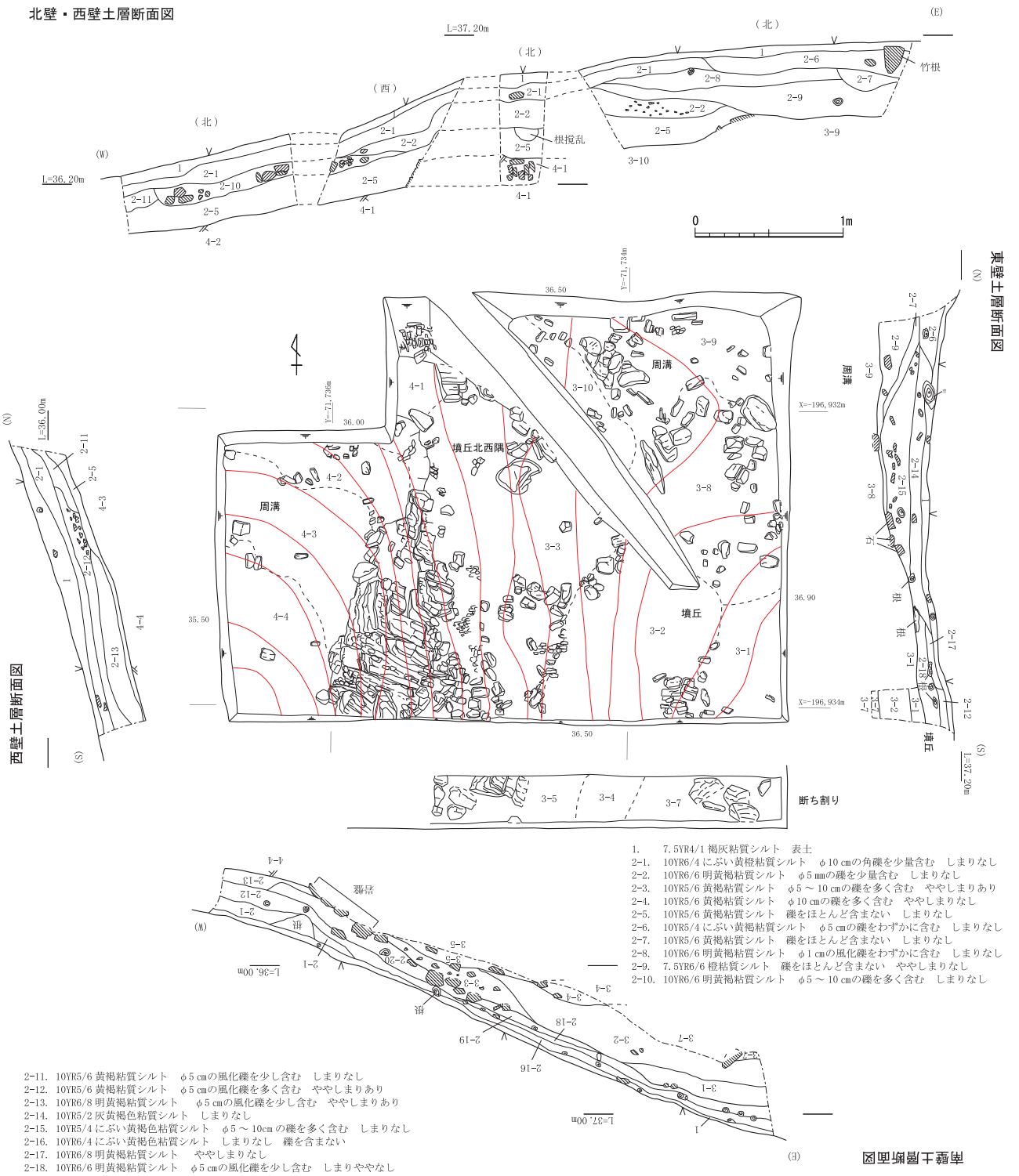
1　10YR5/2 灰黄褐極細砂～シルト　粘質　しまりなし
2-1　10YR6/8 明黄褐粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりややなし
2-2　10YR5/6 黄褐粘質　極細砂～シルト　しまりややあり　径 5 ～ 10cm の礫を少し含む
2-3　10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト　径 5 ～ 10cm の礫を含む　しまりなし
2-4　10YR5/6 黄褐粘質シルト　径 5mm の白色礫を含む　しまりややあり
2-5　10YR6/6 明黄褐粘質シルト　しまりなし　竹の根多くみられる
2-6　10YR6/5 黄褐粘質シルト　径 5cm の礫を少し含む　しまりややあり
2-7　10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト　しまりなし
3　10YR6/6 明黄褐粘質シルト　径 1 ～ 3cm の風化礫を多く含む　しまりあり
3'　7.5YR8/8 黄橙粘質シルト　径 1 ～ 5cm の風化礫を多く含む　しまりあり
4　風化した岩盤　10YR7/4 にぶい黄橙　しまりあり

図 41　5 トレンチ　平面図及び土層断面図（S=1/40）

分の裾部付近は岩盤となっており、削り出しを行っている。トレンチ南西の方部から東へ 1.7m、北へ 1.8m の地点において墳丘の北西隅を検出した。また、トレンチの南側において断ち割りを行った結果、4 トレンチと同様に岩盤より上の墳丘部分は盛土により構築していると考えられる。

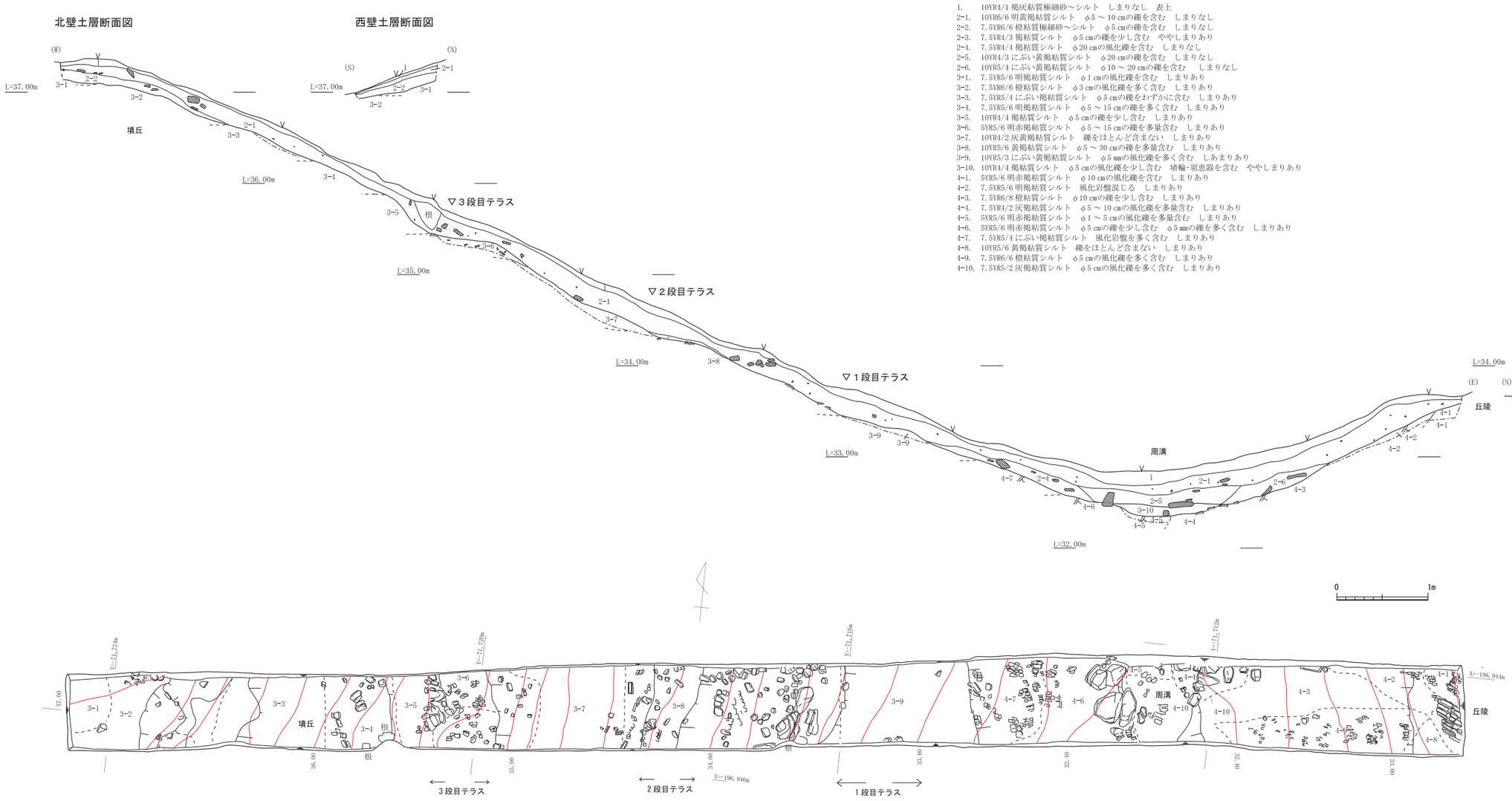
（8）墳丘側面部分の調査（7 トレンチ）

墳丘の東側から周溝をはさんで尾根部分にかけて、幅 0.9 ～ 1.0m、長さ 15.3m で 7 トレンチ



1. 7.5YR4/1 褐灰粘質シルト　表土
2-1. 10YR6/4 にぶい黄橙粘質シルト　φ10 cmの角礫を少量含む　しまりなし
2-2. 10YR6/6 明黄褐粘質シルト　φ5 mmの礫を少量含む　しまりなし
2-3. 10YR5/6 黄褐粘質シルト　φ5 ～ 10 cmの礫を多く含む　ややしまりあり
2-4. 10YR5/6 黄褐粘質シルト　φ10 cmの礫を多く含む　ややしまりなし
2-5. 10YR5/6 黄褐粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりなし
2-6. 10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト　φ5 cmの礫をわずかに含む　しまりなし
2-7. 10YR5/6 黄褐粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりなし
2-8. 10YR6/6 明黄褐粘質シルト　φ1 cmの風化礫をわずかに含む　しまりなし
2-9. 7.5YR6/6 橙粘質シルト　礫をほとんど含まない　ややしまりなし
2-10. 10YR6/6 明黄褐粘質シルト　φ5 ～ 10 cmの礫を多く含む　しまりなし
2-11. 10YR5/6 黄褐粘質シルト　φ5 cmの風化礫を少し含む　しまりなし
2-12. 10YR5/6 黄褐粘質シルト　φ5 cmの風化礫を多く含む　ややしまりあり
2-13. 10YR6/8 明黄褐粘質シルト　φ5 cmの風化礫を少し含む　ややしまりあり
2-14. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　しまりなし
2-15. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト　φ5 ～ 10cm の礫を多く含む　しまりなし
2-16. 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルト　しまりなし　礫を含まない
2-17. 10YR6/8 明黄褐粘質シルト　ややしまりなし
2-18. 10YR6/6 明黄褐粘質シルト　φ5 cmの風化礫を少し含む　しまりややなし
2-19. 7.5YR7/8 黄橙粘質シルト　φ5 cmの風化礫を含む　しまりなし
2-20. 10YR6/4 にぶい黄橙粘質シルト　φ5 cmの風化礫を含む　しまりなし
3-1. 7.5YR6/8 橙粘質シルト　φ1 ～ 5 cmの風化礫を少し含む　しまりあり
3-2. 5YR6/8 橙粘質シルト　φ1 ～ 5 cmの風化礫を少し含む　しまりあり
3-3. 7.5YR6/8 橙粘質シルト　φ5 ～ 10 cmの礫を多く含む　ややしまりあり
3-4. 5YR5/6 明赤褐粘質シルト　φ10 cmの風化礫を含む　しまりあり
3-5. 5YR7/6 橙粘質シルト　φ10 cmの風化礫を含む　しまりあり
3-7. 2.5YR5/8 明赤褐粘質シルト　φ5 ～ 20 cmの風化礫を含む　しまりあり
3-8. 7.5YR6/8 橙粘質シルト　φ1 cmの風化礫を含む
φ10 cmの礫が表面にみられる　しまりあり
3-9. 10YR6/6 明黄褐粘質シルト　φ1 cmの風化礫を多く含む　しまりあり
3-10. 7.5YR6/4 にぶい橙粘質シルト　φ10 cmの礫を多量含む　しまりあり
4-1. 10YR5/4 にぶい黄褐粘質極細砂～シルト　しまった礫の層
4-2. 10YR6/6 明黄褐粘質シルト　φ5 mmの礫を多く含む　しまりあり
4-3. 10YR5/6 黄褐粘質シルト　φ1 ～ 5 cmの風化礫を多く含む　しまりあり
4-4. 7.5YR6/6 橙粘質シルト　φ1 ～ 10 cmの礫を多く含む
φ20 ～ 30 cmの礫がやや多く表面にみられる　しまりあり

図 42　6 トレンチ　平面図及び土層断面図（S=1/40）



1.　10YR4/1 褐灰粘質極細砂～シルト　しまりなし　表土
2-1.　10YR6/6 明黄褐粘質シルト　φ5～10㎝の礫を含む　しまりなし
2-2.　7.5YR6/6 橙粘質極細砂～シルト　φ5㎝の礫を含む　しまりなし
2-3.　7.5YR4/3 褐粘質シルト　φ5㎝の礫を少し含む　ややしまりあり
2-4.　7.5YR4/4 褐粘質シルト　φ20㎝の風化礫を含む　しまりなし
2-5.　10YR4/3 にぶい黄褐粘質シルト　φ20㎝の礫を含む　しまりなし
2-6.　10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト　φ10～20㎝の礫を含む　しまりなし
3-1.　7.5YR5/6 明褐粘質シルト　φ1㎝の風化礫を含む　しまりあり
3-2.　7.5YR6/6 橙粘質シルト　φ3㎝の風化礫を多く含む　しまりあり
3-3.　7.5YR5/4 にぶい褐粘質シルト　φ5㎝の礫をわずかに含む　しまりあり
3-4.　7.5YR5/6 明褐粘質シルト　φ5～15㎝の礫を多く含む　しまりあり
3-5.　10YR4/4 褐粘質シルト　φ5㎝の礫を少し含む　しまりあり
3-6.　5YR5/6 明赤褐粘質シルト　φ5～15㎝の礫を多量含む　しまりあり
3-7.　10YR4/2 灰黄褐粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりあり
3-8.　10YR5/6 黄褐粘質シルト　φ5～30㎝の礫を多量含む　しまりあり
3-9.　10YR5/3 にぶい黄褐粘質シルト　φ5㎜の風化礫を多く含む　しあまりあり
3-10.　10YR4/4 褐粘質シルト　φ5㎝の風化礫を少し含む　埴輪・須恵器を含む　ややしまりあり
4-1.　5YR5/6 明赤褐粘質シルト　φ10㎝の風化礫を含む　しまりあり
4-2.　7.5YR5/6 明褐粘質シルト　風化岩盤混じる　しまりあり
4-3.　7.5YR6/8 橙粘質シルト　φ10㎝の礫を少し含む　しまりあり
4-4.　7.5YR4/2 灰褐粘質シルト　φ5～10㎝の風化礫を多量含む　しまりあり
4-5.　5YR5/6 明赤褐粘質シルト　φ1～5㎝の風化礫を多量含む　しまりあり
4-6.　5YR5/6 明赤褐粘質シルト　φ5㎝の礫を少し含む　φ5㎜の礫を多く含む　しまりあり
4-7.　7.5YR5/4 にぶい褐粘質シルト　風化岩盤を多く含む　しまりあり
4-8.　10YR5/6 黄褐粘質シルト　礫をほとんど含まない　しまりあり
4-9.　7.5YR6/6 橙粘質シルト　φ5㎝の風化礫を多く含む　しまりあり
4-10.　7.5YR5/2 灰褐粘質シルト　φ5㎝の風化礫を多く含む　しまりあり

図43　７トレンチ　平面図及び土層断面図(S=1/50)

を設定した。墳丘側面及び周溝の構造を確認することを目的とした（図 43）。墳丘部分においては、墳丘面を検出しながら掘削した結果、周溝の底に相当する墳裾部分で岩盤と考えられる層を確認し、そこから墳丘側にかけて、20 ～ 25 度の角度で墳丘が築かれていることを確認した。また、裾部から西へ 2.1m、4.8m、6.9m の地点において傾斜が緩やかとなる変換点がみられる。それぞれ 1 段目～ 3 段目のテラスであると考えられ、4 段目は墳丘最上段となる。また、墳丘表面の観察の結果、厚さ 35 ～ 75㎝の盛土の単位を確認した。盛土は 1 段目の中位付近から確認でき、ほかのトレンチで確認した状況からみても、墳丘最下段は岩盤に近い部分に設定し、墳丘上方は盛土により構築していると考えられる。

周溝部分から尾根にかけての土層は自然由来の堆積であることを示しており、当初この部分にあった尾根を削り出して周溝を形成したことが分かる。周溝の底で確認した整地土（第 3-10 層）から埴輪片及び須恵器甕の体部片が出土した。

第 3 節　出土遺物

出土遺物は総じて少なく、遺物整理用コンテナ 2 箱分である。以下では、図化を行った遺物について記述する（図 44）。

1 ～ 16 は井辺 1 号墳から出土した遺物である。1 は、須恵器甕の体部破片である。1 トレンチ南東部に設定したサブトレンチの第 2 層から出土した。外面には縦方向の平行タタキ目がみられ、カキメによりうすくなっている。全体に自然釉が付着している。内面はナデ調整である。

2 は、須恵器甕の体部破片である。1 トレンチ南東部の流土層（第 2 層）から出土した。外面には平行タタキ目がみられるが、全体に黒色の自然釉が濃く付着している。内面には回転ナデ調整がみられる。

3 は、須恵器甕の体部である。7 トレンチ周溝部分の岩盤付近の盛土から出土した。外面には平行タタキ目ののちカキメを施し、内面には同心円状の当て具痕が確認できる。

4 は、須恵器杯蓋の破片である。2 トレンチ北西部の第 2 層から出土した。外面は回転ヘラケズリ及び回転ナデがみられる。内面は回転ナデ調整である。

5 は、須恵器の杯身の破片である。2 トレンチ南西部の表土から出土した。外面の調整は体部が回転ナデ、底部が回転ヘラケズリであり、内面は回転ナデ調整である。外面に朱が付着したような痕跡がある。

6 は、須恵器壺または瓶形の土器の体部である。2 トレンチ北西部の第 2 層から出土した。肩部の屈曲部が残存する。外面の調整は回転ナデであるが、底部はユビナデがみられる。内面は回転ナデ調整である。

7 は、須恵器の壺類の体部と考えられる破片である。2 トレンチ南西部の表土から出土した。外面にはユビオサエの痕跡がみられ、内面の調整は回転ナデである。器壁が薄い。

8 は、円筒埴輪の体部である。1 トレンチ南東隅、第 3-1 層上面から出土した。外面はナナメのハケがみられ、スカシ孔が確認できる。内面の調整はナデである。Ⅴ群系であり、焼成は須恵質である。

9 は、円筒埴輪の体部である。2 トレンチの第 3 層から出土した。突帯を有し、断面形状はM字形を呈し、幅 2.0cm、高さ 0.4cm である。外面にはナナメハケ、スカシ孔が確認でき、内面の調整はナデ及びユビオサエである。Ⅴ群系と考えられる。

10 は、円筒埴輪の体部である。2 トレンチの第 2 層から出土した。突帯を有する。断面はM字形を呈し、幅 2.5cm、高さ 0.5cm である。外面の調整はヨコナデであり、内面にはユビオサエがみられるが、摩滅により不明瞭である。Ⅳ群系と考えられる。

11 は、円筒埴輪の口縁部の破片である。3 － 1 トレンチの基壇平坦面上の第 2 層から出土した。

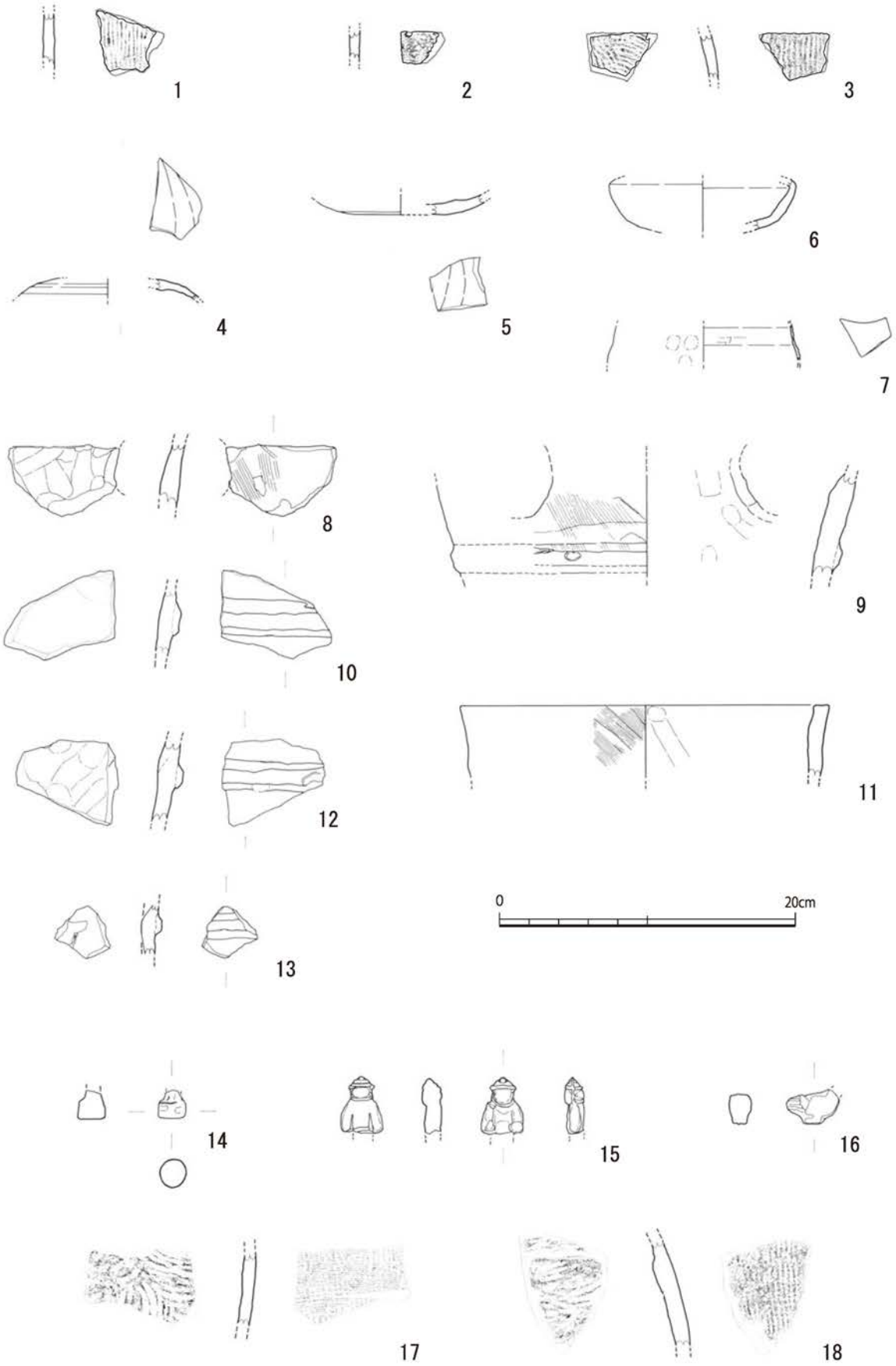


図 44　井辺 1 号墳出土遺物及び井辺地区採集遺物（S=1/4）

外面の調整はナナメハケ、内面はナデ及びユビオサエである。口縁上面は強いナデで少し凹み、焼きひずみがみられる。V群系であり、焼成はやや須恵質である。

12は、円筒埴輪の体部である。5トレンチの第3層から出土した。突帯を有し、断面がM字形を呈し、幅1.9cm、高さ0.4cmである。外面にはヨコナデがみられ、内面にはナデおよびユビオサエが確認できる。V群系であると考えられる。

13は、円筒埴輪の体部である。排土から採集した。突帯を有し、断面形状は台形、幅1.5cm、高さ0.4cmである。外面の調整はヨコナデ、内面は剥離している。断面形状から形象埴輪の可能性もある。

14は、土製品の御庭道具である。1トレンチの北東部の第2層から出土した。手びねりにより製作され、全面にナデが確認できる。底部は面状で平たい。上半部を欠損する。家や燈籠などの可能性がある。

15は、土製品の土人形である。3－2トレンチの南端付近、第2層から出土した。力士の可能性があり、頭部～体部、腕が残存する。型押しにより製作されている。

16は、土製品の土人形である。2トレンチ北西部の第2層から出土した。形状から鳥を模したものと考えられ、型押しにより製作されている。頭部を欠損する。表面にはナデがみられる。表面と裏面の型にずれがみられる。

これらの遺物のうち、古墳時代に属するものとして須恵器と埴輪があるが、井辺1号墳は埴輪を樹立しておらず、盛土である第3層から出土したものが少なからずあることから、第2節において述べたとおり、古墳築造時に運ばれてきた盛土の中にこれらの遺物が含まれていたものと考えられる。須恵器については詳細な時期を判断できる遺物は出土していないが、古墳時代後期に属するものとみられる。埴輪の製作時期については、突帯の特徴から6世紀前半であると考えられる。そのため、石室出土品をもとにした井辺1号墳の築造年代と大きくかけ離れているが、築造に伴うものではないものも含んでいることから、これらの遺物から井辺1号墳の築造年代を判断することは難しい。また、近世期の陶磁器や土人形も出土がみられ、近世段階において井辺1号墳周辺において人の活動があったことがうかがえる。

17・18は、井辺15号墳の墳丘の西側で採集した遺物である。17は、須恵器甕の体部である。外面には平行タタキおよびカキメがみられる。内面には同心円状の当て具痕跡が確認できる。

18は、須恵器甕の体部である。焼成がやや不良であり、外面は不明瞭であるが、格子タタキがみられる。内面には同心円状の当て具痕跡が確認できる。

いずれも体部の破片であり、明確な時期については不明であるが、古墳時代後期のものと考えられ、古墳に伴うものとみて齟齬はないと考えられる。

第4節　まとめ

以上のとおり、調査の結果、井辺1号墳の墳丘部分の規模は、南辺35m、北辺16、側辺30mであることが分かった（図45）。また、前面に設けられた基壇の平坦面は南北の幅が6m、東西の長さ42mである。周溝も含めると、古墳全体の大きさは、南北50m、東西42mとなる。墳形は南辺が大きい台形であるが、7トレンチで検出した墳丘裾部の位置から、側辺は直線的ではなく、外側にふくらむ形状であると考えられる。また、墳丘の段数は4段築盛であることが分かった。3トレンチにおいては3段目以上がすでに流失していたが、7トレンチにおける調査結果及び地表面の傾斜変換状況からみて、前面部分も4段であったと考えられる。一方、墳丘の背面は1段であり、旧地形の尾根の斜面を有効に利用して築造されていたと考えられる。また、側面については、より背面に近づくにつれ、周溝にすりつき、段数が減少していく構造だったと考えられる。そのため、前面からみたときにより荘厳に見えるように築造されていたことが分かる。また、墳

丘最上段については大部分がすでに流失しているが、残存している部分までの高さでみると、基壇下部からの高さが14.5mであり、基壇平坦面からの高さは11mである。墳丘部分は傾斜角度が35度前後で構築され、方形という形状も相俟って平面規模の数値以上に墳丘が大きく見える視覚効果を有していると考えられる。

墳丘の構築方法は、墳丘裾部に岩盤が位置するように設定し、それより上方は盛土によって構築しておりその単位も明瞭に確認できる。さらに、各トレンチで検出した岩盤と古墳各部の関係についてみると（図46)、天王塚古墳などと同様に石室の下半に岩盤層が位置するように構築していると考えられる。また、盛土の方法は、1トレンチにおける断ち割りの結果、墳丘の相似形となる墳丘を水平に堆積させて､外側に拡大しながら墳丘を構築していることが分かった。また、基壇については、斜面部分は岩盤層であり、平坦面部分には盛土を施している。盛土には須恵器や埴輪を含んでおり、構築する際に運搬してきた土の中に遺物が含まれていたと考えられる。墳丘と同時に形成された面であり、基壇部分も墳丘と同時に構築された古墳に付随する施設であると考えられる。また、墳丘背後の丘陵部分を切断するように削りだしており、いわゆる背面カットを行っている。

このように、墳丘前面に基壇を有する方墳はその他の終末期古墳においてもみられるが、最も近似した事例は大阪府南河内郡河南町の平石古墳群において確認できる。シショツカ古墳、アカハゲ古墳、塚廻古墳という3基の古墳が丘陵南斜面の裾部に相次いで築造されている（大阪府教

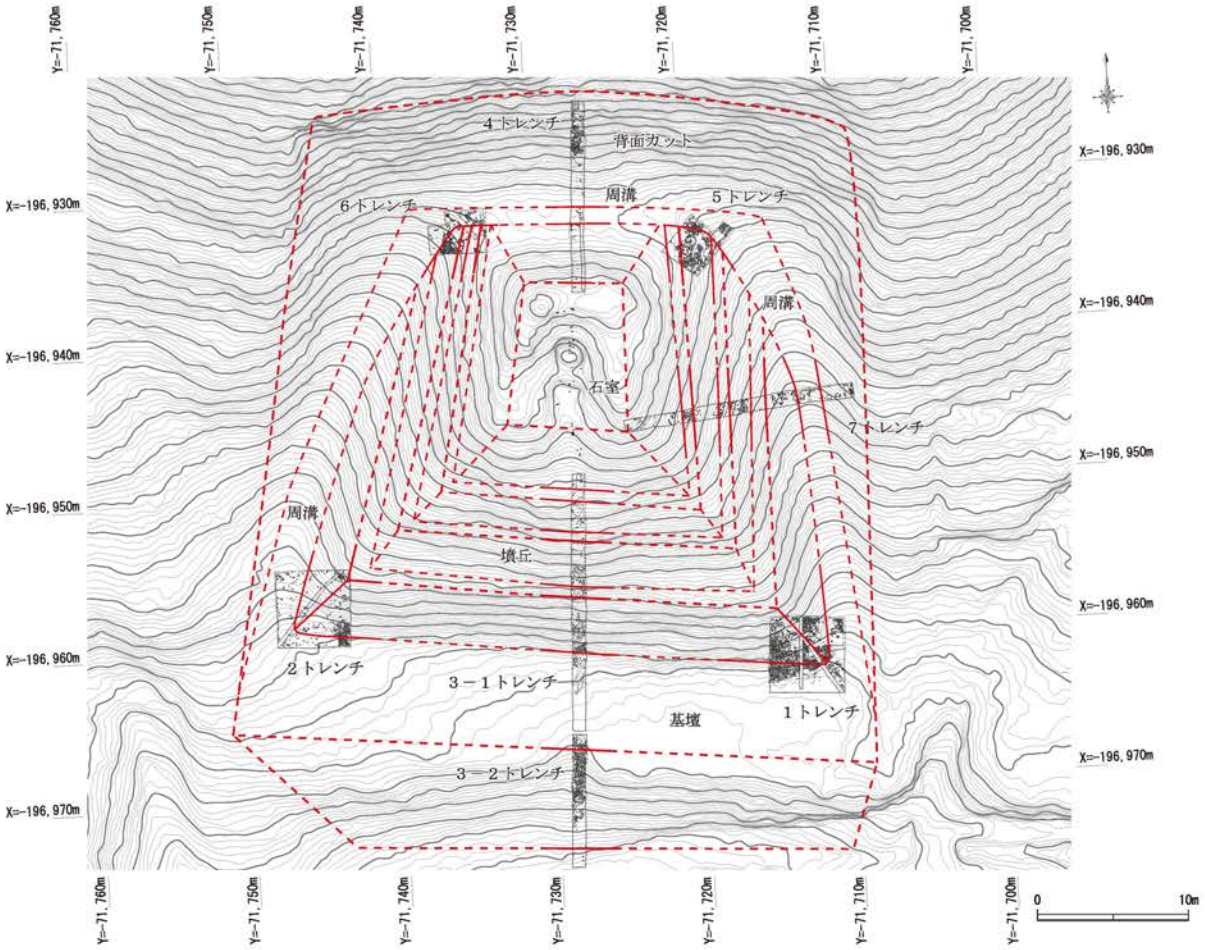


図45　井辺1号墳　墳丘復元図（S=1/500）

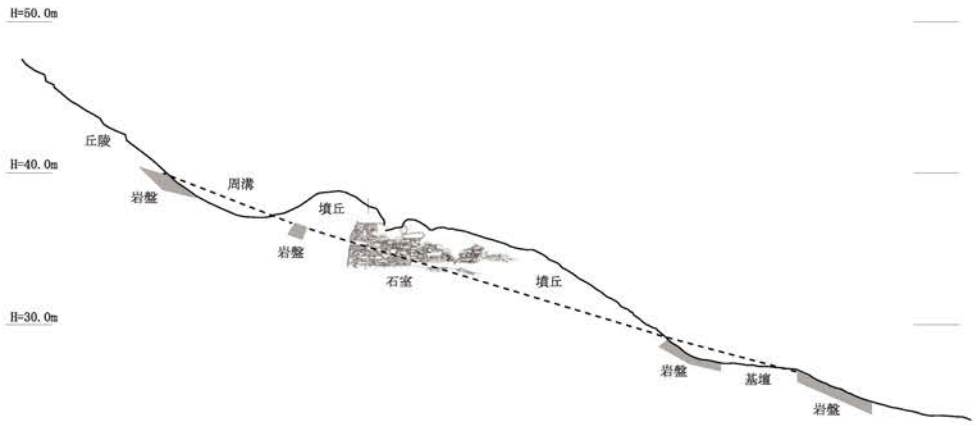


図 46　井辺 1 号墳　岩盤と古墳各部の関係

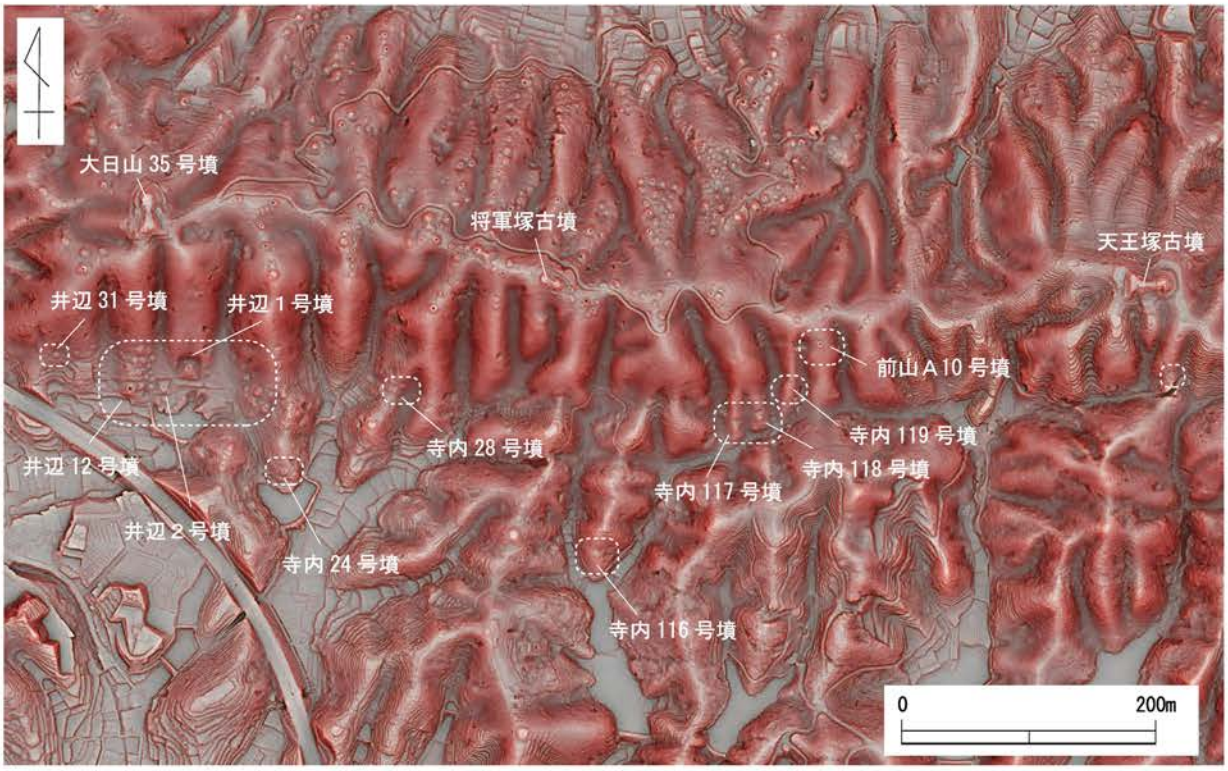


図 47　岩橋丘陵南斜面に展開する背面カットを有する古墳の分布（S=1/6,000）

育委員会 2009)。築造時期は 6 世紀末から 7 世紀前半にかけてであり、規模から大伴氏など王権中枢にいた勢力の墳墓と考えられている（高橋 2023)。そのため、井辺 1 号墳の被葬者が中央との関わりをもち、最新の古墳築造に関する情報を得ていたと考えられる。また、立地の面では、終末期古墳が南斜面に立地することが多いことはこれまでにも指摘されているが、井辺 1 号墳の周囲にも背面カットをもつ古墳が多数分布しており、寺内 28 号墳や寺内 32 号墳は発掘調査により 7 世紀に築造されたことが分かっている(薗田編 1972)。さらに、今回実施した分布調査により、寺内 24・116・117・118 号墳など、岩橋丘陵の南斜面の尾根の先端付近において背面カットを行っている方墳や円墳が新たに確認された（図 47)。これらは谷状地形の最奥部に位置しており、他の地区ではみられない築造場所を選定している。発掘調査が行われていないため、正確な時期については不明であるものの、築造方法や選地のあり方は井辺 1 号墳と共通していることから、井辺 1 号墳の築造を契機として、南斜面に古墳の築造が展開していったことがうかがえる。このよ

うに、井辺１号墳は前方後円墳の築造停止後の紀伊の古墳時代社会における転換状況を明瞭に示している。一方で、井辺１号墳の東西には、中小の方墳や円墳が展開しており、首長墳の築造を契機として周囲に古墳築造が展開する状況はこれまでのあり方を踏襲しており、このことは岩橋千塚古墳群における終末期古墳の特徴を示していると考えられる。

【参考文献】

大阪府教育委員会 2009『加納古墳群・平石古墳群』

関西大学文学部考古学研究室編 1967『岩橋千塚』

薗田香融編 1972『和歌山市における古墳文化』関西大学

高橋照彦 2003「古墳時代後～終末期の古墳と氏族」『和歌山県立紀伊風土記の丘令和５年度秋期特別展「律令国家成立前夜」シンポジウム予稿集』和歌山県立紀伊風土記の丘

表４　井辺１号墳出土及び井辺地区採集遺物観察表

報告書番号	図版番号	器種	出土位置	法　量(cm)	特徴	色　調	胎　土	焼成	残存率	備　考
図43-1	写真図版35-1	須恵器 甕　体部	1トレンチ 南東部サブトレ 第2層	(4.5)×(4.5)×0.8	外)タタキ・カキメ？・全体に自然釉(黒色)、内)回転ナデ	外)N1.5/0黒色、内)N6/0灰色、断)N5/0灰色	密：～1mm白色粒・黒色粒少量、片岩あり	良好	5%以下	2と胎土類似
図43-2	写真図版35-2	須恵器 甕　体部	1トレンチ 南東部　第2層	(3.0)×(2.2)×0.7	外)タタキ・全体に自然釉(黒色)、内)回転ナデ	外)N1.5/0黒色、内・断)N5/0灰色	密：～0.5mm白色粒・黒色粒微量、片岩あり	良好	5%以下	1と胎土類似
図43-3	写真図版35-3	須恵器 甕　体部	7トレンチ 周溝中央部第第3層	(4.7)×(3.3)×0.9	外)タタキ後カキメ(8本/cm)、内)同心円文当具痕	外)N6/0灰色、内・断)N5/0灰色	密：～1mm白色粒・黒色粒・片岩少量	良好	5%以下	1・2と胎土相違
図43-4	写真図版35-4	須恵器 杯蓋	2トレンチ 北西部　第2層	(5.7)×(3.4)×0.7、器高(1.4)	外)回転ヘラケズリ・回転ナデ、内)回転ナデ	外・内・断)N5/0灰色	やや粗：～2mm黒色粒・白色粒・半透明粒多量(片岩確認できず)	良好	10%	反転復元、杯身の可能性もあり
図43-5	写真図版35-5	須恵器 杯身	2トレンチ 南西部　表土	(4.4)×(1.4)×0.9	外)回転ナデ・回転ヘラケズリ、内)回転ナデ、外面に朱付着？	外)2.5GY6/1オリーブ灰色～5YR5/3にぶい赤褐色、内)2.5YR4/3にぶい赤褐色、断)2.5GY6/1オリーブ灰色～5YR4/3にぶい赤褐色	密：～1mm半透明粒・白色粒・片岩微量	やや不良	10%	反転復元、杯蓋の可能性もあり
図43-6	写真図版35-6	須恵器 壺または瓶　体部	2トレンチ 北西部　第2層	器高(3.5)、体部径12.6	外)回転ナデ・底部ナデ、内)回転ナデ	外)N5/0灰色、内・断)5Y6/1灰色	密：～4mm半透明粒微量、片岩あり	良好	10%	反転復元、小形の瓶類の体部
図43-7	写真図版35-7	須恵器 壺類？	2トレンチ 南西部　表土	(3.6)×(2.6)×0.2	外)ユビオサエ、内)工具による回転ナデ、器壁非常にうすい	外・内・断)N5/0灰色	密：ほぼ砂粒みえず	良好(堅緻)	5%以下	反転復元、古墳時代でない可能性あり
図43-8	写真図版35-8	円筒埴輪 体部	1トレンチ トレンチ南東隅 第3層	(7.4)×(4.8)×1.3	外)ナナメハケ(6～7本/cm)、スカシ孔あり、内)ナデ	外)7.5YR6/3にぶい褐色、内)7.5YR5/1褐灰色、断)N5/0灰色	密：～1mm白色粒・半透明粒・片岩微量	良好(硬質)	5%以下	Ⅴ群系か、やや須恵質
図43-9	写真図版35-9	円筒埴輪 体部	２トレンチ 第3層	(10.1)×(7.0)×1.4、突帯部径26.4	外)ナナメハケ(6本/cm)、スカシ孔あり・突帯あり(断面M字形、幅2.0×高0.4cm)、内)ナデ・ユビオサエ	外・内)7.5YR7/6橙色、断)N5/0灰色	密：～2mm白色粒・半透明粒微量、～1mm赤色粒微量、10mm大の片岩1個	良好	5%以下	Ⅴ群系か、反転復元
図43-10	写真図版35-10	円筒埴輪 体部	2トレンチ 第2-2層	(7.4)×(6.0)×1.0	外)ヨコナデ(不明瞭)、突帯あり(断面M字形、幅2.5×高0.5cm)、内)ユビオサエ(不明瞭)	外)5YR6/6橙色、内)7.5YR6/4にぶい橙色、断)10YR5/2灰黄褐色	粗：～2.5mm白色粒・半透明粒・赤色粒・片岩多量	良好	5%以下	Ⅳ群系か
図43-11	写真図版36-11	円筒埴輪 口縁部	3-1トレンチ 第2層　根付近	(5.3)×(4.9)×1.1、口径24.9	外)ナナメハケ(9本/cm)、内)ナデ・ユビオサエ、口縁上面は強いナデで少し凹む、焼きひずみあり	外)2.5Y6/1黄灰色、内)2.5Y5/1黄灰色、断)5Y5/1灰色	やや粗：～3mm半透明粒・片岩・白色粒多量、～1mm黒色粒微量	良好	5%以下	Ⅴ群系、やや須恵質、反転復元
図43-12	写真図版36-12	円筒埴輪 体部	5トレンチ 3層上面(第2層)	(6.9)×(5.7)×1.3	外)ヨコナデ(不明瞭)、突帯あり(断面M字形、幅1.9×高0.4cm)、内)ナデ・ユビオサエ	外)7.5YR6/4にぶい橙色、内)7.5YR6/6橙色、断)2.5GY5/1オリーブ灰色	やや粗：～1.5mm片岩・赤色粒・白色粒・半透明粒多量	やや軟質	5%以下	Ⅴ群系
図43-13	写真図版36-13	円筒埴輪 体部	排土	(3.7)×(3.5)×1.0	外)ヨコナデ、突帯あり（断面台形、幅1.5×高0.4cm）、内)剥離か	外)2.5YR4/4にぶい赤褐色、内)5YR6/4橙色、断)2.5YR3/2暗赤褐色	密：～1mm白色粒・赤色粒・片岩少量	良好	5%以下	天地不明、Ⅴ群系か、突帯の形状から形象埴輪の可能性あり
図43-14	写真図版36-14	土製品 御庭道具か	1トレンチ 北東部　第2層(墳丘上)	1.8×(2.0)×1.9	手びねりか、全面ナデ、底部面あり、上半部欠損	外・断)5YR7/4にぶい橙色	密：～1mm赤色粒・白色粒少量(片岩確認できず)	良好	30%？	江戸時代の御庭道具(家？燈籠？)か
図43-15	写真図版36-15	土製品 土人形	3-2トレンチ トレンチ南端付近 第2層	2.8×(3.8)×1.3	頭部～体部・腕残存、型押し	外・断)5YR6/6橙色	密：～0.5mm赤色粒・白色粒・半透明粒少量(片岩確認できず)	良好	80%	江戸時代の土人形（力士？）か
図43-16	写真図版36-16	土製品 土人形	2トレンチ 北西部　第2層	(3.6)×(2.4)×1.5	型押し、頭部欠損、表面少しナデ、表面と裏面の型少しずれる	外)5YR5/4にぶい赤褐色、断)5YR5/3にぶい赤褐色	密：～1mm赤色粒・白色粒微量、2×8mm赤色小石1個、(片岩確認できず)	良好	70%	江戸時代の土人形（鳥か）か
図43-17	写真図版36-17	須恵器 甕　体部	井辺15号墳 墳丘西　表採	(7.9)×(5.1)×0.9	外)タタキ後カキメ(7本/cm)、内)同心円文当具痕	外)N4/0灰色、内)N3/0暗灰色、断)N3/0暗灰色～2.5YR4/2灰赤色	密：～4mm半透明粒少量、～4mm片岩微量	良好(堅緻)	5%以下	
図43-18	写真図版36-18	須恵器 甕　体部	井辺15号墳 墳丘西　表採	(5.8)×(8.0)×1.2	外)タタキ(後カキメ？)、内)同心円文当具痕	外)10Y7/1灰白色、内)5YR3/2暗赤褐色、断)2.5GY4/1暗オリーブ灰色	密：～3mm片岩・半透明粒少量、～1mm金雲母微量	やや不良	5%以下	

＊法量は幅×高×厚、(　)内は残存値　特徴・色調の内･外･断は「面」を省略。色調は土色帖を基とする。

第５章　寺内 18 号墳の調査成果

第１節　調査の方法

（１）調査の目的

寺内 18 号墳は和歌山市森小手穂に所在し、岩橋山塊の主稜線から約 500m 南、大日山から南に派生する尾根の稜線上で、尾根が平野部に落ち込む寸前の緩傾斜地の標高約 48m の地点に位置する。墳丘は尾根筋上に南北に配置され、東西は急斜面で谷に落ち込む。

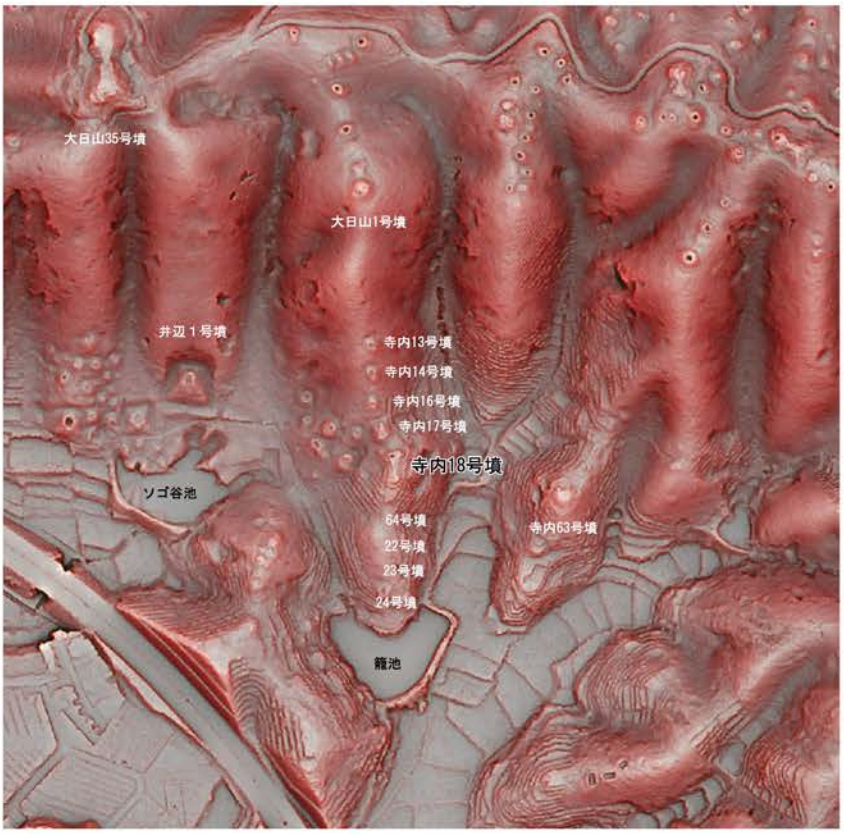


図 48　寺内 18 号墳の位置

周囲には、南側の緩斜面の尾根筋に寺内 64 号墳、寺内 22 号墳、寺内 23 号墳、寺内 24 号墳が、北側には大日山１号墳から続く急斜面がやや緩やかとなる標高 70m 付近から尾根筋上に寺内 13 号墳、寺内 14 号墳、寺内 16 号墳、寺内 17 号墳が配置され、北西の谷部には、小型の円墳が密集する。

昭和 30 年代に前方部基底面の北半分が開墾されて蜜柑畑となり、昭和 39 年（1964）には墳丘の西側及び南側の開墾が行われた。この開墾により墳丘の埴輪列と後円部横穴式石室の排水溝が露出し、その末端で勾玉１点が採集された。また、前方部及び後円部には共に深さ 2m に及ぶ盗掘坑があり、前方部の盗掘坑からは須恵器が掘り出されたと伝わる（関西大学 1967）。

開墾が墳丘基底部に及んだことから、昭和 40 年（1965）には、和歌山市教育委員会の委嘱を受けた関西大学により緊急の測量調査と発掘調査が実施された。この調査により、本古墳は古墳時代後期の古墳で、主軸を南北に向けた全長 28m の前方後円墳であること、後円部と前方部にそれぞれ横穴式石室を備え、後円部墳頂には方形埴輪列が、後円部から前方部東側墳丘裾に埴輪列が巡ることが明らかとなった。

ただし、発掘調査が行われたのはすでに大幅な盗掘を受けていた後円部横穴式石室と前方部横穴式石室及び露出状態であった墳丘埴輪列のみで、墳丘については測量調査を実施したのみであった。

そこで今回、特別史跡への追加指定に向けて、寺内地区で唯一の前方後円墳である寺内 18 号墳の正確な墳丘規模や構造などを明確にすることを目的として、測量調査及び発掘調査を実施した。

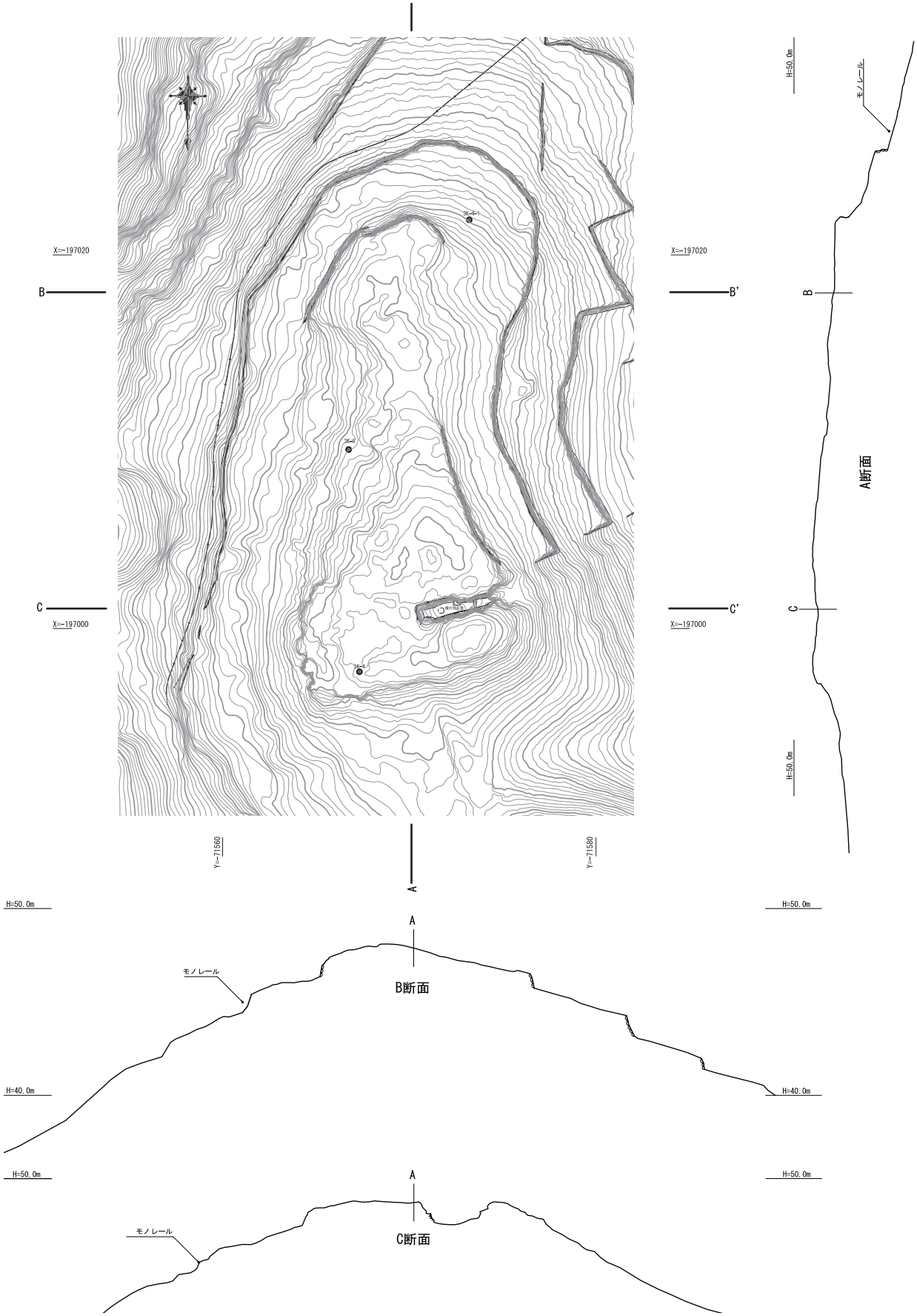


図 49　墳丘測量図（S=1/300）

（2）調査の方法

発掘調査に先立ち測量調査を実施し墳丘測量図（図 49）を作成した。発掘調査はこの成果に基づき、後円部の墳丘仮主軸上、前方部東側くびれ部、前方部東側、前方部北側に計 6 箇所のトレンチを設定した。

調査は人力掘削によりトレンチ内の表土、撹乱土及び墳丘流土を除去し、墳丘等の遺構検出を行った。その後、写真撮影及び平面図、立面図並びに断面図等の記録を作成した。写真撮影は、フルサイズ一眼レフカメラ（2000 万画素相当以上）、デジタルカメラ（2000 万画素相当）にて撮影を行った。図面作成は、縮尺 20 分の 1 の実測図を作成し、必要に応じて縮尺 10 分の 1 の平面図を作成した。また、一部の遺構において、写真測量による 3 次元計測により 3 次元オルソモデルを作成した。

記録作成後、墳丘の構築方法や構造、地山と盛土の堆積状況を確認する目的で必要最小限の範囲での断割り調査を実施した。すべての作業完了後、遺構及び墳丘の保護のため、川砂及び不織布シートにより墳丘上面を養生した後、掘削排土により人力で埋戻しを行った。

なお、発掘調査は、「21 － 01・185 － 542」「21 ＝ 2021 年度、01 ＝和歌山市、185 ＝岩橋千塚古墳群、542 ＝寺内 18 号墳」の調査コードを付し、発掘調査記録及び出土遺物を管理している。

（3）測量調査の方法

基準点は、電子基準「和歌山」・「和歌山海南」・「打田」を用い、GPS 測量により 3 級基準点を 3 箇所設置したものを利用した。墳丘測量図は、既設点を利用した 3 次元レーザー測量により縮尺 100 分の 1、10㎝コンターの墳丘測量図である。

（4）調査区の設定

発掘調査に際しては、墳丘測量図から後円部に任意の中心（0.0）点を設定し、墳丘仮主軸（NS0）を設定した。この墳丘仮主軸に直交し後円部任意の中心（0.0）を通る方向に東西軸（EW0）を設定し、この 2 つの軸を基準として 2m グリッドを設定した（図 50）。

調査区は幅 1m のトレンチを基本として設定した。後円部は、墳丘裾を確認することを目的とし、墳丘仮主軸上に 1 トレンチを設定した。東くびれ部では、墳丘裾並びに造り出しの有無を確認することを目的に、墳丘仮主軸に直交する方向に 2 トレンチを設定した。前方部については、墳丘裾の確認並びに東側及び北西隅部の形状を確認することを目的に、墳丘東側に仮主軸上から直交する方向に 3 トレンチ、墳丘仮主軸上に 6 トレンチ、墳丘北西部に仮主軸に平行して 4 トレンチとその西側に 5 トレンチを設定した。

（5）基本層序

基本土層として以下のように分層した。

1 層： 表土層で笹を主体とする植物の根及び腐植土により構成される層。3 トレンチ及び 6 トレンチでは、昭和 40 年の発掘調査後の埋戻し土も含む。トレンチごとに細分を行った。

2 層：古墳の墳丘上に堆積した流土の層。トレンチごとに細分を行った。

3 層：墳丘の盛土と判断される層。トレンチごとに細分を行った。

4 層：遺物を包含せず自然堆積の地山と判断される土層。トレンチごとに細分を行った。

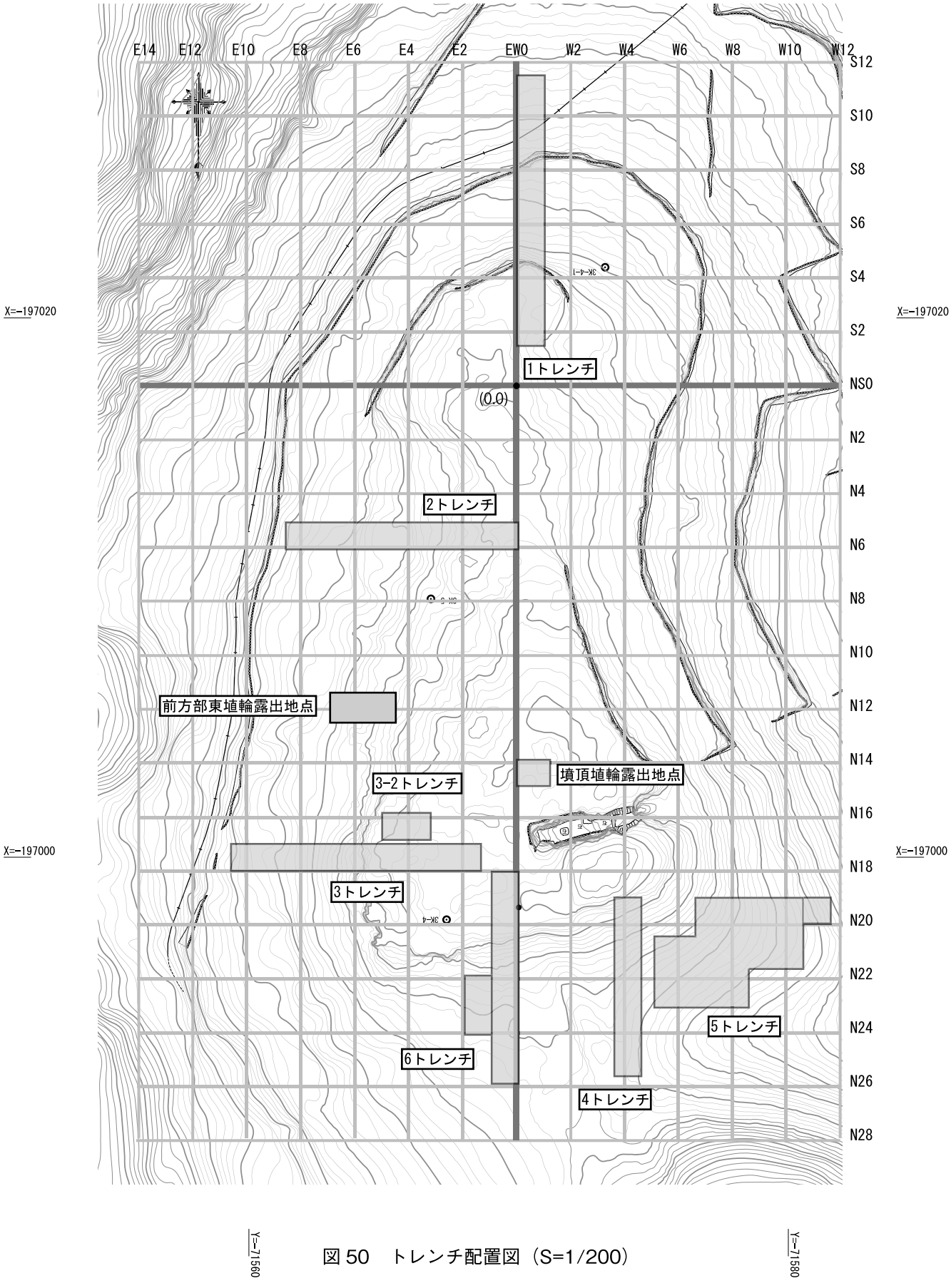


図 50　トレンチ配置図（S=1/200）

第２節　調査成果

（１）調査前の墳丘の現況

寺内 18 号墳は、昭和 30 年代に蜜柑畑利用のための開墾に伴い、墳丘西側が大きく削平されるとともに、墳丘西側から南側、南側から南東側にかけては蜜柑畑の石垣が巡る。近年、耕作は行われておらず、墳丘全面に樹木や草木が繁茂する状態であったが、調査の際に伐採したことで形状が明確となった。

墳丘は大日山から南に派生する尾根の稜線上に位置し、南北方向に主軸をもつ前方後円形である。後円部を南（丘陵裾側）に、前方部を北に向ける。

墳頂は平坦面となり、北側の前方部に向けてわずかに高くなる。後円部墳頂の方形埴輪列は、昭和 40 年の発掘調査の際にすべて取り上げられており、現在、その痕跡を確認することはできないが、現在も墳丘上には多くの埴輪片が散乱している。墳丘の西側は大きく削平され、丘陵裾まで段々畑が続き、各段には石垣が巡る。墳丘の東側は、昭和 40 年の発掘調査において「東くびれ部は墳丘基底部で幅広く、東側くびれ部にややふくらんだ部分があり、造り出し状を呈している。」（関西大学 1967）と報告されているが、現況では斜面となっており、平坦面は認められない。墳丘南側も開墾され、２段の石垣が円形に巡ることから墳丘の形状は概ね復元できる。

墳丘北側では、北東部では墳頂平坦面の下に、蜜柑畑石垣が巡り、その下に畑に利用されたとみられる平坦面を経て、大日山１号墳へと続く北側斜面が立ち上がる。墳頂と平坦面の比高は 1.5m 程度と低い。一方、墳丘の北西部では石垣が巡っておらず、墳頂平坦面から西に向けてゆるやかに下降する地形となる。

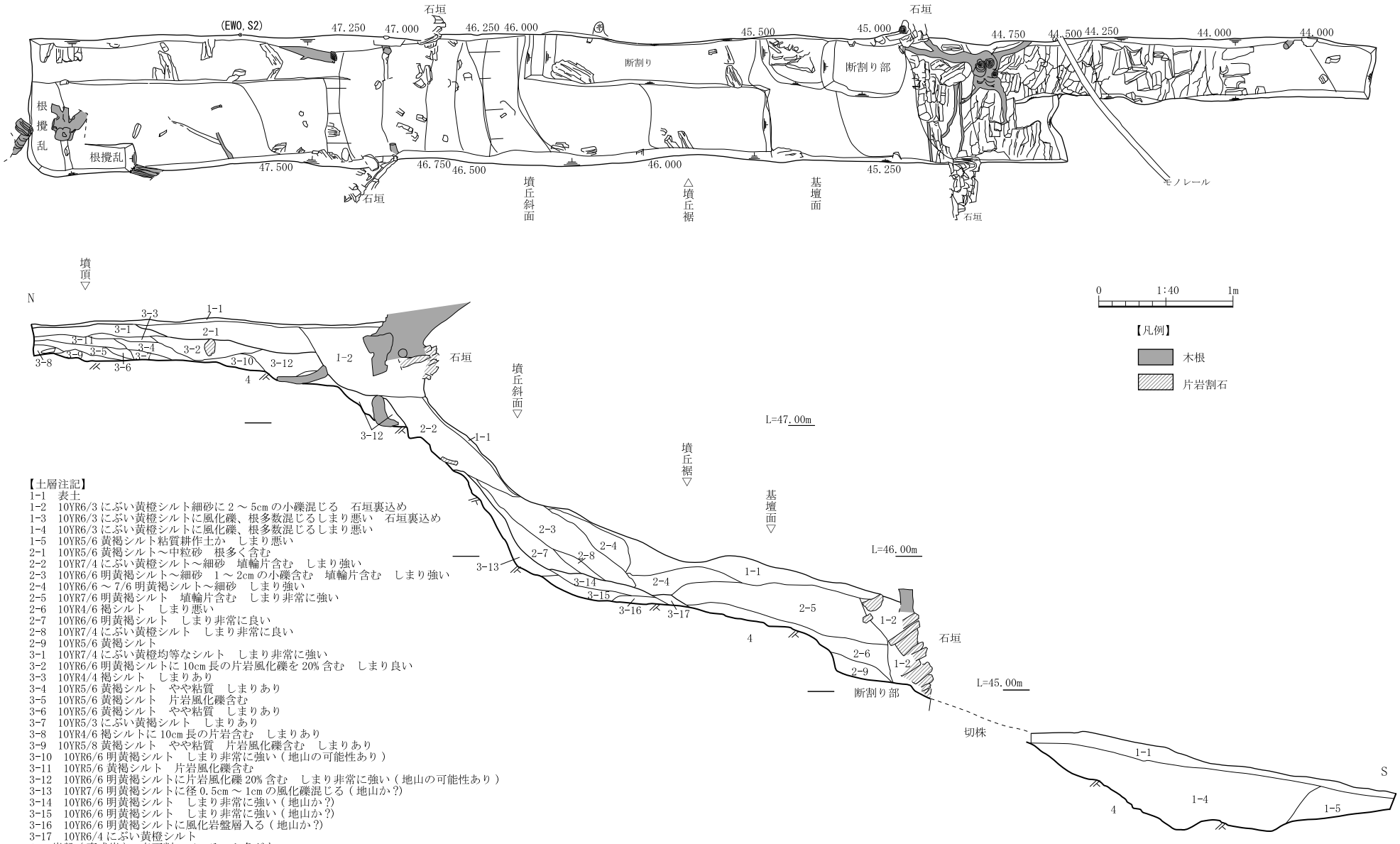
後円部及び前方部には、それぞれ横穴式石室が配置されている。後円部横穴式石室は、東西主軸で、西側に開口する岩橋型横穴式石室である。昭和 40 年の発掘調査時にはすでに半壊状態で、天井石及び側壁の大部分を欠いていた。玄室は、幅約 1.65m、長さ 0.91m のいわゆる T 字型で、西側に長い排水溝を持つ。現在は完全に埋め戻され、石材等を確認することもできない。

前方部には、東西主軸で西側に開口し、玄室、前室、羨道からなる岩橋型横穴式石室が配置される。昭和 40 年の発掘調査時にはすでに玄室及び羨道部の天井石を欠き、玄室の側壁も下部の数段を残すのみであった。横穴式石室は、玄室幅 1.95m、長さ 2.63m の両袖式で、玄室前道とその前面に幅 0.83m、長さ 1.66m の前室をもち、前室前道とさらに幅 0.67m、長さ 1.4m の羨道からなる。前室前道は羨道側から結晶片岩の板石一枚で閉塞され、さらに羨道側から閉塞石に棒状の結晶片岩を斜めに立てかけていた。現在は玄室部分が完全に埋め戻されているが、前室及び羨道、前庭部は側壁及び閉塞石が露出した状態である。ただし、発掘調査時の図面と現在の石積を比較したところ、露出している石積のうち両側壁の上部の石積については、調査後に積まれたものであることが判明した。また、開口していた玄室入口についても、現在は新たに施された石積により封鎖されている。

（２）１トレンチ

後円部の墳丘裾を確認し、古墳の規模を明らかにすることを目的に墳丘仮主軸上に南北に設定した幅 1m ×長さ 10m のトレンチである。トレンチは、現況の後円部墳頂平坦面から墳丘外の緩斜面にかけて、設定した。

断ち割り調査の結果、基壇面と墳丘裾及び墳丘斜面を検出した。（なお、本報告では、寺内 18



【土層注記】
1-1　表土
1-2　10YR6/3 にぶい黄橙シルト細砂に 2 ～ 5cm の小礫混じる　石垣裏込め
1-3　10YR6/3 にぶい黄橙シルトに風化礫、根多数混じるしまり悪い　石垣裏込め
1-4　10YR6/3 にぶい黄橙シルトに風化礫、根多数混じるしまり悪い
1-5　10YR5/6 黄褐シルト粘質耕作土か　しまり悪い
2-1　10YR5/6 黄褐シルト～中粒砂　根多く含む
2-2　10YR7/4 にぶい黄橙シルト～細砂　埴輪片含む　しまり強い
2-3　10YR6/6 明黄褐シルト～細砂　1 ～ 2cm の小礫含む　埴輪片含む　しまり強い
2-4　10YR6/6 ～ 7/6 明黄褐シルト～細砂　しまり強い
2-5　10YR7/6 明黄褐シルト　埴輪片含む　しまり非常に強い
2-6　10YR4/6 褐シルト　しまり悪い
2-7　10YR6/6 明黄褐シルト　しまり非常に良い
2-8　10YR7/4 にぶい黄橙シルト　しまり非常に良い
2-9　10YR5/6 黄褐シルト
3-1　10YR7/4 にぶい黄橙均等なシルト　しまり非常に強い
3-2　10YR6/6 明黄褐シルトに 10cm 長の片岩風化礫を 20% 含む　しまり良い
3-3　10YR4/4 褐シルト　しまりあり
3-4　10YR5/6 黄褐シルト　やや粘質　しまりあり
3-5　10YR5/6 黄褐シルト　片岩風化礫含む
3-6　10YR5/6 黄褐シルト　やや粘質　しまりあり
3-7　10YR5/3 にぶい黄褐シルト　しまりあり
3-8　10YR4/6 褐シルトに 10cm 長の片岩含む　しまりあり
3-9　10YR5/8 黄褐シルト　やや粘質　片岩風化礫含む　しまりあり
3-10　10YR6/6 明黄褐シルト　しまり非常に強い (地山の可能性あり)
3-11　10YR5/6 黄褐シルト　片岩風化礫含む
3-12　10YR6/6 明黄褐シルトに片岩風化礫 20% 含む　しまり非常に強い (地山の可能性あり)
3-13　10YR7/6 明黄褐シルトに径 0.5cm ～ 1cm の風化礫混じる (地山か ?)
3-14　10YR6/6 明黄褐シルト　しまり非常に強い (地山か ?)
3-15　10YR6/6 明黄褐シルト　しまり非常に強い (地山か ?)
3-16　10YR6/6 明黄褐シルトに風化岩盤層入る (地山か ?)
3-17　10YR6/4 にぶい黄橙シルト
4　岩盤 (変成岩)　表面削っているのか角がない

図 51　1 トレンチ平面図・東壁土層断面図（S=1/40）

号墳の墳丘裾の平坦面について、最下段の斜面や裾が造成されていないことから、これを最下段テラスではなく「基壇」であるとして記述する。）

墳丘裾及び墳丘斜面　断ち割り調査の結果、墳丘裾は平坦に上面を整えた地山岩盤層上に施された墳丘盛土（第３層）の傾斜が変換するトレンチ北端から約 4.8m 南の標高 45.6m 付近とみられる。墳丘裾付近では、墳丘盛土を厚さ５～ 10㎝の単位で積み上げ墳丘斜面を形成しているが、標高 46m より上部は、岩盤を削り出して急斜面の墳丘斜面を形成する。地山岩盤層を削り出した墳丘斜面は、墳丘裾から比高 1.8 ～ 2.0m となる標高 47.6m 付近まで及ぶ。標高 47.6m 付近で地山の岩盤層の上面を平坦に整え、その上部に厚さ５～ 10㎝の単位で水平に墳丘盛土を積み上げて墳丘を構築する。現況で確認できる墳丘盛土の厚さは約 20㎝で、地山削り出しの墳丘斜面と合わせて、南側後円部高は約 2.0m を測る。

基壇面　墳丘裾から南側では、上面を整えられた地山岩盤層の平坦面からなる基壇面を確認した。昭和 40 年の発掘調査で確認された墳丘裾を巡る埴輪列は、この基壇面に樹立されていたこととなる。この基壇面は、墳丘裾から約 1m 南側で、深さ 20 ～ 30㎝程度掘り込まれていたが、これは蜜柑畑の石垣設置に伴い削平されたものとみられる。昭和 40 年の発掘調査の測量図と比較すると、石垣設置地点のすぐ北側が埴輪 No.9 の樹立地点にあたることから、本来の基壇平坦面は石垣付近まで続いていたと考えられる。基壇平坦面の南端は、石垣設置による撹乱のため明確ではないものの、石垣より南側の範囲では地山岩盤層が平坦面をもたず、緩やかに南に下降し、表面の整形も施されていない。このことから、基壇端は石垣設置地点付近に想定することができ、墳丘南側の基壇面は幅 1.8m 程度となる。

出土遺物　後円部南側の基壇面付近の石垣裏込土から、人物形埴輪及び石見型埴輪の破片が出土した。尚、基壇面上に樹立されていた埴輪については、昭和 40 年の発掘調査時にすべて取り上げられ、現在、和歌山市で保管されている。

（３）２トレンチ

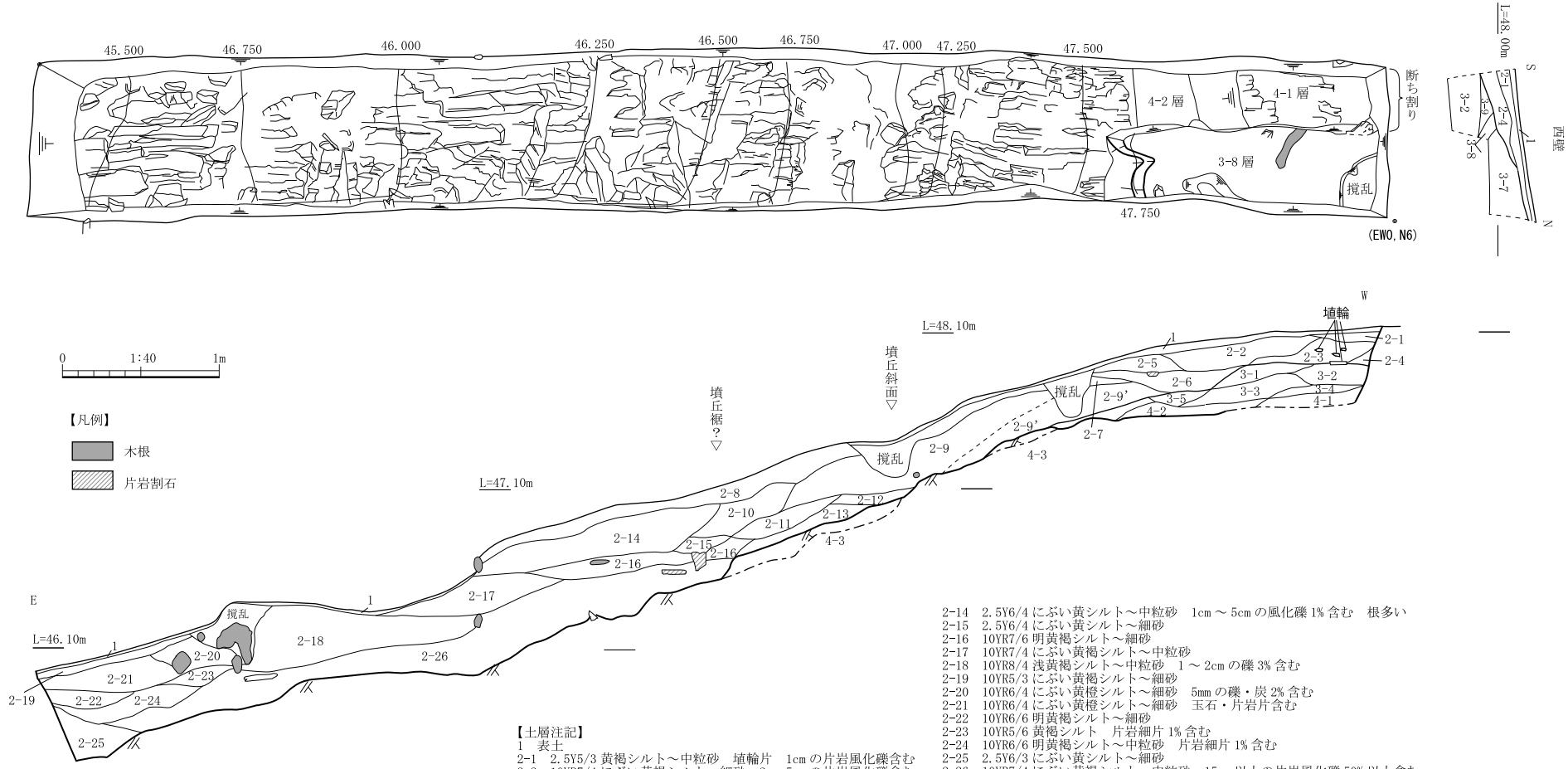
墳丘東側くびれ部付近における造り出しの有無を確認することを目的に、墳丘仮主軸に直交する方向で、現況の墳頂平坦面から東側石垣にかけての斜面上に設定した幅 1m ×長さ 8.8m のトレンチである。

断ち割り調査の結果、地山岩盤層を削り出して成形した墳丘斜面と、墳頂付近で平坦にし上面を整えた地山層（第４層）及びその上部に施された墳丘盛土（第３層）を検出した。

墳丘裾及び墳丘斜面　標高 45.1m 付近から標高 47．5m 付近までは、第１層及び第２層直下に、地山岩盤層が一定の傾斜をもって広がる。地山岩盤層は、標高 46.5m より上部では、表面が整形されているが、標高 46.5m より下部では表面に整形された痕跡が認められない。岩盤の表面が整えられている範囲は、地山岩盤層を削り出し成形した墳丘斜面にあたると考えられる。地山岩盤層の整形状況が切り替わる標高 46.5m 付近では、明瞭ではないもののわずかに岩盤の傾斜が変化しており、この付近に墳丘裾を想定することができる。

一方、墳頂側では、地山岩盤層又は地山層が標高 47．5m 付近でその上面を平坦に整え、その上部に厚さ５～ 10㎝の単位で墳丘盛土を高さ 20㎝程度まで水平に積み上げて墳丘を構築していることを確認した。墳丘裾が標高 46.5m 付近であったとすれば、東くびれ部付近の墳丘裾と墳頂との比高は約 1.2m となる。

基壇付近　東くびれ部の基壇面については、昭和 40 年の発掘調査において、「東くびれ部は墳丘



【土層注記】
1　表土
2-1　2.5Y5/3 黄褐シルト～中粒砂　埴輪片　1cm の片岩風化礫含む
2-2　10YR7/4 にぶい黄褐シルト～細砂　2 ～ 5cm の片岩風化礫含む
2-3　10YR7/4 にぶい黄褐シルト～細砂　埴輪片多数含む
2-4　10YR6/4 にぶい黄褐シルト　5cm 長の片岩風化礫含む
2-5　10YR7/4 にぶい黄褐シルト～細砂
2-6　10YR6/6 明黄褐シルト　1cm の片岩風化礫 1% 含む
2-7　10YR6/6 明黄褐シルト
2-8　10YR6/3 にぶい黄シルト～細砂　5mm ～ 1cm の風化礫 2% 含む
2-9　10YR7/6 明黄褐シルト～中粒砂　5 ～ 10cm の片岩風化礫 7% 含む
(2-9')　2-9 と同じ　しまり良い　（盛土か？）
2-10　2.5Y7/4 浅黄シルト～中粒砂　5cm の風化礫 3% 含む
2-11　10YR6/6 明黄褐シルト　1 ～ 2cm の風化礫 1% 含む
2-12　2.5Y7/4 浅黄シルト　1cm の風化礫 2% 含む
2-13　2.5Y7/4 浅黄シルト　5cm の風化礫 2% 含む
2-14　2.5Y6/4 にぶい黄シルト～中粒砂　1cm ～ 5cm の風化礫 1% 含む　根多い
2-15　2.5Y6/4 にぶい黄シルト～細砂
2-16　10YR7/6 明黄褐シルト～細砂
2-17　10YR7/4 にぶい黄褐シルト～中粒砂
2-18　10YR8/4 浅黄褐シルト～中粒砂　1 ～ 2cm の礫 3% 含む
2-19　10YR5/3 にぶい黄褐シルト～細砂
2-20　10YR6/4 にぶい黄橙シルト～細砂　5mm の礫・炭 2% 含む
2-21　10YR6/4 にぶい黄橙シルト～細砂　玉石・片岩片含む
2-22　10YR6/6 明黄褐シルト～細砂
2-23　10YR5/6 黄褐シルト　片岩細片 1% 含む
2-24　10YR6/6 明黄褐シルト～中粒砂　片岩細片 1% 含む
2-25　2.5Y6/3 にぶい黄シルト～細砂
2-26　10YR7/4 にぶい黄褐シルト～中粒砂　15cm 以上の片岩風化礫 50% 以上含む
締まり悪い（ガラガラ）　地山由来であるが締まりが悪く面を検出できない
3-1　10YR8/6 黄褐シルト～細砂　1 ～ 2cm の片岩風化礫 20% 含む　しまり良い
3-2　10YR7/6 明黄褐シルト　しまり良い　片岩風化礫 1% 含む
3-3　10YR8/6 黄褐シルト　5mm の片岩風化礫 2% 含む　しまり良い
3-4　10YR7/6 明黄褐シルト　しまり良い
3-5　10YR6/4 にぶい黄褐シルト～細　1cm の片岩風化礫 3% 含む　しまり良い
3-6　10YR7/4 にぶい黄褐シルト　片岩風化礫わずかに含む　しまり良い
3-7　10YR6/6 明黄褐シルト　片岩風化礫 5% 含む（西壁のみ）
3-8　10YR6/6 明黄褐シルト　片岩風化礫 2% 含む（西壁のみ）
3-9　10YR6/6 明黄褐シルト　しまり良い（西壁のみ）
4-1　10YR6/6 明黄褐シルトに 40% 岩盤
4-2　10YR5/6 黄褐シルトに 40% 岩盤
4-3　岩盤層（変成岩）

図 52　2 トレンチ平面図・南壁土層断面図（S=1/40）

基底部で幅広く、東側くびれ部にややふくらんだ部分があり、造り出し状を呈している。」（関西大学 1967）と 報告されているが、現況では、墳丘裾付近とみられる標高 46.5m より下部においても、岩盤は一定の傾斜をもって下降し、平坦面を確認することはできない。この範囲では、岩盤直上に長さ 15㎝前後の片岩の風化礫を多量に含むしまりの悪い層（第 2-26 層）がトレンチ東端まで広がる。このことから基壇面付近は開墾により大きく改変されたとみられ、基壇面及び造り出しの有無についての手がかりを得ることはできなかった。尚、昭和 40 年の測量図から想定される埴輪 No.20 の樹立地点付近において精査したが、堀方等の痕跡を確認することはできなかった。

出土遺物　斜面の流土中（第 2 層）から、馬形埴輪や人物埴輪等の形象埴輪片が複数点出土した。このうち一部の破片は、昭和 40 年の発掘調査で後円部墳頂の方形埴輪列から出土した破片と接合した。

（4）3 トレンチ

昭和 40 年の発掘調査で調査が及んでいない前方部東側において、墳丘の形状及び規模を確認することすることを目的に、墳頂平坦部から東側石垣にかけての斜面上に墳丘仮主軸に直交する方向に設定した幅 1m ×長さ 9.3m のトレンチである。現況は、墳頂平坦面から下降する東側斜面に蜜柑畑の石垣が巡り、さらにその下部は平坦面をもたず、東に下降する斜面となっている。

断ち割り調査の結果、墳丘盛土及び箱式石棺の蓋石と考えられる板石を検出した。

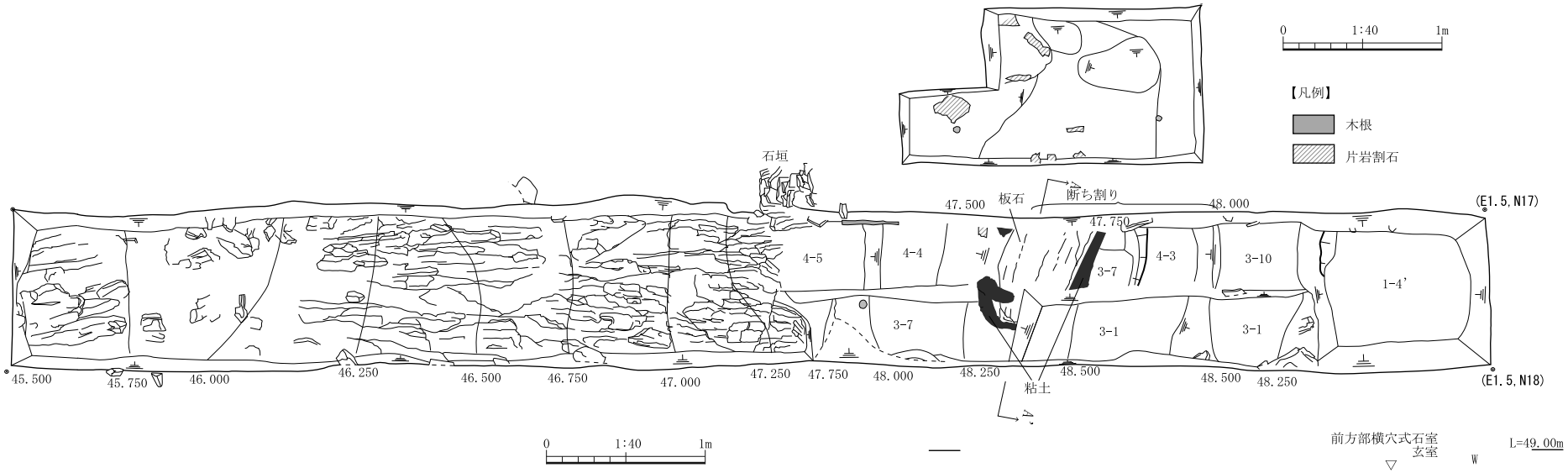
前方部横穴式石室玄室付近　前方部には、東西に主軸をもち、西側に開口する玄室、前室、羨道からなる岩橋型横穴式石室が配置されている。このうち玄室は、玄室幅 1.95m、長さ 2.63m の両袖式を呈するが、乱掘により昭和 40 年の発掘調査時にはすでに天井石及び側壁の大部分を欠き、側壁及び奥壁は高さ約 1.2m を残すのみであった。現在、前室及び羨道は天井を欠失した状態で側壁が露出しているが、玄室部分は完全に埋め戻されている。

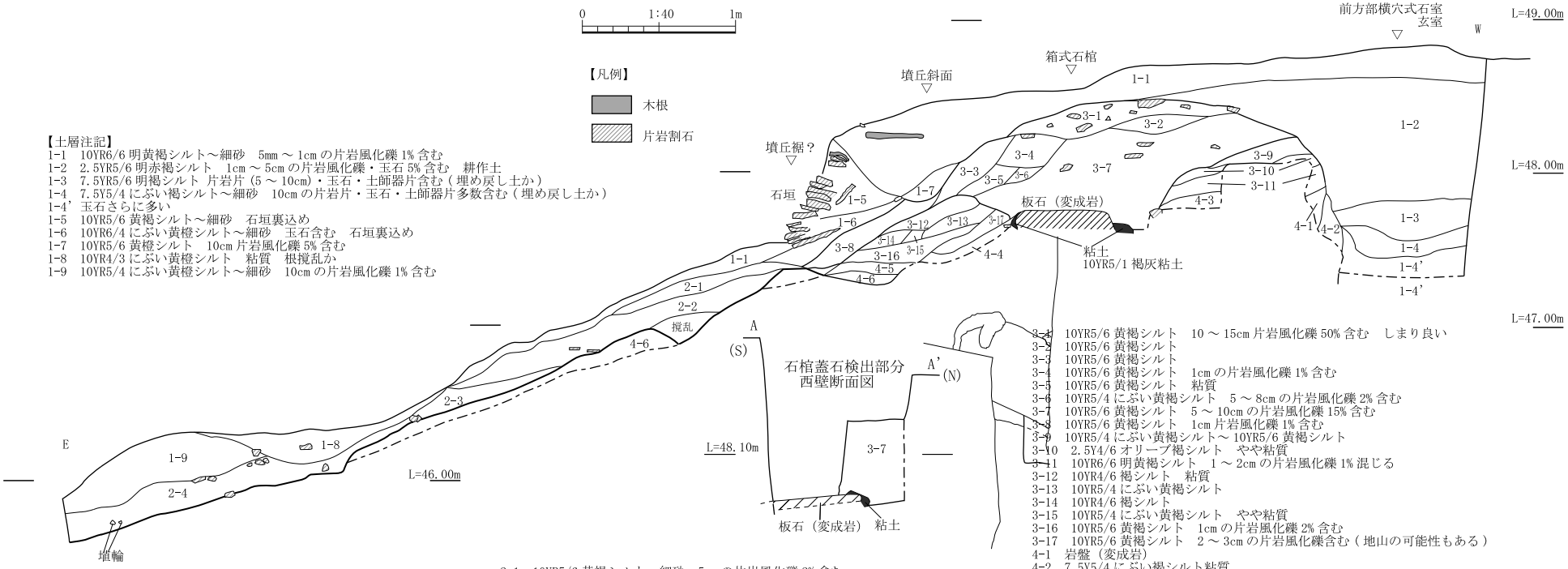
掘削の結果、トレンチ西端から 1m 東側までは、地山岩盤層及び墳丘盛土を大きく掘り込んだ掘方内に、現地表面から約 1.4m の深さまで、現代耕作土と土師器片や玉石を含む横穴式石室の埋戻し土（第 1 層）が堆積していることを確認した。この地点は、露出している前室及び羨道部から想定される玄室奥壁及び石室裏込め部分に当たり、検出した掘方は、前方部横穴式石室の盗掘坑ラインと考えられる。

この範囲において堆積土を掘削した結果、前方部横穴式石室奥壁の石積が検出可能な標高 48.0m 付近に至っても、第 1 層の堆積が続いており、奥壁石積を確認することができなかった。尚、奥壁石積の基底部は標高 47.0m 付近に想定されるが、調査の安全面を考慮し、今回の調査では標高 47.4m までしか掘削していない。標高 47.4m までは第 1 層が堆積していることを確認し、それより下部はピンポールにより石材の有無を確認したが石材を確認することはできなかった。このことから、前方部横穴式石室玄室の奥壁石積は、昭和 40 年の発掘調査以降に石材が取り除かれ、現況では玄室奥壁石積は残存していない可能性が極めて高いことが判明した。

尚、盗掘坑の東壁を精査したところ、標高 47.8m 付近まで地山岩盤層が及んでいることを確認した。玄室基底部が標高 47.0m 付近に想定されることから、石室構築の際に地山岩盤層を少なくとも 80㎝以上掘り込んでいることがわかる。岩盤層の上部には黄褐色シルトとオリーブ褐色シルトの墳丘盛土が厚さ 10㎝の単位で交互に積まれていることを確認した。

小型箱式石棺の検出　3 トレンチ中央では、断ち割り調査の結果、地山及び地山岩盤層とその上





【土層注記】
1-1　10YR6/6 明黄褐シルト～細砂　5mm ～ 1cm の片岩風化礫 1% 含む
1-2　2.5YR5/6 明赤褐シルト　1cm ～ 5cm の片岩風化礫・玉石 5% 含む　耕作土
1-3　7.5YR5/6 明褐シルト 片岩片（5 ～ 10cm）・玉石・土師器片含む（埋め戻し土か）
1-4　7.5Y5/4 にぶい褐シルト～細砂　10cm の片岩片・玉石・土師器片多数含む（埋め戻し土か）
1-4'　玉石さらに多い
1-5　10YR5/6 黄褐シルト～細砂　石垣裏込め
1-6　10YR6/4 にぶい黄橙シルト～細砂　玉石含む　石垣裏込め
1-7　10YR5/6 黄橙シルト　10cm 片岩風化礫 5% 含む
1-8　10YR4/3 にぶい黄橙シルト　粘質　根撹乱か
1-9　10YR5/4 にぶい黄橙シルト～細砂　10cm の片岩風化礫 1% 含む

2-1　10YR5/6 黄褐シルト～細砂　5cm の片岩風化礫 2% 含む
2-2　10YR5/6 黄褐シルト　玉石・青石片含む
2-3　10YR5/4 にぶい黄褐シルト　埴輪片含む
2-4　10YR6/6 明黄褐シルト　埴輪片含む　15cm の片岩風化礫 3% 含む

3-1　10YR5/6 黄褐シルト　10 ～ 15cm 片岩風化礫 50% 含む　しまり良い
3-2　10YR5/6 黄褐シルト
3-3　10YR5/6 黄褐シルト
3-4　10YR5/6 黄褐シルト　1cm の片岩風化礫 1% 含む
3-5　10YR5/6 黄褐シルト　粘質
3-6　10YR5/4 にぶい黄褐シルト　5 ～ 8cm の片岩風化礫 2% 含む
3-7　10YR5/6 黄褐シルト　5 ～ 10cm の片岩風化礫 15% 含む
3-8　10YR5/6 黄褐シルト　1cm 片岩風化礫 1% 含む
3-9　10YR5/4 にぶい黄褐シルト～ 10YR5/6 黄褐シルト
3-10　2.5Y4/6 オリーブ褐シルト　やや粘質
3-11　10YR6/6 明黄褐シルト　1 ～ 2cm の片岩風化礫 1% 混じる
3-12　10YR4/6 褐シルト　粘質
3-13　10YR5/4 にぶい黄褐シルト
3-14　10YR4/6 褐シルト
3-15　10YR5/4 にぶい黄褐シルト　やや粘質
3-16　10YR5/6 黄褐シルト　1cm の片岩風化礫 2% 含む
3-17　10YR5/6 黄褐シルト　2 ～ 3cm の片岩風化礫含む（地山の可能性もある）
4-1　岩盤（変成岩）
4-2　7.5Y5/4 にぶい褐シルト粘質
4-3　10YR5/6 黄褐シルト　変成岩風化層混じる
4-4　10YR6/6 明黄褐シルトと 5YR6/6 橙シルト　変成岩岩盤風化層混じる
4-5　10YR5/8 黄褐シルト
4-6　岩盤（変成岩）

図 53　3 トレンチ平面図・南壁土層断面図（S=1/40）

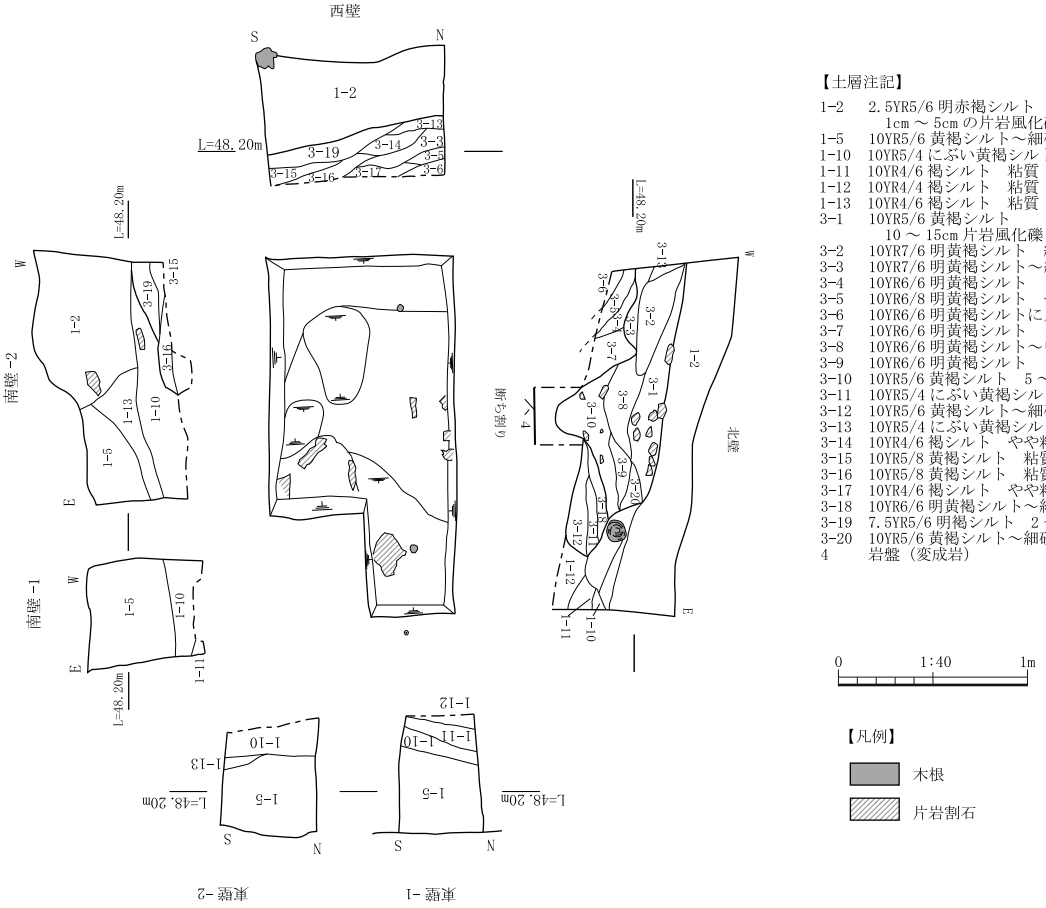


図 54　3 トレンチ南拡張部（3-2 トレンチ）　土層断面図　（S=1/40）

部に積まれた墳丘盛土、小型の箱式石棺の蓋石とみられる結晶片岩の板石一枚を検出した。地山及び地山岩盤層は、トレンチ西端から約 4m 東の地点では標高 47.4m 付近で一度平坦に整えられ、そこから緩やかな傾斜をもって西側に立ち上がり、横穴式石室玄室奥壁の裏込め付近では標高 47.8m となる。地山及び地山岩盤層の上部には、褐色シルトと黄褐色シルトの墳丘盛土（第 3-9 から 3-17 層）を厚さ約 10cmの単位で交互に積み上げて、墳丘を構築している。トレンチ西端から 2.4m 東の標高 48.0m 付近では、この墳丘盛土を掘り込んだ掘方内に小型の箱式石棺が設置されていた。蓋石は結晶片岩の板石で、主軸を南南東－北北西方向とし、上面はほぼ水平を保っていた。蓋石の北端は 3 トレンチ内で確認したが、南端はトレンチ南壁より南に続く。蓋石の長さを確認するため、3 トレンチの南側に 30cmの畔を設けてトレンチを拡張（3-2 トレンチ）し掘削した結果、板石の南端は 3 トレンチと 3-2 トレンチ間の畔内に収まることが判明した。このことから、蓋石は、最大幅 50cm、長さ 70cm以内、厚さ 10cm以上となる。

また、ピンポールにより蓋石下部の石材の有無を確認した結果、東西の長側板にあたる板石があることを確認した。蓋石の周囲には粘土が充填されており、この粘土により蓋石と側板は固定され、密封されていた。

墓壙は、厚さ約10cmの単位の褐色シルトと黄褐色シルト層を交互に積み上げた墳丘盛土（第3-9から3-17層）を掘り込んでいる。墓壙の壁は石棺付近では約80cmの幅でほぼ垂直に立ち上がるが、上部では大きく開く形となり、断ち割り部の南壁面では幅1.6mを測る。調査では、墓壙底面までは掘削していないが、側板幅を20～30cmと仮定すると、箱式石棺の底部は、この付近の地山岩盤層検出レベルと一致する。墓壙を上部では広く、石棺付近では狭くなるように2段階に掘削し、石棺底面を地山直上にあたるようにして箱式石棺を設置する例は、岩橋千塚古墳群内の大谷山39号墳でも確認されており、本古墳群内での共通したあり方とみられる。また、岩橋千塚古墳群内の出土事例から、石棺の内法が140cm以下のものはいずれも小児用である（和歌山県教育委員会2017）ことを考えると、この箱式石棺も小児用であったと考えられる。

箱式石棺を設置後、長さ5～10cmの片岩風化礫を多量に含む墳丘盛土（第3-1層から第3-7層）を施し、再び墳丘を構築する。

前方部横穴式石室設置時に構築されたと考えられる褐色シルトと黄褐色シルトからなる墳丘盛土と、箱式石棺設置後に構築された片岩風化礫を多量に含む墳丘盛土の切り合い関係から、箱式石棺は前方部横穴式設置後に墳丘を掘り込み設置されたことがわかる。

墳丘裾　墳丘は、上面を平らに整えた地山及び地山岩盤層の上部に、箱式石棺設置前に施された墳丘盛土と、箱式石棺設置後に施された墳丘盛土の2種類の墳丘盛土によって構築されている。墳丘盛土はトレンチ西端から約4m東まで施され、それより東側では地山岩盤層がトレンチ東端まで一定の傾斜で下降する。墳丘斜面の傾斜変換点は確認できないが、傾斜面の地山岩盤層の表面に整形が施されていないことから、墳丘盛土が施された範囲の東端にあたるトレンチ西端から約4m東の標高47.4m付近の地点が、墳丘裾にあたる可能性が高い。

基壇付近　想定される墳丘裾より東側では、地山岩盤層の傾斜面が続き、基壇の可能性がある平坦面は認められなかった。前方部東側は、昭和40年の発掘調査においても調査が行われていない範囲で、これまで基壇面の有無及び基壇上の埴輪列の有無については報告されていない。したがって、トレンチ東側で確認された地山岩盤層の斜面は、古墳築造当初からの地形であるのか、当初は基壇平坦面をもっていた地点が後世の削平により傾斜面となっているのかについては、明らかではない。

出土遺物　前方部横穴式石室埋戻し土中（第1層）から土師器坏が出土した。また、流土中（第2層）から円筒埴輪片及び人物形・馬形・石見型埴輪片が出土した。

（5）4トレンチ

昭和40年の発掘調査において調査が及んでいない前方部北側で、前方部の墳丘裾を確認し、古墳の規模及び形状を明らかにすることを目的に、前方部墳頂付近から墳丘外の平坦面にかけて設定した幅1m×長さ6.8mのトレンチである。墳丘に開墾が及んでいない可能性の高い、仮主軸から約4m西側に平行して南北に設定したトレンチである。

断ち割り調査の結果、墳丘斜面、墳丘裾、基壇面及び基壇上に樹立した状態の円筒埴輪1基を検出した。

墳丘裾及び墳丘斜面　墳丘裾は、墳丘盛土（第3層）と地山岩盤層（第4層）からなる墳丘の

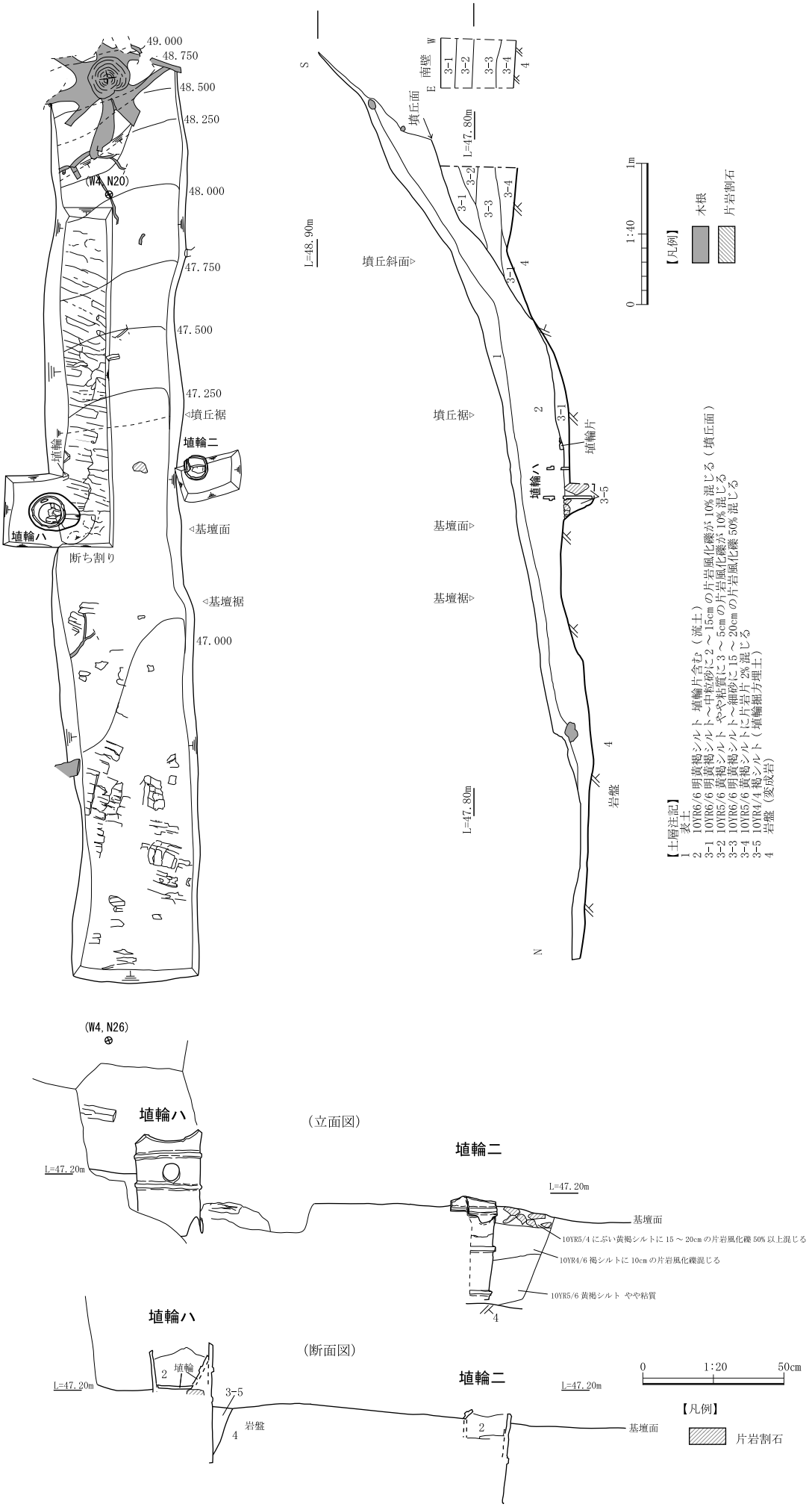


図 55　4 トレンチ平面図・東壁土層断面図（S=1/40）、埴輪ハ・埴輪二　立面図・断面図（S=1/20）

傾斜変換点にあたるトレンチ南端から約 2.6m 北側の標高 47.2m 付近とみられる。断ち割り調査の結果、墳丘裾付近から標高 47.6m 付近までは地山岩盤層を削り出して緩やかな斜面を形成し、上部には墳丘盛土を薄く施す。標高 47.6m 付近で地山岩盤層は上面を平坦に整え、その上部に厚さ約 10㎝の単位で明黄褐色シルトと黄褐色シルトの墳丘盛土を施し、墳丘を構築する。

基壇面　墳丘裾から北側では、上面を平坦に整えた地山岩盤層からなる基壇面を確認した。基壇面は幅約 1.3m を測る。基壇端から北側の地山岩盤層は、上面を整えず、基壇面との比高 10㎝程度で北側に緩やかに下降した後、ほぼ平坦となる。

埴輪ハ　基壇面付近の東壁を精査した際に壁面にかかる埴輪を検出したため、トレンチの一部を東側に 50㎝拡張した。その結果、墳丘裾から約 50㎝北側の地点で、樹立状態を保った円筒埴輪（埴輪ハ）を検出した。埴輪ハは、スカシ孔を南北に配置し、地山岩盤層に掘り込まれた直径 25 ～ 30㎝の楕円形の掘方内に、底部から最下段突帯付近までの約 20㎝の深さまで埋められていた。円筒埴輪の内部には、埴輪を固定するためとみられる複数の片岩片が配置される。

埴輪ニ（4 トレンチと 5 トレンチ間の調査）　後述する 5 トレンチの調査において、基壇上に巡る埴輪列が確認された。5 トレンチでは、検出された埴輪が心々距離 0.8 ～ 1m の間隔で配置されていたことから、4 トレンチと 5 トレンチの間にも埴輪列の埴輪が樹立されている可能性が推定された。このことから、4 トレンチ及び 5 トレンチの壁面の土層記録を作成後、両トレンチ間の畔を撤去した。基壇上面を精査した結果、基壇上面で樹立状態を保ったままの形象埴輪の基部（埴輪ニ）を検出した。埴輪ニは底部径 20㎝で、掘方内に 3 段目突帯が埋まる深さ 60㎝まで埋められていた。

出土遺物　基壇上面で、円筒埴輪片、形象埴輪片と須恵器甕の破片が出土した。

（6）5 トレンチ

昭和 40 年の発掘調査において調査が及んでいない前方部西隅において、墳丘の形状を明らかにすることを目的に設定した幅 5.2m ×長さ 3.8m のトレンチである。

調査の結果、墳丘斜面、墳丘裾、基壇面及び基壇上に樹立した状態の円筒埴輪及び据え置かれた須恵器大甕、基壇面に掘り込まれた土器埋納遺構を検出した。

墳丘裾及び墳丘斜面　前方部北側の墳丘裾は、墳丘盛土（第 3 層）と地山岩盤層（第 4 層）からなる墳丘の傾斜変換点である標高 47.0m 付近とみられる、前方部北西側の墳丘裾は、墳丘盛土の傾斜が変化する標高 46.2m 付近とみられる。前方部北西隅はこの北側墳丘裾と北西側墳丘裾が交差する地点に認められる。

墳丘斜面は、片岩風化礫を多量に含む黄褐色シルトと褐色シルトの墳丘盛土で形成される。

基壇面　墳丘北側では、墳丘裾から北側で、上面を平坦に整えた地山岩盤層からなる幅約 1m の基壇面を確認した。基壇端より北側では、地山岩盤層の上面は整えられず、地山岩盤層は緩やかに北側に下降して基壇面と約 10㎝の比高をもつ。尚、北側で基壇面を形成する地山岩盤層は、トレンチ東端では標高 47.0m となるが、トレンチ東端から約 2m（仮主軸から 7m）西側で西に大きく下降し、トレンチ西端では標高 45.0m となる。トレンチ南側の断ち割り調査の結果、墳丘の北西側では、標高 45.0m から地山岩盤層上に厚さ 10㎝の単位で 1m 以上積み上げた盛土の上面を、標高 46.2m 付近で平坦にして幅約 1m の基壇面を形成する。基壇面は東から緩やかに西に傾斜し、東西で約 80㎝の比高をもつ。

前方部埴輪列　基壇上面を精査した結果、前方部北側に樹立状態の埴輪 5 基（埴輪ホ・埴輪ヘ・

埴輪ト・埴輪チ・埴輪リ）と北西側に樹立状態の埴輪２基（埴輪ヌ・埴輪ル）が、心々距離 0.8 ～ 1m の間隔で配置され、墳丘裾から約 50cmの位置に一直線上に並ぶ埴輪列を確認した。各埴輪は基壇上面で掘方を確認した後、掘方の埋土を一部断ち割って底部の形状を確認した。

埴輪ホ　埴輪ホは円筒埴輪である。北側墳丘裾から約 50cm北側の位置に、スカシ孔を南北に向け、地山岩盤層に掘り込まれた直径約 25cmの円形の堀方内に底部から最下段突帯までを埋める。

埴輪ヘ　埴輪ヘは円筒埴輪である。北側墳丘裾から約 50cm北側の位置にスカシ孔を北側に向け、地山岩盤層に掘り込まれた直径約 30cmの円形の堀方内に、底部から 10cm程度を埋める。埴輪ホと心々距離で 80cmを測る。

埴輪ト　埴輪トは石見型埴輪である。北側墳丘裾から約 50cm北側の位置に、スカシ孔を南北に向け、基壇面に掘り込まれた直径 20cm、深さ 60cmの円形掘方内に基部の２段目突帯までを埋める。掘方壁と埴輪基部の間に片岩片を詰め、埴輪を固定する。基部の内部には石見型埴輪形象部の破片が落ち込んでいたことから、石見型埴輪であると判明した。埴輪ホと心々距離で 1m を測る。

埴輪チ　埴輪チは円筒埴輪である。北側墳丘裾から約 50cm北側の位置に、スカシ孔を南北に向け、基壇面に掘り込まれた直径約 25cmの円形掘方内部に埴輪を設置する。掘方壁と埴輪基部の間に片岩片を詰め、埴輪を固定する。埴輪トと心々距離で 1m を測る。

埴輪リ　埴輪リは円筒埴輪である。北側墳丘裾から約 50cm北側の位置に、スカシ孔を南北に向け、基壇面に掘り込まれた直径約 30cmの円形の堀方内に、底部から 10cm程度を埋める。埴輪と掘方の間の空間及び埴輪内部に片岩片を詰め、埴輪を固定する。埴輪チと心々距離で 1m を測る。

埴輪ヌ　埴輪ヌは円筒埴輪である。北西側墳丘裾から約 50cm西側の位置に樹立する。掘方は明瞭ではない。埴輪の内部に長さ約 10cmの片岩片を配置し、埴輪を固定する。

埴輪ル　埴輪ルは円筒埴輪である。北西側墳丘裾から約 50cm西側の位置に、基壇面に掘り込まれた直径約 30cmの円形の堀方内に、底部から 20cm程度を埋める。埴輪ヌと心々距離で 90cmを測る。

須恵器大甕　前方部北側の基壇上で、墳丘裾と基壇上に樹立した埴輪列の間で、須恵器大甕を確認した。大甕は基壇面である地山岩盤層を約 10cm掘り窪めた直径 52cmの円形の掘方内に据えられており、掘方の底部を、焼成の際に歪んだ大甕の底部の形状に合わせて整形し、固定する。

土器埋納遺構　前方部北西隅付近では、北西側の墳丘裾と基壇上に樹立した埴輪列との間の基壇面上で、長径 70cm、短径 50cmの楕円形の土坑を検出した。土坑は基壇面を深さ 10cmほど掘削し、内部に須恵器坏７セット、無蓋高坏２個、須恵器壺１個、土師器壺１個を埋置した後、掘削した基壇面を形成する盛土（第 3-7 層）で埋め戻されていた。

土器は、中央に土師器壺１個を正置し、その周囲に須恵器の坏身・坏蓋６セットを円形に正置する。その両脇に高坏２個を腕部を北側に向けて倒し置き、さらに南側に須恵器坏１セットと須恵器壺１個を正置する。須恵器壺の底部及び高坏脚部付近には長さ約 5cmの片岩が置かれ、土器を固定する。

出土遺物　基壇上の埴輪列と須恵器大甕及び土器埋納遺構内の土器の他、墳丘斜面上の表土（第１層）から須恵器器台片が出土した。

（７）６トレンチ

昭和 40 年の発掘調査において調査が及んでいない前方部北側で、前方部の墳丘裾を確認し、古墳の規模を明らかにすることを目的に墳丘仮主軸上に南北に設定した幅 1m ×長さ 8m のトレンチである。トレンチは、現況の前方部墳頂平坦面から墳丘外の緩斜面にかけて設定した。調査

【土層注記】
1　表土
2-1　流土　埴輪片含む（3-1 層由来）しまり悪い
2-2　10YR5/8 黄褐シルト　やや粘質　しまり悪い　流土
3-1　10YR5/6 黄褐シルトに 5 ～ 20cm の片岩風化礫 30% 混じる　しまり強い
3-2　10YR4/6 褐シルト～中粒砂（撹乱か）
3-3　7.5YR5/8 明褐シルトに片岩風化礫 50% 混じる　しまり強い
3-4　10YR5/6 黄褐シルト～細砂に片岩風化礫 40% 含む
3-5　7.5YR4/6 褐シルトに 5 ～ 10cm の片岩風化礫 20% 混じる
3-6　10YR5/6 黄褐シルト
3-7　10YR6/6 明黄褐シルト　0.5cm の片岩風化礫 2% 含む
北西基壇面しまりかなり強い
3-8　7.5YR5/6 明褐シルト　やや粘質　片岩風化礫 20% 含む
3-9　7.5YR5/4 にぶい褐シルト
3-10　10YR5/4 にぶい黄褐シルト
3-11　10YR5/6 黄褐に片岩風化礫 2% 混じる
3-12　10YR6/6 明黄褐シルト
3-13　10YR5/6 黄褐シルト　しまりない
3-14　10YR4/6 褐シルト～細砂　0.5 ～ 1cm の片岩片 2% 含む
3-15　10YR5/6 黄褐シルト　0.2 ～ 0.5cm の片岩片 2% 含む
3-16　10YR4/6 褐シルト
3-17　10YR5/6 黄褐シルト　しまりあり　やや粘質　0.5cm の片岩片 2% 含む
3-18　10YR5/6 黄褐シルト　しまりあり
3-19　10YR5/4 にぶい黄褐シルト　やや粘質

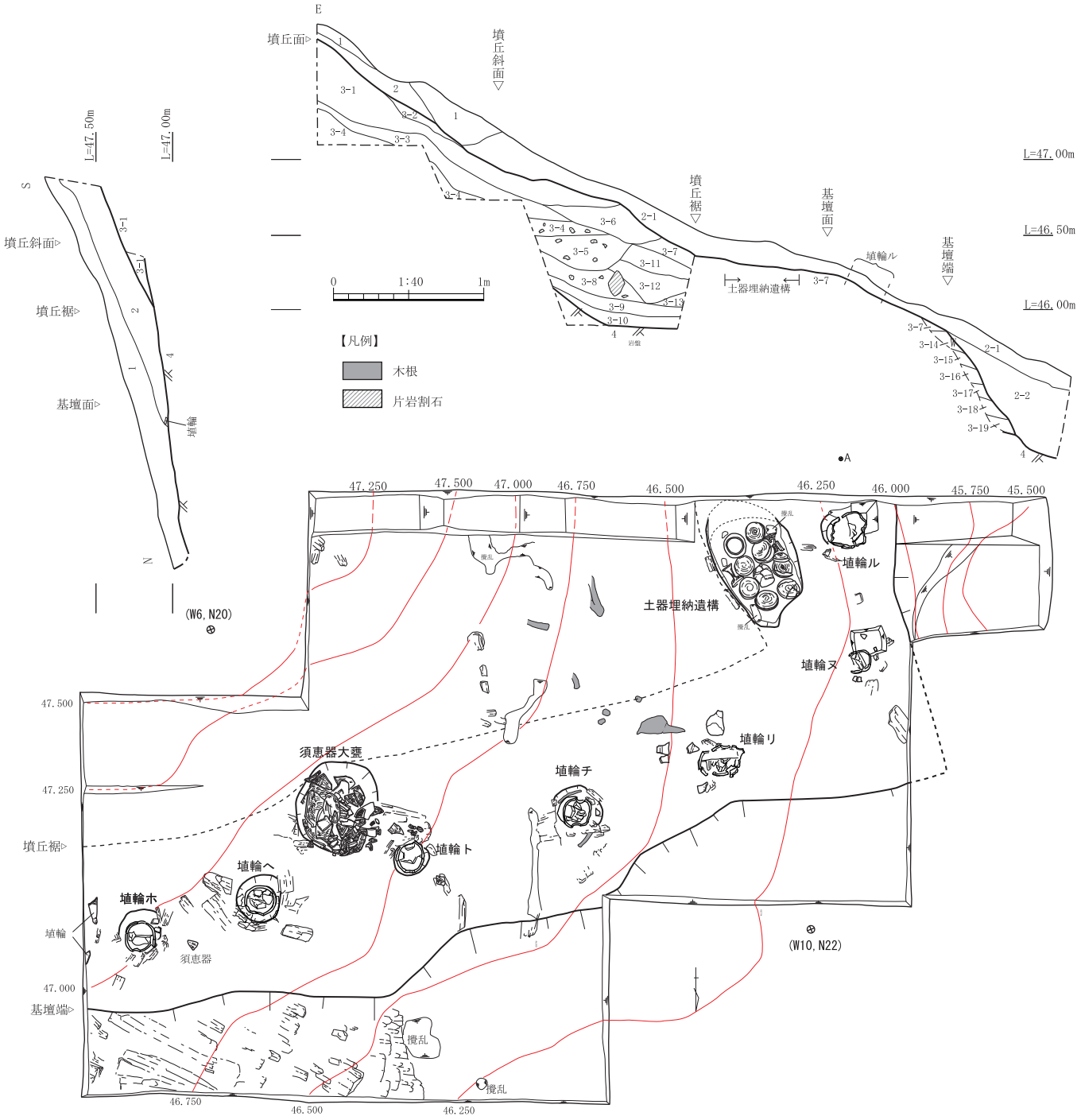
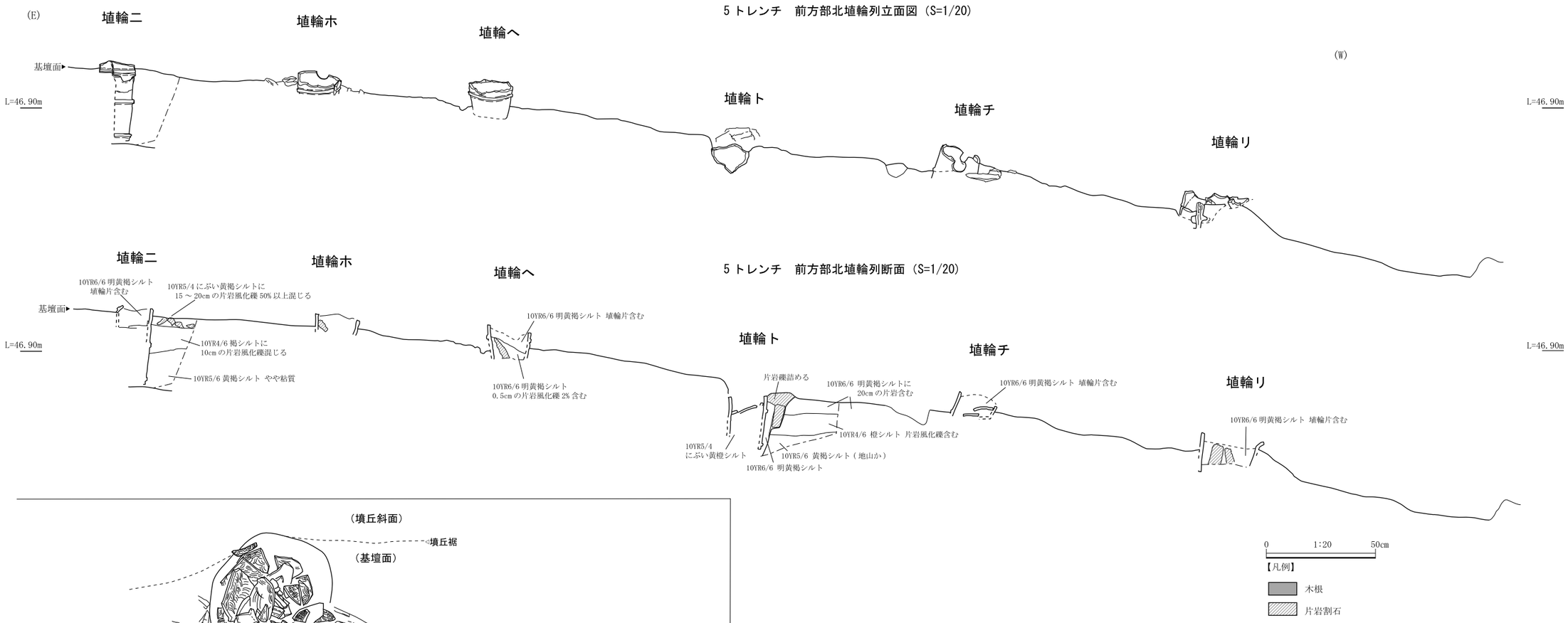


図 56　5 トレンチ平面図・南壁及び東壁土層断面図（S=1/40）

図 57　5 トレンチ出土状況（オルソ画像）



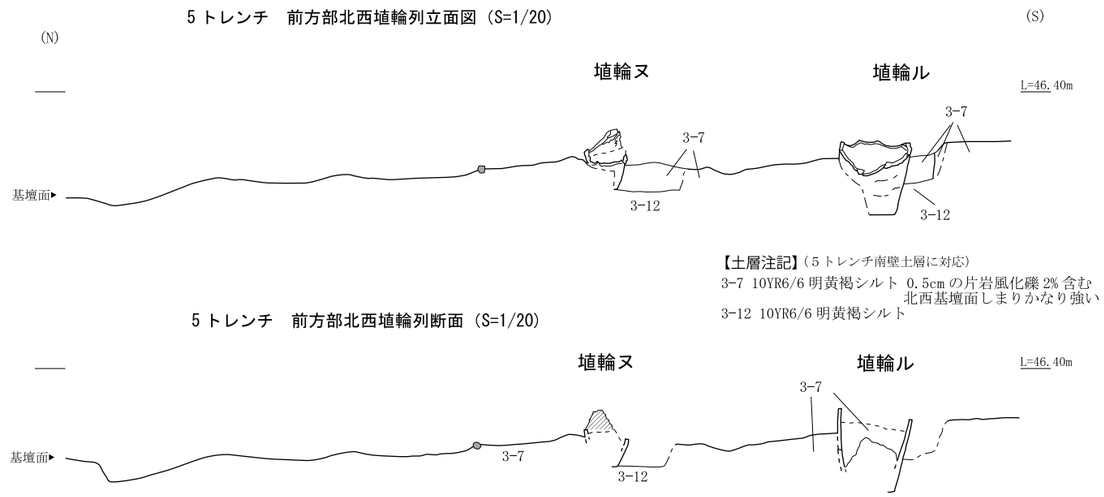


図58　5トレンチ 前方部北埴輪列・西埴輪列　立面図・断面図(S=1/20)

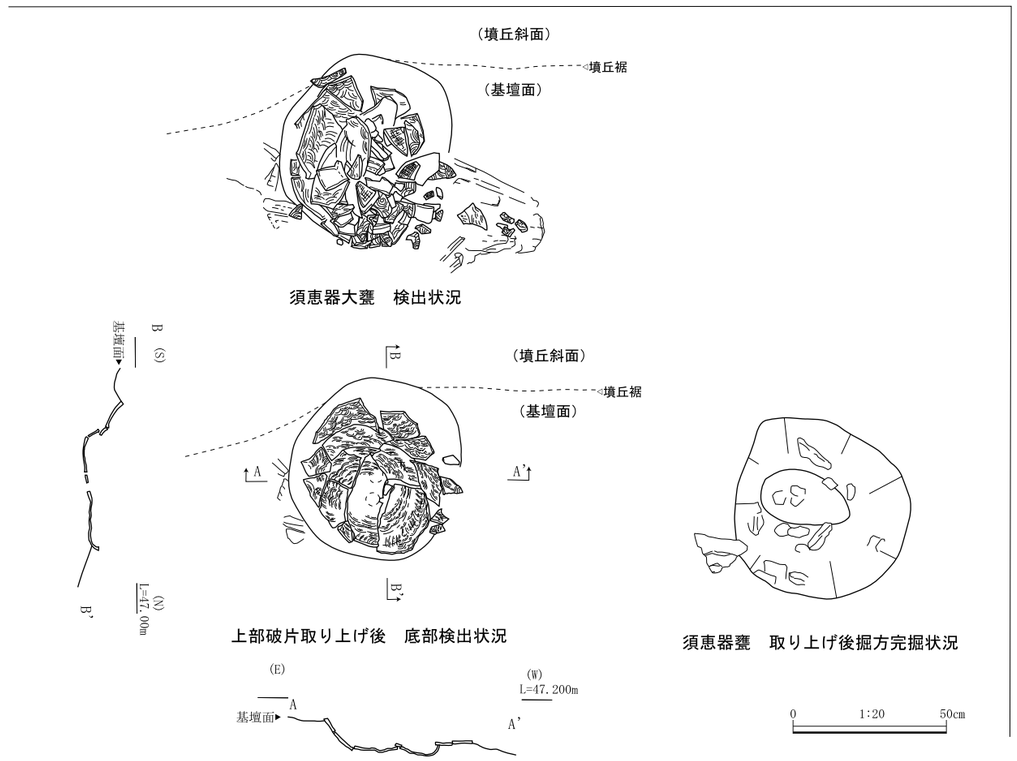


図59　5トレンチ　須恵器大甕検出状況　平面図・断面図(S=1/20)

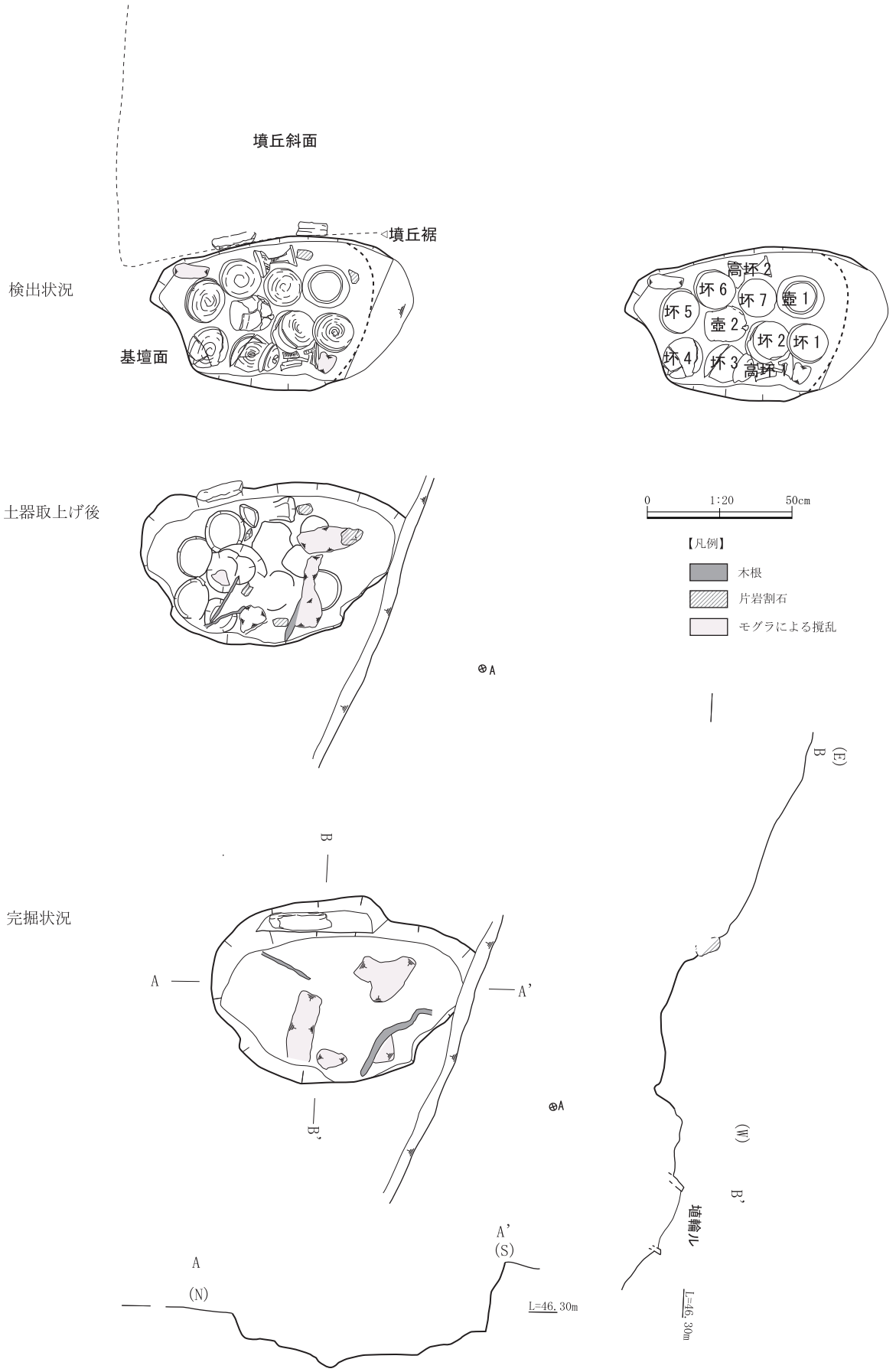


図 60　5 トレンチ　土器埋納遺構平面図・断面図（S=1/20)

の過程において、墳丘裾ラインを確認することを目的に、トレンチ中央付近を東側に 1m 拡張した。

調査の結果、墳丘斜面、墳丘裾、基壇面及び基壇上に樹立した状態の埴輪 2 基を検出した。

墳丘裾及び墳丘斜面　墳丘裾は、墳丘盛土（第 3 層）と地山岩盤層（第 4 層）からなる墳丘の傾斜変換点にあたるトレンチ北端から約 3.6m 南の標高 47.4m 付近とみられる。

断ち割り調査の結果、墳丘は地山岩盤層が墳丘裾から緩やかに立ち上がる地山岩盤層と、その上面を整え上部に積み上げた墳丘盛土からなる。墳丘盛土は、まず地山岩盤上に厚さ約 10㎝の単位で水平に積み上げた（第 3-2・3-7 ～ 3-9 層）後、その北側上面に施し（第 3-3 ～ 3-6 層）、さらに上部に、片岩風化礫を多量に含む黄褐色シルト層（第 3-1 層）を約 30㎝の厚さで広範囲に施す。現況で確認できた墳丘盛土の厚さは約 60㎝で、地山岩盤層と墳丘盛土を合わせて、北側前方部高は約 1.0m を測る。

基壇面　墳丘裾から北側では、上面を平坦に整えた地山岩盤層からなる基壇面を確認した。地山岩盤層の平坦面は、傾斜をほぼ持たずにトレンチ北端まで広がっているが、墳丘裾から約 1m 北側の地点より北側の地山岩盤層では上面が整形されていないことから、この付近が基壇端にあたると考えられる。

埴輪イ　基壇上面を精査した結果、樹立状態を保つ埴輪 2 基及びその掘方を検出した。

埴輪イは石見型埴輪の基部である。墳丘裾から約 1m 北側の基壇上に、スカシ孔を南北に向け、地山岩盤層に掘り込まれた直径約 40㎝の円形の掘方内に、約 20㎝埋められていた。基部の内部及び周辺には、基部と同じ胎土の石見型埴輪の形象部の破片が散乱していたことから、埴輪イは石見型埴輪であることが判明した。

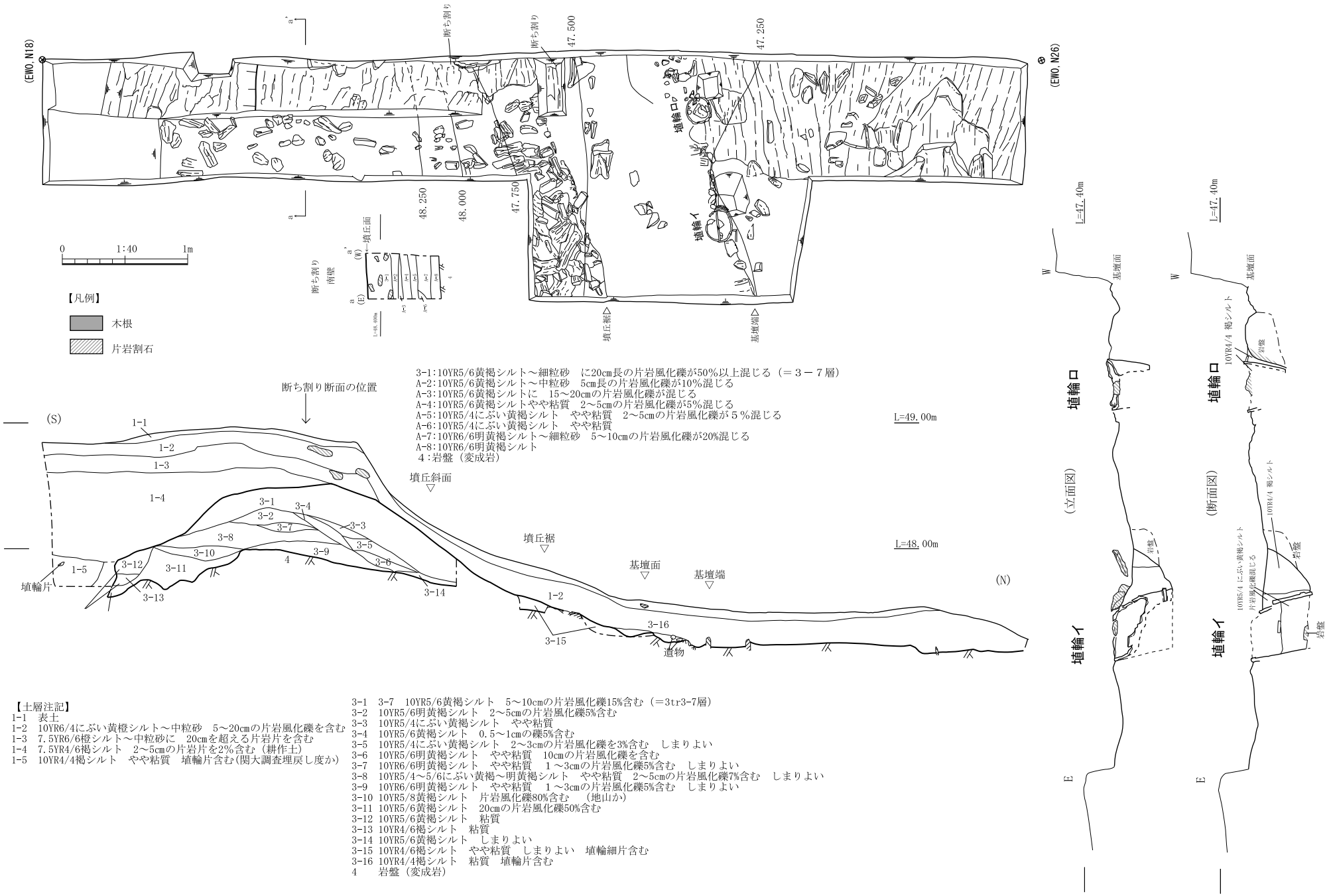
埴輪ロ　埴輪ロは円筒埴輪である。墳丘裾から約 1m 北の基壇面上で、埴輪イから心々距離で約 1m 西側の地点に、スカシ孔を南北に向け、地山岩盤層に掘り込まれた直径約 20㎝の円形の掘方内に、約 20㎝埋められていた。形象埴輪基部である埴輪イと比較して、埴輪ロの掘方は狭く、掘方壁と埴輪との間はほとんどない。

墳頂部（前方部横穴式石室玄室周辺）　トレンチ南側は、前方部横穴式石室玄室北側壁付近にあたる。前方部横穴式石室玄室は、前述のとおり前方部東側に設置した 3 トレンチの調査において、玄室奥壁石積が失われていることが確認されている。6 トレンチでは、玄室北側壁の遺存状況について確認を行った。

断ち割り掘削の結果、トレンチ南側では、墳丘盛土が大きく掘り込まれた範囲で、現地表面から標高 47.8m 付近にあたる深さ約 1.2m まで、現代耕作土と埴輪片や玉石を含む横穴式石室の埋戻し土（第 1 層）が堆積していることを確認した。この地点は、露出している前室及び羨道部から想定される玄室北側壁及び石室裏込め部分に当たり、検出した掘方は、前方部横穴式石室の盗掘坑ラインと考えられる。

この範囲において堆積土を掘削した結果、北側壁の石積が検出可能な標高 48.0m 付近に至っても石積を確認することはできなかった。第 1 層は標高 47.7m より下まで続いていることを確認した後、それより下部についてはピンポールにより石材の有無を確認したが、石材は確認されなかった。このことから、前方部横穴式石室玄室北側壁石積は、奥壁石積と同様に、昭和 40 年の発掘調査以降に、石材が取り除かれ、現況では石積が残存していない可能性が高いことが判明した。

盗掘坑北壁では、標高 47.8m 付近で地山岩盤層を検出した。玄室基底部が標高 47.0m 付近に想定されることから、石室構築の際に地山岩盤層を少なくとも 80㎝以上掘り込んでいることが



【土層注記】
1-1　表土
1-2　10YR6/4にぶい黄橙シルト～中粒砂　5～20cmの片岩風化礫を含む
1-3　7.5YR6/6橙シルト～中粒砂に　20cmを超える片岩片を含む
1-4　7.5YR4/6褐シルト　2～5cmの片岩片を2%含む（耕作土）
1-5　10YR4/4褐シルト　やや粘質　埴輪片含む(関大調査埋戻し度か)

3-1　3-7　10YR5/6黄褐シルト　5～10cmの片岩風化礫15%含む（＝3tr3-7層）
3-2　10YR5/6明黄褐シルト　2～5cmの片岩風化礫5%含む
3-3　10YR5/4にぶい黄褐シルト　やや粘質
3-4　10YR5/6黄褐シルト　0.5～1cmの礫5%含む
3-5　10YR5/4にぶい黄褐シルト　2～3cmの片岩風化礫を3%含む　しまりよい
3-6　10YR5/6明黄褐シルト　やや粘質　10cmの片岩風化礫を含む
3-7　10YR6/6明黄褐シルト　やや粘質　1～3cmの片岩風化礫5%含む　しまりよい
3-8　10YR5/4～5/6にぶい黄褐～明黄褐シルト　やや粘質　2～5cmの片岩風化礫7%含む　しまりよい
3-9　10YR6/6明黄褐シルト　やや粘質　1～3cmの片岩風化礫5%含む　しまりよい
3-10　10YR5/8黄褐シルト　片岩風化礫80%含む　(地山か)
3-11　10YR5/6黄褐シルト　20cmの片岩風化礫50%含む
3-12　10YR5/6黄褐シルト　粘質
3-13　10YR4/6褐シルト　粘質
3-14　10YR5/6黄褐シルト　しまりよい
3-15　10YR4/6褐シルト　やや粘質　しまりよい　埴輪細片含む
3-16　10YR4/4褐シルト　粘質　埴輪片含む
4　岩盤（変成岩）

図61　６トレンチ平面図・西壁土層断面図（S=1/40）、埴輪イ・埴輪口　立面図・断面図（S=1/20）

わかる。岩盤層の上部には黄褐色シルトと褐色シルトを厚さ10cmの単位で水平に積んだ墳丘盛土を確認した。

出土遺物　基壇上面で、円筒埴輪片、石見型埴輪破片と須恵器甕の破片が出土した。

（8）埴輪露出地点の調査

樹立状況を保っている可能性がある埴輪片が墳丘上に露出している2地点にトレンチを設定した。

前方部墳頂埴輪露出地点　前方部墳頂埴輪露出地点は、任意の中心（0.0）から14m北側で、形象埴輪の破片が地表面に露出していた地点である。墳丘仮主軸上に幅50cm×長さ50cmのトレンチを設定して掘削した結果、地表に突き出した埴輪片は馬形埴輪の脚部であったが、原位置を保っていないことを確認した。このほか家形埴輪片等が出土したが、いずれも流土中（第2層）であった。尚、出土地点より下層で墳丘盛土（第3層）を確認し上面を精査したが、埴輪の掘方は確認されなかった。

前方部東斜面埴輪露出地点　前方部東斜面埴輪露出地点は、任意の中心（0.0）から北に12m、東に6mの地点で、昭和40年の測量図の埴輪No.24の樹立地点付近にあたる。埴輪片が露出していた箇所に幅50cm、長さ1.1mのトレンチを設定し掘削した結果、埴輪片は円筒埴輪の底部であったが、原位置を保っていないことが判明した。出土地点より下層で墳丘盛土（第3層）を確認し上面を精査したが、埴輪の掘方は確認されなかった。尚、調査後、和歌山市が保管する埴輪No.24と比較した結果、胎土や法量が異なり、別個体であることを確認した。

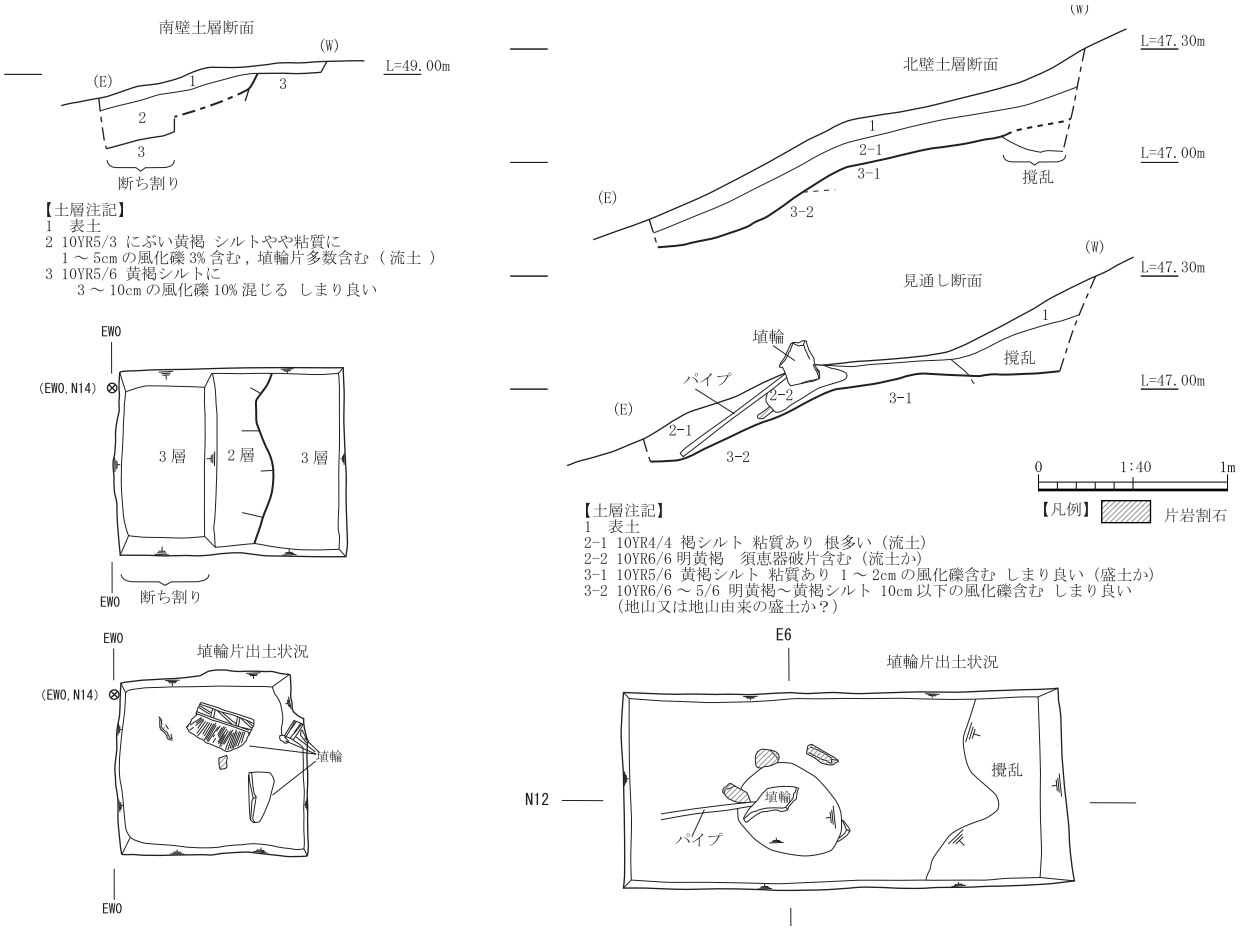


図62　埴輪露出地点　出土状況図・南壁土層断面図（S=1/40）

第３節　出土遺物

（１）埴輪

埴輪は、円筒埴輪と、石見型埴輪、盾形埴輪、人物埴輪、動物埴輪、家形埴輪、その他の器財埴輪等が確認された。

円筒埴輪及び石見型埴輪については、前方部北側で検出された樹立埴輪（埴輪ハ・埴輪ニ）のほか、各トレンチの出土資料や表採資料の一部について図化・掲載を行い、全体的な特徴について項目ごとに記述する。形象埴輪は器種ごとに出土地点の概要について述べた後に、各資料の特徴について記述する。

各資料の調整、胎土、色調、焼成等の諸属性は、別表の遺物観察表にまとめた。

円筒埴輪　出土した円筒埴輪は、形態や製作技法、胎土から大きく２つに分類することができる。１つは、胎土がにぶい橙色又は黄橙色を呈し、外面の二次調整を省略するⅤ群系埴輪（畿内型）と呼ばれるもので、もう１つは胎土が橙色～赤褐色を呈し外面２次調整にヨコハケを施す一群でⅣ群系埴輪（紀伊型・大和南部型）と呼ばれるものである。今回の調査では、８：１程度の割合で前者が多く出土する。

以下、Ⅴ群系埴輪とⅣ群系埴輪に分け、各円筒埴輪にかかる各属性の特徴について記述する。

Ⅴ群系埴輪は、前方部北側基壇上に樹立状態を保っていた埴輪ハ（図 65-39）において全体の法量が復元できる。埴輪ハ（39）は、底部径 16.7㎝、口径 26.6㎝、器高 51.5㎝を測り、逆台形を呈する。105 ～ 107 は､底部径は 14.2 ～ 19.1㎝､底部高は 16 ～ 21㎝と法量にばらつきがみられる。３条４段で、２段目と３段目に円形スカシ孔を２方向から穿孔する。埴輪ハは、口縁部高及び突帯間隔が 10.8㎝、底部高は 18㎝となる。口縁端部は外反し、端部面及び端部内面には強いヨコナデを施す（1・5 ～ 11・23・38・39・46・47・53）。突帯は低いＭ字形で、貼り付け後にヨコナデを施す（12 ～ 14・24・37 ～ 39・43・44・48 ～ 50・54・68・84）。内面調整はナデ、外面調整は一次調整のナナメハケ、ナデのみで、二次調整は確認できない。底部は板状工具によるオサエないしナデによる底部調整が認められる。焼成は良好で、一部は須恵質を呈する。色調は橙色とにぶい黄橙色の２種類があり、いずれも胎土に赤色粒、石英、長石及び片岩片などを含む。川西編年のⅤ期（川西 1967）、廣瀬編年のⅤ期新相（MT15 ～ TK10 型式期併行）（廣瀬 2021）に位置付けられる。

一方、Ⅳ群系埴輪に分類できる個体（22・25・63 ～ 66・埴輪ロ）で、全体の器形や法量を復元できるものはない。底部の形状は､底部が確認できる前方部北側の埴輪ロでは､楕円形を呈する。器壁厚は､いずれの破片も 0.6 ～ 0.7m と非常に薄い。焼成は良好で､色調は橙色～赤褐色を呈する。今回の調査で出土した埴輪片はいずれも摩滅のため外面の調整を確認することができないが、胎土や色調、薄い器壁などの特徴は、昭和 40 年の発掘調査出土埴輪のⅣ群系に分類した埴輪（瀬谷ほか 2024）の特徴と共通することから、これらをⅣ群系埴輪とした。尚、Ⅳ群系埴輪に分類した個体は、今回の調査で、前方部東側の３トレンチ及び前方部北側の６トレンチ（埴輪ロ）から出土した７点のみであった。

岩橋千塚古墳群では、６世紀段階にⅤ群系埴輪とⅣ群系埴輪の２系統の円筒埴輪が用いられることが知られている（河内 1988）。大型前方後円墳である大日山 35 号墳や大谷山 22 号墳では、Ⅴ群系円筒埴輪とⅣ群系円筒埴輪の両者が用いられているが、寺内 18 号墳と墳丘規模が近い墳長 20 ～ 30m の前方後円墳である、前山 A58 号墳や大日山１号墳ではⅤ群系埴輪のみ、大谷山６

号墳や大谷山27号墳、大谷山28号墳ではⅣ群系埴輪のみであるように、1古墳に1系統の埴輪が用いられている。こうしたなか、寺内18号墳では、Ⅴ群系とⅣ群系埴輪が比率8：1で出土しており、Ⅴ群系が大幅に優勢な状況ではあるものの2系統の円筒埴輪が用いられていることを確認することができた。

石見型埴輪（図63-3、図64-19・21・28～31、図65-40、図67-58・61・図68-73～75、図69-94・95）

石見型埴輪は、前方部基壇上に樹立する埴輪列中の埴輪イ・埴輪ニ・埴輪ト及び、各トレンチの流土中又は墳丘外から出土又は表採した。基部及び形象部が出土しているものの、いずれも破片であるため、全体の法量や形象部の形状及び規格については不明である。

形象部は、周縁を2条一括の沈線で施文する。上段面の文様は、弧文を施すもの（61・74）、壺形文様を施すもの（21）、無文であるもの（29）に分けられる。このうち壺形文様は類例が少ないが、岩橋千塚古墳群の花山2号墳出土の石見型埴輪に同様の文様が確認される。施文具は、いずれも2条一括であるが、昭和40年の発掘調査出土品では、2条一括のほか、3条一括の施文も確認されている（瀬谷ほか2024）。上段帯・中央帯・下段帯は沈線で区画され、上・下段帯には鋸歯文（3・75・94）を施すが、中央帯は無文（75・94）となる。下段面の文様は判然としない。上辺にはU字形の刳り込みと角状突起（28・73）をもつ。切り欠きはない。形象部背面上方には、板部補強用の粘土帯を貼り付ける個体（21）もある。尚、出土位置や胎土から、40は埴輪ニの形象部で、74・75は埴輪イの形象部と考えられる。

石見型埴輪の基部として確認されたのは、埴輪イ・埴輪ニ（58）・埴輪トの3点である。埴輪ニ（58）は、底部径20.0㎝、残存高33.5㎝を測る。2段目に円形のスカシ孔をもち、3条の突帯のうち2条はヨコナデ調整を行い、底部突帯は、底部に接しない位置に円筒埴輪にみる断続ナデB技法と同様の方法で貼り付ける。基部は、粘土接合痕から、倒立技法により製作していることが確認される。埴輪イ及び埴輪トは現地に保存している。基部の形状を確認するため調査時に掘方の埋土の一部を断ち割った結果、底部に接しない位置に底部突帯がヨコナデ調整で貼り付けられていることを確認した。

基部に倒立技法が認められたことや、形象部の文様、施文具の特徴から、出土した石見型埴輪はMT15型式期以降に位置付けられる。

家形埴輪（図68-78・79）家形埴輪とみられる破片が前方部墳頂の流土中から2点出土した。

78は、扁平な断面と、斜方向の小孔が穿たれる特徴をもつ。表面には2条一括の沈線が施され、裏面には2条の剥離痕がみられる。79は家形埴輪の屋根部分にあたる。傾斜面には、正位置に据えた際の垂直方向に小孔が穿たれる。軒先に貼り付けられた幅4㎝の粘土帯には、上下の縁に各1条の沈線を施し、内部に2条一括の沈線で縦方向と斜方向が連続した文様が施される。同様の文様は、岩橋千塚古墳群の大日山35号墳の高床入母屋造の家形埴輪の屋根や井辺八幡山古墳の入母屋造の家形埴輪の屋根にも確認される。

人物埴輪（図63-2、図64-26、図70-102）　後円部南側の石垣裏込め土と前方部東斜面の流土中から2点が出土した。このほか1点が、昭和63年に採集されている。

2は、人物埴輪の腕部である。前腕から指先にかけて湾曲する形状から右腕とみられる。手の甲側には剥離痕がみられる。中実で、上腕側に差し込むため粘土芯をもつ。26・102は美豆良である。26は表面に粘土を巻き付け、102は2条の線刻により紐を表現する。いずれも、内側には顔に貼り付いていた痕跡が確認できる。

馬形埴輪（図 64-16 ～ 18･27、図 68-76･77･82、図 69-96）　前方部東くびれ部付近の墳頂及び斜面と、前方部横穴式石室付近の墳頂において、流土中からの出土又は表採により 8 点が出土した。脚部（76）とたて髪（96）の他、馬具の一部とみられる破片（16 ～ 18・77・82）を確認した。

16 は馬鈴で、1 条の沈線を施して鈴を表現する。17・27・82 は、表面に 2 条一括の沈線と 2 個一括の刺突を施す。杏葉又は鏡板とみられる。18 は、2 条一括の沈線上に竹管文を施す。円形のスカシ孔と小孔が穿たれているのが確認できる。77 は、表面に 2 条一括の沈線と側面に竹管文を施す。鞍の一部の可能性がある。76 は脚部で、付け根付近とみられる。96 は、断面が T 字形を呈する。たて髪とみられる。たて髪（76）と脚部（76）は、胎土や色調が異なっているためそれぞれ別個体と考えられることから、馬形埴輪は 2 個体以上存在していたことが推定される。

盾形埴輪（図 64-33、図 65-62、図 68-71・72・80）　前方部墳頂及び墳裾付近の流土中と前方部北側基壇上で 5 点が出土した。いずれも盾面にあたる。盾面の上部は円形を呈し、周縁及び内部の区割りには 2 条一括の沈線と沈線間に隅丸方形の刺突文を施す。区割りされた盾面の内側には、単条施文具による沈線で、昭和 40 年の発掘調査で出土した盾形埴輪と同様の鋸歯文を施し、小孔を穿つ。尚、出土した盾面の部位から、複数の盾形埴輪が存在していたことがわかる。

靫形埴輪（図 64-20）　前方部東くびれ部付近の流土中から 1 点が出土した。破片のため、全体の形状や法量は不明である。

20 は、形象部上辺の鏃部にあたる。裏面には補強用の粘土帯が付く。表面には側縁に 2 条一括の沈線と 2 個一括の刺突を施し、その内側には沈線により 2 本の鏃が矢尻を上部に向けた形で描かれる。鏃は独立片逆刺鏃を表現しており、岩橋千塚古墳群の大日山 35 号墳出土の靫形埴輪と形状や文様に共通性がみられる。また、2 条一括沈線と 2 個一括の刺突は、大日山 35 号墳や井辺八幡山古墳の形象埴輪において多用されている施文で、刺突の形状が当古墳では円形であるのに対して大日山 35 号墳では方形であるなど同一工具ではないものの、共通性が窺える。

器種不明形象埴輪（図 63-4、図 65-41・42、図 67-59・60、図 68-69・70・83、図 69-89・91・97、図 70-100・103・104）　前方部及び後円部の広範囲で、流土中から出土又は表採した形象埴輪のうち、器種の不明な一群である。

4 は扁平な断面をもち、表面に 2 個一括の刺突が施される。41 は表面に 1 条の沈線と、小孔を穿つ。42 は側面が弧状を呈する。59・60 は、無文で、形状から石見型埴輪又は巫女形埴輪の髻、もしくは鳥形埴輪の尾羽の可能性がある。69・70 は表面に 2 条一括の沈線と沈線間に 1 列の刺突を施す。馬形埴輪又は人物埴輪の一部とみられる。胎土や色調から同一個体の可能性がある。83 は形象基部である。前方部墳頂の流土中から出土した。復元底径は 23.2cmで、底部突帯を貼り付け、その貼付位置は底部に接しない。89 は下端部に突帯が付く。家形埴輪の壁の下端部の可能性がある。91 は表面に 2 条一括の沈線と竹管文を施す。18 の竹管文と類似することから、馬形埴輪の可能性がある。97 は直径 7.7cmの筒状に復元される。人物埴輪の腕部又は動物埴輪の脚部の可能性がある。100 は直径 10cm程度の筒状に復元される。大刀形埴輪又は動物埴輪の脚部の可能性がある。103 は鰭状を呈し、表面に 1 条の沈線と 2 個一括の刺突を施す。大刀形の鰭部にあたる可能性がある。104 は表面に 2 条一括の沈線と 2 個一括の刺突を施す。

以上、出土埴輪の特徴から、円筒埴輪は、川西編年のⅤ期（川西 1967）、廣瀬編年のⅤ期新相（MT15 ～ TK10 型式期併行）（廣瀬 2021）に、石見型埴輪は、基部における倒立技法や形象部の特徴から MT15 型式期以降に位置付けられる。家形埴輪や靫形埴輪では施文工具や文様、意匠において、6 世紀前半の首長墓である大日山 35 号墳出土品と類似していることが指摘できる。

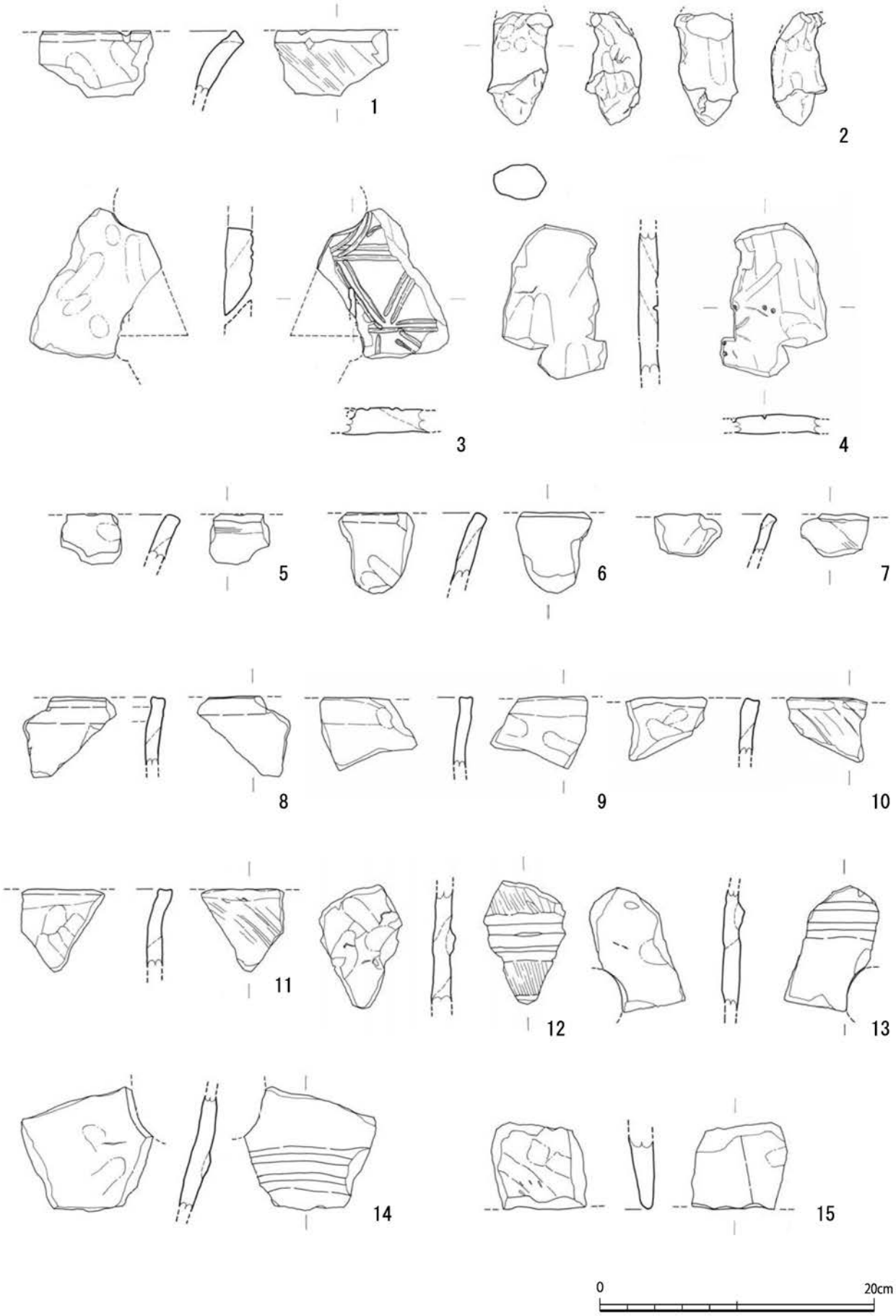


図 63　寺内 18 号墳出土埴輪（1）実測図（S=1/4）
1～4：1 トレンチ　5～15：2 トレンチ

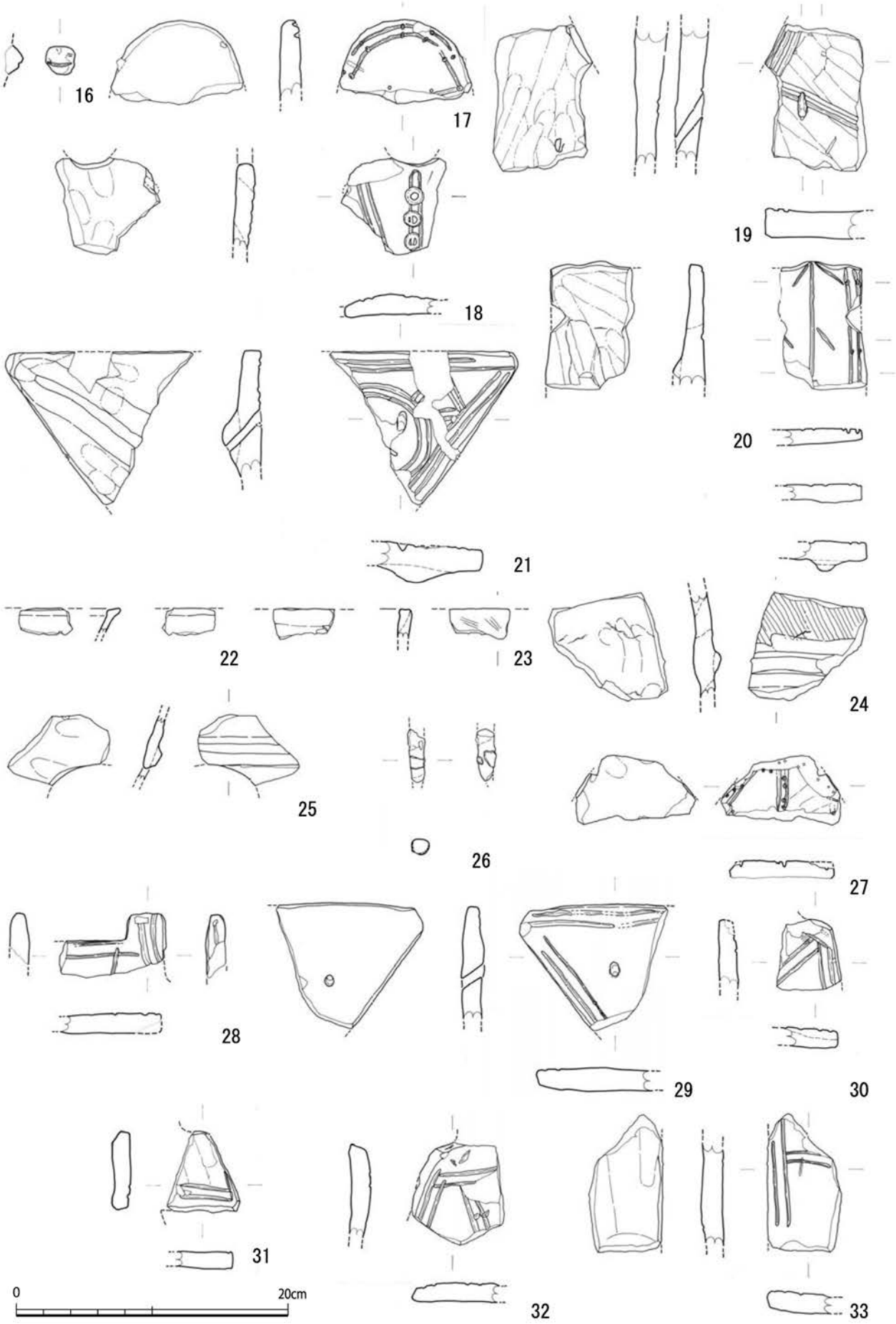


図64　寺内18号墳出土埴輪（2）実測図　(S=1/4)
16～21：2トレンチ　22～33：3トレンチ

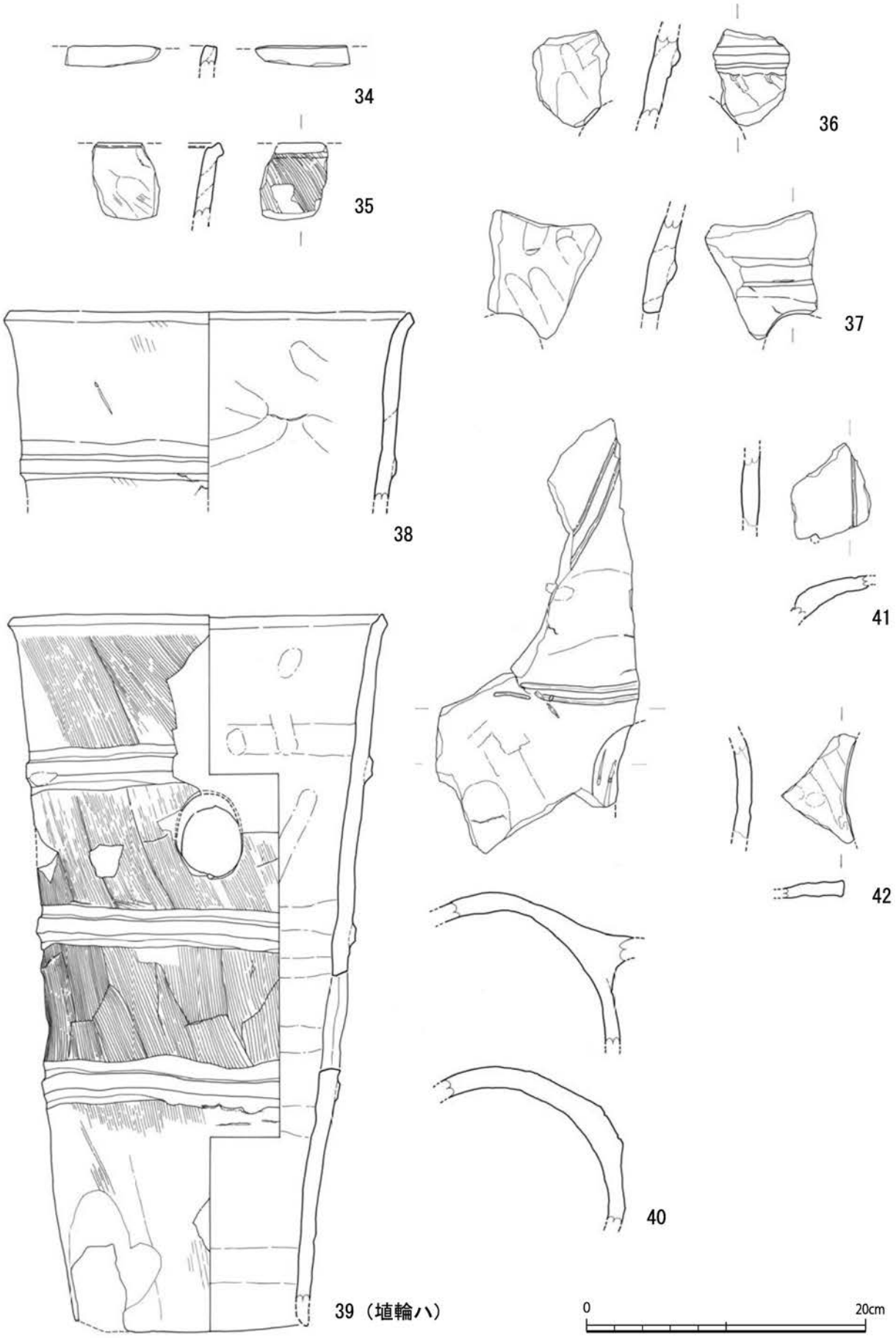


図 65　寺内 18 号墳出土埴輪（3）実測図　(S=1/4)
34 ～ 42：4 トレンチ

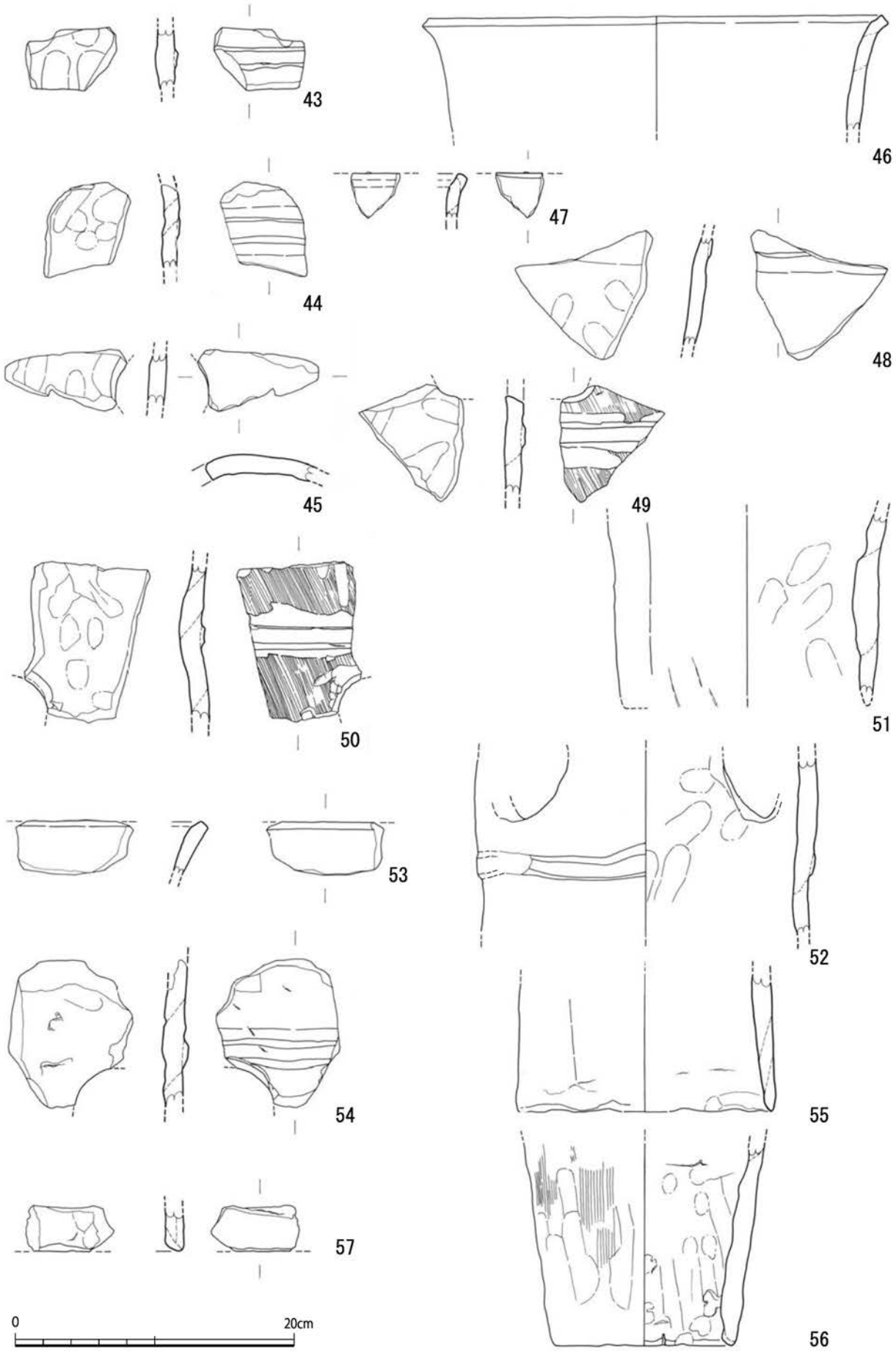


図 66　寺内 18 号墳出土埴輪（4）実測図　(S=1/4)
43 ～ 57：5 トレンチ

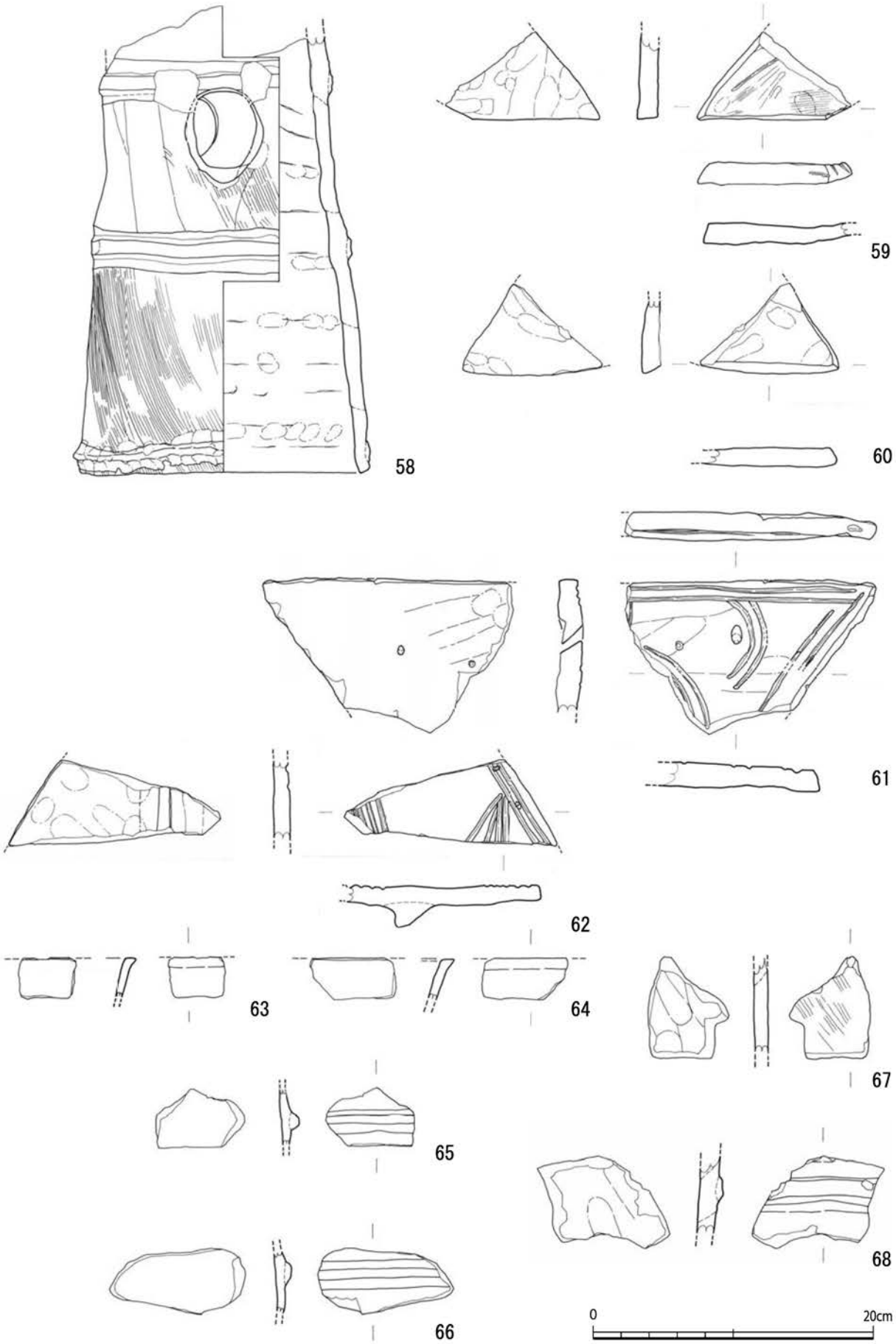


図 67　寺内 18 号墳出土埴輪（5）実測図　(S=1/4)
58 ～ 62：5 トレンチ　63 ～ 68：6 トレンチ

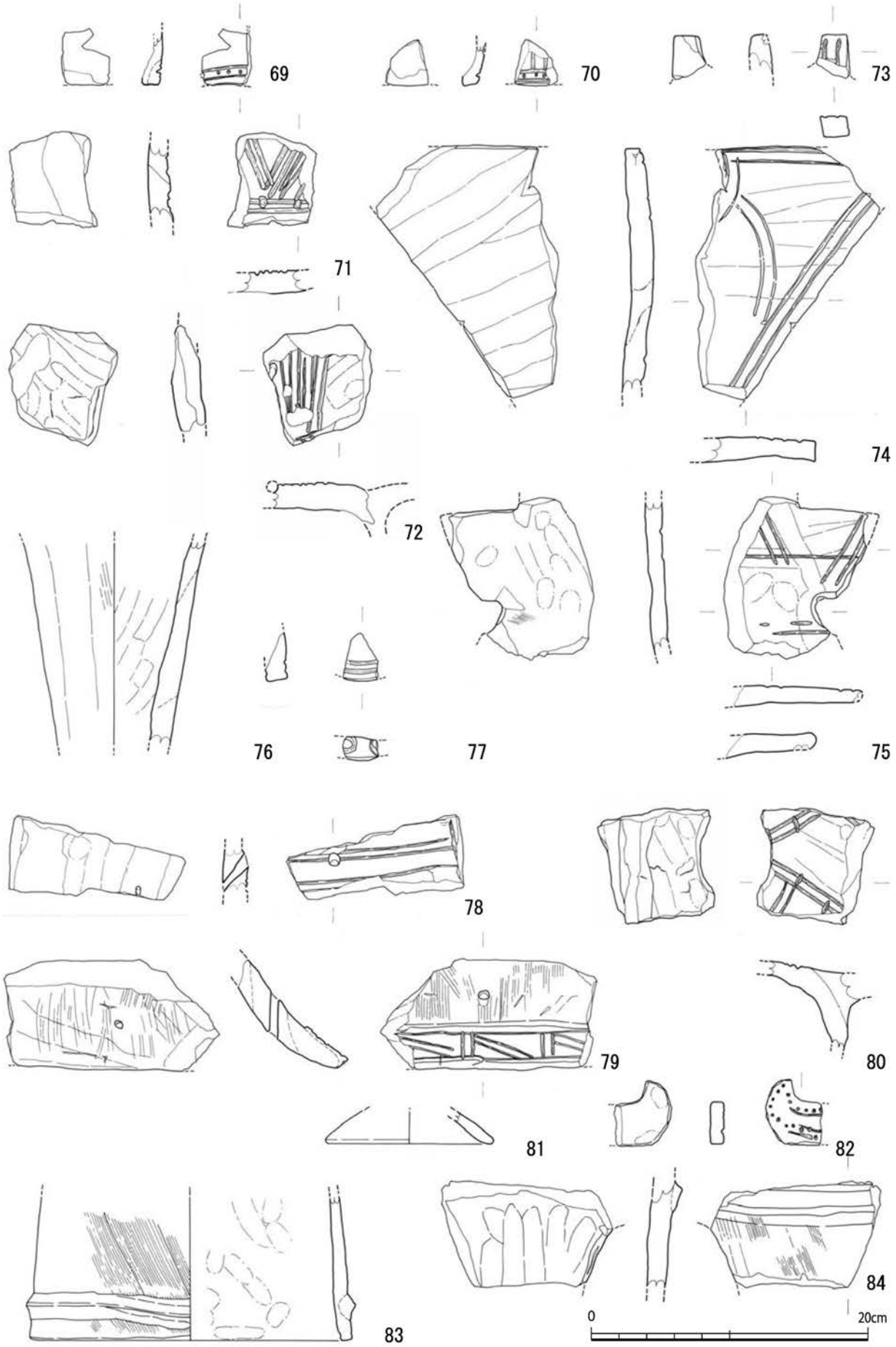


図68　寺内18号墳出土埴輪（6）実測図　(S=1/4)

69～75：6トレンチ　76～79：前方部墳頂埴輪露出地点　80～84：前方部墳頂表採

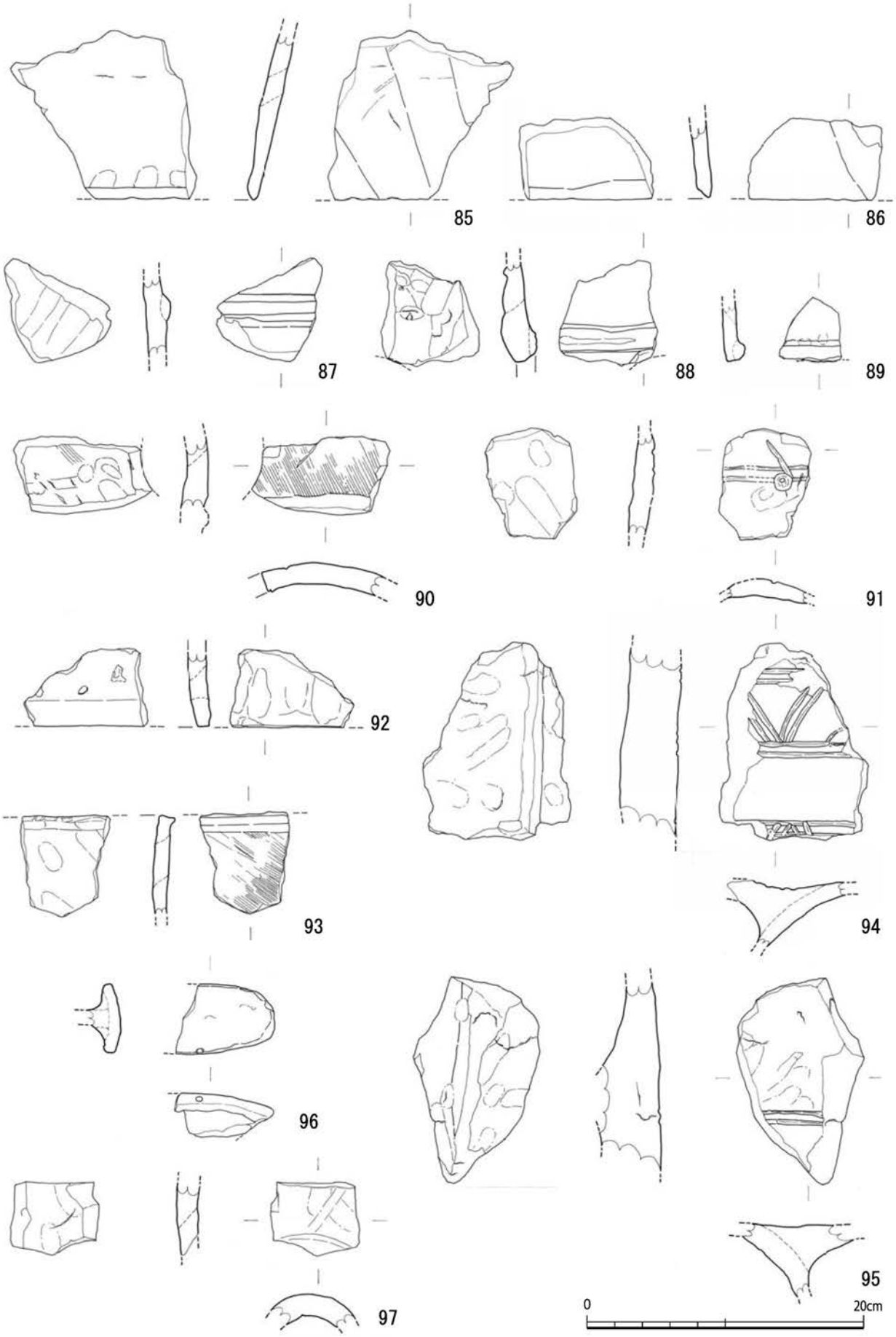


図 69　寺内 18 号墳出土埴輪（7）実測図　(S=1/4)
85・86：前方部東斜面埴輪露出地点　87 ～ 92：前方部表採　93 ～ 97：墳丘外表採

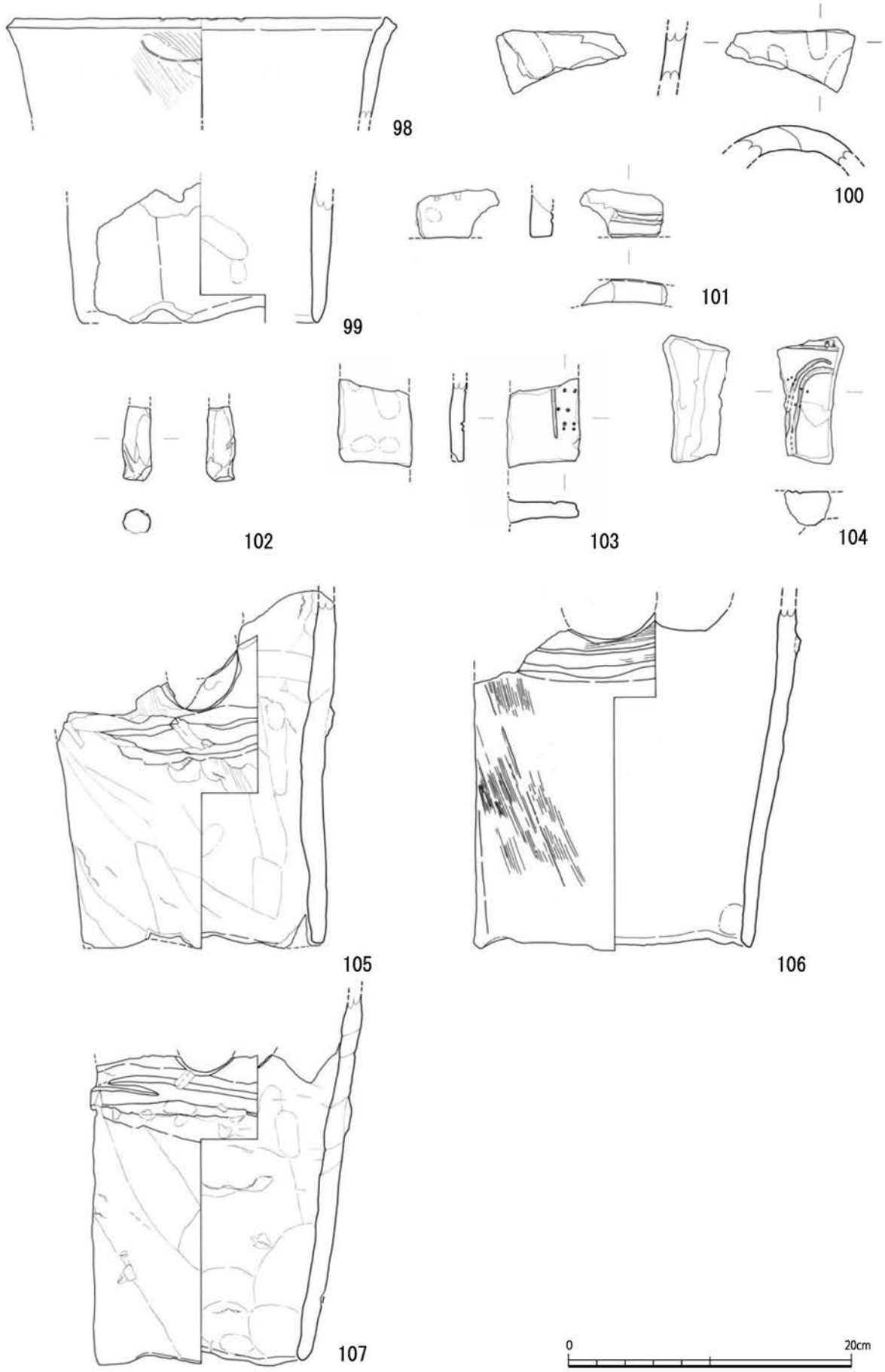


図 70　寺内 18 号墳出土埴輪（8）実測図　(S=1/4)
98 ～ 104：寺内 18 号墳表採　105 ～ 107：伝寺内 18 号墳前方部表採

また、馬形埴輪（17・27）や靫形埴輪（20）にみられる２条一括の沈線と２個一括の刺突による施文も、大日山35号墳及び井辺八幡山古墳出土の形象埴輪において多用されていることが指摘できる。これらの特徴から、形象埴輪においても、概ね６世紀前半の様相を示していると捉えることができる。

（２）土器（図71-108～125、図72-126、図73-127～137）

土器は、前方部基壇上の土器埋納遺構出土土器、前方部基壇上の須恵器大甕、その他墳丘流土中出土の土器に分けて記述する。

坏身・坏蓋（図71-108～121）　土器埋納遺構から坏蓋と坏身が組み合った状態で、７セット出土した。

108・110・112・114・116・118・120は坏蓋である。口径は13.6～14.4cm、器高は4.1～4.8cmを測る。天井部は平たく、天井部と口縁部の境に鈍い凹線又は沈線が巡る。口縁部はやや内湾又は垂直気味に下がり、端部にはわずかに面をもつ。天井部の２分の１の範囲を回転ヘラケズリし、それより下部は回転ナデである。112は内面中央に当て具痕が残る。焼成が良好で灰色を呈する個体（108・112・116）と、生焼けで灰黄褐色を呈する個体（110・114・118・120）がある。

109・111・113・115・117・119・121は坏身である。口径は12.2～12.6cm、器高は4.3～5.1cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は面をもたず、丸くなでる。111の口縁部内面にはモミ圧痕（図71）が確認される。底部は丸みを帯びた個体（109・111・113・115・117・121）と平底の個体（119）がある。底部外面は３分の１を回転ヘラケズリし、底部から後円部にかけては回転ナデ調整である。焼成が良好で灰色を呈する個体は119の１点のみで、他は全て生焼けで灰黄褐色を呈する。

坏身・坏蓋は、各セット（坏１：108・109、坏２：110・111、坏３：112・113、坏４：114・115、坏５：116・117、坏６：118・119、坏７：120・121）で身と蓋がきっちりと組み合っていることや、胎土が共通していることから、いずれも製作時のセット関係を保っているものと考えられる。尚、岩橋千塚古墳群では、石室内と石室外で儀礼に用いる土器が使い分けられ、石室外では焼成の甘い土器が用いられている例がみられることが指摘されていることから（仲辻2018）、土器埋納遺構出土の坏身・坏蓋がいずれも焼成の甘い個体であることは、意図的な選択によるものであると考えられる。

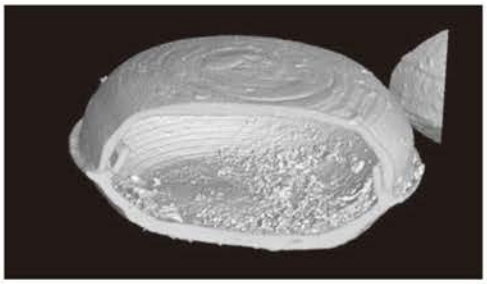


写真８　CT撮影による開封前の坏の内部確認

坏身・坏蓋のセットは、現地から組み合った状態のまま取り上げた後、県工業技術センターの協力の下、CT撮影を行い内容物の有無を確認した。その後、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の指導・協力の下、室内において開封作業及び、内部の土壌分析を行った。その結果、内部には一部遺構埋土が混入していたものの、埋納時は内容物がない空の状態であったことを確認した。

写真９　開封後の坏身・坏蓋の内部（混入土壌除去後）

無蓋高坏（図71-122・123）　完形の無蓋高坏が２個体

（高坏 1･高坏 2）出土した。高坏 1（122）は口縁部径 9.9cm、器高 13.5cm、脚端部径 8.5cmを測る。脚部は長く、中位から外反して下方に広がり脚端部はやや丸みをおびる。脚部には長方形のスカシ孔が 3 方に配置される。スカシ孔は坏部に切り込む。坏部は、底部は若干丸みをおびる。底部と口縁部の間に沈線が巡り、口縁部は外反し端部はやや尖らせておさめる。脚部には、回転により全面にカキメが施される。坏部は、内外面ともに回転ナデが施され後に、体部外面下位に波状文が施される。坏部底部外面は回転ヘラケズリが施される。高坏 2（123）は口縁部径 10.4cm、器高 13.9cm、脚端部径 7.6cmを測る。脚は長く、中位から外反して下方に広がり、脚端部は面をもつ。脚部には長方形のスカシ孔が 3 方に配置される。スカシ孔は坏部に切り込む。坏部は、底部は若干丸みをおびる。底部と口縁部の間に鈍い突線が巡り、口縁部は外反し端部はやや尖らせておさめる。脚部には回転により全面にカキメが施される。坏部は、内外面ともに回転ナデが施された後に、体部外面下位に波状文と底部に回転によりカキメが施される。2 個体とも焼成は良好である。

須恵器壺（図 71-124）　完形の須恵器壺が 1 個体出土した。壺 1（124）は、口径 11.5cm、器高 16.1cm、胴部径 15.2cmを測る。底部は丸底を呈する。口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は外面側に玉縁状に作り出し、その下位に沈線が 1 条巡る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。焼成は甘く、色調は浅黄色を呈する。

これらの土器埋納遺構内から出土した須恵器の一括資料が示す形式的特徴は、概ね陶邑窯跡群における TK10 型式期に属すると考えられる。

土師器壺（図 71-125）ほぼ完形に復元される土師器壺が 1 個体出土した。壺 2（125）は、口径 9.5 cm、器高 10.7cm、胴部径 12cmを測る。底部は丸底を呈し、口縁部は短く、やや外反して立ち上がる。口縁部は外面をヨコナデ、内面はヨコハケ後にヨコナデを施し、底部は外面ナデ、内面ナナメハケを施す。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

須恵器大甕（図 72-126）　前方部基壇面に据えられた状態で須恵器大甕が 1 個体出土した。胴部の一部が欠損するが、ほぼ完形に復元される。口径 26cm、器高 52.3cm、胴部径 51cmを測る。口縁部は端部の下部に凹線が巡る。底部には焼き歪みがみられる。胴部の外面 4 箇所に別個体が付着している。焼台の一部である可能性がある。胴部は外面にタタキ、内面に同心円文がみられる。焼成は良好で、上部を中心に自然釉が認められる。色調は灰色である。口縁部上部が回転ナデ調整で、口縁部下部はナデ調整である。胴部以下はタタキによる成形である。陶邑窯跡群における TK10 型式期に属すると考えられる。

その他墳丘出土土器（図 73-127 ～ 137）　127 は、前方部横穴式石室玄室部の埋戻し土中から出土した土師器坏である。口径 11.7cm、器高 5.5cmを測る。全体にナデ調整を施す。128 は墳丘外の南西側畑において表採された須恵器の坏身である。復元口径 13.4cm、器高 3.6cmとなる。129 は墳丘外の西側斜面下で表採された須恵器壺の口縁部である。130 ～ 132 は須恵器器台脚部片である。130・132 は前方部北側斜面及び墳裾付近で、131 は前方部東斜面の埴輪露出地点から出土した。このうち 131 は昭和 40 年の発掘調査で前方部横穴式石室の撹乱から出土した高坏形器台脚部片と接合することを確認した。130・132 も同一個体の可能性が高い。昭和 40 年の発掘調査出土品では脚部端部から脚部は突線とにぶい凹線により 8 段に区画され、下から 2 ～ 4 段に目には三角形スカシが千鳥状に、下から 5 ～ 7 段目には方形スカシが、下から 8 断面には円形スカシが施されている。三角形スカシと方形は 4 方向に、円形スカシは多方向に穿孔されている。8 段目には櫛歯を用いた列点文がみられ、下から 2 ～ 7 段目には波状文がみられる。スカシの形状や

施文から、130 は下から 2 ～ 7 段目、131 は下から 6 ～ 8 段目、132 は脚端部にあたる。133 ～ 137 は須恵器甕片である。いずれも前方部北側の墳丘裾付近から出土した。133 ～ 135・137 は外面にタタキ、内面に同心円文の当具痕がみられる。136 は外面にタタキ後にカキメを施し、内面には同心円文の当具痕がみられる。胎土は他の甕と異なっている。

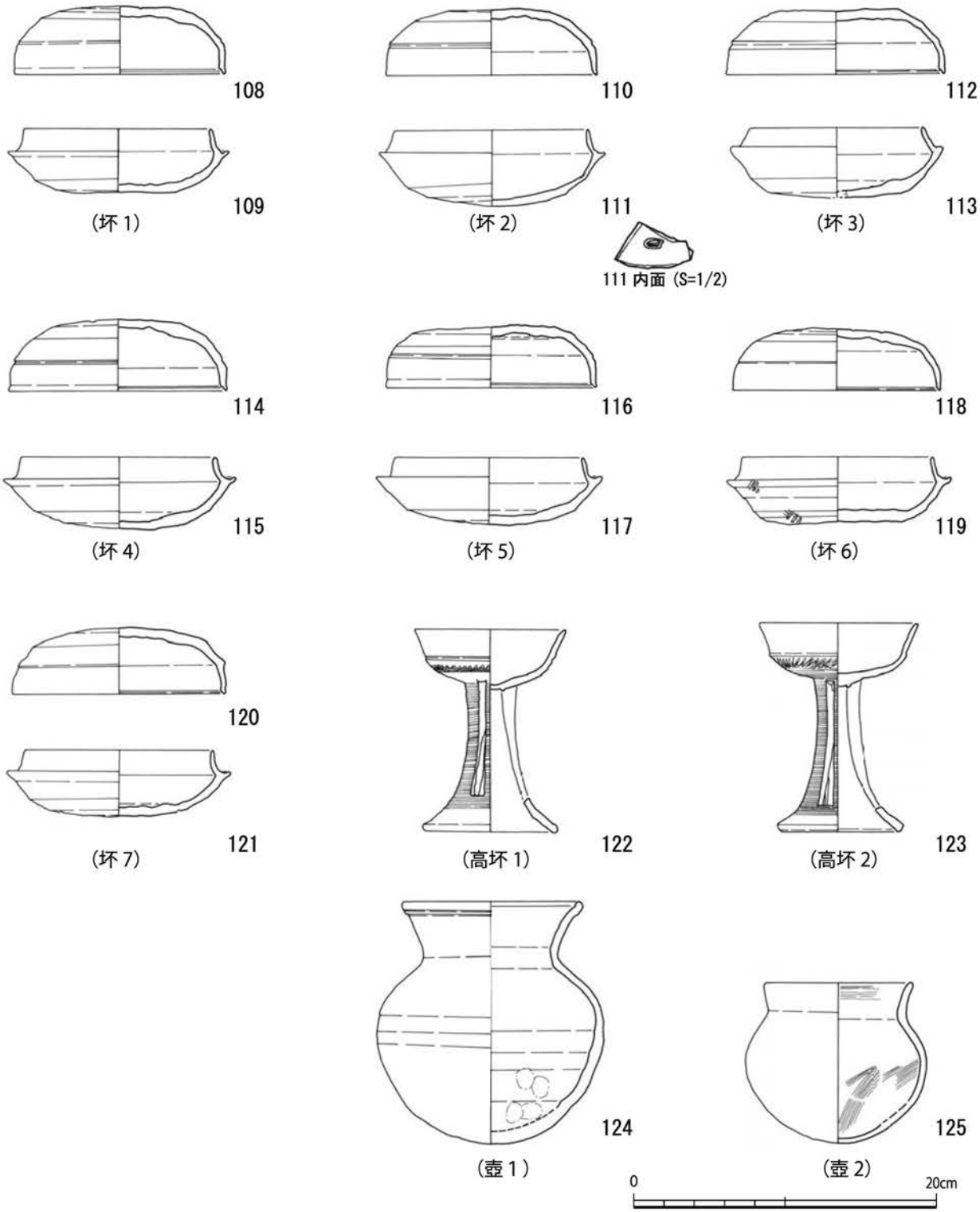
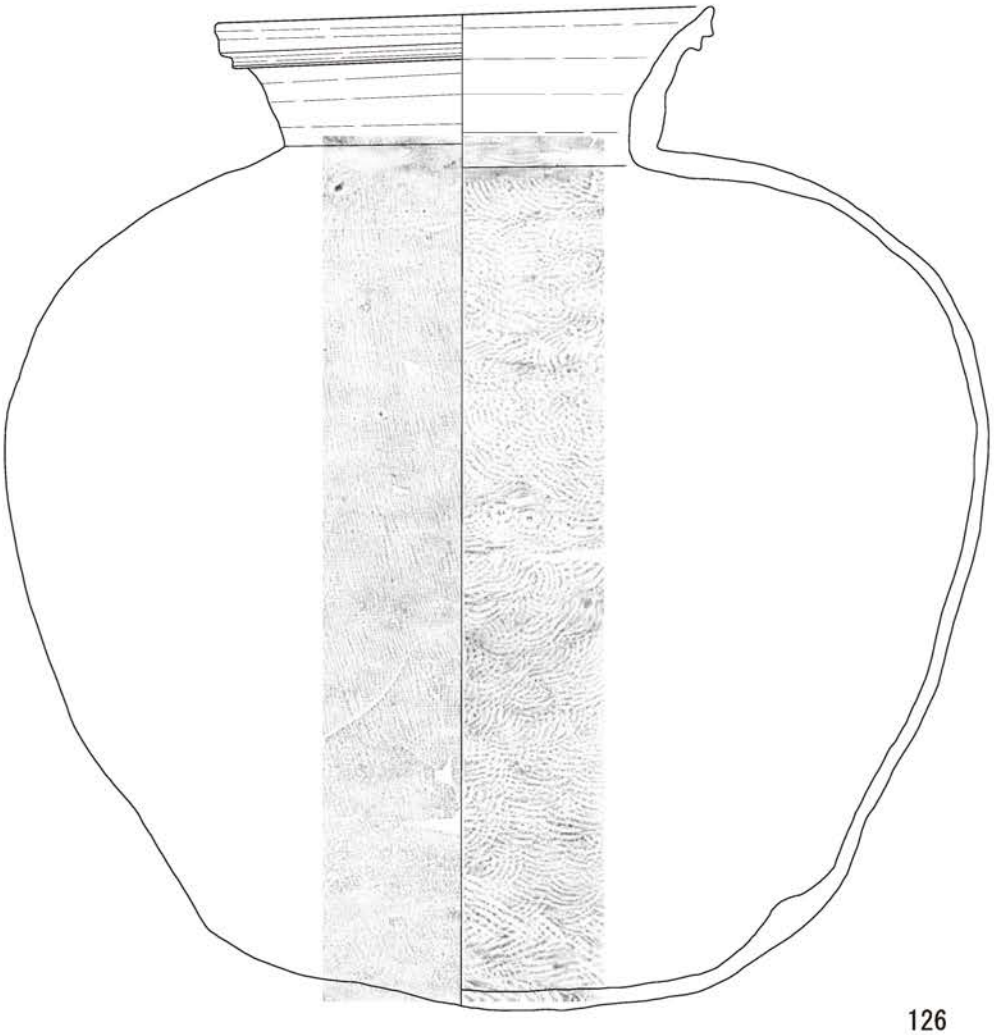


図 71　寺内 18 号墳出土土器（1）実測図　(S=1/4)
108 ～ 125：5 トレンチ　土器埋納遺構出土



底部外面の凹み及び他個体の融着状況

図 72　寺内 18 号墳出土土器（2）　実測図（S=1/4）
126：5 トレンチ

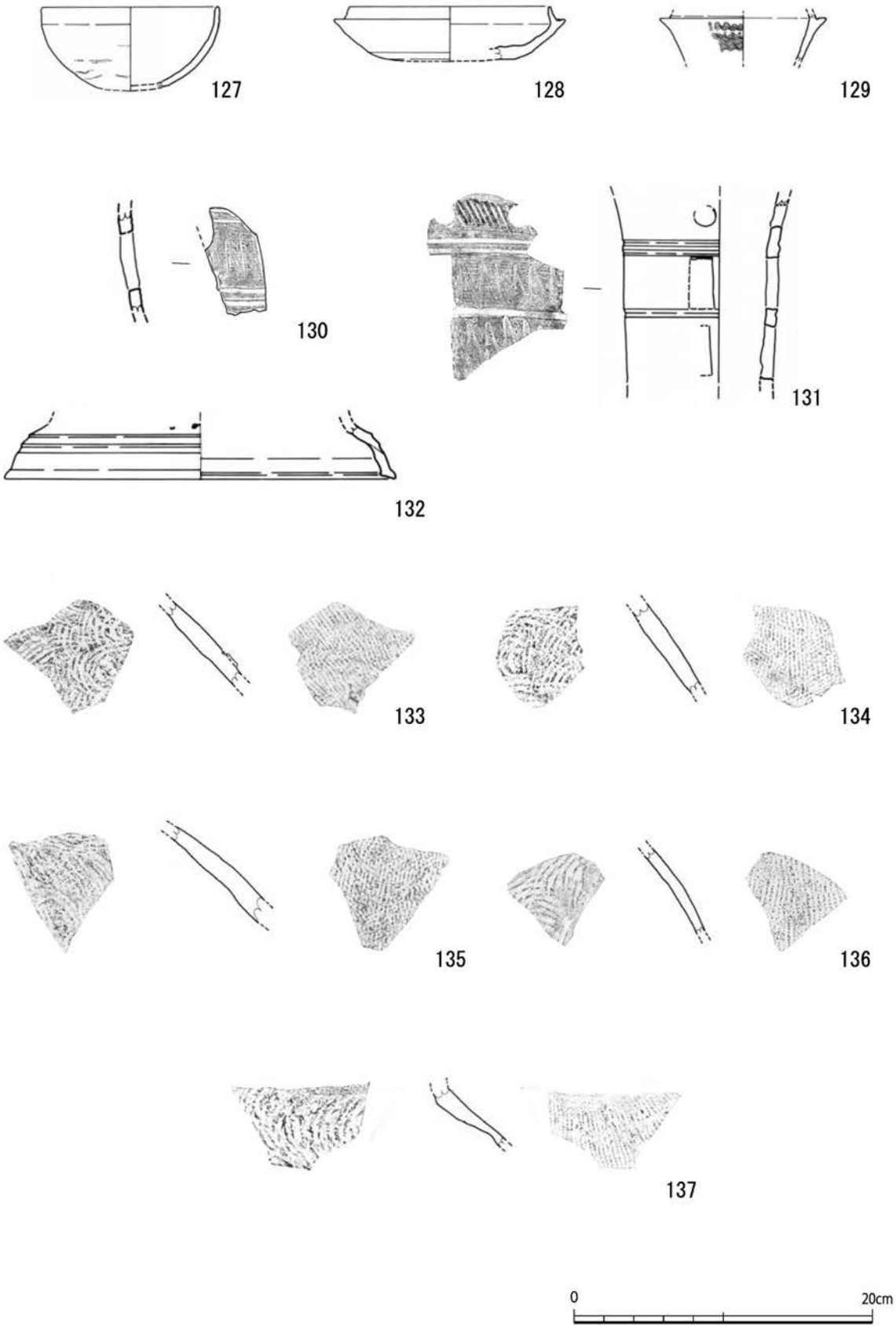


図 73　寺内 18 号墳出土土器（3）実測図（S=1/4）
127：3 トレンチ　128：墳丘南西表採　129：墳丘外西表採　130・135 ～ 137：5 トレンチ
131：前方部東斜面埴輪露出地点　132 ～ 134：4 トレンチ

表 5　遺物観察表（寺内 18 号墳　21-01・185-542）

＊法量は幅×高×厚、（　）内は残存値　特徴・色調の内・外・断は「面」を省略。色調は土色帖を基とする。

No.	図版番号	器種	出土位置	法　量（cm）	特徴	色　調	胎　土	焼成	残存率	備　考
1	図 63 写真図版 47	円筒埴輪 口縁部	1 トレンチ 2 層 下段石積裏込土か	(8.3) × (4.8) × 1.4、 推定口径 26.8	外）ナナメハケ（6 本 /cm） 内）ナナメナデ 口縁端部）強いヨコナデ	外・内）5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR5/2 灰褐色	やや粗：～ 2mm 赤色粒多量、～ 3mm 片岩中量、～ 1mm 白色粒・半透明粒少量	良好	5% 以下	V 群系 朝顔形埴輪の可能性あり S40 円筒埴輪 8 か 10 の口縁か
2	図 63 写真図版 47	人物埴輪 腕	1 トレンチ 下段石積 裏込土中	(8.2) × (4.8) × 4.0	中実、湾曲の形状から右腕か？（右腕の場合は手の甲側に剥離痕あり）、差込用の粘土の芯あり	外）2.5YR6/4 にぶい橙色～ 2.5YR6/6 橙色 断）2.5YR4/2 灰赤色	粗：～ 1.5mm 白色粒・赤色粒・半透明粒多量、～ 12mm 片岩少量、11mm 白色粒含む	良好	5% 以下	
3	図 63 写真図版 47	器財埴輪 石見型	1 トレンチ 下段石積裏込土下層直上（+S40 の埴輪 8）	(9.6) × (10.9) × 2.1	表）ナデ？、2 条一括沈線（芯々 0.7cm）、穿孔あり（径 0.6cm） 裏）ナデ・ユビオサエ	表・裏）2.5YR6/6 橙色 断）10YR3/1 黒褐色	密：～ 2mm 白色粒・赤色粒・半透明粒・片岩多量、6mm 片岩 1 個	良好	5% 以下	
4	図 63 写真図版 47	形象埴輪	1 トレンチ 下段石垣上斜面　2 層（+1 トレンチ下段石積裏込土中）	(7.7) × (11.2) × 1.6	表）ナデ、2 個一括刺突文（芯々 0.7cm）、工具痕残る 裏）ナデ	表・裏）5YR5/4 にぶい赤褐色 断）5YR4/1 褐灰色	粗：～ 1.5mm 赤色粒・片岩・半透明粒多量	良好	5% 以下	天地左右不詳 器財又は人物？
5	図 63 写真図版 47	円筒埴輪 口縁部	2 トレンチ 西端から 4m-5m 2 層下	(4.4) × (3.7) × 1.2	外）調整不明瞭 内）ナデか・ユビオサエ 口縁端部）ヨコナデ（もしくはヨコハケ）	外・内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 3mm 片岩・赤色粒多量、～ 1mm 白色粒微量	良好	5% 以下	V 群系 出土位置から S40 埴輪 20 の可能性 No.9 と類似
6	図 63 写真図版 47	円筒埴輪 口縁部	2 トレンチ 西端から 4m-5m 2 層下	(5.5) × (5.9) × 1.2、 推定口径 27.6	外）調整不明瞭 内）ナナメナデ 口縁端部）強いヨコナデ	外・内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）10YR5/1 褐灰色	やや粗：～ 4mm 片岩多量、～ 3mm 赤色粒中量、～ 4mm 半透明粒少量	良好	5% 以下	V 群系 出土位置から S40 埴輪 20 の可能性 No.10 と同一個体か
7	図 63 写真図版 47	円筒埴輪 口縁部	2 トレンチ 西端から 4m-5m 2 層下	(4.9) × (3.1) × 0.8	外）ナナメハケか 内）ナナメナデ 口縁端部）ヨコナデ	外）5YR6/4 にぶい橙色 内）2.5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR4/1 褐灰色	密：～ 4mm 片岩中量、～ 1mm 赤色粒中量、～ 1mm 白色粒微量	良好	5% 以下	V 群系 出土位置から S40 埴輪 20 の可能性 No.9 と同一個体か
8	図 63 写真図版 47	円筒埴輪 口縁部	2 トレンチ 西端から 4m-5m 2 層（礫混じり土）	(6.7) × (5.9) × 1.1	外）調整不明瞭 内）調整不明瞭 口縁端部）強いヨコナデ・端部面あり（少し凹む）	外・内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 2mm 赤色粒多量、～ 5mm 片岩中量、～ 2mm 半透明粒少量	良好	5% 以下	V 群系 No.9 に類似
9	図 63 写真図版 47	円筒埴輪 口縁部	2 トレンチ 西端から 4m-5m 2 層（礫混じり土）	(7.1) × (5.3) × 0.9	外）調整不明瞭（ナデか） 内）調整不明瞭 口縁端部）強いヨコナデ・端部面あり（少し凹む）	外）5YR6/6 橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR5/1 褐灰色	やや粗：～ 4mm 片岩・赤色粒多量、～ 3mm 半透明粒少量、～ 1mm 白色粒微量、12mm 片岩 1 個	良好	5% 以下	V 群系 No.7 と同一個体 か No.5/8 に類似
10	図 63 写真図版 47	円筒埴輪 口縁部	2 トレンチ 西端から 4m-5m 2 層（礫混じり土）	(5.9) × (4.6) × 1.2	外）ナナメ板ナデ 内）ナデ・ユビオサエ 口縁端部）強いヨコナデ・端部面あり（少し凹む）	外）7.5YR7/3 にぶい橙色 内）10YR7/4 にぶい黄橙色 断）10YR6/2 灰黄褐色	やや密：～ 2.5mm 半透明粒中量、～ 3mm 片岩中量、～ 2mm 赤色粒少量	良好	5% 以下	V 群系 No.6 と同一個体か No.11 に類似
11	図 63 写真図版 47	円筒埴輪 口縁部	2 トレンチ 西端から 3m-4m 2 層	(6.0) × (6.1) × 1.1、 推定口径 21.8	外）ナナメハケ（6 本 /cm） 内）ナデ・ユビオサエ 口縁端部）強いヨコナデ（端部面あり・少し凹む）	外・内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）10YR6/1 褐灰色	密：～ 3mm 半透明粒中量、～ 2mm 赤色粒少量、4mm 半透明粒 1 個	良好	5% 以下	V 群系 No.10 に類似
12	図 63 写真図版 47	円筒埴輪 体部	2 トレンチ 西端から 3m-4m 岩盤直上	(6.0) × (9.0) × 1.3	外）ナナメハケ（単位不明）、突帯あり（幅 2.0 ×高 0.4cm、断面低い M 字形） 内）ナデ・ユビオサエ（接合痕目立つ・ナデ不十分か）	外・内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）5Y5/1 灰色	密：～ 2mm 片岩中量、～ 2mm 半透明粒少量、～ 1mm 赤色粒少量	良好	5% 以下	V 群系 下端部スカシ孔の可能性あり
13	図 63 写真図版 48	円筒埴輪 体部	2 トレンチ 西端から 5m-6m 2 層（墳裾付近）	(6.9) × (9.1) × 1.3	外）調整不明瞭、スカシ孔・突帯あり（幅 2.0 ×高 0.5cm、断面低い M 字形） 内）ナデ・ユビオサエ	外・内）5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 3mm 片岩・赤色粒多量、～ 3mm 半透明粒中量	良好	5% 以下	V 群系
14	図 63 写真図版 48	円筒埴輪 体部	2 トレンチ 排土	(9.5) × (9.2) × 1.2	外）調整不明瞭、スカシ孔・突帯あり（幅 1.9 ×高 0.3cm、断面低い台形） 内）調整不明瞭（ユビオサエ・ナデ？）	外・内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）10YR6/1 褐灰色	密：～ 4mm 片岩多量、～ 3mm 半透明粒中量、～ 2mm 赤色粒少量	良好	5% 以下	V 群系
15	図 63 写真図版 48	円筒埴輪か 形象埴輪基部	2 トレンチ 西端から 2m-3m 2 層	(7.0) × (6.4) × 1.5	外）ナデ・板オサエ（板ナデ） 内）ナデ・ユビオサエ	外）5YR6/4 にぶい橙色 内）5YR5/3 にぶい赤褐色 断）5YR3/1 黒褐色	やや粗：～ 2.5mm 赤色粒多量、～ 3mm 片岩中量、～ 2mm 半透明粒少量	良好	5% 以下	V 群系か 底部調整のある円筒埴輪基部か鳥形・人物・蓋形などの基部？
16	図 64 写真図版 48	動物埴輪 馬形（鈴）か	2 トレンチ 西端から 7m-8m 2 層	2.1 × 2.1 × 1.3	表）1 条沈線で鈴を表現 裏）剥離痕跡	表）7.5YR6/4 にぶい橙色 裏）5YR7/4 にぶい橙色	粗：～ 1.5mm 半透明粒・片岩・赤色粒多量	良好	5% 以下 （鈴 100%）	半球形
17	図 64 写真図版 48	形象埴輪 馬形（馬具）か	2 トレンチ 西端から 0m-1m 2 層	9.8 × (6.3) × 1.6	表）調整不明瞭、2 条一括沈線・2 個一括刺突文（芯々 0.7cm） 裏）調整不明瞭・貼付か？	表）2.5YR5/4 にぶい赤褐色、裏）2.5YR6/4 にぶい橙色、断）10YR6/3 にぶい黄橙色	粗：～ 5mm 片岩・半透明粒・赤色粒・白色粒多量、10mm 片岩 1 個	良好	5% 以下	円形の個体
18	図 64 写真図版 48	形象埴輪 馬形？	2 トレンチ 西端から 6m-7m 2 層	(7.7) × (7.1) × 1.6	表）ナデか、2 条一括沈線か（芯々 0.7cm）・竹管文（径 1.3cm）、円形スカシ・穿孔 1 箇所あり 裏）ナデ・ユビオサエ	表・裏）5YR6/4 にぶい橙色 断）10YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 5mm 片岩・半透明粒・赤色粒多量、～ 1mm 白色粒微量	良好	5% 以下	天地左右不詳 No.91 の竹管文に類似
19	図 64 写真図版 48	器財埴輪 石見型	2 トレンチ外北側 1m 表採	(7.5) × (10.1) × 2.4	表）強いナデ、2 条一括沈線（芯々 0.6 ～ 0.7cm）、穿孔あり（径 0.6cm） 裏）強いナデ	表）5Y4/1 灰色～ 7.5YR6/3 にぶい褐色 裏）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）N7/0 灰白色	密：～ 12mm 片岩・半透明粒少量、～ 3mm 白色粒・半透明粒少量	良好	5% 以下	外面須恵質
20	図 64 写真図版 48	器財埴輪 靫形	2 トレンチ 2 層（+ 前方部東斜面埴輪露出地点 2 層）	(6.5) × (9.5) × 2.3	表）摩滅、2 条一括沈線＋2 個一括刺突文（芯々 0.6cm）、矢じりの線刻あり、 裏）ナデ、補強突帯あり	表）7.5YR7/4 にぶい橙色 裏）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）N6/0 灰色	密：～ 2mm 白色粒・片岩・赤色粒少量	良好	5% 以下	
21	図 64 写真図版 48	器財埴輪 石見型	2 トレンチ 西端から 5m-6m 2 層礫混じり土（+2 トレンチ西端 4m-5m　2 層・2 トレン西端 3m-4m　2 層）	(13.9) × (11.3) × 2.9	表）摩滅不明瞭、2 条一括沈線（芯々 0.6cm）・帆立貝形の線刻あり、穿孔あり（径 0.6cm）、 裏）ユビオサエ・ナデ、補強突帯あり	表・裏）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）2.5Y6/1 黄灰色	密：～ 4mm 白色粒・半透明粒・片岩少量、～ 2mm 赤色粒微量	良好	5% 以下	補強突帯貼付後に穿孔（補強突帯の一部に穿孔かかる）
22	図 64 写真図版 49	円筒埴輪 口縁部	3 トレンチ 西端から 3m-4m 2 層　岩盤直上	(3.9) × (2.0) × 0.5	外）調整不明瞭 内）調整不明瞭 口縁端部）強いヨコナデ、外側上方につまみ上げる	外）5YR6/6 橙色 内）5YR5/6 明赤褐色 断）5YR6/6 橙色	やや粗：～ 2mm チャート・片岩・半透明粒多量、～ 1mm 赤色粒少量	良好	5% 以下	Ⅳ群系
23	図 64 写真図版 49	円筒埴輪 口縁部	3 トレンチ 東端 岩盤直上	(4.5) × (2.2) × 0.9、 推定口径 19.4	外）ナナメハケ（単位不明） 内）ナデ 口縁端部）面あり（少し凹む）	外）5YR6/3 にぶい橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや密：～ 3mm 片岩・赤色粒中量、～ 1mm 半透明粒少量、5mm 半透明粒 1 個	良好	5% 以下	V 群系

表 5　遺物観察表（寺内 18 号墳　21-01・185-542）

No.	図版番号	器種	出土位置	法　量（cm）	特徴	色　　調	胎　　土	焼成	残存率	備　　考
24	図 64 写真図版 49	円筒埴輪 体部	3 トレンチ 1 層 上段石積裏込土	(8.7) × (8.0) × 1.2	外）ナナメハケ（4 本 /cm）、突帯あり（幅 1.6 ×高 0.5cm、断面低い台形） 内）ナデ・ユビオサエ	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/2 灰黄褐色 断）N5/0 灰色	密：～ 4mm 片岩中量、～ 2mm 半透明粒中量、～ 1mm 白色粒少量、～ 1mm 赤色粒微量、11mm 片岩 1 個、5mm 半透明粒 1 個	良好 （硬質）	5% 以下	V 群系 須恵質
25	図 64 写真図版 49	円筒埴輪 体部	3 トレンチ 東端付近 岩盤直上	(7.4) × (5.2) × 0.7	外）調整不明瞭、スカシ孔・突帯あり（幅 1.3 ×高 0.4cm、断面低い台形） 内）ユビオサエ・ナデ	外）5YR6/6 橙色 内）5YR5/8 明赤褐色 断）5YR6/6 橙色	やや粗：～ 1.5mm 片岩・半透明粒多量、～ 2mm チャート少量、～ 1mm 赤色粒・白色粒少量、4mm 白色粒 1 個	良好	5% 以下	Ⅳ群系
26	図 64 写真図版 49	人物埴輪 美豆良	3 トレンチ 2 層	1.3 × (3.9) × 1.3	美豆良に巻き付ける粘土あり（紐の表現）、裏側は顔に貼り付いていた痕跡あり	外）2.5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR3/1 黒褐色	やや粗：～ 1mm 赤色粒・白色粒多量、6mm 半透明粒 1 個、おそらく片岩あり	良好	5% 以下 （美豆良は 70%）	
27	図 64 写真図版 49	形象埴輪 馬形の馬具か	3 トレンチ 2 層	(8.8) × (5.1) × 1.3	表）ナデ、2 条一括沈線・2 個一括刺突文（芯々 0.6cm） 裏）接合剥離面	表）2.5YR6/6 橙色 裏）2.5YR6/4 にぶい橙色 断）N3/0 暗灰色	密：～ 1mm 赤色粒・白色粒・片岩多量	良好	5% 以下	辻金具や雲珠の可能性
28	図 64 写真図版 49	器財埴輪 石見型	3 トレンチ 東端 2 層	(7.9) × (4.8) × 1.6	表）ナデか、2 条一括沈線芯々 0.8cm）、角状突起側面に工具痕残る 裏）ナデか	表・裏）5YR6/6 橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗：～ 1.5mm 赤色粒多量、～ 1.5mm 片岩少量、6mm 赤色粒 1 個、9mm 半透明粒 1 個	良好	5% 以下	角状突起
29	図 64 写真図版 49	器財埴輪 石見型	3 トレンチ 東端付近 2 層	(10.9) × (9.3) × 1.8	表）摩滅（調整不明瞭）、2 条一括沈線（芯々 0.8cm） 裏）摩滅（調整不明瞭）、穿孔あり（径 0.6cm）	表・裏）5YR6/6 橙色 断）7.5YR5/1 褐灰色	やや粗:～ 4mm 赤色粒･片岩･半透明粒多量	良好	5% 以下	
30	図 64 写真図版 49	器財埴輪 石見型か	3 トレンチ 東端 2 層	(4.7) × (5.2) × 1.5	表）ナデか、2 条一括沈線芯々 0.8cm） 裏）ナデか	表・裏）5YR6/6 橙色 断）7.5YR5/2 灰褐色	密：～ 3.5mm 片岩・赤色粒中量、～ 3mm 半透明粒少量	良好	5% 以下	
31	図 64 写真図版 49	器財埴輪 石見型	3 トレンチ 東端 2 層	(5.4) × (5.8) × 1.4	表）ナデ、2 条一括沈線（芯々 0.8cm） 裏）ナデ	表・裏）5YR6/4 にぶい橙色 断）10YR5/2 灰黄褐色	やや粗：～ 1.5mm 赤色粒多量、～ 3mm 片岩・半透明粒中量	良好	5% 以下	
32	図 64 写真図版 49	器財埴輪 石見型か	3 トレンチ 東端 2 層	(6.8) × (7.6) × 1.6	表）ナデか、2 条一括沈線芯々 0.8cm）、表面の一部に工具痕残る 裏）ナデか	表・裏）5YR6/6 橙色 断）10YR6/2 灰黄褐色	やや粗：～ 3mm 片岩・半透明粒多量、～ 1.5mm 赤色粒多量	良好	5% 以下	
33	図 64 写真図版 49	器財埴輪 盾形？	3 トレンチ 東端 2 層	(5.5) × (10.2) × 1.7	表）ナデか、2 条一括沈線芯々 0.8cm） 裏）ナデ	表・裏）5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR7/3 にぶい橙色	やや粗：～ 3mm 片岩・赤色粒多量、～ 2mm 半透明粒少量	良好	5% 以下	
34	図 65 写真図版 50	円筒埴輪 口縁部	4 トレンチ 墳裾付近 2 層	(6.8) × (1.6) × 1.0	外）ナデ 内）ナデ 口縁端部）面あり（少し凹む）	外・内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 2mm 赤色粒・片岩多量、～ mm 半透明粒少量	良好	5% 以下	V 群系
35	図 65 写真図版 50	円筒埴輪 口縁部	4 トレンチ外東側 表採	(4.9) × (5.1) × 1.0	外）ナナメハケ（6 ～ 7 本 /cm） 内）強いナナメナデ（もしくは板ナデ） 口縁端部）強いヨコナデ（端部を外側につまみ出す）	外）10YR6/2 灰黄褐色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）2.5Y5/1 黄灰色	密：～ 2mm 片岩・半透明粒少量、～ 1mm 赤色粒微量	良好	5% 以下	V 群系 須恵質に近い 埴輪ハと同一個体の可能性あり
36	図 65 写真図版 50	円筒埴輪 体部	4 トレンチ外北へ 1m 表採	(5.5) × (7.0) × 1.3	外）強いナナメナデ（もしくは板オサエ）、スカシ孔・突帯あり(幅 1.6 ×高 0.5cm、断面低い台形） 内）ナデ	外）7.5YR6/2 灰褐色 内）5YR5/4 にぶい赤褐色 断）5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 2.5mm 赤色粒・チャート・半透明粒多量、～ 2mm 片岩少量	良好	5% 以下	V 群系
37	図 65 写真図版 50	円筒埴輪 体部	4 トレンチ 2 層（3 層上面か） 墳裾埴輪集中部	(8.0) × (9.2) × 1.4	外）調整不明瞭、スカシ孔・突帯あり（幅 1.4 ×高 0.5cm、断面低い台形） 内）ナナメナデ	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 1.5mm 赤色粒・片岩多量、～ 2mm 半透明粒少量	良好	5% 以下	V 群系 埴輪ハ・埴輪ニと胎土異なる
38	図 65 写真図版 61	円筒埴輪 口縁部	4 トレンチ 埴輪ハ拡張部　東壁 2 層	(11.1) × (13.4) × 1.0、 口径 28.7	外）ナナメハケか、突帯あり（幅 1.7 ×高 0.3cm、断面低い台形） 内）ナデ、口縁端部）強いヨコナデ（少し外側へつまみ出す）	外）7.5YR6//6 橙色 内）7.5YR7/3 にぶい橙色 断）10YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 6mm チャート・片岩・半透明粒・赤色粒・白色粒多量、8mm 白色粒含む	良好	10% （口縁部 10%）	V 群系 埴輪ハに類似
39	図 65 写真図版 50	円筒埴輪 （ほぼ完形）	4 トレンチ 墳裾付近　基壇上 埴輪ハ	口径 26.6 ×器高 51.5 ×底部径 16.7、 底部高（1 段目突帯の高さ） 18.0	外）口縁部強いヨコナデ、体部ナナメハケ（6 本 /cm）、3 条 4 段（突帯断面は低い M 字形、幅 1.8 ×高 0.5cm）・2 段目と 3 段目にスカシ孔 内）ナデ	外）5YR6/6 橙色 内）10YR8/4 浅黄橙色 断）10YR6/1 褐灰色	やや粗：～ 6mm 片岩多量、～ 3mm 赤色粒・半透明粒・白色粒中量、20mm 片岩 1 個	良好	90% （口縁部 70%・基部 90%）	ほぼ完形 一部須恵質 3 条 4 段 V 群系
40	図 65 写真図版 50	器財埴輪 石見型	4 トレンチ 墳裾埴輪集中部 3 層上面（+4 トレン外（東）表採）	(14.7) × (31.2) × 1.5	外）ナデ、2 条一括沈線（芯々 0.9cm）、下端部に剥離痕あり、下端側面に工具によるケズリあり（板ナデの工具か） 内）ナデ・ユビオサエ	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）2.5YR5/6 明赤褐色 断）5YR4/2 灰褐色	やや粗：～ 4mm 半透明粒・片岩・赤色粒多量、10mm 片岩・赤色粒含む	良好	5% 以下	円筒部（径 18cm 程度）と若干形象部残る
41	図 65 写真図版 50	形象埴輪	4 トレンチ 墳裾付近 2 層	(5.7) × (6.8) × 1.4	表）ナデか、沈線 1 条、穿孔あり（径 0.7cm） 裏）ナデ？	表）7.5YR7/4 にぶい橙色 裏）5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR5/1 褐灰色	やや粗：～ 2mm 赤色粒・片岩多量、～ 2mm 半透明粒・白色粒・チャート少量	良好	5% 以下	大刀形？か人物？家形の屋根の可能性もあり
42	図 65 写真図版 50	形象埴輪	4 トレンチ 埴輪ハ拡張部　東壁 2 層	(5.3) × (7.8) × 1.3	表）ナデか 裏）ナデ？ 側面）ナデ、側面弧状になる(スカシではない)	表・裏・断）7.5YR7/4 にぶい橙色	やや粗：～ 3mm 赤色粒・片岩多量、～ 2mm 半透明粒中量	良好	5% 以下	人物の帽子か巫女のまげ？（もしくは水鳥の尾羽？）
43	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 体部	5 トレンチ 基壇上 埴輪ホ	(6.5) × (4.5) × 1.2	外）調整不明瞭、突帯あり（幅 1.3 ×高 0.2cm、断面低い M 字形） 内）ナデ・ユビオサエ	外）10YR7/4 にぶい黄橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）N5/0 灰色	密：～ 2mm 片岩中量、～ 1mm 半透明粒少量、～ 1mm 赤色粒・白色粒微量	良好	5% 以下	V 群系
44	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 体部	5 トレンチ 基壇上 埴輪ニ半裁時	(6.1) × (6.8) × 1.1	外）調整不明瞭、突帯あり（幅 1.8 ×高 0.2cm、断面かなり低い台形） 内）ナデ・ユビオサエ	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/3 にぶい褐色 断）7.5YR4/1 褐灰色	密:～ 1.5mm 片岩･半透明粒･赤色粒中量、16mm 片岩 1 個	良好	5% 以下	V 群系
45	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 体部	5 トレンチ 基壇上 埴輪ヘ	(8.7) × (4.4) × 1.2	外）調整不明瞭、スカシ孔あり 内）ナデ	外・内）7.5YR7/3 にぶい橙色 断）N5/0 灰色	やや粗：～ 2.5mm 片岩・赤色粒多量、～ 2mm 半透明粒中量	良好	5% 以下	V 群系
46	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 口縁部	5 トレンチ 基壇上 埴輪チ	(14.5) × (8.2) × 1.0、 口径 32.6	外）調整不明瞭 内）調整不明瞭 口縁端部）強いヨコナデ	外）5YR6/6 橙色 内）5YR5/4 にぶい赤褐色 断）2.5Y6/1 黄灰色	やや粗：～ 8mm 片岩多量、～ 3mm 半透明粒少量、～ 2mm 赤色粒少量、～ 1mm 白色粒微量	良好	5% （口縁部 30%）	V 群系 反転復元
47	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 口縁部	5 トレンチ 基壇上 埴輪チの西	(3.4) × (3.2) × 0.9	外）調整不明瞭 内）ナデ、口縁端部）強いヨコナデ（ナデで外側につまみ出す）	外・内）7.5YR7/3 にぶい橙色 断）7.5YR4/1 褐灰色	密:～ 3mm 赤色粒･半透明粒･片岩中量、～ 1mm 白色粒微量	良好	5% 以下	V 群系 埴輪チや埴輪リとは別個体
48	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 体部	5 トレンチ 基壇上 埴輪チ	(9.8) × (9.2) × 1.0	外）調整不明瞭、突帯あり（幅 2.0 以上×高 0.3cm、断面低い台形） 内）ナデ・ユビオサエ	外）7.5YR5/3 にぶい褐色 内）5YR6/6 橙色 断）10YR4/2 灰黄褐色	やや粗：～ 3mm 片岩・赤色粒多量、～ 2mm 半透明粒中量、10mm 片岩 3 個	良好	5% 以下	V 群系か

表 5　遺物観察表（寺内 18 号墳　21-01・185-542）

No.	図版番号	器種	出土位置	法　量（cm）	特徴	色　調	胎　土	焼成	残存率	備　考
49	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 体部	5 トレンチ 基壇上 埴輪リ	(7.5) × (8.3) × 1.2	外）ナナメハケ（8 本 /cm）、スカシ孔･突帯あり（幅 1.8 ×高 0.3cm、断面低い M 字形） 内）ナデ・エビオサエ	外）10YR7/4 にぶい黄橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）N6/0 灰色	密：～ 3mm 片岩少量、～ 2mm 半透明粒少量、～ 2mm 赤色粒微量、7mm 半透明粒 1 個	良好 （やや硬質）	5% 以下	V 群系
50	図 66 写真図版 52	円筒埴輪 体部	5 トレンチ 埴輪リ周辺 2 層	(8.9) × (11.6) × 1.3	外）ナナメハケ（8 本 /cm）、スカシ孔･突帯あり（幅 1.6 ×高 0.3cm、断面低い M 字形） 内）ナデ・エビオサエ	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/2 灰黄褐色 断）2.5Y5/1 黄灰色	密：～ 2.5mm 白色粒・半透明粒少量、～ 2mm 片岩少量、13mm 片岩 1 個	良好 （やや硬質）	5% 以下	V 群系
51	図 66 写真図版 52	円筒埴輪 基部付近	5 トレンチ 基壇上 埴輪リ	(10.7) × (13.7) × 1.7、 推定底部径 18.0	外）板オサエか板ナデ（底部調整か、端部うすくなる） 内）ナデ・エビオサエ	外）2.5YR6/4 にぶい橙色 内）2.5YR5/4 にぶい赤褐色 断）2.5YR5/2 灰赤色	やや粗：～ 5mm 片岩・赤色粒多量、～ 2mm 半透明粒中量、～ 2mm 白色粒少量、7mm 半透明粒含む	良好	5%	V 群系 反転復元
52	図 66 写真図版 52	円筒埴輪 体部	5 トレンチ 基壇上 埴輪リ	(14.5) × (13.7) × 1.1、 体部径 24.0	外）調整不明瞭、スカシ孔･突帯あり(幅 1.7 ×高 0.3cm、断面低い台形) 内）調整不明瞭（エビオサエあり）	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）N6/0 灰色	やや粗：～ 8mm 片岩多量、～ 9mm 半透明粒中量、～ 3mm 赤色粒中量	良好	5%	V 群系 反転復元
53	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 口縁部	5 トレンチ 埴輪ヌとルの間 2 層	(8.4) × (3.9) × 0.9、 推定口径 22.4	外）調整不明瞭 内）調整不明瞭 口縁端部）強いヨコナデ	外・内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 4mm 片岩・半透明粒多量、～ 3mm 赤色粒中量、～ 1mm 白色粒少量	良好	5% 以下	V 群系 埴輪ヌか
54	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 体部	5 トレンチ 埴輪ヌとルの間 2 層	(9.0) × (10.6) × 1.3	外）調整不明瞭、スカシ孔･突帯あり（幅 2.0 ×高 0.3cm、断面低い台形） 内）ナデか	外）2.5YR6/4 にぶい橙色 内）2.5YR6/6 橙色 断）2.5YR4/1 赤灰色	やや粗：～ 3mm 片岩・赤色粒多量、～ 2mm チャート・半透明粒少量	良好	5% 以下	V 群系 円筒埴輪ヌか
55	図 66 写真図版 51	円筒埴輪 基部	5 トレンチ 基壇上 埴輪ルとヌの間	(10.2) × (10.3) × 1.3、底部径 18.0（ひずみ大きい）	外）板オサエか（底部調整か） 内）ナデ・エビオサエ 基部端部）ユビオサエでうすくする	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）N6/0 灰色	密：～ 2.5mm 片岩・半透明粒中量、～ 2mm 赤色粒少量	良好 （やや硬質）	5% （基部 20%）	V 群系 やや須恵質 反転復元
56	図 66 写真図版 52	円筒埴輪 基部	5 トレンチ 基壇上 埴輪ト周辺	(10.2) × (14.5) × 1.5、 底部径 12.9	外）タテハケ（6 本 /cm）・ハケ後ナデによる底部調整 内）ユビオサエ・ナデ（端部付近強いタテナデ）	外）5YR6/6 橙色 内）2.5YR6/6 橙色 断）N4/0 灰色	やや粗：～ 2.5mm 片岩・赤色粒多量、～ 4mm 半透明粒少量、9mm 片岩 1 個	良好	5% （基部 25%）	V 群系
57	図 66 写真図版 52	円筒埴輪 基部	5 トレンチ 拡張部下斜面（+ 前方部東側　表採）	(6.3) × (3.3) × 1.2	外）調整不明瞭 内）ナデ 基部端部）面あり（丸みあり・ナデで調整か）	外）5YR5/4 にぶい赤褐色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）2.5YR3/1 暗赤灰色	やや粗：～ 3mm 片岩・赤色粒多量、～ 2mm 半透明粒・白色粒少量	良好	5% 以下	V 群系
58	図 67 写真図版 53	形象埴輪 基部	4 トレンチと 5 トレンチの間の畔下 基壇上 埴輪ニ	底部径 20.0 × 器高 (33.5)、 1 段目突帯まで 高 16.4	外）タテ～ナナメハケ（6 本 /cm、原体幅 2.5cm）、基部端部に 1 段（断続ナデ？）と体部に 2 段突帯（断面低い M 字形、幅 1.8 ×高 0.4cm）、2 段目にスカシ孔 内）ナデ・エビオサエ、粘土紐接合痕残る	外）5YR6/6 橙色 内）5YR6/8 橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 5mm 片岩・赤色粒多量、～ 5mm 半透明粒中量	良好	40% （基部 90%）	埴輪ニ V 群系
59	図 67 写真図版 53	形象埴輪	4 トレンチと 5 トレンチの間の畔下 基壇上 埴輪ニ周辺	(11.0) × (6.3) × 1.7	表）ハケか（6 ～ 7 本 /cm） 裏）ナデ・エビオサエ、側面）工具痕残る	表・裏）7.5YR7/4 にぶい橙色、 断）N5/0 灰色	密：～ 2.5mm 赤色粒多量、～ 2.5mm 片岩中量、～ 1mm 白色粒・半透明粒少量	良好	5% 以下	鳥の尾羽か巫女のまげ？
60	図 67 写真図版 53	形象埴輪	5 トレンチ 基壇上　東壁	(9.9) × (6.5) × 1.5	表）ナデ・エビオサエ 裏）ナデ・エビオサエ	表・裏）7.5YR7/3 にぶい橙色 断）7.5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 3mm 片岩・赤色粒多量、8mm 大半透明 1 個	良好	5% 以下	鳥の尾羽か巫女のまげ？
61	図 67 写真図版 53	器財埴輪 石見型	5 トレンチ 基壇上 埴輪ト (+S40 の埴輪 25)	(18.0) × (11.0) × 1.9	表）強いナデか、2 条一括沈線（芯々 0.8cm）、穿孔あり（表径 0.65・裏径 0.4cm）、穿孔途中孔あり（径 0.3 ×深 0.3cm） 内）強いナデ、穿孔途中孔あり（径 0.4 ×深 0.3cm）	表・裏）2.5YR5/6 明赤褐色 断）10YR7/4 にぶい黄橙色	やや粗：～ 5mm 赤色粒・半透明粒・片岩多量	良好	5% 以下	
62	図 67 写真図版 53	器財埴輪 盾形	5 トレンチ 基壇上　東壁	(15.2) × (6.0) × 1.3	表）ナデ、2 条一括沈線（芯々 0.7cm）・沈線間に隅丸方形刺突文（0.35 × 0.3 ×深 0.1cm）・鋸歯文状線刻 裏）ナデ、補強突帯あり	表・裏）5YR7/4 にぶい橙色 断）10YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 4mm 片岩・赤色粒・半透明粒・白色粒多量、10mm 片岩含む	良好	5% 以下	既往調査の盾形埴輪の文様に類似 No.71 に類似
63	図 67 写真図版 54	円筒埴輪 口縁部	6 トレンチ 2 層	(4.1) × (2.9) × 0.6	外）調整不明瞭 内）調整不明瞭 口縁端部）ヨコナデ	外）5YR5/6 明赤褐色 内）5YR6/6 橙色 断）5YR5/6 明赤褐色	密：～ 1mm 片岩・半透明粒・赤色粒少量、～ 1mm 白色粒微量	良好	5% 以下	Ⅳ群系 埴輪ロか
64	図 67 写真図版 65	円筒埴輪 口縁部	6 トレンチ 基壇上 埴輪ロ南側	(6.1) × (3.0) × 0.6	外）調整不明瞭 内）調整不明瞭 口縁端部）強いヨコナデ（端部外側へつまみ出す）	外）5YR5/8 明赤褐色 内）2.5YR5/6 明赤褐色 断）2.5YR5/6 明赤褐色	やや密：～ 1mm 片岩・チャート・白色粒・半透明粒中量、～ 1mm 赤色粒少量	良好	5% 以下	Ⅳ群系 埴輪ロか
65	図 67 写真図版 54	円筒埴輪 体部	6 トレンチ 基壇上 埴輪ロ南側	(6.3) × (4.2) × 0.5	外）調整不明瞭、突帯あり（幅 1.6 ×高 0.6cm、断面やや高い台形） 内）調整不明瞭	外）5YR5/6 明赤褐色 内）5YR6/6 橙色 断）5YR5/6 明赤褐色	密:～ 2mm 片岩･赤色粒中量、～ 1mm 半透明粒・白色粒少量	良好	5% 以下	Ⅳ群系 埴輪ロか
66	図 67 写真図版 54	円筒埴輪 体部	6 トレンチ 墳裾平坦面 2 層	(9.7) × (4.7) × 0.6	外）調整不明瞭、突帯あり（幅 2.0 ×高 0.5cm、断面台形） 内）調整不明瞭	外）5YR6/6 橙色 内）5YR5/6 明赤褐色 断）5YR6/6 橙色	粗:～ 2mm 片岩･赤色粒多量、～ 2mm 白色粒・半透明粒中量	良好	5% 以下	Ⅳ群系 埴輪ロか 朝顔形の肩部の可能性あり
67	図 67 写真図版 54	円筒埴輪 体部	6 トレンチ 埴輪イ 半裁中に欠けた破片	(5.7) × (7.3) × 1.0	外）ナナメハケ（5 本 /cm） 内）ナナメナデ	外）5YR6/4 にぶい橙色 内）5YR4/4 にぶい赤褐色 断）5YR4/1 褐灰色	密：～ 2.5mm 半透明粒・赤色粒・片岩多量、8mm 赤色粒 1 個	良好	5% 以下	V 群系
68	図 67 写真図版 54	円筒埴輪 体部	6 トレンチ 2 層	(9.4) × (6.2) × 1.3	外）調整不明瞭、突帯あり（幅 1.7 ×高 0.4cm、断面低い M 字形） 内）ナデ	外）5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR7/6 橙色 断）N5/0 灰色	密：～ 2.5mm 片岩中量、～ 2mm 赤色粒・半透明粒少量	良好 （断面やや硬質）	5% 以下	V 群系 埴輪イ・ロとは異なる 朝顔形の可能性あり
69	図 68 写真図版 54	形象埴輪	6 トレンチ 墳裾平坦面 2 層	(3.5) × (4.1) × 1.4	表）ナデか､2 条一括沈線芯々 0.7cm）、沈線間に 1 列の刺突文（2 個一括刺突文の可能性あり） 裏）剥離痕	表・裏）2.5YR6/4 にぶい橙色、剥離痕 断）5YR4/1 褐灰色	密：～ 2mm 赤色粒中量、～ 4mm 片岩・半透明粒少量	良好	5% 以下	馬形あおりか人物？ No.70 と同一個体か
70	図 68 写真図版 54	形象埴輪	6 トレンチ 表土	(3.1) × (3.4) × 1.3	表）ナデか､2 条一括沈線芯々 0.7cm）、沈線間に 1 列の刺突文（2 個一括刺突文の可能性あり）、縦方向の浅い沈線 2 条あり 裏）剥離痕	表・裏）5YR6/4 にぶい橙色、剥離痕 断）2.5YR4/1 赤灰色	密：～ 2mm 片岩・半透明粒・赤色粒・チャート少量	良好	5% 以下	馬形あおりか人物？ No.69 と同一個体か

表 5　遺物観察表（寺内 18 号墳　21-01・185-542）

No.	図版番号	器種	出土位置	法　量（cm）	特徴	色　　調	胎　　土	焼成	残存率	備　　考
71	図 68 写真図版 54	器財埴輪 盾形	6 トレンチ 斜面　2 層	(5.9) × (6.6) × 1.9	表）ナデか、2 条一括沈線芯々 0.7cm）・沈線間に隅丸方形刺突文（0.6 × 0.5 ×深 0.2cm）・鋸歯文状線刻 裏）ナデか、裏面に剥離痕（補強突帯か）	表・裏）7.5YR7/3 にぶい橙色（裏面剥離痕 7.5YR4/1 褐灰色） 断）7.5YR4/1 褐灰色	密：～ 2.5mm 片岩・赤色粒・白色粒・半透明粒少量	良好	5% 以下	S40 調査の盾形埴輪の文様に類似 No.62 に類似
72	図 68 写真図版 54	器財埴輪 盾形か	6 トレンチ 2 層	(7.7) × (8.7) × (3.1)	表）鋸歯文状の線刻、ナデか、穿孔あり(半欠、径 0.6cm） 裏）強いナデ・ユビオサエ、裏面に剥離痕（補強突帯の剥離か）	表・裏）5YR6/6 橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや密:～ 2mm 赤色粒・片岩・半透明粒少量	良好	5% 以下	既往調査の盾形埴輪の文様に類似
73	図 68 写真図版 54	器財埴輪 石見型	6 トレンチ 埴輪イ埋土半裁時出土（埴輪の中）	(2.4) × (3.1) × 1.6	表）ナデか（不明瞭）、2 条一括沈線（芯々 0.9cm） 裏）ナデか（不明瞭）	表・裏）5YR6/6 橙色、断）7.5YR6/6 橙色	密：～ 1.5mm 白色粒・片岩・半透明粒・赤色粒少量	良好	5% 以下	石見型埴輪の角状突起
74	図 68 写真図版 54	器財埴輪 石見型	6 トレンチ 埴輪イ　埴輪内部出土の破片（＋基壇上の破片）	(13.3) × (18.1) × 1.8	表）ナデ、2 条一括沈線（芯々 0.9cm） 裏）ナデ	表・裏）5YR5/6 明赤褐色～ 5YR6/6 橙色 断）10YR5/1 褐灰色	やや粗：～ 5mm 赤色粒・白色粒・半透明粒・片岩多量	良好	5% 以下	
75	図 68 写真図版 54	器財埴輪 石見型	6 トレンチ 基壇上 埴輪イ南側	(10.2) × (11.7) × 1.6	表）ナデか（不明瞭）・2 条一括沈線（芯々 0.9cm） 裏）ナデ・ユビオサエ（一部ハケの痕跡？）	表・裏）7.5YR5/6 橙色 断）5YR6/6 橙色	やや粗：～ 3mm 半透明粒・白色粒・赤色粒・片岩多量	良好	5% 以下	
76	図 68 写真図版 55	馬形埴輪 脚部	前方部墳頂埴輪露出地点 2 層	器高（14.7） ×最大径 (13.2)	外）工具によるナデ（板ナデかハケ） 内）ナデ（しぼり痕か）	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）N3/0 暗灰色	やや粗：～ 4mm 片岩・半透明粒多量、～ 2mm 赤色粒中量	良好	5% 以下	
77	図 68 写真図版 55	形象埴輪 馬形（馬具）か	前方部墳頂埴輪露出地点 2 層	(3.5) × (2.6) × 1.6	表）ナデか、2 条一括沈線芯々 0.6cm） 裏）剥離、裏面に沈線 1 条残る側面）竹管文（径 1.2cm）	表・裏）5YR6/6 橙 断）2.5GY6/1 オリーブ灰色	密：～ 1mm 白色粒・片岩・赤色粒少量	良好	5% 以下	辻金具や雲珠もしくは鞍の可能性
78	図 68 写真図版 55	形象埴輪 家形か器財	前方部墳頂埴輪露出地点　2 層（＋墳頂前方部羨道南の窪み表採）	(12.9) × (6.1) × 1.9	表）ナデか、2 条一括沈線芯々 0.6cm）、穿孔あり（径 0.75cm） 裏）ナデ・ユビオサエ、裏面に剥離痕 2 条（補強突帯の剥離か）	表）5YR7/4 にぶい橙色 裏）5YR6/4 にぶい橙色 断）N5/0 灰色	密：～ 1.5mm 赤色粒中量、～ 4mm 片岩・半透明粒少量	良好	5% 以下	
79	図 68 写真図版 55	形象埴輪 家形	前方部墳頂埴輪露出地点 2 層	(15.3) × (8.0) × 1.9	外）タテハケ（6 本 /cm）、穿孔 1 箇所（径 0.6cm）、端部に粘土板貼付（貼付後に沈線） 内）ハケ・ナデ	外・内）5YR6/6 橙色 断）N3/0 暗灰色	やや密:～ 4mm 片岩・白色粒・半透明粒中量、～ 4mm 赤色粒少量	良好	5% 以下	屋根軒先部分
80	図 68 写真図版 55	器財埴輪 石見型？	墳頂 前方部石室前 表採	(8.5) × (8.3) × (6.5)	外）ナデ、2 条一括沈線（芯々 0.7cm）・短い直線状刺突文（長 0.9 ×幅 0.25 ×深 0.2cm） 内）ナデ	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）5YR7/4 にぶい橙色 断）N5/0 灰色	密：～ 4mm 片岩・白色粒・半透明粒・赤色粒少量	良好	5% 以下	形象埴輪の円筒部とわずかに鰭部残る
81	図 68 写真図版 55	形象埴輪	前方部墳頂 表採	底部径 11.7 ×器高（2.4）	外）ナデか 内）摩滅	外・内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 2.5mm 片岩・半透明粒・赤色粒中量	良好	5% 以下	動物埴輪脚部や人物埴輪の一部あるいは土師器脚台部の可能性
82	図 68 写真図版 55	馬形埴輪 （馬具）	前方部墳頂 表採	(4.1) × 3.2 × 1.0	表）ナデ、2 個一括刺突文芯々 0.55cm）、沈線あり（2 条一括か） 裏）ナデ、文様なし	表・裏）5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR5/1 褐灰色	やや粗：～ 2mm 片岩・赤色粒多量、～ 1mm 半透明粒・白色粒含む	良好	5% 以下	双脚輪状文形か人物冠帽の可能性もあり
83	図 68 写真図版 55	形象埴輪 基部	墳頂 前方部羨道南の凹み 表採	器高（10.5） ×推定底部径 23.2	外）ナナメ～タテハケ（6 本 /cm）、ハケ後に突帯(幅 1.9 ×高 0.5cm・断面三角形に近い台形） 内）ナデ・ユビオサエ	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/6 橙色 断）N4/0 灰色	密：～ 1.5mm 赤色粒・片岩・半透明粒中量、～ 1.5mm チャート微量	良好	5% 以下 （基部 15%）	反転復元
84	図 68 写真図版 55	円筒埴輪 体部	墳頂 前方部石室南 表採	(12.4) × (7.8) × 1.4	外）ナナメハケ（単位不明）、スカシ孔・突帯あり（幅 2.3 ×高 0.6、断面低い M 字形） 内）ナデ	外・内）5YR6/6 橙色 断）N5/0 灰色	密：～ 4mm 片岩・半透明粒多量、～ 2mm 赤色粒多量、～ 1mm 白色粒微量	良好	5% 以下	V 群系 天地逆の形象埴輪基部の可能性あり
85	図 69 写真図版 55	円筒埴輪 基部	前方部東斜面埴輪露出地点	(13.5) × (12.2) × 1.3	外）板オサエか（底部調整） 内）不明瞭、基部端部）ナデ・ユビオサエ（端部はヨコナデで斜めに面を整形）	外）5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）N5/0 灰色	やや粗：～ 5mm 片岩・半透明粒・赤色粒多量	良好	5% 以下	V 群系
86	図 69 写真図版 55	円筒埴輪 基部	前方部東斜面埴輪露出地点から東に 1.6m 表採	(9.7) × (5.9) × 1.0、 推定底部径 24.8	外）板オサエか（不明瞭だが底部調整か） 内）調整不明瞭、基部端部）ナナメに面あり（ナデで整形する）	外・内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）10YR5/1 褐灰色	やや密：～ 3mm 半透明粒・赤色粒・片岩中量、5mm 半透明粒含む、10mm 片岩 1 個	良好	5% 以下	V 群系か
87	図 69 写真図版 56	円筒埴輪 体部	前方部北東 表採	(7.6) × (7.6) × 1.2	外）整不明瞭、突帯あり(幅 1.9 ×高 0.5cm、断面台形） 内）ナナメナデ	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）7.5YR8/4 浅黄橙色 断）N5/0 灰色	やや粗：～ 2.5mm 半透明粒・片岩多量、～ 3mm 赤色粒・白色粒中量	良好	5% 以下	V 群系 断面やや須恵質
88	図 69 写真図版 56	円筒埴輪 体部	前方部北東 表採	(7.1) × (7.7) × 1.8	外）調整不明瞭、スカシ孔・突帯あり(1.8 ×高 0.5cm、断面低い台形） 内）ナデ・ユビオサエ	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）7.5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 3mm 赤色粒多量、～ 2.5mm 半透明粒中量、～ 2mm 片岩中量	良好	5% 以下	V 群系 断面厚いため天地逆で形象埴輪基部の可能性あり
89	図 69 写真図版 56	形象埴輪 家形か？	前方部北東 表採	(4.5) × (4.7) × 1.6	外）ナデ・ユビオサエ、下端部に突帯あり 内）ナデ・ユビオサエ	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/2 褐灰色 断）10YR4/1 褐灰色	密：～ 2mm 赤色粒・片岩中量、～ 2mm チャート少量、～ 1mm 半透明粒微量	良好	5% 以下	家形の壁下端部か
90	図 69 写真図版 56	円筒埴輪 体部	前方部西側 墳頂より 1 段下の平坦面　表採	(10.0) × (5.6) × 1.6	外）ナナメハケ（6 本 /cm）、スカシ孔あり、下端部は突帯上辺のヨコナデか 内）ナデ・ユビオサエ・一部ナナメハケ	外）7.5YR5/2 灰褐色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）N4/0 灰色	密：～ 2mm 半透明粒中量、～ 3mm 片岩少量、～ 1mm 赤色粒微量	良好 （堅緻）	5% 以下	V 群系 やや須恵質
91	図 69 写真図版 56	形象埴輪	前方部西 1 段石積平面　表採（＋ 2 トレンチ　2 層）	(6.6) × (8.1) × 1.4	表）ナデか、沈線・竹管文（径 1.2cm） 裏）ナデ・ユビオサエ	表・裏）2.5YR5/4 にぶい赤褐色、断）5YR4/1 褐灰色	密：～ 5mm 赤色粒・片岩・半透明粒・チャート中量	良好	5% 以下	人物か馬形？ 天地左右不詳 No.18 の竹管文に類似
92	図 69 写真図版 56	円筒埴輪 基部	前方部石室入口 西斜面 表採	(8.9) × (5.6) × 1.2	外）ナデか板ナデ（不明瞭だが底部調整か） 内）ナデ・端部付近ヨコナデか基部端部）面あり（ナデ）	外）5YR6/6 橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）10YR7/2 にぶい黄橙色	やや粗：～ 2.5mm 赤色粒・片岩多量、～ 2mm 半透明粒中量	良好	5% 以下	V 群系
93	図 69 写真図版 56	円筒埴輪 口縁部	墳丘外 東くびれ部北下 表採	(6.5) × (7.2) × 1.1、 推定口径 21.4	外）ナナメハケ（8 本 /cm） 内）ナデ・ユビオサエ 口縁端部）強いヨコナデ（端部面あり・少し凹む）	外）7.5YR6/3 にぶい褐色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）7.5YR5/2 灰褐色	密：～ 2mm 半透明粒・赤色粒中量、～ 3mm 片岩少量	良好	5% 以下	V 群系
94	図 69 写真図版 56	器財埴輪 石見型	墳丘外 東くびれ部北下 表採	(10.4) × (14.3) × (4.2)	外）ナデか、2 条一括沈線芯々 0.8cm） 内）ナデ	外・内）5YR6/4 にぶい橙色 断）10YR3/1 黒褐色	やや粗：～ 3mm 赤色粒多量、～ 4mm 片岩・半透明粒中量、～ 2mm チャート少量、22mm 片岩 1 個、8mm 赤色粒 1 個	良好	5% 以下	円筒部と鰭部

表 5　遺物観察表（寺内 18 号墳　21-01・185-542）

No.	図版番号	器種	出土位置	法　量（cm）	特徴	色　調	胎　土	焼成	残存率	備　考
95	図 69 写真図版 56	器財埴輪 石見型か	墳丘外 東くびれ部北下 表採	(9.3) × (14.9) × (5.2)	表）ナデ、2 条一括沈線（芯々 0.8cm） 裏）ナデ	表）5YR6/6 橙色～ 5YR6/4 にぶい橙色、裏）5YR6/6 橙色、断）N5/0 灰色～ 10YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 3mm 片岩･赤色粒･白色粒・半透明粒多量	良好	5% 以下	円筒部と鰭部
96	図 69 写真図版 56	形象埴輪 馬形の 鬣部分？	後円部南西 墳裾付近 表採	(7.2) × (5.2) × (3.2)	表）粗いナデ 裏）粗いナデ・ユビオサエ	表・裏）2.5YR6/6 橙色～ 2.5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR3/1 黒褐色	密：～ 2.5mm 半透明粒･片岩･赤色粒中量	良好	5% 以下	平面小判状（断面 T 字状）
97	図 69 写真図版 56	形象埴輪	墳丘外 西斜面下 表採	(6.4) × (5.3) × 1.6、 推定径 7.7	外）ナデ 内）ナデ	外）7.5YR7/3 にぶい橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 2.5mm 片岩・赤色粒・半透明粒多量	良好	5% 以下	動物の脚部か人物の腕部
98	図 70 写真図版 57	円筒埴輪 口縁部	寺内 18 号墳 S63 年表採	(6.3) × (7.1) × 1.2、 推定口径 26.1	外）ヘラ記号あり（線刻）・ナナメハケ（4 本 /cm） 内）ナデ、口縁端部）強いヨコナデ	外）10YR6/4 にぶい黄橙色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）10YR5/1 褐灰色	密：～ 1.5mm 半透明粒少量、～ 1mm 片岩微量	良好	5% 以下	V 群系 反転復元 やや須恵質
99	図 70 写真図版 57	円筒埴輪 基部	寺内 18 号墳 S63 年頃表採	(14.0) × (9.9) × 1.5、 推定底部径 16.6	外）板ナデか板オサエ(不明瞭･底部調整か) 内）ナデ・ユビオサエ（不明瞭）、基部端部）うすくなる・面なし	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）10YR7/4 にぶい黄橙色 断）10YR3/1 黒褐色	やや粗：～ 4mm 半透明粒中量、～ 3mm 片岩中量、～ 2mm 赤色粒少量、1.7mm 片岩 1 個	良好	5% （基部 25%）	V 群系 反転復元
100	図 70 写真図版 57	器財埴輪	寺内 18 号墳 S63 年表採	(9.1) × (4.5) × 1.6	外）調整不明瞭（ナデか） 内）調整不明瞭（ナデか）、円筒埴輪より径が小さい（大刀形の体部か）	外）5YR7/6 橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）10YR5/1 褐灰色	密：～ 2mm 半透明粒・片岩中量、～ 2mm 赤色粒少量	良好	5% 以下	大刀形？又は馬形の脚部の可能性もあり 天地不詳
101	図 70 写真図版 68	器財埴輪 石見型？	寺内 18 号墳 S63 年表採	(5.9) × (3.0) × 1.5	表）ナデか､2 条一括沈線芯々 0.6cm） 裏）ナデか（不明瞭） 側辺）面あり・強いナデ	表）7.5YR6/4 にぶい橙色 裏）5YR6/6 橙色 断）7.5YR5/1 褐灰色	密：～ 3mm 半透明粒中量、～ 3mm 片岩少量、～ 2mm 赤色粒少量	良好	5% 以下	天地左右不詳
102	図 70 写真図版 57	人物埴輪 美豆良	寺内 18 号墳 S63 年表採	1.9 × (5.3) × 1.9	外）調整不明瞭（ナデか） 内）調整不明瞭（ナデか）、顔に貼り付けた痕跡あり、斜め方向の 2 条の線刻あり	外・内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR4/1 褐灰色	密:～ 2mm 半透明粒･赤色粒･片岩少量	良好	5% 以下	
103	図 70 写真図版 57	器財埴輪	寺内 18 号墳 S63 年表採	(5.0) × (6.3) × 1.7	表）ナデか、沈線 1 条・2 個一括刺突文 4 箇所（芯々 0.7cm） 裏）調整不明瞭（ナデか）	表・裏）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）10YR5/1 褐灰色	密：～ 2mm 半透明粒・片岩・赤色粒少量	良好	5% 以下	板状の破片 （大刀形の鰭か盾形？）
104	図 70 写真図版 57	器財埴輪か	寺内 18 号墳 S63 年表採	(4.7) × (9.0) × 2.5	表）ナデか､2 条一括沈線芯々 0.6cm）・2 個一括刺突文 1 箇所＋浅い痕 4 箇所 裏）ナデか（不明瞭）	表・裏）5YR5/4 にぶい赤褐色 断）5YR4/1 褐灰色	密：～ 2mm 白色粒・赤色粒・半透明粒・片岩中量	良好	5% 以下	浅い刺突は軽く押した痕
105	図 70 写真図版 57	円筒埴輪 体部～基部	寺内 18 号墳 S37 年頃表採	器高（26.4） ×底部径 14.2、 底部高（1 段目突帯の高さ） 18.5	外）調整不明瞭、基部付近は板ナデか板オサエ（底部調整か）、スカシ・突帯あり（断面低い台形、幅 2.1 ×高 0.4cm） 内）ナデ・ユビオサエ・粘土積上げ痕よく残る 基部端部）うすくする・丸み（少ししぼる？）	外・内）5YR6/6 橙色 断）5YR4/1 褐灰色	やや粗：～ 5mm 片岩・赤色粒多量、～ 8mm 半透明粒中量	良好	30% （基部 100%）	V 群系 紀の川市教育委員会蔵
106	図 70 写真図版 57	円筒埴輪 体部～基部	寺内 18 号墳 S37 年頃表採	器高さ（26.2） ×底部径 19.1、 底部高（1 段目突帯の高さ） 21.0	外）ナナメハケか板ナデ（または板オサエ、底部調整か）、一部ヨコハケ？（強いヨコナデの可能性あり）、スカシ･突帯あり（断面低い台形、幅 1.5 ×高 0.4cm） 内）調整不明瞭、基部端部）ユビオサエでうすくする	外・内）7.5YR7/4 にぶい橙色、断）10YR7/1 灰白色	やや粗：～ 8mm 片岩・半透明粒・白色粒・赤色粒多量	良好	30% （基部 100%）	V 群系 個人蔵
107	図 70 写真図版 57	円筒埴輪 体部～基部	寺内 18 号墳 S37 年頃表採	器高（24.5） ×底部径 16.9、 底部高（1 段目突帯の高さ） 16.0	外）ナナメハケ（不明瞭）、基部付近は板ナデか（底部調整か）、スカシ・突帯あり（断面低い台形、幅 2.1 ×高 0.4cm、雑な貼付） 内）ナデ・ユビオサエ 基部端部）斜めに面（ナデ）	外）5YR7/4 にぶい橙色～ 10YR6/1 褐灰色 内）5YR7/6 橙色 断）10YR5/1 褐灰色	やや密：～ 3mm 半透明粒・片岩多量、～ 3mm 白色粒中量、10mm 片岩 1 個・半透明粒 1 個	良好	40% （基部 100%）	V 群系 やや須恵質 紀の川市教育委員会蔵
108	図 71 写真図版 58	須恵器 坏蓋	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 1	口径 13.9 ×器高 4.5	外）回転ヘラケズリ･回転ナデ･肩部沈線状 内）回転ナデ・中央部不定方向のナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る	外）N4/0 灰色 内）10YR4/1 褐灰色～ 5YR5/4 にぶい赤褐色 断）5YR5/6 明赤褐色	粗：～ 3mm 片岩・白色粒・半透明粒多量	良好 （堅緻）	ほぼ 100%	No.109 とセット ロクロ右回り
109	図 71 写真図版 58	須恵器 坏身	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 1	口径 12.2 ×器高 4.3	外）回転ヘラケズリ・回転ナデ 内）回転ナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る、中央部の一部は不定方向のナデか	外）10YR6/2 灰黄褐色 内）10YR7/6 明黄褐色 断）N7/0 灰白色	粗：～ 4mm 片岩・半透明粒多量	軟質 （生焼け）	ほぼ 100%	No.108 とセット ロクロ右回りか
110	図 71 写真図版 58	須恵器 坏蓋	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 2	口径 13.9 ×器高 4.4	外）回転ヘラケズリ・肩部沈線状 内）粘土紐巻き上げ痕跡残る、内外面摩滅により調整不明瞭	外）7.5YR5/4 にぶい褐色 内）10YR7/4 にぶい黄橙色 断）2.5Y8/2 灰白色	粗：～ 2.5mm 白色粒・半透明粒・片岩多量	軟質 （生焼け）	90%	No.111 とセット ロクロ右回り
111	図 71 写真図版 58	須恵器 坏身	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 2	口径 12.6 ×器高 5.1	外）回転ナデか・回転ヘラケズリ 内）回転ナデ、内面にモミ圧痕（炭化）あり	外）10YR6/4 にぶい黄橙色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）N7/0 灰白色	密：～ 2mm 片岩・半透明粒少量	軟質 （生焼け）	ほぼ 100%	No.110 とセットか ロクロ右回りか 内面にモミ圧痕あり
112	図 71 写真図版 58	須恵器 坏蓋	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 3	口径 14.4 ×器高 4.4	外）回転ヘラケズリ･回転ナデ･肩部沈線状 内）回転ナデ・中央部当て具痕か・粘土紐巻き上げ痕跡残る	外）N4/0 灰色 内）N4/0 灰色～ N5/0 灰色 断）5YR4/4 にぶい赤褐色	やや粗：～ 2.5mm 片岩・半透明粒少量	良好 （堅緻）	80%	No.113 とセット ロクロ右回り
113	図 71 写真図版 58	須恵器 坏身	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 3（+5 トレンチ土器埋納遺構埋土）	口径（11.3） ×器高 4.7	外）回転ヘラケズリ・回転ナデ 内）回転ナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る、全体に摩滅	外）10YR6/2 灰黄褐色 内）5YR6/6 橙色 断）5YR6/6 橙色	粗:～ 3mm 片岩･赤色粒多量、～ 2mm 半透明粒少量	軟質 （生焼け）	50%	No.112 とセット ロクロ右回りか
114	図 71 写真図版 58	須恵器 坏蓋	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 4（+5 トレンチ土器埋納遺構埋土）	口径 14.3 ×器高 4.8	外）回転ヘラケズリ･回転ナデ･肩部沈線状 内）回転ナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る	外）10YR6/2 灰黄褐色 内）7.5YR5/2 灰褐色 断）5YR6/6 橙色	粗：～ 5mm 半透明粒・片岩・白色粒多量、～ 1mm 赤色粒微量	やや軟質 （生焼けぎみ）	ほぼ 100%	No.115 とセット ロクロ右回り
115	図 71 写真図版 58	須恵器 坏身	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 4	口径 12.6 ×器高 4.9	外）回転ヘラケズリ・回転ナデ 内）回転ナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）5YR5/6 明赤褐色 断）5YR6/6 橙色	粗：～ 4mm 片岩・赤色粒・半透明粒多量、～ 1mm 白色粒少量	軟質	95%	No.114 とセット ロクロ右回り
116	図 71 写真図版 59	須恵器 坏蓋	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 5	口径 13.8 ×器高 4.3	外）回転ヘラケズリ･回転ナデ･肩部沈線状 内）回転ナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る	外）N4/0 灰色 内）N5/0 灰色 断）N5/0 灰色～ 5YR5/4 にぶい赤褐色	粗:～ 4mm 白色粒･半透明粒･片岩多量	良好 （堅緻）	ほぼ 100%	No.117 とセット ロクロ右回り

表 5　遺物観察表（寺内 18 号墳　21-01・185-542）

No.	図版番号	器種	出土位置	法　量（cm）	特徴	色　　調	胎　　土	焼成	残存率	備　　考
117	図 71 写真図版 59	須恵器 坏身	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 5	口径 12.3 ×器高 4.5	外）回転ヘラケズリ・回転ナデ 内）回転ナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る、内面中央に当て具痕あり	外）N4/0 灰色 内・断）5YR5/4 にぶい赤褐色	やや粗:～ 4mm 白色粒･片岩･半透明粒多量、～ 1mm 赤色粒少量	やや軟質	ほぼ 100%	No.116 とセット ロクロ右回り
118	図 71 写真図版 59	須恵器 坏蓋	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 6	口径 13.6 ×器高 4.1	外）回転ヘラケズリ･回転ナデ･肩部沈線状 内）回転ナデ・中央部不定方向のナデもしくは不調整･粘土紐巻き上げ痕跡残る	外）10YR7/1 灰白色 内）10YR7/6 明黄褐色～ 10YR7/1 灰白色 断）10YR7/1 灰白色	粗：～ 5mm 片岩・半透明粒多量、～ 1mm 白色粒少量	軟質 （生焼け）	100%	No.119 とセット ロクロ右回り
119	図 71 写真図版 59	須恵器 坏身	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 6	口径 12.4 ×器高 4.5	外）回転ヘラケズリ･回転ナデ･外面に工具痕（当て具?）あり 内）回転ナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る	外）N4/0 灰色 内）5YR5/6 明赤褐色 断）5YR5/6 明赤褐色～ N4/0 灰色	粗：～ 4mm 片岩多量、～ 4mm 半透明粒・白色粒少量、～ 1mm 赤色粒少量	良好 （堅緻）	ほぼ 100%	No.118 とセット ロクロ右回り
120	図 71 写真図版 59	須恵器 坏蓋	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 7	口径 13.9 ×器高 4.5	外）回転ヘラケズリ･回転ナデ･肩部段状 内）回転ナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）7.5YR7/2 明褐色～ 5YR5/4 にぶい赤褐色 断）5YR5/6 明赤褐色	粗:～ 4mm 白色粒･半透明粒･片岩多量、～ 1mm 赤色粒少量、15mm 片岩 1 個	軟質 （生焼け）	ほぼ 100%	No.121 とセット ロクロ右回り
121	図 71 写真図版 59	須恵器 坏身	5 トレンチ 土器埋納遺構 坏 7	口径 12.3 ×器高 4.5	外）回転ヘラケズリ・回転ナデ 内）回転ナデ・粘土紐巻き上げ痕跡残る、内面中央剥離多い	外）10YR7/2 にぶい黄橙色 内）5YR5/6 明赤褐色 断）5YR5/6 明赤褐色	粗：～ 6mm 半透明粒・片岩多量、～ 1mm 赤色粒少量	軟質 （生焼け）	ほぼ 100%	No.122 とセット ロクロ右回り
122	図 71 写真図版 59	須恵器 高坏	5 トレンチ 土器埋納遺構 高坏 1	口径 9.9 ×器高 13.5 ×脚部径 8.5	外）坏部：回転ヘラケズリ・回転ナデ・沈線と波状文、ロクロ右回り、脚部：カキ目（8 本 /cm）・回転ナデ 内）坏部:粗い回転ナデ,脚部:回転ナデ・しぼり痕	外）10YR6/1 褐灰色～ N4/0 灰色 内）N4/0 灰色～ 5Y7/1 灰白色 断）N3/0 暗灰色～ N4/0 灰色	やや粗：～ 2.5mm 半透明粒・白色粒・片岩多量	良好 （堅緻）	100%	長脚 3 方スカシ
123	図 71 写真図版 59	須恵器 高坏	5 トレンチ 土器埋納遺構 高坏 2	口径 10.4 ×器高 13.9 ×脚部径 7.6	外）坏部：回転ナデ・沈線でなく断面三角形状・波状文・カキ目､ロクロ方向不明(脚部取り付け時に丁寧な回転ナデ)、脚部：カキ目（8 本 /cm）・回転ナデ 内）坏部：回転ナデ、脚部：回転ナデ・しぼり痕	外）7.5YR6/1 褐灰色～ N3/0 暗灰色 内）N4/0 灰色～ N6/0 灰色 断）N4/0 灰色～ 5YR5/3 にぶい赤褐色、全体に自然釉あり（7.5Y3/2 オリーブ黒色）	密：～ 1.5mm 半透明粒・白色粒少量、～ 2mm 片岩微量、3mm 白色粒 1 個	良好 （堅緻）	100%	長脚 3 方スカシ 坏部にスカシ切取時の工具痕残る
124	図 71 写真図版 59	須恵器 壺	5 トレンチ 土器埋納遺構 壺 1	口径 11.5 ×器高 16.1	外）回転ナデ･口縁部沈線状･底部付近不定方向のナデ 内）回転ナデ・底部付近ユビオサエ	外）2.5Y7/3 浅黄色、 内）10YR7/2 にぶい黄橙色、 断）7.5Y7/1 灰白色	密：～ 5mm 片岩少量、～ 1mm 半透明粒少量	軟質	100%	丸底
125	図 71 写真図版 59	土師器 壺	5 トレンチ 土器埋納遺構 壺 2（＋土器埋納遺構北東区埋土・南東区埋土）	口径 9.5 ×器高 10.7	外）口縁部付近ヨコナデ・底部付近ナデ 内）口縁部付近ヨコハケ後ヨコナデ・底部付近ナナメハケ（8 本 /cm）	外・断）5YR6/6 橙色 内）5YR5/6 明赤褐色	やや粗:～ 2mm 赤色粒･片岩･半透明粒・黒色粒多量	良好	70%	丸底 接合しない小片あり（本来残存 100% か）
126	図 72 写真図版 60	須恵器 大甕	5 トレンチ 墳丘裾 基壇面上面	口径 26㎝ ×器高 52.3㎝ ×胴部径 51㎝	外）タタキ、口縁部～頸部回転ナデ、一部自　然釉（2.5Y3/1 黒褐色） 内）同心円文当具痕、口縁部回転ナデ、頸部横方向の強いナデ	外）10YR6/4 にぶい黄橙色（体部上半）～ 10YR5/1 褐灰色（口縁部～頸部、体部下半） 内）10YR6/1 褐灰色（体部）～ 2.5YR5/3 黄褐色（口縁部～頸部） 断）10YR6/4 にぶい黄橙色	密：～ 2㎜白色粒・黒色粒・半透明粒少量	良好	ほぼ 100%	外面 4 か所に別個体の須恵器融着
127	図 73 写真図版 60	土師器 坏	3 トレンチ 西側 前方部横穴式石室埋戻土	口径 11.7 ×器高 5.5	外）口縁部付近ヨコナデ・底部付近粗いナデ（粘土の接合痕残る） 内）口縁部付近ヨコナデ・底部付近ナデ		密：～ 2.5mm 片岩・赤色粒・半透明粒多量	良好	40% （口縁部 40%）	反転復元
128	図 73 写真図版 60	須恵器 坏身	墳丘外南西側畑 表採	口径 13.4 ×器高 3.6	外）回転ヘラケズリ･回転ナデ、一部自然釉 内）回転ナデ	外）N5/0 灰色 内）2.5Y8/2 灰白色 断）N4/0 灰色～ 7.5YR5/2 灰赤色	密：～ 1mm 半透明粒・片岩・白色粒少量	良好	10% （口縁部 10%）	反転復元 ロクロ右回り
129	図 73 写真図版 60	須恵器 壺類 口縁部？	墳丘外 西側斜面下平坦面 表採	推定口径 9.0 ×器高（3.3）	外）回転ナデ、波状文 内）回転ナデ	外）N4/0 灰色 内・断）N5/0 灰色	密：～ 1mm 片岩微量	良好	5% 以下	反転復元 蓋を受ける受口状
130	図 73 写真図版 60	須恵器 器台片	5 トレンチ 斜面 表土	（3.7）×（6.85） × 0.9	外）沈線 3 条+カキ目後に波状文+沈線 2 条、三角形スカシ 内）回転ナデ	外）N5/0 灰色 内・断）N6/0 灰色	やや密：～ 3mm 半透明粒少量、～ 1mm 白色粒少量（おそらく片岩）	良好	5% 以下	実 124・126 は同一個体（関大図 141-1 と同一か）
131	図 73 写真図版 60	須恵器 器台片	前方部東斜面埴輪露出地点（＋ S40 調査出土）	（8.3）×（12.4） × 0.9、胴部径 10.4	外）カキ目後にハケ状工具の刺突文+円形スカシ+沈線 2 条+波状文+長方形スカシ+沈線 1 条+長方形スカシ 内）回転ナデ	外・内・断）N4/0 灰色	やや密：～ 1mm 白色粒少量（おそらく片岩）	良好	5% 以下	反転復元、No.130・131 は同一個体（関大図 141-1 と同一か）
132	図 73 写真図版 60	須恵器 器台脚部	4 トレンチ 墳裾付近 2 層	（8.4）×（3.7） × 0.7、脚部径 26.4	外）回転ナデ、沈線 2 条、波状文あり 内）回転ナデ	外・内・断）N5/0 灰色	やや密：～ 1mm 白色粒含む	良好	5% 以下、底部 10%	反転復元、No.130・131 は同一個体（関大図 141-1 と同一か）
133	図 73 写真図版 60	須恵器 甕	4 トレンチ 東拡張区 埴輪ハ周辺　2 層	（8.5）×（7.1） × 1.2	外）タタキ・一部重ね焼き痕跡 内）同心円文当具痕・ナデ・ユビオサエ	外）N3/0 暗灰色 内）N5/0 灰色 断）5R3/1 暗赤灰色～ N3/0 暗灰色	密：～ 1.5mm 片岩・白色粒少量、7mm 片岩 1 個	良好	5% 以下	体部片 No.134 と類似
134	図 73 写真図版 60	須恵器 甕	4 トレンチ 東拡張区北壁 2 層	（6.8）×（8.1） × 1.3	外）タタキ・一部ナデ 内）同心円文当具痕	外）N4/0 灰色 内）N5/0 灰色 断）5R3/1 暗赤灰色	密：～ 2.5mm 片岩・半透明粒微量	良好 （堅緻）	5% 以下	体部片 No.133 と類似
135	図 73 写真図版 60	須恵器 甕	5 トレンチ 基壇上 埴輪ホとへの間	（8.3）×（8.7） × 1.4	外）タタキ 内）同心円文当具痕・当具痕後ナデ	外・内）N4/0 灰色 断）5R3/1 暗赤灰色～ N4/0 暗灰色	密：～ 2mm 片岩・半透明粒微量	良好 （堅緻）	5% 以下	体部片 No.133・134 と類似
136	図 73 写真図版 60	須恵器 甕	5 トレンチ 埴輪トの内部の埋土中	（7.3）×（6.4） × 0.8	外）タタキ・カキ目（タタキ後）、外面一部鉄分付着 内）同心円文当具痕・ナデ	外）N4/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N5/0 灰色	やや粗：～ 1mm 白色粒多量、～ 1mm 半透明粒・片岩少量	良好	5% 以下	体部片 他の甕と胎土相違
137	図 73 写真図版 60	須恵器 甕	5 トレンチ 須恵器大甕周辺 2 層	（9.5）×（5.8） × 1.3	外）タタキ、自然釉 内）同心円文当具痕	外）N5/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）5R4/1 暗赤灰色	密：～ 3mm 片岩・半透明粒少量	良好	5% 以下	頸部～体部片

第４節　まとめ

（１）墳丘復元

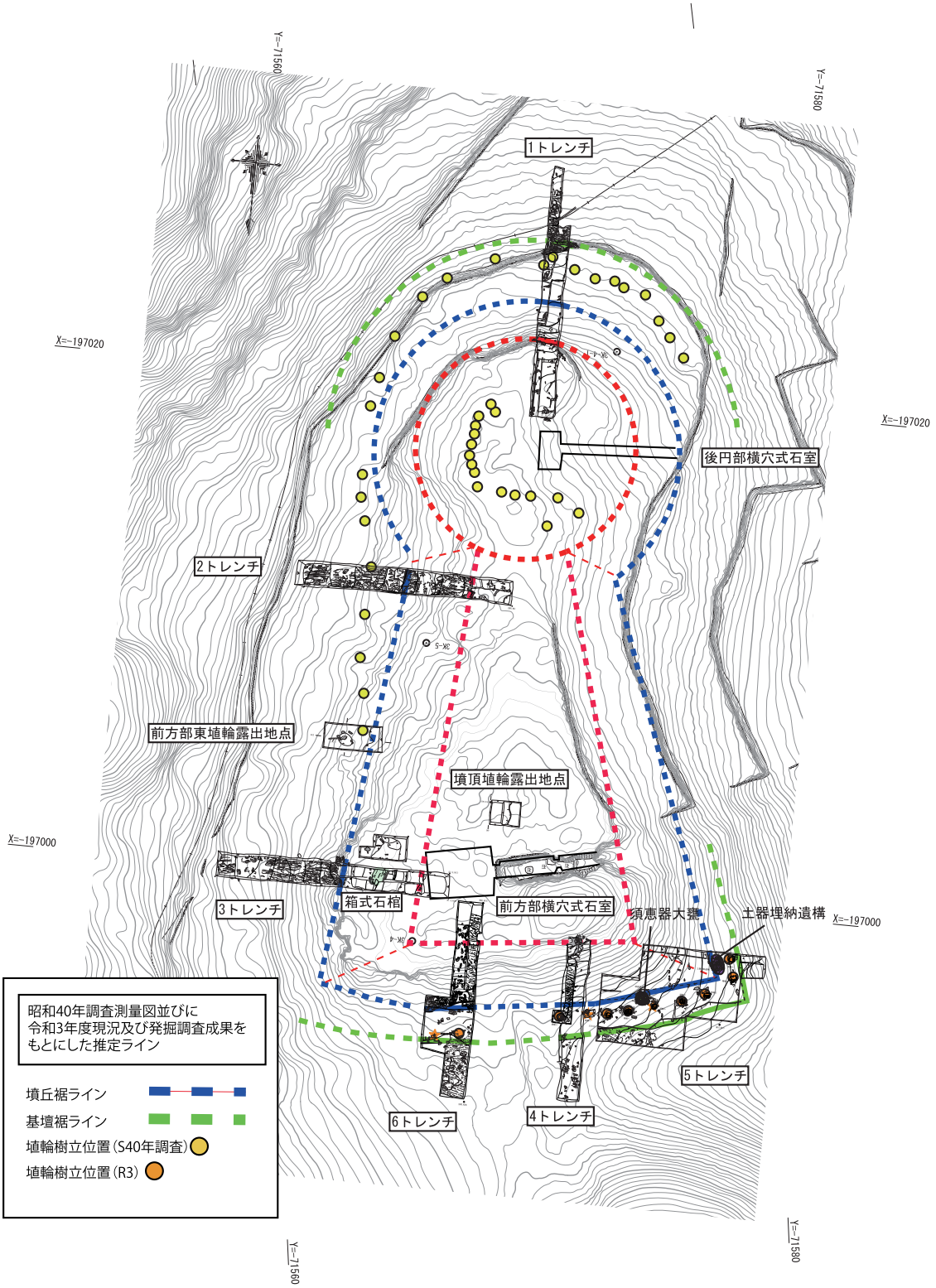


図 74　墳丘復元図（S=1/250）

今回の測量調査及び発掘調査成果と昭和40年の発掘調査成果を合わせて寺内18号墳の墳丘について検討した結果、図74のとおり、寺内18号墳は基壇上に1段築盛の墳丘を構築する全長約31m、墳長約27mの前方後円墳に復元できる。各要素を詳しくみていくと、以下のとおりである。

基壇面は、墳丘の両端部分の後円部南側の1トレンチ及び前方部北側の4～6トレンチで確認された。今回の調査では、くびれ部から前方部にかけての基壇面は確認できなかったが、昭和40年の発掘調査では、後円部から前方部東側にかけて墳丘裾に埴輪列が巡っていたことが確認されていることから、本来はこの付近にも基壇面が形成されていたことがわかる。ただし、造り出しの有無や全体の形状については判然としない。基壇面の長さは、後円部で約1.8m、前方部で約1.4mと旧地形からの制約からか後円部がやや長く、標高も後円部側で標高45.6m、前方部側で標高46～47mを測り、旧地形に沿う形で前方部側が高くなり、後円部側に向けて緩やかに下降する。基壇面上には円筒埴輪と石見型埴輪からなる埴輪列が巡る。また、前方部北側の基壇上には、埴輪列と墳丘裾の間の墳丘裾に接する地点に須恵器大甕が据え置かれ、前方部北西隅付近では、西側の埴輪列と墳丘裾の間に長径約70㎝、短径約50㎝の楕円形の土坑を掘り、内部に須恵器杯（蓋・身）7セット、無蓋高坏2個、須恵器壺1個、土師器壺1個を入れ、埋め戻した土器埋納遺構が確認された。墳丘に土器が埋納された事例としては、6世紀初頭の岩橋千塚古墳群の井辺前山26号墳で、前方後円墳の南側くびれ部において須恵器坏・瓹・壺と土師器壺・把手付鉢・鉢を埋納した土坑2基が確認されており、今回の寺内18号墳の事例で2例目となる。

墳丘は段を持たず1段となる。後円部側では、墳丘の大部分を地山岩盤層（第4層）の削り出しにより形成し、墳頂付近にわずかに墳丘盛土を施す。一方、前方部側では、地山岩盤層は基壇面上から墳丘裾付近までしか認められず、墳丘の大部分は片岩風化礫を多量に含む墳丘盛土により構築される。墳丘全体としては、盛土による構築は全体の1/3程度とみられる。

墳頂部では、昭和40年の発掘調査において後円部墳頂に方形の埴輪列が巡っていたことが確認されている。

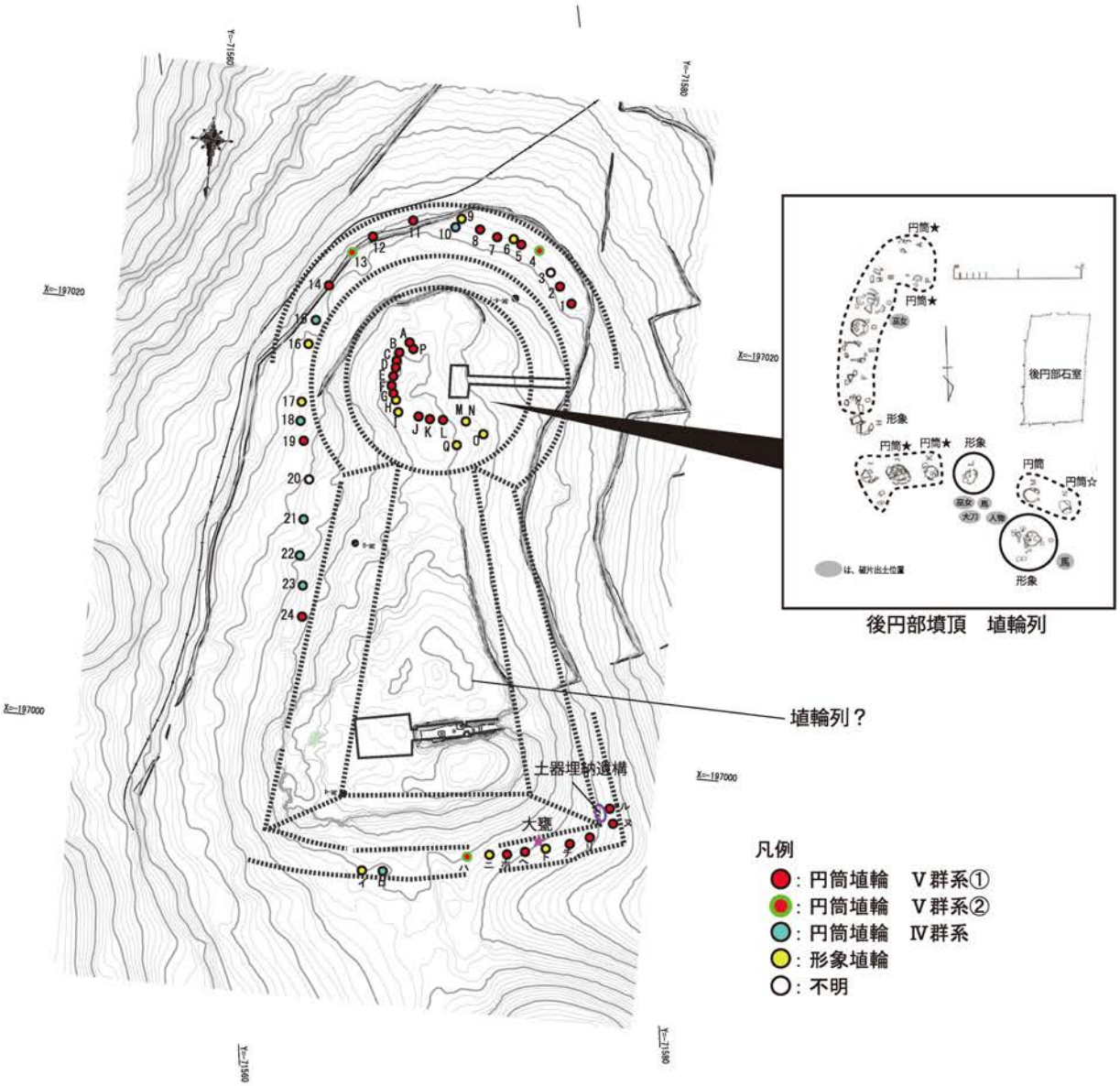
埋葬施設は、昭和40年の発掘調査で後円部及び前方部にいずれも西側に開口する横穴式石室をもつことが確認されているが、今回の調査において新たに前方部東側に箱式石棺が設置されていることを確認した。箱式石棺は、後円部横穴式石室の玄室奥壁より東に約3mの地点に位置し、主軸は前方部東側の墳丘復元ラインとほぼ平行する。箱式石棺は蓋石の法量で長さ約70㎝、幅約50㎝を測る小型の石棺で、その法量から小児用の可能性が考えられる。墓壙の掘方から、箱式石棺は後円部横穴式石室が設置された後に墳丘盛土を掘り込み、その中に石棺底面を地山岩盤直上にあたる高さで水平に据えたとみられる。石棺は、蓋石の周囲に粘土を充填し、密閉されていた。

この他、外表施設として葺石や周溝は確認されなかった。

（2）埴輪列と土器の配置

今回の発掘調査成果と昭和40年の発掘調査成果から、寺内18号墳の基壇上及び墳頂部における埴輪列の器種及び配置は、図75のように想定される。

基壇上の埴輪列は、前方部北側及び後円部西側で、各埴輪が心々距離0.8～1m間隔で、円筒埴輪2基と石見型埴輪1基という単位で規則的に配置されている。一方、後円部東側基壇上では、円筒埴輪と石見型埴輪の配置は不規則となる。ただし、東側基壇上の埴輪列では、埴輪の心々距離が西側基壇上の埴輪列と比較して非常に広い箇所がみられることから、埴輪間の距離が広いNo.11-12間とNo.13-14間 に石見型埴輪各1基、No.16-17間に円筒埴輪2基の配置を想定すれば、



：円筒埴輪　Ⅴ群系①

：円筒埴輪　Ⅳ群系

埴輪ハ

：円筒埴輪　Ⅴ群系②

埴輪二

：形象埴輪

図 75　埴輪樹立位置の復元案

後円部東側基壇上の埴輪列も西側と同様の埴輪配置となる。尚、出土した円筒埴輪は、Ⅴ群系埴輪とⅣ群系埴輪の2系統があり、さらに胎土や法量からⅤ群系埴輪は2種類に分類することできる（瀬谷ほか2024）が、各円筒埴輪の出土位置からは、Ⅳ群系埴輪が前方部東側に多い等の傾向はみられるものの、明確な規則性は見出せない。

後円部墳頂では、昭和40年の発掘調査において方形に配置された埴輪列が確認されている（関西大学1967）。出土埴輪の基部の形状から、A～F・J・K・N・Pが円筒埴輪、G～H・L・M・O・Qは形象埴輪であることが判明した。各形象埴輪の樹立位置は不明であるが、墳丘からは石見型埴輪、盾形埴輪、家形埴輪、靫形埴輪、胡籙形埴輪、大刀形埴輪、双脚輪状文形埴輪、馬形埴輪、人物埴輪等が出土している。

尚、円筒埴輪及び形象埴輪の基部、石見型埴輪形象部片が、天井石を欠失した前方部横穴式石室内から複数出土していることから、前方部墳頂においても埴輪列が囲繞していた可能性が考えられる。

以上、寺内18号墳では基壇上に墳丘を囲繞する円筒埴輪と石見型埴輪の埴輪列及び後円部墳頂の円筒埴輪と形象埴輪が配置された方形埴輪列、並びに前方部墳頂の埴輪列が想定される。

出土埴輪は製作技法や意匠の特徴から6世紀前半の様相を示していることが指摘できるが、6世紀前半の岩橋千塚古墳群では、石見型埴輪は前山A58号墳、大谷山6号墳、大日山1号墳、大日山43号墳のような墳長20～30mの前方後円墳や円墳に樹立されるものの大型前方後円墳である大谷山22号墳や大日山35号墳には用いられず、一方で双脚輪状文形埴輪、靫形埴輪、胡籙形埴輪、大刀形埴輪等が揃って用いられているのは大型前方後円墳である大谷山22号墳、大日山35号墳、井辺八幡山古墳のみであること等、墳丘の形状や規模からみる階層性と樹立される形象埴輪の種類に相関関係をみることができる。寺内18号墳では、6世紀前半の首長墓からは出土しない石見型埴輪を用いた埴輪列で墳丘を囲繞する一方で、最上位層の古墳に樹立される双脚輪状文形埴輪や靫形埴輪、胡籙形埴輪、大刀形埴輪が揃って出土しており、樹立埴輪の器種構成からは当該期の首長墓に次ぐ階層に位置付けられる。

土器は、TK10型式期に位置付けられる須恵器大甕が前方部基壇上に据えられ、同じくTK10型式の坏・高坏・壺・土師器壺が基壇の土坑内に埋納されていた。また、墳丘斜面から須恵器高坏形器台が出土したほか、昭和40年の発掘調査前に前方部から須恵器大甕が出土したと伝えられている。この大甕は、今回出土した前方部基壇上の大甕とは別個体であることから、複数の大甕の存在が想定される。岩橋千塚古墳群の墳長20～30mの前方後円墳における墳丘上の大甕の配置や土器の埋納は、6世紀初頭から前半の大谷山6号墳や前山A58号墳、井辺前山36号墳、大谷山28号墳においては、いずれもくびれ部に配置されていることが確認されているが、今回の調査において、前方部における土器を用いた儀礼の存在が明らかとなった。

また、前方部横穴式石室の前室からは土師器の甕・椀・提瓶と、6世紀中頃の特徴をもつ馬具（轡）が出土している。石室の前室部に土師器の甕を配置する点は、岩橋千塚古墳群で6世紀中頃以降においてよくみられる儀礼であり（仲辻2018）、寺内18号墳においても当該期に同様の儀礼が行われていたとみられる。

（3）埋葬施設

今回の調査において、寺内18号墳は、後円部にT字形の岩橋型横穴式石室1基、前方部に岩橋型横穴式石室1基と箱式石棺1基、合わせて3基の埋葬施設を持つことが確認された。

前方部横穴式石室は、東西主軸で西側に開口し、玄室幅1.95m、長さ2.63mの両袖式で、玄室

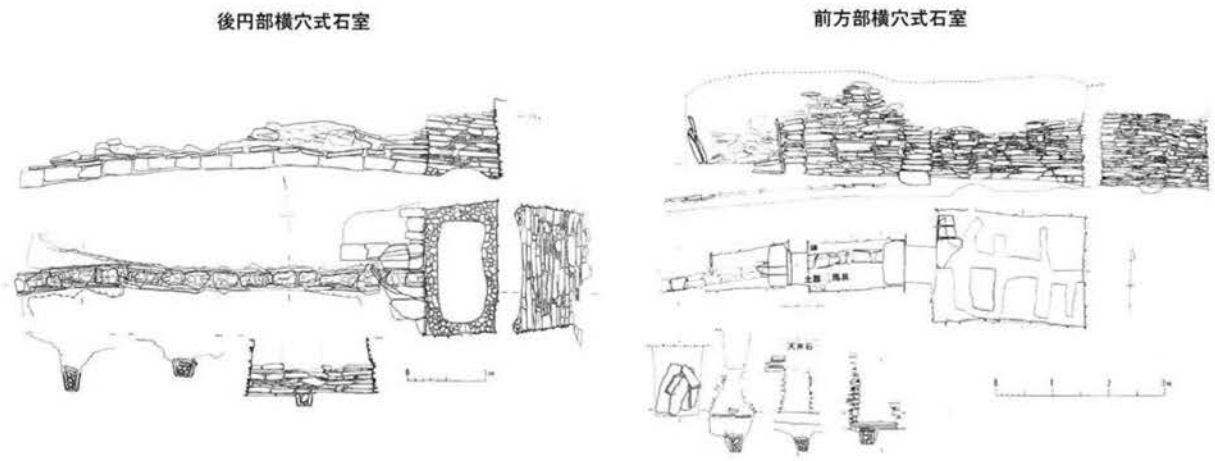


図 76　寺内 18 号墳の後円部及び前方部の横穴式石室（関西大学 1967 より転載）

前道とその前面に幅 0.83m、長さ 1.66m の前室をもち、前室前道とさらに幅 0.67m、長さ 1.4m の羨道からなる岩橋型横穴式石室である。玄室の平面形態は両袖式で、玄室前道は前壁の中央に位置する。袖部は平積の一段一石積みで、玄室前道基石は玄室前道の幅を越えるが玄室の前壁の幅より狭い。岩橋型横穴式石室の変遷では 6 世紀中葉の構築が想定される大谷山 4 号墳と類似する、袖部 c 類･基石 c 類（萩野谷 2019）に分類される。出土遺物は、鉄鎌、環状鏡板付き轡、大刀、刀子、鉄鏃、両頭金具及び、碧玉製勾玉、ガラス製小玉が出土し、特徴から 6 世紀中頃と想定されている（瀬谷ほか 2024）。

後円部横穴式石室は、東西主軸で、西側に開口し、玄室は幅約 1.65m、長さ 0.91m のいわゆる T 字形の岩橋型横穴式石室で、西側に長い排水溝を持つ。玄室の平面形態は両袖式で、玄室前道は前壁中央よりやや左寄の位置に想定される。袖部は石積みが残る範囲では小口積（袖部 a 類）、玄室前道基石は残存していないが基石の幅は玄室前道の幅とほぼ等しい（基石 b 類）と想定される（図 76）。袖部や基石においては古相を示すが、MT15 型式期の花山 33 号墳や前山 A58 号墳､大日山 43 号墳と比較して玄室前道が中央に寄ることから､これより後出するものとみられる。また、墳丘における構築位置から、前方部横穴式石室に先行あるいは同時期に構築されたと考えられ、構築時期は 6 世紀前半から中頃と推定される。

前方部東側に配置された箱式石棺は、墳丘盛土と墓壙の関係から、前方部横穴式石室構築後に設置されたことがわかる。岩橋千塚古墳群では、6 世紀初頭以降の古墳において、箱式石棺は単独の埋葬施設としては採用されず横穴式石室の周辺に付設されることや、いずれも小型であることが指摘され（瀬谷 2017）、寺内 18 号墳においても同様の様相を見出すことができる。

岩橋千塚古墳群では、一墳丘に複数の埋葬施設をもつ古墳が複数確認されている。このうち横穴式石室と箱式石棺が組み合わさる事例は、6 世紀初頭の墳長 25m の前方後円墳である大谷山 6 号墳（横穴式石室＋竪穴式石室＋箱式石棺）や 6 世紀前半の墳長 27m の前方後円墳である大谷山 28 号墳（横穴式石室＋箱式石棺）、7 世紀前半の直径 12m の円墳である寺内 35 号墳（横穴式石室＋箱式石棺）にみられるが、6 世紀初頭以降で箱式石棺を伴う首長墓での複数埋葬は現在のところ確認されていない。寺内 18 号墳の横穴式石室は、6 世紀前半から中頃に築造されたとみられるが、大谷山 6 号墳や大谷山 28 号墳の事例と合わせて、6 世紀初頭から前半に築造された墳長 30m 前後の前方後円墳における埋葬のあり方として、注目される。

（4）築造時期と階層性

寺内18号墳から出土した埴輪は製作技法や形態的特徴から6世紀前半に位置付けられ、前方部基壇上の須恵器大甕や土器埋納遺構出土土器はTK10型式期に該当する。これらと後円部横穴式石室で想定される時期に齟齬がないことから、寺内18号墳は6世紀前半に築造された全長31m、墳長27mの前方後円墳と推定される。前方部の横穴式石室は、石室の型式や出土遺物、前室に土師器甕を配置することから、6世紀中頃に構築されたとみられ、さらに6世紀中頃以降に前方部に小型の箱式石棺が設置された。

岩橋千塚古墳群では、6世紀前半に、首長墓である大谷山22号墳や大日山35号墳で墳長60m以上の大型前方後円墳が築造される。MT15型式期では墳長20～30mの前方後円墳が、TK10型式期では墳長52mの前方後円墳である井辺前山6号墳と、墳長20～30mの前方後円墳がそれに次ぐ規模となり、さらにその他多数の小型円墳が築造される。墳丘形態や規模から、寺内18号墳は、6世紀前半の墳長20～30mの小型前方後円墳の一群に位置付けられる。

寺内18号墳から出土した円筒埴輪及び形象埴輪は、首長墓には樹立されない3条4段の円筒埴輪と石見型埴輪を多用する一方で、豊富な形象埴輪を持ち、なかでも双脚輪状文形埴輪や靫形埴輪等の最上位層でのみ確認されている器種が用いられ、大日山35号墳出土埴輪との意匠や施文工具の共通性が認められる。この埴輪にみえる様相と墳丘規模との関係を考慮すると、寺内18号墳は首長墓に次ぐ階層に位置付けられる。

なお、寺内18号墳で確認した円筒埴輪と石見型埴輪からなる埴輪列、墳丘の土器埋納遺構、一つの墳丘に横穴式石室と箱式石棺が埋葬施設に用いられる複数埋葬事例は、同時期の小型前方後円墳で類例を見出すことができた。このことから、岩橋千塚古墳群において6世紀前半には首長を頂点とする明確な階層構造が成立し、墳丘規模や埋葬施設、埴輪の樹立や儀礼における土器の使用においても階層性に基づく一定の規範が存在していたことがうかがえる。また、首長墓に次ぐ階層に位置付けられる小型前方後円墳が、大谷山地区、大日山地区、前山A地区、寺内地区、井辺前山地区に展開していることも、当該期の岩橋千塚古墳群における古墳群の展開や範囲を考えるうえで重要な示唆を与えてくれる。

【参考文献】

河内一浩 1988「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求道能道』巽先生古稀記念論集刊行会
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
関西大学考古学研究室 1967『岩橋千塚』
瀬谷今日子 2017「第3節　岩橋千塚古墳群における箱式石棺」『岩橋千塚古墳群－大谷山4・5・6・39号墳　発掘調査報告書－』和歌山県教育委員会
瀬谷今日子・仲原知之・冨永里菜・仲辻慧大・木村日向子 2024「寺内18号墳　昭和40年発掘調査出土品の検討」『和歌山市立博物館研究紀要』38号　和歌山市立博物館
仲辻慧大 2018「紀伊地域の古墳における土器使用儀礼について」『待兼山考古学論集Ⅲ－大阪大学考古学研究室30周年記念論集－』大阪大学考古学研究室
萩野谷正宏 2019「岩橋千塚古墳群における横穴式石室の展開」『古代学研究』219　古代学研究会
廣瀬　覚 2021『6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究』奈良文化財研究所
和田一之輔 2006「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』53－3　考古学研究会
和歌山県教育委員会 2013『大日山35号墳発掘調査報告書－特別史跡岩橋千塚古墳群　発掘調査・保存整備報告書2－』

第６章　前山Ｂ地区の調査成果

第１節　調査の目的と方法

（１）調査の目的

和歌山県は平成 29 年４月に和歌山県長期総合計画を策定し、その中で和歌山県立紀伊風土記の丘（以下、「紀伊風土記の丘」とする。）資料館を考古博物館に再編整備する事を記載した。これを受け紀伊風土記の丘では、平成 31 年３月に『和歌山県立考古民俗博物館基本構想』（以下、「基本構想」とする。）を、令和４年３月には『和歌山県立考古民俗博物館基本計画』（以下、「基本計画」とする。）を策定し、紀伊風土記の丘再編整備として現資料館と考古民俗博物館（仮称）として整備することとした。

これらの『基本構想』及び『基本計画』では、紀伊風土記の丘の資料館西側等に博物館（新築）及び収蔵棟の建設、さらに周辺には駐車場や屋外体験広場の配置が想定されているが、事業予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である「岩橋千塚古墳群前山Ｂ地区」及び「岩橋Ⅱ遺跡」に該当し、さらに特別史跡岩橋千塚古墳群に隣接している。このため、『基本計画』では「施設の整備にあたっては埋蔵文化財の保護に十分に配慮した設計を行い、早期に試掘確認調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認する。」としている。そこで、埋蔵文化財の遺存状況を把握し、建設計画において保護を図る目的で和歌山県立考古民俗博物館建設に伴う試掘確認調査（以下、「試掘確認調査」とする。）として実施した。

試掘確認調査では第４次調査において、４基の古墳を発見し、その後、周知の埋蔵文化財包蔵地として和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図に掲載した。これらの古墳については特別史跡指定地に隣接し、同一支群としてとらえることが可能であることから、その重要性に鑑み建設計画を見直し、現状保存を行うこととした。このため、本報告書では、前山Ｂ地区の４基の古墳の特別史跡への追加指定を考慮し、第４次調査の一部を報告する（図 79）。

なお、以上の調査成果のうち、第２次、第３次、第５次、第４次調査の一部は、令和４年度に出土遺物等整理を行い、『和歌山県埋蔵文化財調査年報－令和３年度－』（和歌山県教育委員会 2023）を正式報告としている。

（２）調査の経過

調査は「和歌山県立考古民俗博物館建設に伴う第１次試掘確認調査」（以下、「第１次調査」とする。）として、令和２年１月から４月までの間で県有地を中心に紀伊風土記の丘学芸課で実施した。その後、建設予定地の用地買収が完了したことから、調査可能な範囲について令和３年７月から令和４年４月にかけて「和歌山県立考古民俗博物館建設に伴う第２次～第５次試掘確認調査」（以下、それぞれ「第２次～第５次調査」とする。）として実施した。

第４次調査途中において古墳４基を発見したため、特別史跡岩橋千塚古墳群整備検討会議及び有識者の指導を得ながら保存方法を検討しつつ試掘確認調査を実施した。このため、試掘確認調査のうち令和４年３月 31 日までの掘削作業及び記録作成作業、応急整理作業については、県内遺跡発掘調査等事業として国庫補助事業で実施し、令和４年４月１日から４月 15 日までに実施した前山 B370 号墳の追加調査及び補測作業、埋戻しについては、県単費で実施した。

令和４年度には、前山 B370 号墳の玄室床面埋土の土壌水洗を実施し、第１次～第５次調査の

出土遺物等整理を併せて実施した。さらに玄室出土遺物のうち金属製品については保存処理が必要となったことから、令和５年度には県内遺跡発掘調査等事業として国庫補助事業にて保存処理とともに第４次調査出土遺物の整理業務を進めた。出土遺物整理については公益財団法人和歌山県文化財センターに岩橋千塚古墳群出土遺物等整理支援業務として令和５年４月から令和６年３月まで、保存処理については岩橋千塚古墳群金属製品保存処理委託業務として株式会社イビソクに令和５年６月から令和６年３月まで委託業務として実施した。

なお、第４次調査で発見した４基の古墳は、令和６年３月 22 日付け文第 1099 号で周知の埋蔵文化財包蔵地の岩橋千塚古墳群前山Ｂ地区の前山 B368 ～ 371 号墳とされた。

（３）既往の調査（図 77・78、写真 10・11）

建設予定地のうち、今回報告する岩橋千塚古墳群前山Ｂ地区の第４次調査に関連する既往の調査は、次のとおりである。

写真 10 みねせんげ出土黥面人物埴輪（大野 1981 より）

写真 11　KE4 号墳（前山 B225 号墳）発掘状況

第４次調査地の南には排水路を境に特別史跡指定地が隣接し、現在の万葉植物園の北付近に 10 基の古墳（前山 B338 号墳～前山 B347 号墳）が存在する。古墳の存在する範囲は、かつて「みねせんげ」と呼ばれる共同墓地が存在しており、古墳の上には板碑や五輪塔の破片が確認できる。過去の紀伊風土記の丘の万葉植物園整備に伴う墓地整理に際しては、黥面人物埴輪や家形埴輪が採集されている（大野 1981）。これらの古墳の北側にある第４次調査地には尾根筋の平坦面が存在することもあり、古墳の存在が予測された。

また、万葉植物園の東の丘陵尾根筋である花木園東部地区にも４基の円墳（前山 B221 号墳～前山 B225 号墳）が確認されている。これらについては、昭和 51 年に環境整備に伴う工事立会が行われており、KE1 号墳（前山 B221 号墳）から KE4 号墳（前山 B225 号墳）の名称が与えられている（紀伊風土記の丘管理事務所 1976）。このうち KE4 号墳（前山 B225 号墳）は上部が削平されていたが、横穴式石室の玄室奥壁、羨道側壁、排水溝と石室掘形が確認されている。横穴式石室の規模は長さ約 2.1m、幅 1.8 ～ 1.9m を測る。TK209 型式期の台

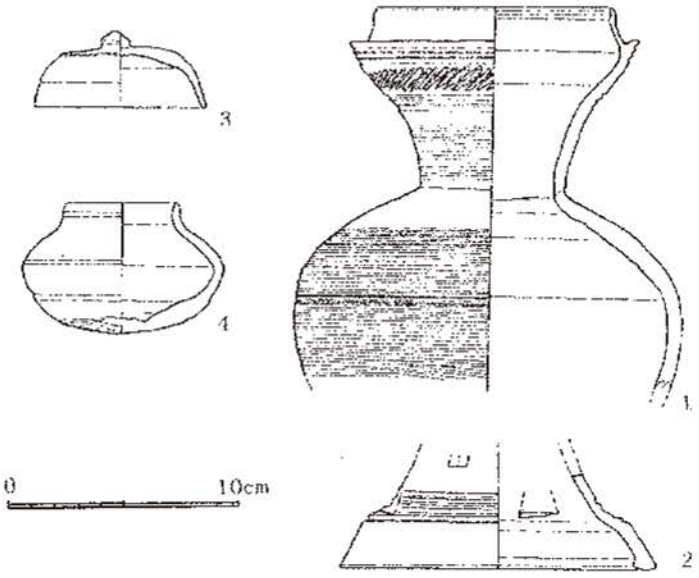


図 77　前山Ｂ地区出土須恵器（奥村 1996 より、S=1/3）

付壺が出土した。

さらに、花木園東部地区の尾根筋の延長上である第4次調査地の4-15トレンチ（前山B368号墳）付近では、昭和57年に柑橘畑で苗木移植中に須恵器有蓋台付壷・蓋・短頸壺が出土しており、周辺に古墳の存在が想定されている（奥村1996）。花木園東部地区は尾根筋に沿って古墳が存在することから、当該地についても古墳が発見される可能性が高いと判断した。

一方、第4次調査地の北東付近では、和歌山市教育委員会によって平成26年に宅地造成に伴う事前確認調査が実施され、円墳2基を確認している（和歌山市教育委員会2016）。前山B366号墳は、直径約18mに復元できる円墳であり、横穴式石室と考えられる石室掘形のみを検出し、石積みなどは認められなかった。また、前山B367号墳では、玄室幅と羨道幅がほぼ同じ規模の横穴式石室を確認した。石室の周囲には、長さ約2.5m、約幅2.0mの石室掘形を検出している。基底部付近の石積みのみが残存するが、玄門部分には框石とみられる方柱状の長さ約1mの石材を配する。床面には、板石を敷き詰めている。奥壁北東隅からは須恵器短頸壺と蓋が出土しており、これらはTK209型式期の所産と考えられる。

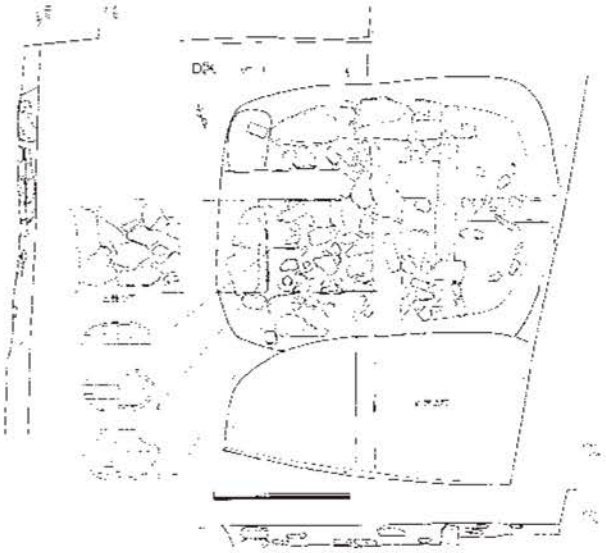


図78　前山B367号墳横穴式石室実測図
（和歌山市教育委員会2016より、S=1/60）

（4）調査の方法（図79、写真12）

第4次調査は、岩橋千塚古墳群前山B地区のうち建設予定地の中央に位置する万葉植物園北の尾根筋及び西側に存在する花木園東部地区の尾根筋とその谷部を対象とした。万葉植物園北の尾根筋部分については、墳丘が削平された埋没古墳を確認するため、尾根に存在する平坦面を中心に伐採を行い、トレンチを計15箇所を設定した。掘削は機械掘削により表土、攪乱土及び遺物包含層を掘削し、古墳の存在が明らかになったトレンチについては人力により掘下げを行い、墳丘及び遺構等の掘削は人力にて行った。

第4次調査では、途中、4基の古墳を検出したことから、特別史跡岩橋千塚古墳群整備検討会議や有識者の指導及び助言を得つつ、墳丘及び横穴式石室の規模を確認することを目的として調査を進めた。このうち、墳丘のみを確認した前山B371号墳は攪乱部分を断ち割り、盛土を確認した。また、4-3トレンチで検出した前山B369号墳及び4-15トレンチで検出した前山B368号墳はそれぞれ埋葬施設を確認し、近現代の堆積土が流入していたことから床面上面まで発掘調査を実施した。また、前山B370号墳は、当初、玄室及び玄室前道のみを確認したが、横穴式石室の開口方向

写真12　前山B369号墳（4-3トレンチ）埋戻し状況

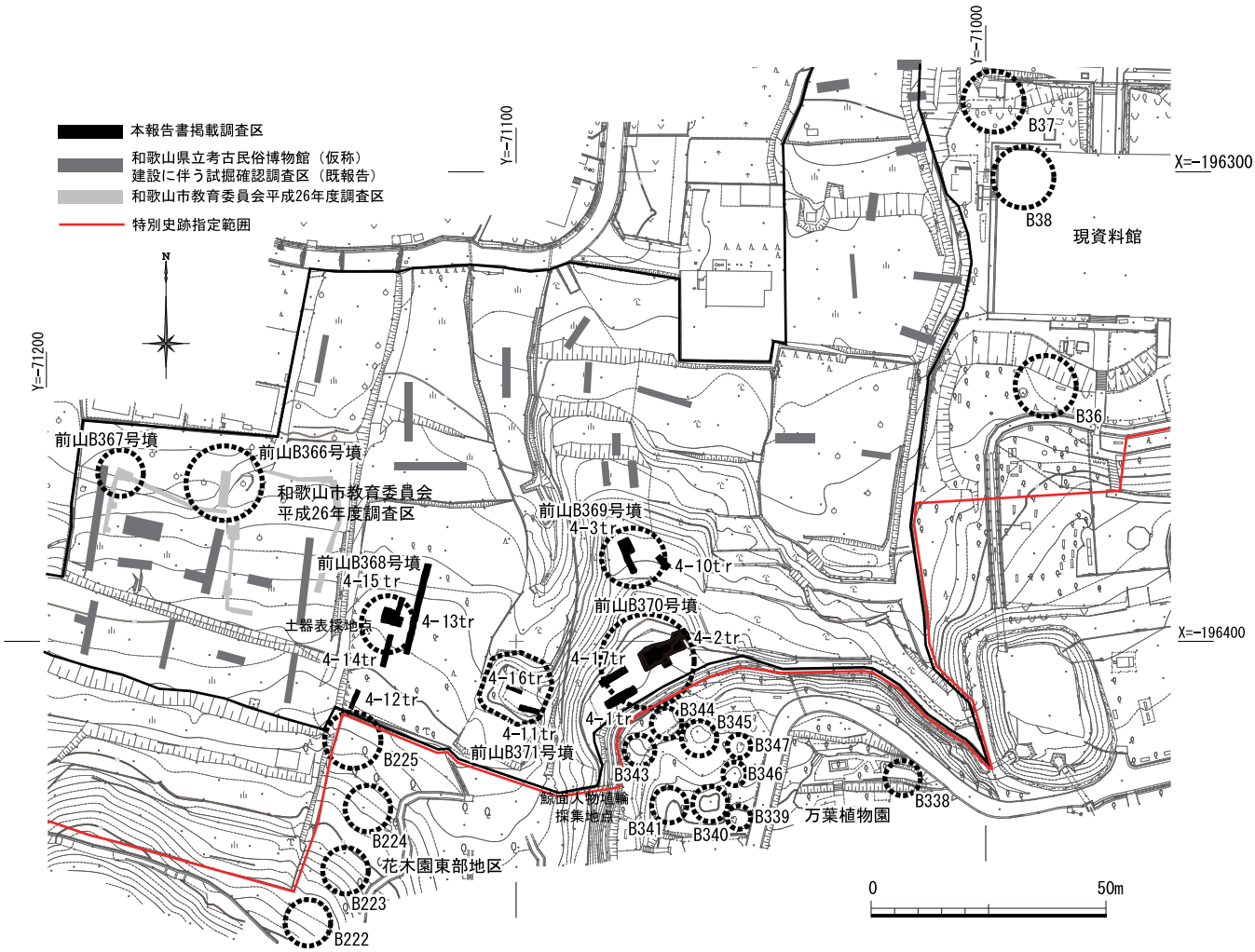


図 79　和歌山県立考古民俗博物館（仮称）建設に伴う試掘確認調査トレンチ配置図（S=1/1,500）

や規模を明確にするため、適宜拡張を行った。玄室床面は遺存状況が良好であり、副葬品は原位置をとどめている可能性が高いことから、検出時に掘削した玄室床面東半の調査にとどめ、玄室床面西半は石室埋土上層までの掘削とした。また、玄室床面東半の埋土は、石室埋土下層を中心に地区ごとに土嚢袋で取り上げ、1㎜メッシュの篩によって土壌水洗を行い、微細遺物の採取に努めた（図 82）。なお、玄室石積みについては奥壁についても遺存範囲まで掘下げ、玄室規模を確認した。

横穴式石室を確認した古墳については、土嚢及び養生シートにより石積みや床面を保護しつつ埋戻しを行った（写真 12）。また埋戻しに際しては石積みや床面の上部 0.2m を目安として、埋戻し土に不織布及びブルーシートを埋め込み、再発掘時の目安とした。

記録作成については、手実測による平面図、断面図、立面図の作成および写真撮影を実施した。図面作製は縮尺 20 分の 1 の実測図を作成し、必要に応じて 10 分の 1 の実測図を作成した。なお、遺存状況が比較的良好な前山 B369 号墳及び前山 B370 号墳については、石積み状況の把握やより詳細な記録を作成するため Sfm/MVS の技術を用いて三次元計測を行い、3D モデル及びオルソ画像を作成した。

第２節　調査成果

（１）基本層序

今回の調査対象地における基本層序は次の６つの層に大別し、枝番により細分した。なお、石室埋土などの遺構埋土については別途把握している。

第１層：暗灰黄色、灰黄色を呈する細砂層で現代の柑橘畑の耕作土である。

第２層：灰黄色、にぶい黄色、浅黄を呈する細砂～細砂層であり、近現代の耕作土である。

第３層：にぶい黄橙色を呈するシルト～細砂層で、農地の段造成に伴う盛土である。

第４層：灰黄色～にぶい黄色のシルト～細砂層であり、シルトブロック及び風化した変成岩を多く含む。

第５層：明黄褐色～明褐色の岩盤層及びシルト層である。調査地点によっては岩盤層とシルト層の分布が異なり、第４層との明確な区別はできていない。調査対象地における基盤層である。

（２）前山 B370 号墳（4-2、4-17 トレンチ）（図 80 ～ 86、写真 13 ～ 18）

検出状況　前山 B370 号墳は、万葉植物園の北、丘陵尾根が張り出した東西約 25m、南北約 20m の平坦面上に位置する。近現代以降に柑橘畑となっており、現在は南側は紀伊風土記の丘の排水路が存在し、特別史跡指定地を区画する。4-1 トレンチでは、表土及び耕作土の直下で岩盤層である第５層を確認しているが、墳丘等は確認できなかった。4-2 トレンチでは第５層上面で横穴式石室の掘形及び壁体を検出した。古墳であることが判明したことから前山 B370 号墳と呼称し、適宜調査区を拡張しつつ調査を進め、横穴式石室及び東端の墳丘裾を確認した。

写真 13　前山 B370 号墳（4-2 トレンチ）横穴式石室検出状況（東から）

石室埋土は、大きく２層に区分できる（図 82）。上層は、削平等により古墳が破壊された際に流入したと考えられる近現代の明黄褐色～にぶい黄褐色シルトの流入土であり、玄室床面の上部約 0.15m まで堆積する。さらに、下層には灰黄色シルトの埋土が堆積し、円筒埴輪（1・2）とともに中世の土師皿（4）が出土した。このため、玄室は近現代、中世以前の大きく二時期の埋没を経ていると考えられる。

さらに、追加調査として 4-17 トレンチを 4-2 トレンチの西に設定し、墳丘規模を確認した。4-17 トレンチでは第５層上面まで削平を受け、近現代の客土が堆積するが、直下では墳丘盛土が遺存する。ここでは周辺埋葬施設を検出し、さらに西端の墳丘裾を確認した。

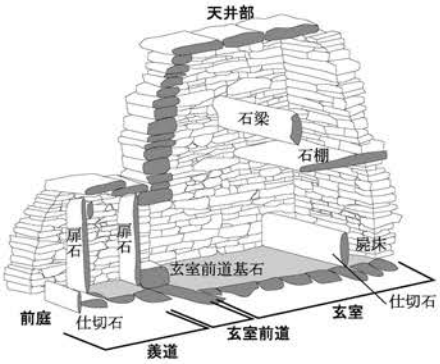


図 80　岩橋型横穴式石室模式図

横穴式石室は長さ約 10.6m、幅 3.6 ～ 3.75m の範囲で検出した。石室は東方向に開口し、玄室及び玄室前道、羨道、羨道前庭、墓道、墓道前庭、

図81　前山B370号墳（4-2トレンチ）平面図及び立面図　（S=1/40）

墳丘を確認した。石室の天井石及び玄室の側壁上部は開墾により欠失するが、玄室床面と前壁、奥壁、側壁、羨道の基底部分と一部の壁体の石積みが残存する。玄室は両側に袖部をもつ両袖式の岩橋型横穴式石室である。石室の長さは、主軸長で 10.8m、主軸の方位は N-57° -E となる。石材は玄室床面に敷かれた川原石を除いて、すべて結晶片岩である。

横穴式石室　玄室は主軸長約 2.6m、主軸幅約 1.95m を測り、玄室主軸長から中規模の横穴式石室に区分できる。袖部は左袖部幅 0.65m、右袖部幅 0.5m 以上であり、両袖となる。奥壁は幅 2.0m、最大残存高 0.21m、左側壁は幅 2.55m、最大残存高 0.65m、右側壁は幅 2.6m、最大残存高 0.42m を測る。石室は、羨道、玄室の形に沿って岩盤を掘り込み石室掘形とする。石室掘形は主軸長 6.4m、主軸幅約 3.6m、深さ約 0.8m であり、石室掘形に沿って壁体を積み上げている。墳丘は岩盤削り出しにより基底部を形成し、上部及び墳丘外周部に盛土を行う。

玄室前壁　玄室前壁は、左袖部は遺存状況が良好であり、残存高 0.7m を確認できるが、右袖部は袖部の基底石まで抜き取られている。左袖部の石積みは、玄室前道基石とその左右に長さ 0.65m、幅 0.25m の石材を 2 石程度、長側面を壁体として利用し、平積みすることで基底石とし、その上部に袖石を積み上げる。おおよそ一段一石積みとなる。袖石は長さ 0.6 ～ 1.1m、幅 0.2 ～ 0.4m、厚さ 0.15 ～ 0.2m の横長の石材を平積みにし、一段一石となるように積み上げる。前壁と両側壁との重複関係では、前壁が両側壁に先行して積まれている。

玄室側壁　玄室側壁は、左側壁は前壁及び奥壁付近に 4 石以上の石積みが確認できる。一方、右側壁は前壁付近に 5 石以上の石積みが確認出来るが、奥壁側の石積みは遺存状態が悪い。側壁の石積みを観察すると、幅 0.15 ～ 0.2m、長さ 0.55 ～ 0.7m、厚さ 0.1 ～

写真 14　前山 B370 号墳玄室床面検出状況（北から）

写真 15　玄室床面雲珠（67）出土状況（西から）

写真 16　玄室床面鉄刀（35）出土状況（東から）

写真 17　玄室床面耳環（71･72）出土状況（北から）

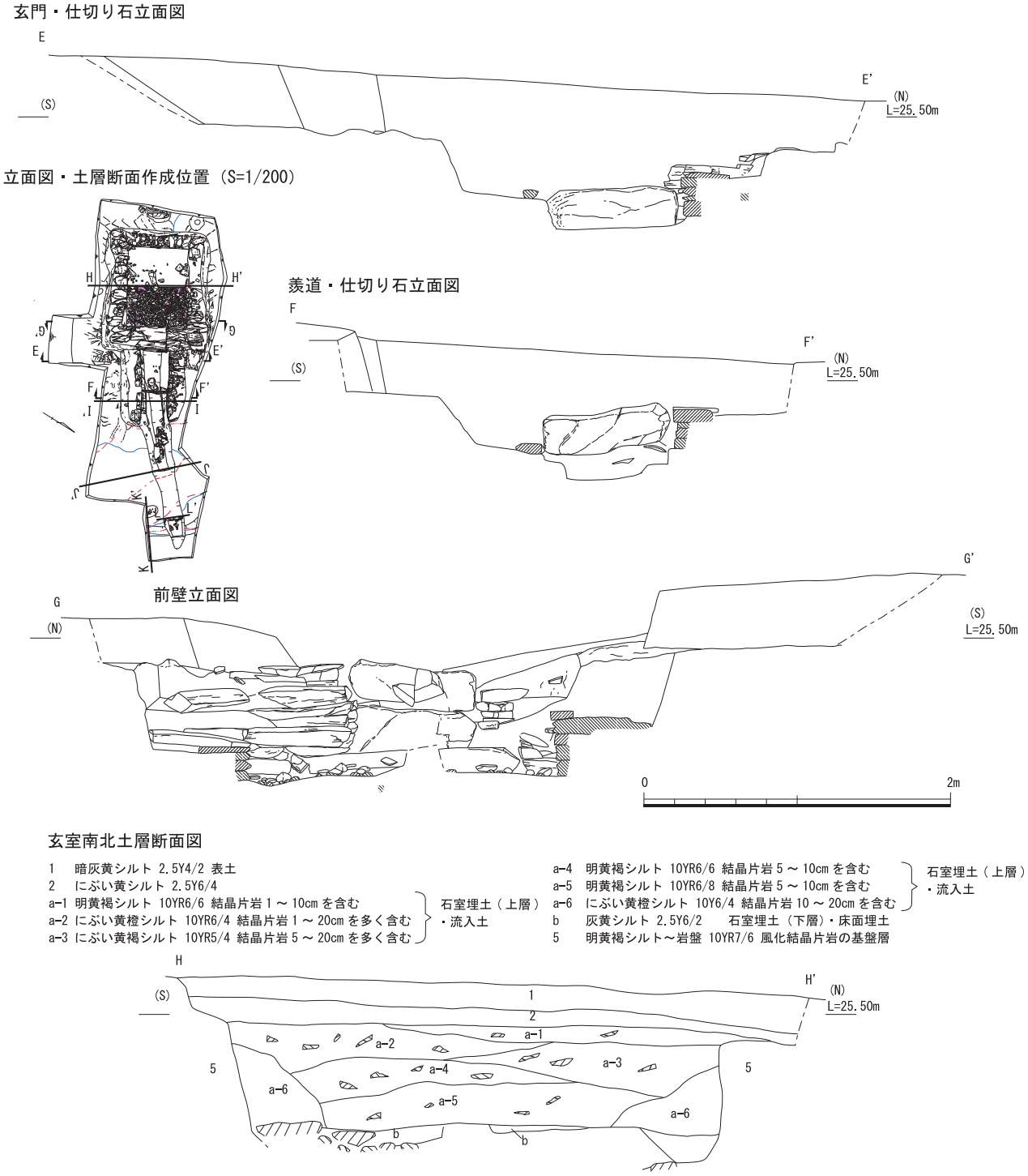


図 82　前山 B370 号墳（4-2 トレンチ）立面図及び断面図（S=1/40）

0.2m の結晶片岩の板石の小口面を壁体に用いる小口積みで積み上げる。袖部に近いところでは長さ 0.65m、幅 0.15m の石材を平積みで積み上げ、面を揃える。さらに長さ 0.1m、幅 0.1m の小型の石材を充填する箇所も存在する。側壁の奥行きは 0.3 ～ 0.6m となり、1 石または多くとも 2 石程度を用い、控え積みは確認できない。

玄室奥壁　玄室奥壁は、幅 0.15 ～ 0.24m、長さ 0.3 ～ 0.4m、厚さ 0.1 ～ 0.2m の結晶片岩の板石を用い小口積みで積み上げる。奥壁と両側壁との重複関係では、最下段では奥壁が両側壁に先行して積まれるが、右側壁では 2 段目以上は隅部の取り合いが側壁が先行する部位も確認できる。

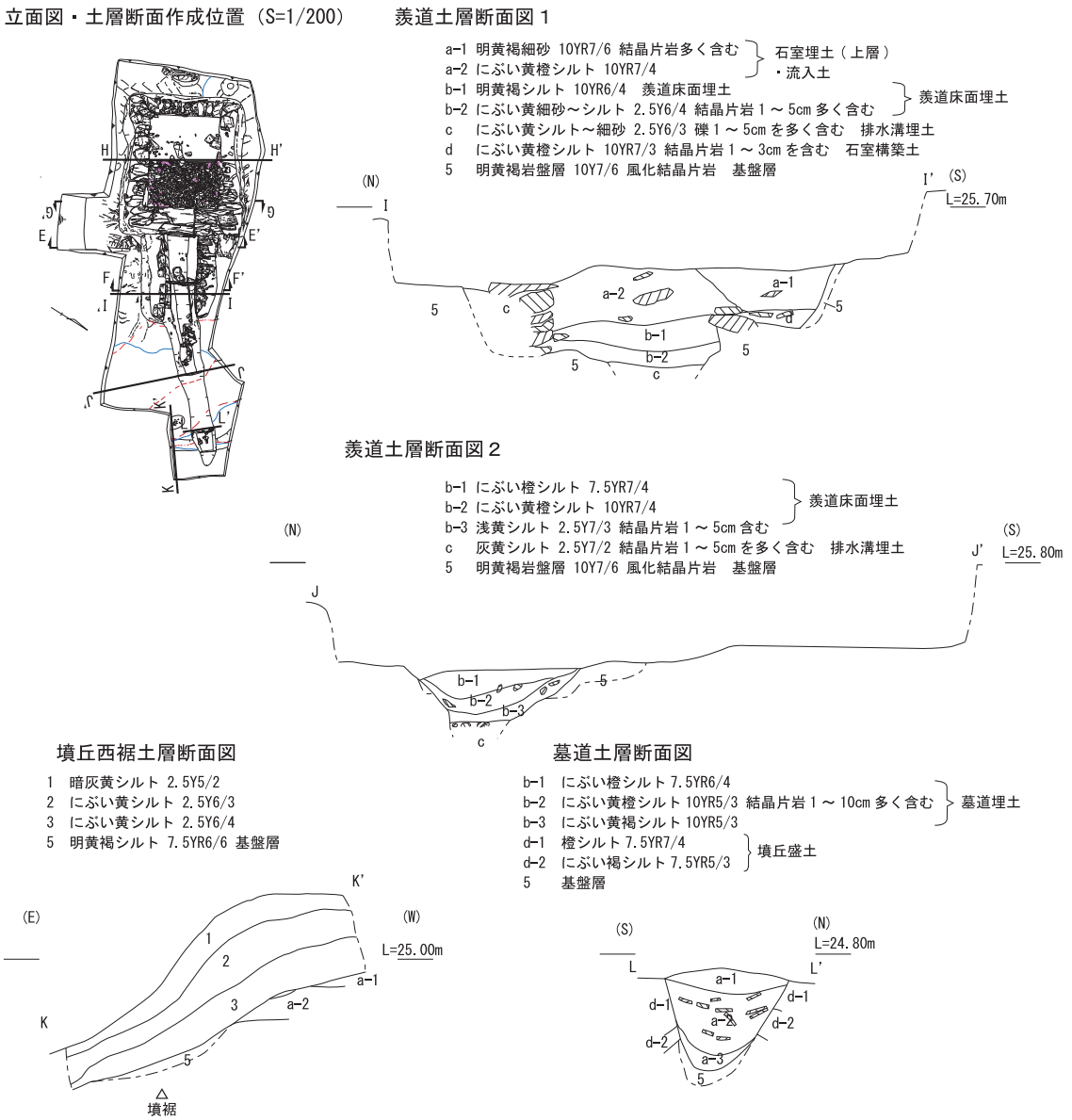


図 83　前山 B370 号墳（4-2 トレンチ）断面図（S=1/40）

玄室床面　玄室床面の標高は、約 24.6m である。床面には直径 0.1 ～ 0.15m の川原石の円礫を敷き詰め、確認できる範囲の厚さは 0.2m である。複数の床面が存在する可能性があるが、試掘確認調査では最終床面のみの検出とした。また、調査の進捗により玄室床面の遺存状況が良好であることが判明したことから玄室床面の保存を目的とし、玄室の奥壁側西半分については床面直上までの掘削は行わずに未調査範囲とした。

玄室床面上の遺存状態は良好であり、原位置を保つ副葬品も存在する。玄室床面からは武器（鉄刀・刀装具・鉄鏃）（35 ～ 45）、工具（鹿角装刀子・鉄鉋・鉄鑿）（47 ～ 50）、その他鉄製品（51 ～ 54）、馬具（縁金具・覆輪・鞍金具・雲珠・辻金具・花形飾）（51 ～ 55・57 ～ 70）、装身具（耳環・空玉・滑石臼玉）（71 ～ 76）が出土した。

玄室床面の遺物取り上げは、石室主軸から南北それぞれ１区･2 区に区分し、前壁から西へ 0.8m ごとに A 区･B 区、そして拡張区に区分した。玄室南東の玄室前壁付近の 2-A 区では、馬具（61･62・64・67 ～ 69）が集中して出土している。さらに玄室中央南に近いの 2-B 区では工具である

鹿角装刀子（47）が出土する。周辺では人骨と思われる骨片が出土したが、遺存状態が悪く細片となり取り上げられていない。玄室中央北の 1-B 区では、装身具の耳環 2 点（71・72）が近接する位置から出土しており、その他の耳環も 1 区からの出土となる。また、玄室中央北の 1-B 区からは、武器が出土する。特に鉄刀（35）、刀装具（36・37）については、玄室北中央の側壁付近から出土し、(35) は切先を奥壁側へ向ける。主軸に沿って鉄刀（35）と刀装具（36･37）が幅 0.2m の間隔で置かれている。以上の遺物については、当時の副葬状況をとどめているものと思われる（図 82）。

玄室前道　玄室前道は、主軸長 0.85m、幅 0.7m で玄室前壁のほぼ中央に位置する。玄室前道の高さは標高約 24.75m であり、玄室床面からは約 0.15m 高くなる。玄室前道基石は長さ 1.5m、幅 0.48m、厚さ 0.2 ～ 0.25m の大ぶりな板石と長さ 1.08m、幅 0.25m、厚さ 0.12m の板石を用い、前後に 2 枚、長辺を主軸に直交させるように並列させる。玄室前道基石の長さは玄室前道の幅を超えるため、基石上に袖石が積み上げられる。

玄門　玄門付近には、長さ 0.9m、幅 0.1m、高さ 0.26m の結晶片岩板石の片理を水平方向に用いた玄門仕切石を設ける。玄門仕切石は右袖部に接し、床面に埋め込む。また、原位置をとどめていないが、検出時には長さ 0.25m、幅 0.08m、高さ 0.7m の板石が左側壁付近で確認されることから、玄門には化粧石が施されていたとみられる。

羨道　羨道は、主軸長約 2.3m、幅 0.8 ～ 0.9m である。羨道の西側の高さは標高 24.9 ～ 25.0m であり、玄室床面からは 0.3 ～ 0.4m 高い。玄門から西へ 1.4m 付近には羨道仕切石を設け、羨道前庭と羨道を区画する。羨道仕切石は長さ 0.8m、幅 0.1m、厚さ 0.24m の結晶片岩の板石である。玄門仕切石と同様に結晶片岩の片理を水平方向に用いて、床面よりも上部に位置する。

羨道左側壁の基底部は長さ 0.3 ～ 0.5m、幅 0.2 ～ 0.3m の板石を横方向に用い平積みとし、さらに上部は長さ 0.2 ～ 0.4m、幅 0.1 ～ 0.2m の板石を小口積みとする。一方、基底部付近しか遺存しない羨道右側壁は、長さ 0.2 ～ 0.4m、幅 0.1 ～ 0.15m の板石を横長に用い平積みとする。また、左側壁は掘形を設け、板石を積み上げ背後には土砂を充填する。これに対して、基底部しか遺存しない右側壁は岩盤を階段状に掘り窪め、岩盤上に板石を積んでいる。このように左右の側壁の観察からは、基底部と上部では石積みの構築方法が異なることがわかる。

なお、羨門左側壁の端部には、板石を埋め込み立てており、化粧石と同様に羨門の区画を意図したものと考える。羨道からは、馬具（縁金具）（56）が出土した。

排水溝　排水溝は、羨道の中央において長さ約 3.2m、幅 0.4 ～ 0.6m の掘形を確認した。羨門付近で排水溝の掘形は不明瞭となり、墓道へと続くものと考えられる。排水溝は第 5 層を掘り込むが、側石や蓋石は存在しない。排水溝の底面には角礫が混じるが、円礫の充填などは認められない。玄室の床面については未調査のため不明であるが、玄室前道基石の下部に排水溝の掘形が続いていくため、玄室床面には排水溝が存在するものとみられる。

墓道　墓道は、羨道石積みから墳丘裾東付近まで長さ約 4.2m、幅約 0.7m の範囲で検出した。墓道は石室主軸よりもやや北方向に傾き、方位は N-50° -E となる。墓道の掘削は、一部とした。墓道前庭の南側には焼土及び炭化物の集中が直径約 0.2m の範囲で認められ、墓前祭祀の痕跡の可能性がある。

横穴式石室の時期　前山 B370 号墳の横穴式石室は、萩野谷正宏による岩橋型横穴式石室の分類では、袖部は一段一石積み（袖部 d 類）、玄室前道基石は玄室前道幅を超えるが 2 石以上で構成される（基石 c1 類、萩野谷 2019）。玄室前道位置は玄室前壁中央に近く、両袖となる。羨門に

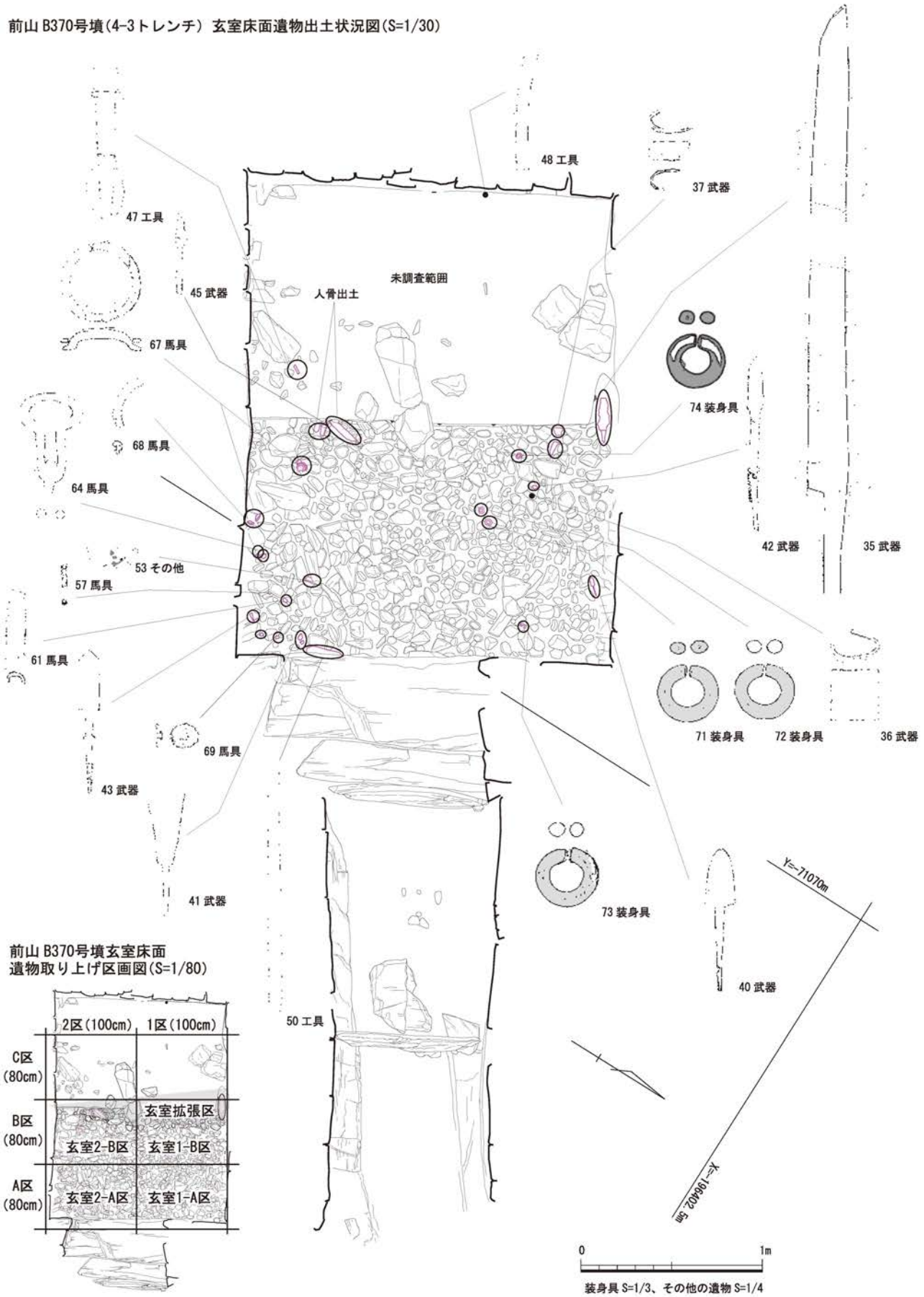


図 84　前山 B370 号墳（4-2 トレンチ）玄室床面遺物出土状況図及び遺物取り上げ区画図（S=1/30・1/80）

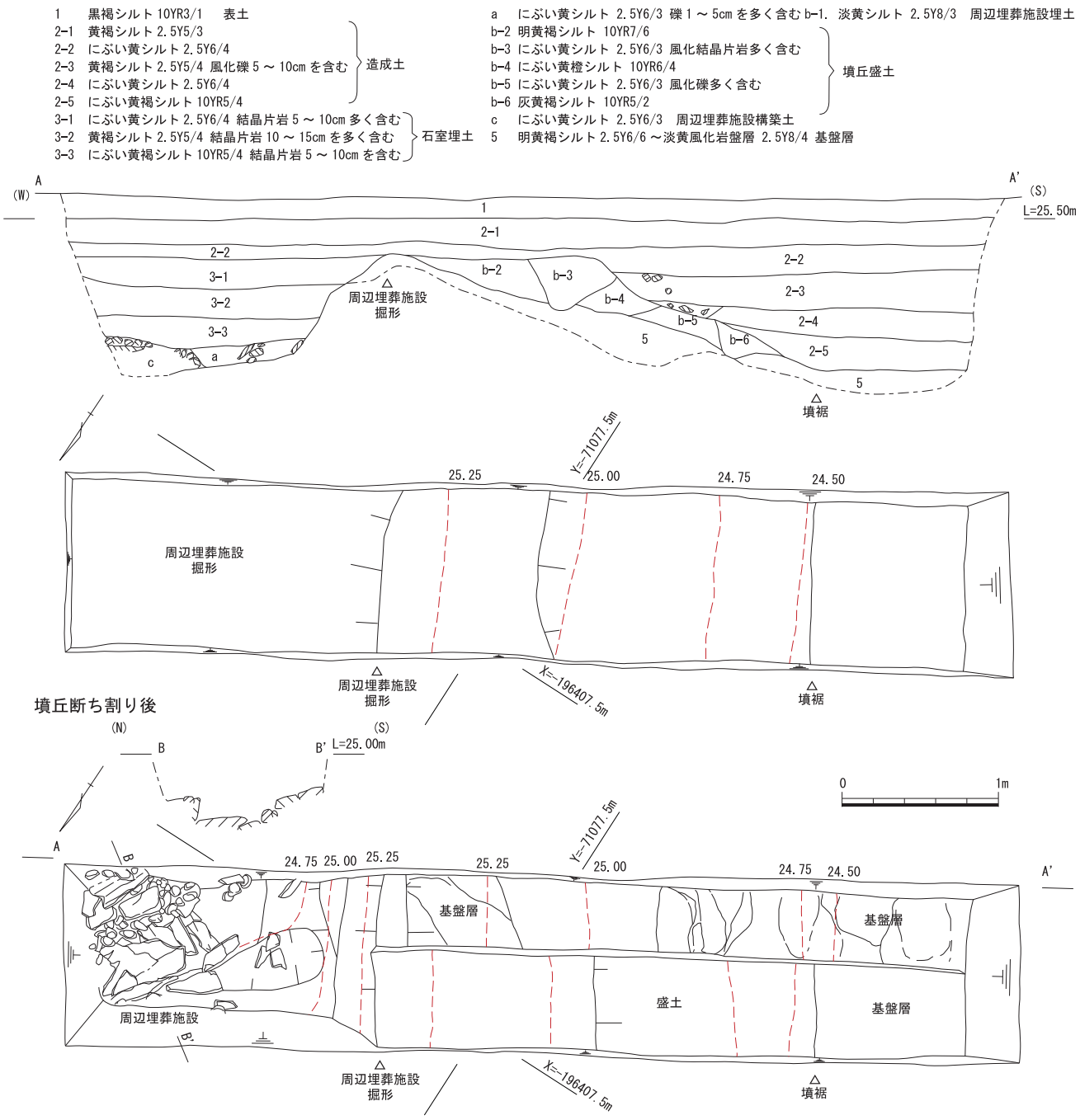


図 85　前山 B370 号墳（4-17 トレンチ）平面図及び断面図（S=1/40）

板石を埋め込み立てており、玄門付近からも原位置を保っていないが化粧石とみられる板石が出土している。羨門と玄門の化粧石の存在を積極的に認めるならば、岩橋型横穴式石室の変遷では 4c 型式（TK43 型式期）に該当する。なお、玄室前道基石については 2 石で構成され一見古い様相を示すが、中規模の横穴式石室のもつ個体差といえる。

墳丘　墳丘は、東西の主軸上で墳丘裾を確認した。4-2 トレンチでは墓道周辺で墳丘盛土の残存を確認し、標高約 24.5m 付近で東端墳丘裾を検出した。また、西側については 4-17 トレンチでも墳丘盛土を確認し、標高約 24.5m 付近で西端墳丘裾を確認した。墳丘の多くは、岩盤層である第 5 層を削り出すが、4-2 トレンチの西、4-17 トレンチの東では盛土を一部確認した。東西端の墳丘裾は玄室奥壁の中央を中心とし、石室主軸上の東西約 10m の位置に存在する。

周囲の地形からは墳丘裾は北に向かってそれぞれ弧を描くように延び、北側は丘陵斜面裾を利用している。一方、南側は特別史跡指定地を区画する排水路が存在し、墳丘は残存していないが、前山 B344 号墳の墳丘及び石室の北側付近の段が墳丘裾に該当するものとみられる。このため、南北の墳丘についてもおおよそ半径が 8 ～ 10m の規模となることから、墳形は円墳であると判断できる。

以上により、前山 B370 号墳の主軸上での墳丘規模と墳形が確定し、直径約 20m の円墳であることが判明した。

写真 18　周辺埋葬施設検出状況（北から）

周辺埋葬施設　周辺埋葬施設として、玄室西側、4-17 トレンチの西側で周辺埋葬とみられる竪穴系の埋葬施設を検出した（写真 18）。周辺埋葬施設は、南側は直径 0.1m の砂岩及びチャートの川原石を積み上げ、北側は長さ 0.25 ～ 0.3m、幅 0.16 ～ 0.2 の結晶片岩の板石を積み上げる。

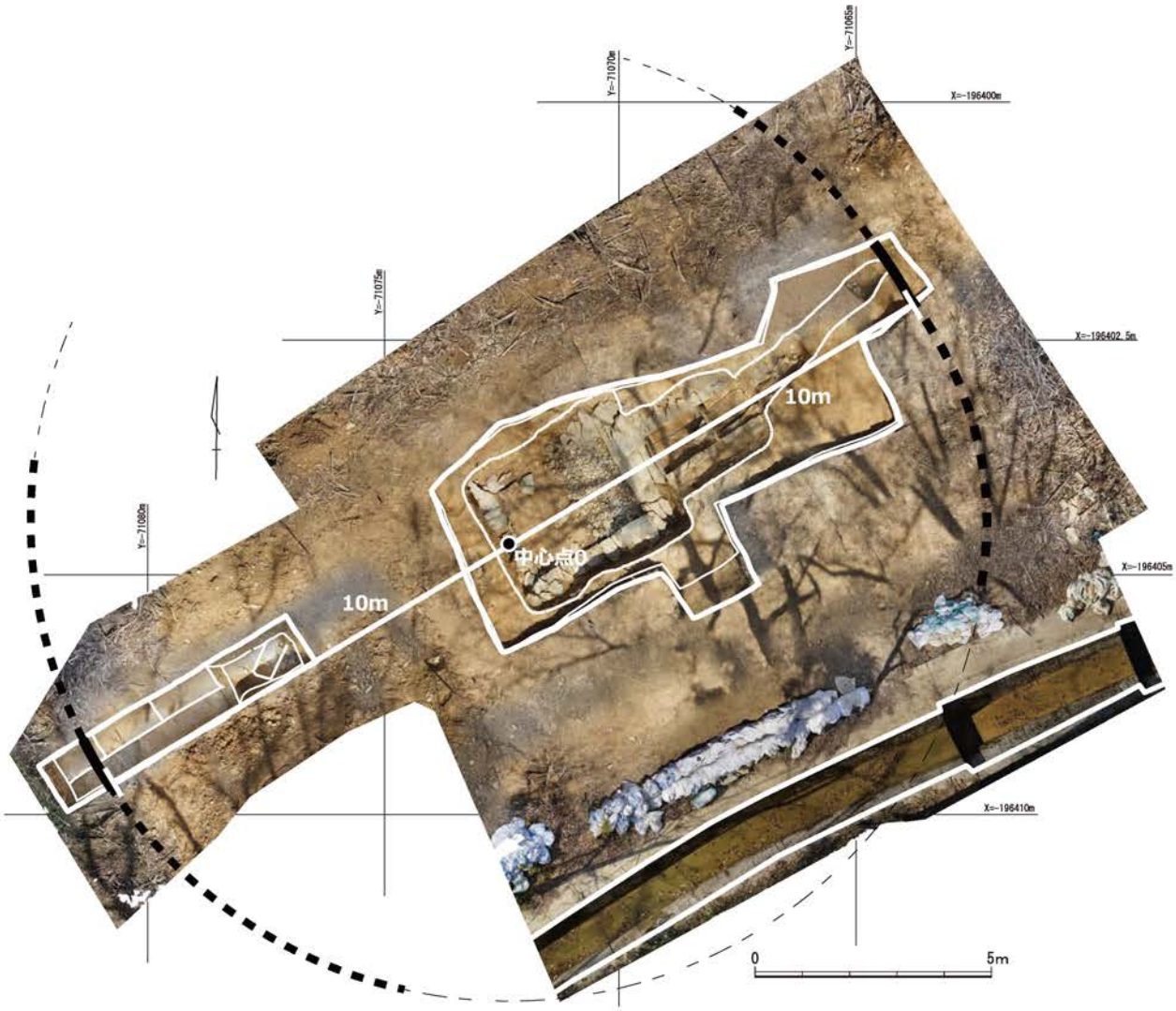


図 86　前山 B370 号墳墳丘復元図（S=1/150）

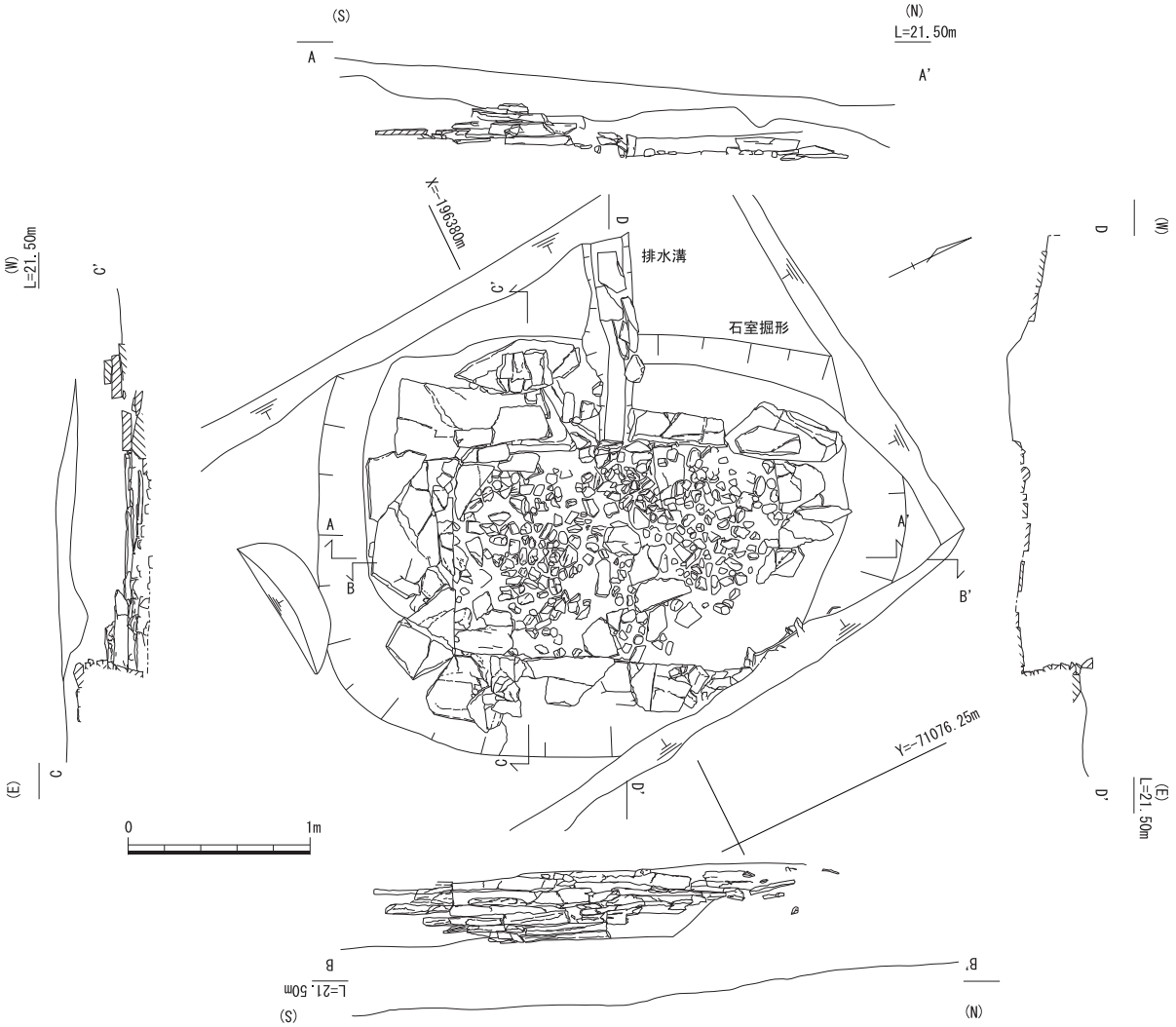
長辺 0.7m、短辺 0.5m を測り、天井石及び蓋石は遺存しない。南側に用いられる川原石は前山 B370 号墳の玄室床面の円礫と類似しており、これを転用したものと考えられる。小口及び側壁は板石一段で構成されることから、箱式石棺に類する構造とみられる。
周辺埋葬施設の上面からは、須恵器高坏（5）及び鉄鏃（46）が出土した。須恵器高坏は TK43 型式期のものである。周辺埋葬施設は蓋石が存在せず、埋土の上面まで近現代造成土が堆積することから、上部は撹乱または石材の抜き取りにより破壊されているとみられる。

（3）前山 B369 号墳（4-3 トレンチ）、周辺（4-10 トレンチ）（図 87、写真 19）
検出状況　4-3 トレンチは前山 B370 号墳の北、尾根筋から約 4m 下の平坦面に設定した。当初、第 2 層下で岩盤層を確認したが、トレンチ南側で岩盤を掘り込んだ大きな掘形を検出したため、トレンチを拡張し、掘削を進めたところ横穴式石室を検出した。このため、前山 B369 号墳として、右奥壁を除いた横穴式石室の全形を確認した。
石室は長さ約 2.9m、幅 3.2 ～ 3.3m の範囲で検出し、玄室及び羨道を確認した。墳丘や天井石はすでに削平されていたが、石室の基底部付近が残存する。玄室埋土は長さ 0.1 ～ 0.2m、幅 0.1m の板石が土砂とともに深さ 0.3m で堆積する。第 2 層からは須恵器甕（7）が、掘形の上面から掘り込まれた遺構 8 からは須恵器坏身（6）が出土した。
　また、4-3 トレンチの周辺の状況を明らかにするため、4-10 トレンチを設定した。4-10 トレンチでは、第 5 層上面で遺構 1 を検出した。
横穴式石室　横穴式石室は横長の玄室の中央に羨道が取りつくいわゆる「T 字形石室」であり、石室は西方向に開口する。玄室は、主軸長 1.2 ～ 1.3m、主軸幅約 2.1m を測る。主軸の方位は N-65° -W となる。袖部は左袖部幅 0.78m、右袖部幅 0.6m 以上であり、両袖となる。奥壁は幅 1.9m、最大残存高 0.4m、右側壁は幅 1.15m、最大残存高 0.2m、左側壁は 1.08m、最大残存高 0.25m を測る。石室は玄室の形に沿って岩盤を掘り込み、掘形に沿って壁体を積み上げている。
　玄室前壁の石積みは袖部のみが遺存しており、左袖石は長さ 1.0m、幅 0.35 ～ 0.45m、右袖石は長さ 0.64、幅 0.3m の石材を基底石とし、石材を横方向に用いた平積みによりその上部を積み上げる。前壁は、両側壁に先行して積まれている。
　玄室側壁は、3･4 石程度の石積みしか確認できないが、幅 0.3 ～ 0.4m、長さ 0.3 ～ 0.6m、厚さ 0.15 ～ 0.2m の結晶片岩板石を横方向に用いた平積みにより積み上げる。側壁の奥行きは 0.5m となり、背後は石室掘形となり、控え積みや裏込めは確認できない。

写真 19　前山 B369 号墳（4-3 トレンチ）
横穴式石室検出状況（北から）

写真 20　前山 B368 号墳（4-15 トレンチ）
埋葬施設検出状況（北から）

前山B369号墳（4-3トレンチ）



前山B369号墳周辺（4-10トレンチ）

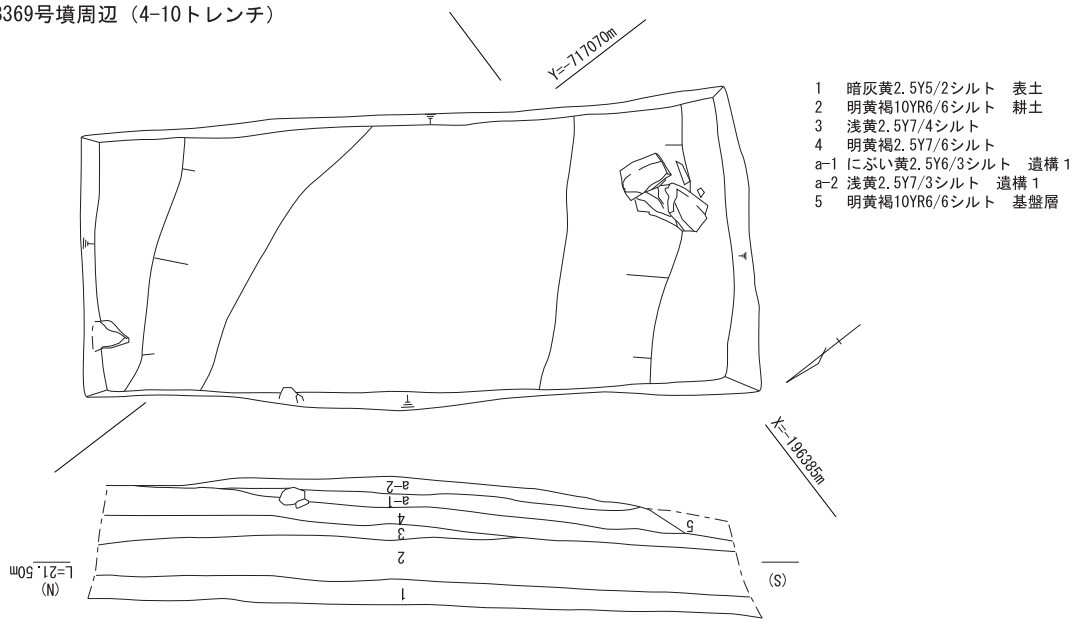


図 87　前山 B369 号墳（4-3 トレンチ）、周辺（4-10 トレンチ）平面図及び断面図、立面図（S=1/40）

玄室奥壁は、幅 0.25 ～ 0.3m、長さ 0.3 ～ 0.5m、厚さ 0.1 ～ 0.15m の結晶片岩板石を横方向に用い、平積みにより積み上げる。奥壁と両側壁との重複関係では、最下段では奥壁が両側壁に先行して置かれる。2 段目以上は隅部の取り合いが側壁と奥壁にまたがる石積みとなり、平面は隅丸方形となる。

玄室床面は、直径 0.1 ～ 0.15m の川原石の円礫、長さ 0.1 ～ 0.2m、幅 0.05 ～ 0.1m の結晶片岩板石を敷き詰め、確認できる範囲では厚さ 0.1m を測る。玄室床面の標高は約 20.9m であり、遺物は出土していない。

羨道は、主軸上で約 2.3m の長さで検出し、幅 0.6m である。玄門付近に框石を設け、玄室と羨道を区画する。框石は長さ 0.55m、幅 0.8m、厚さ 0.2m の板石であり、玄室床面と同じ高さに据え付ける。

排水溝は、羨道左側壁に沿って検出長 1.1m、幅 0.22 ～ 0.3m で確認した。排水溝は岩盤を掘り込み、両側面に長さ 0.2 ～ 0.3m の板石を斜めに据え付ける。断面は、V 字形となる。西側では、一部、蓋石も残存する。

関連遺構　4-10 トレンチでは、幅 2.4 ～ 2.6m、深さ 0.2 ～ 0.3m を測る南北方向の浅い溝（遺構 1）を検出しており、南側の肩部からは結晶片岩の板石 3 石が並び、周囲から須恵器蓋坏（11・14・17）・短頸壺（22・23）が出土した。また、遺構 1 の中央部分では須恵器坏蓋（8 ～ 10）・坏身（12・13・15・16・18）・壺（20）・甕（21）・提瓶（24）、土師器片が多数出土した。これらの土器は TK43 型式期の所産である。遺構 1 は横穴式石室との位置関係から東側を区画する溝である可能性があり、前山 B369 号墳に関連する遺構とみられる。

（4）前山 B371 号墳（4-11、4-16 トレンチ）（図 88）

検出状況　4-11 トレンチは、4-2、4-3 トレンチの西側、万葉植物園北の尾根裾から西側に張り出した東西約 12.5m、南北約 10m の方形状の高まり上に設定したトレンチである。4-11 トレンチは、尾根筋から張り出す起点に位置し、東側には柑橘畑の際に築かれた石垣が存在する。トレンチ中央部分は、深さ 0.4m の撹乱が存在する。撹乱埋土下では水平に堆積する明褐色、にぶい黄色のシルト～細砂からなる盛土層を確認し、盛土層からは古墳時代の須恵器甕（25）、土師器片が出土した。トレンチ東側では第 5 層を確認したが、西側では盛土層が続く。

また、4-11 トレンチの盛土層の性格を明らかにするため、追加調査として方形状の高まりの頂部に 4-16 トレンチを設定した。4-16 トレンチでは、第 3 層の下面で北東側に向かって緩やかな傾斜をもつ暗灰黄色、黄灰色のシルト～細砂からなる盛土層を確認した。この盛土層は 4-11 トレンチで確認できた盛土層と類似しており、鉄細片が出土した。

4-11、4-16 トレンチを設定した高まりを中心として盛土層の分布が認められ、盛土上面から古墳時代の須恵器甕（25）が出土することから、この盛土層を墳丘盛土と判断した。このため、これらの盛土層の分布範囲は古墳の可能性が高いと判断し、前山 B371 号墳とした。

墳丘　4-11、4-16 トレンチの調査から墳丘盛土と考えられる盛土層は、トレンチを設定した東西約 8m の範囲で分布することが判明した。盛土は厚さ約 0.2m のシルト～細砂層を水平に積み上げる。撹乱により墳裾を明確に把握できていないが、これらの分布範囲と周辺地形から、東西 12.5m 以上、南北約 10m の墳丘が復元できる。現況測量図からは方墳の可能性もあるが、墳形は発掘調査を実施していないため不明である。

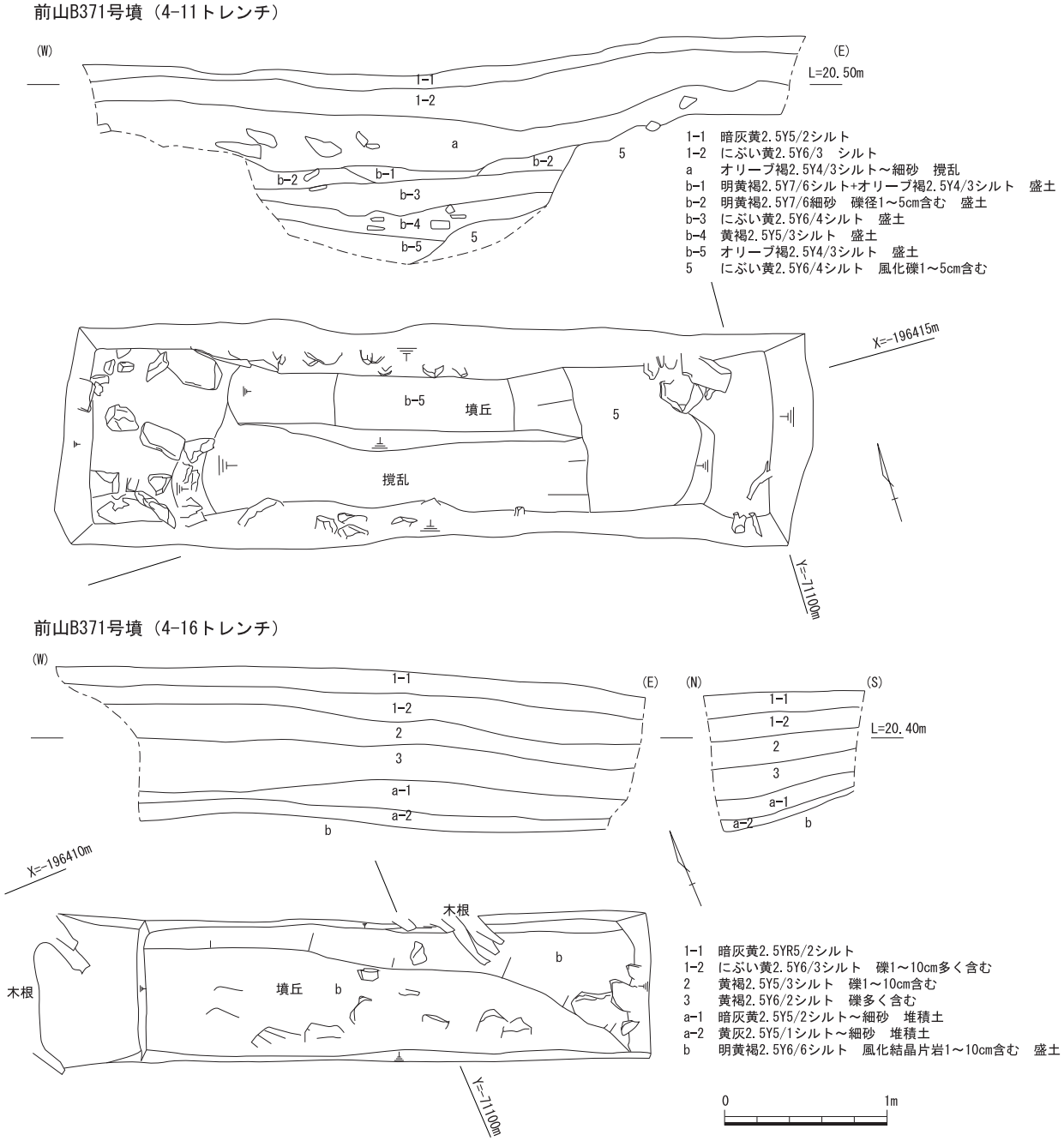


図 88　前山 B371 号墳（4-11、4-16 トレンチ）平面図及び断面図（S=1/40）

（5）前山 B368 号墳（4-15 トレンチ）（図 89、写真 20）

検出状況　4-15 トレンチは、花木園東部地区の尾根筋の延長上に設定した。昭和 57 年に苗木移植中に須恵器有蓋台付壷、短頸壺が出土しており、周辺に古墳の存在が想定された地点に相当する。4-15 トレンチでは、第 4 層及び第 5 層上面で埋葬施設の掘形を検出し、掘形の底面で石積みの一部を確認した。このため、前山 B368 号墳として調査を進めた。

埋葬施設　埋葬施設の掘形は南北約 3.5m、東西約 2.7m の楕円形を呈し、埋土は黄灰色の細砂からなる。埋葬施設の壁体と考えられる石積みは、北側及び南側では石積みの遺存状況が悪く、開口方向及び埋葬施設の種別は判断できなかった。埋葬施設内部の規模は、東西 1.2m、南北 1.8m

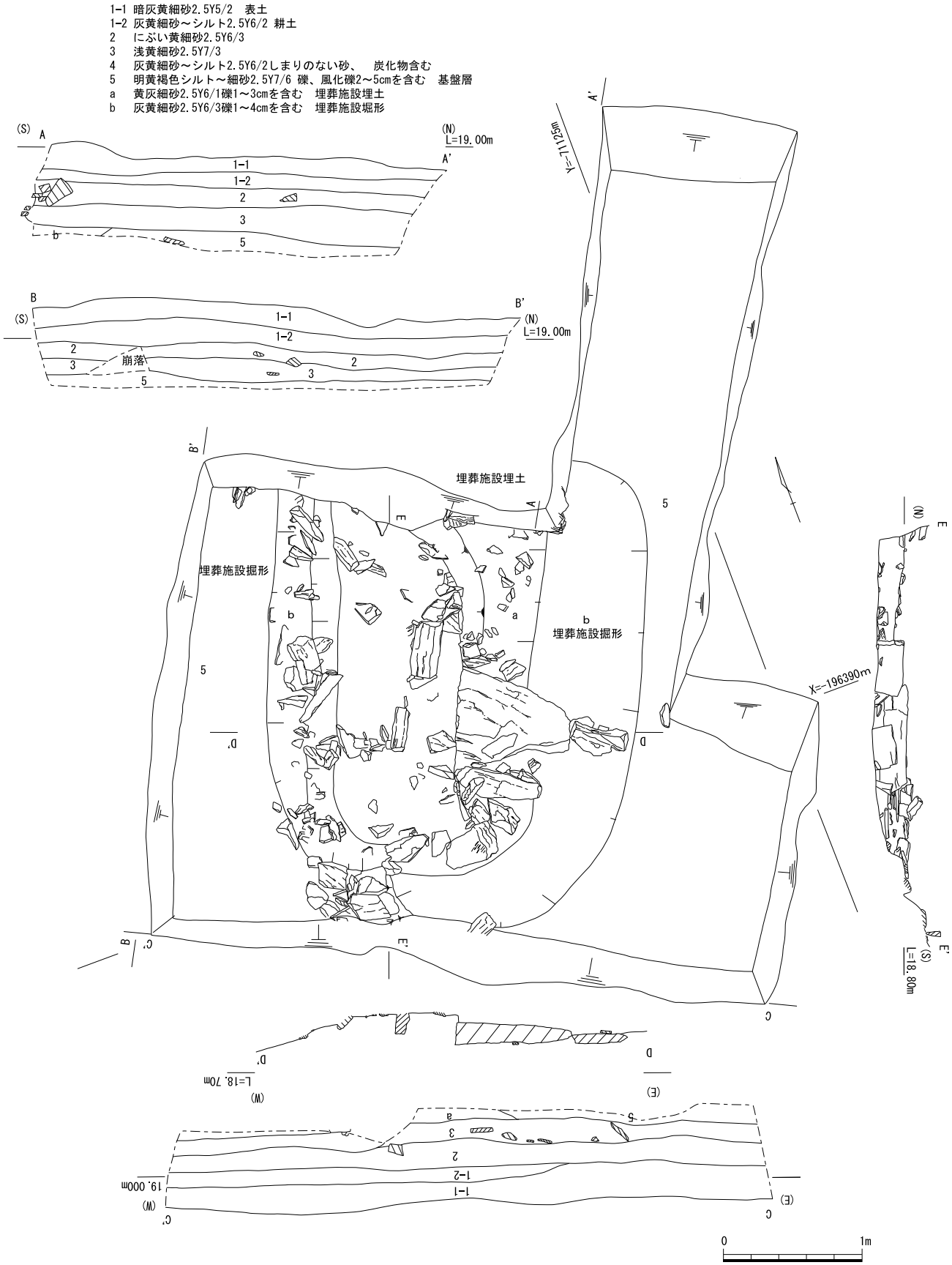


図 89　前山 B369 号墳（4-3 トレンチ）、周辺（4-10 トレンチ）平面図及び断面図、立面図（S=1/40）

となる。石積は東側では、長さ 0.6 ～ 0.8m、幅 0.2 ～ 0.4m の石材の小口を壁体に用いる小口積みが確認される。床面の石敷きなどは、確認できていない。埋葬施設の埋土からは、古墳時代後期の須恵器甕（28）が出土した。

（6）花木園東部地区隣接地　（4-12 ～ 4-14 トレンチ）（図 90・91）

検出状況及び遺構　花木園東部地区には、前山 B221 号墳～前山 B225 号墳が分布する。特に調査地に隣接する KE4 号墳（前山 B225 号墳）は、花木園の環境整備に伴う工事立会において横穴式石室の玄室奥壁、羨道側壁、排水溝と石室掘形が確認されており、現状でも特別史跡指定地では墳丘状の高まりが確認できる。このため、その北側の状況を確認する目的で 4-12 トレンチを設定した。

調査地点の現況は、特別史跡指定地との境界に石垣が存在し、北側の墳丘は削平されている。4-12 トレンチを設定し、掘削を行ったところ、近現代の造成土が堆積しており、造成土下で基盤層である第 5 層となる。このため、すでに墳丘等は、削平されているものとみられる。

また、4-13、4-14 トレンチでは、第 1 層～第 5 層が堆積する。4-13 トレンチでは第 5 層上面で遺構検出したところ、南北方向に流れる幅約 0.8 ～ 1.2m の溝（遺構 1）を検出した。この溝は南から北に向かって、尾根筋の縁辺部を蛇行して流れる溝と考えられる。埋土からは、古墳時代後期の土師器高坏（29）、須恵器甕・壺・高坏（30・33・34）などが出土した。なお、弥生土器壺（31）・甕（32）についても出土したが細片であることから、遺構の形成時または開放時に混じりこんだとみられる。また、4-13 トレンチでは東西方向の溝（遺構 2）を検出しており、第 2 次調査で検出された溝に関連するとみられる。溝は、古墳群とほぼ同時期もしくはわずかに後出する。

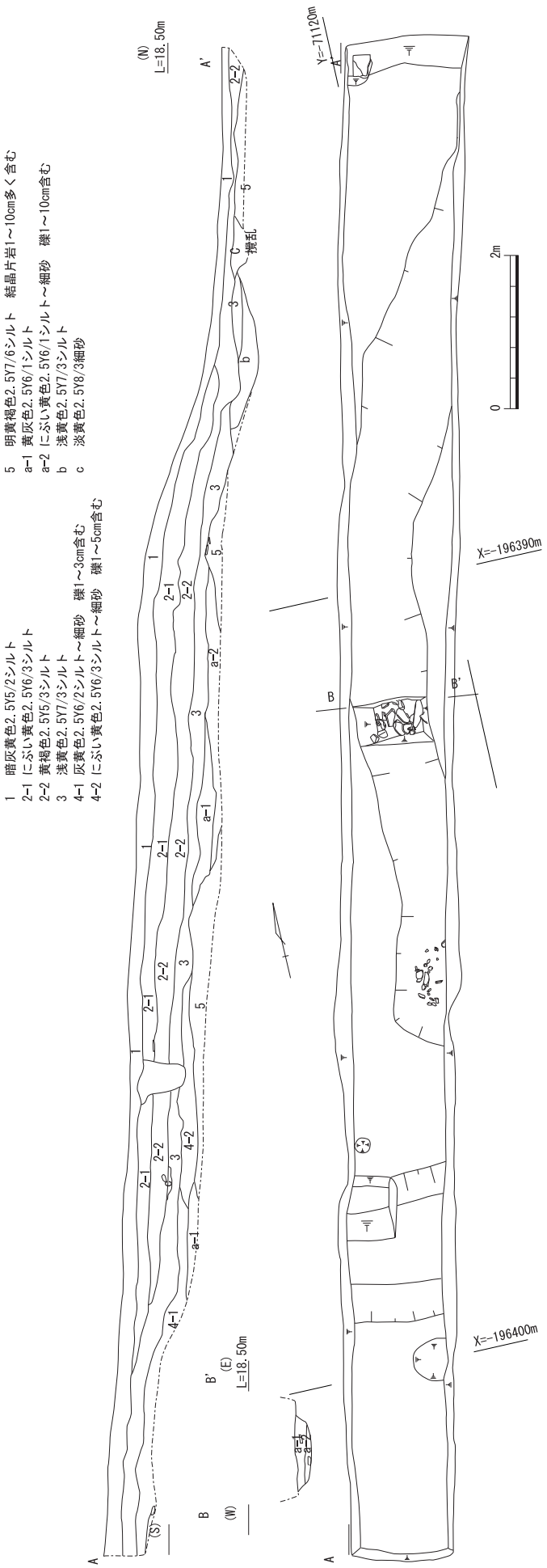


図 90　花木園東部地区隣接地（4-13 トレンチ）平面図及び断面図（s=1/80）

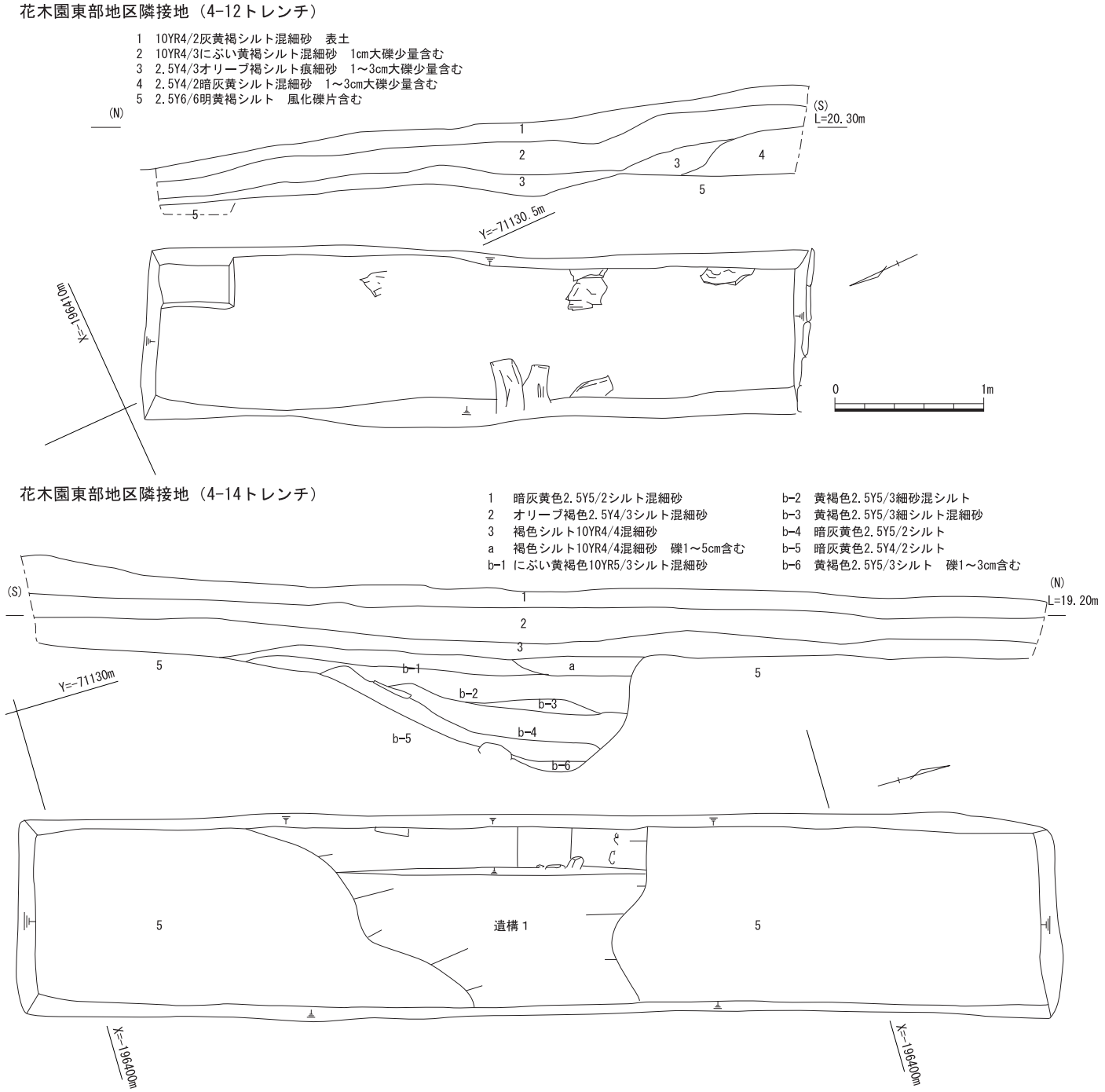


図 91　花木園東部地区隣接地（4-12、4-14 トレンチ）平面図及び断面図（S=1/40）

第 3 節　出土遺物

（1）土器、埴輪（図 92）

土器は各トレンチから、埴輪は 4-2 トレンチから出土した。ここでは遺構ごとに報告する。

前山 B370 号墳（4-2、4-17 トレンチ）出土土器　4-2 トレンチからは円筒埴輪（1･2）、土師器壺･土師皿（3・4）、須恵器高坏（5）が、4-17 トレンチからは須恵器高坏（5）が出土した。

円筒埴輪（1・2）は、玄室埋土下層から出土した。(1) は円筒埴輪の体部片であり、断面 M

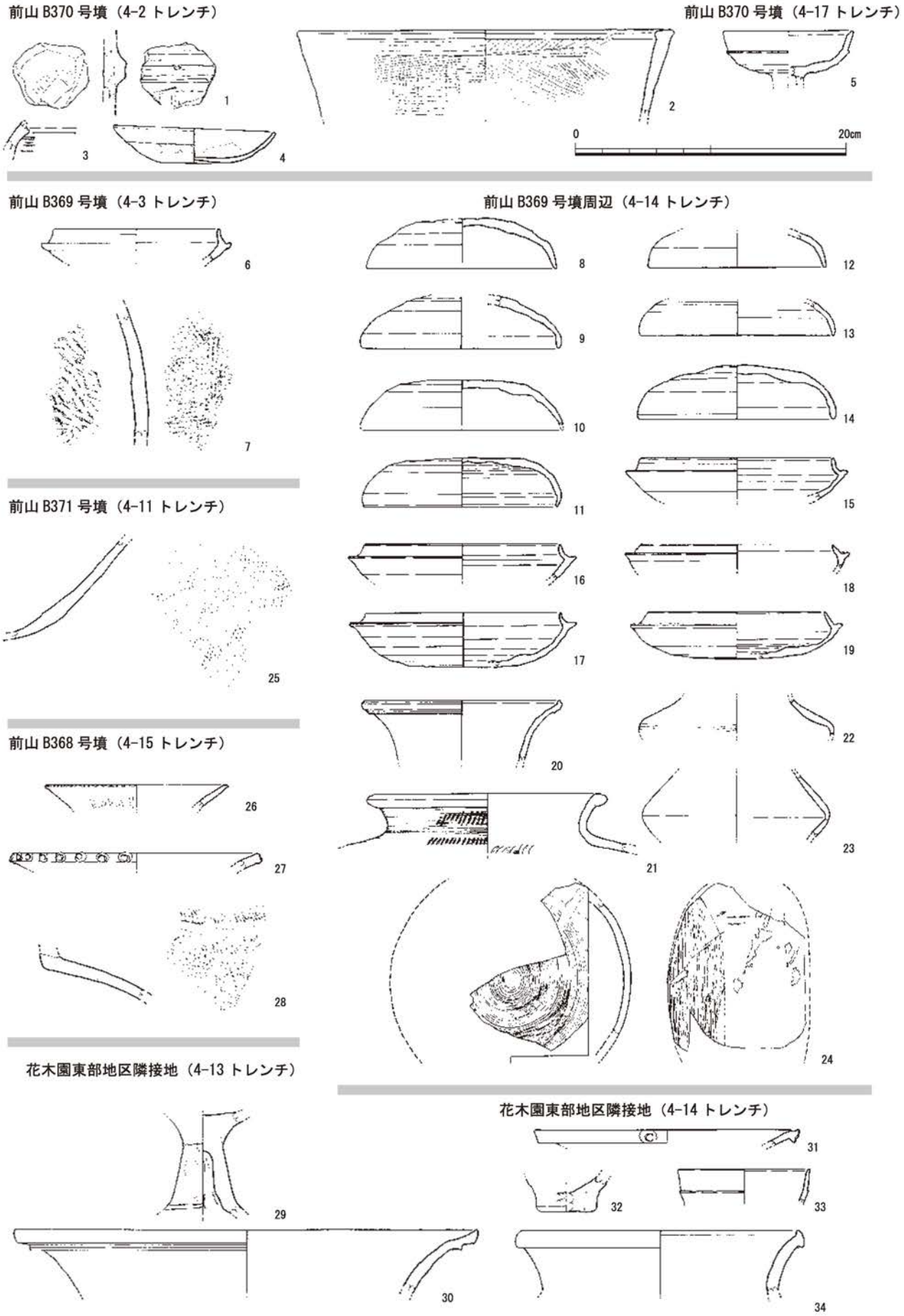


図 92　土器・埴輪実測図（S=1/4）

字の突帯をもち外面は縦ハケののち、二次調整の横ハケを施す。(2) は口縁部であり、口縁端部は上端に面をもち、内外に拡張させる。外面はタテハケののち、縦方向に静止痕の残るヨコハケ、口縁部付近は斜めハケを施す。(1･2) については、口縁部形状や外面二次調整から大和南部型（紀伊型）埴輪であり（廣瀬 2021)、古墳時代後期前葉（MT15 ～ TK10 型式期）のものである。横穴式石室及び出土土器、副葬品の編年からみた前山 B370 号墳の築造時期よりも古く位置づけられる。当古墳での円筒埴輪の樹立は確認されていないことから、これらの円筒埴輪は墳丘盛土または周辺の古墳に伴うものが石室埋土に落ち込んだと考えられる。また、(3) は、口縁端部を欠損する壺の口縁部片である。細片のため時期は不明である。(4) は、玄室埋土から出土した土師皿である。口縁部内外面をナデ、底部にはユビオサエが残り、中世の所産である。(5) は周辺埋葬施設の上面から出土した。無蓋高坏の坏部であり、端部は内傾する弱い面を持つ。長脚化した段階のものと推定でき、TK43 型式期のものと考えられる。(5) については古墳の築造時期に近接するものと考えられる。

前山 B369 号墳（4-3 トレンチ）、周辺（4-10 トレンチ）出土土器　4-3 トレンチからは、須恵器坏身（6）・甕（7）が出土したが、いずれも前山 B369 号墳に伴うものではない。また、4-10 トレンチの遺構 1 からは、須恵器坏蓋（8 ～ 14)･坏身（15 ～ 19)･壺（20)･甕（21)･短頸壺（22･23)・提瓶（24）が出土した。遺構 1 は、前山 B369 号墳に関連する遺構とみられる。

（6）は、前山 B369 号墳の掘形上面で検出した遺構 8 から出土した。立ち上がりは短く、有蓋高坏の坏部の可能性もある。(7) は第 2 層中からの出土で、外面に平行タタキが残る。

（8 ～ 14）は、口縁部から天井部へと緩やかに移行する坏蓋である。口径 13.3 ～ 14.4cmであり、天井部のヘラケズリの範囲も狭い。(15 ～ 19) は、立ち上がりが短く、口径 13.2 ～ 14.4cmを測る。(20) は広口壺で、口縁端部を拡張し外側に面をもつ。(21) は頸部が短い甕の口縁部片である。頸部から肩部にかけてタタキののち、横方向のカキメを施す。(22・23) は、短頸壺の肩部から胴部片である。(24) は提瓶の体部片であり、円形のカキメを施す。これらの土器はいずれも TK43 型式期のものであり、遺構 1 は前山 B369 号墳の関連遺構とみられることから、当古墳の築造時期を示すと判断できる。

前山 B371 号墳（4-11 トレンチ）出土土器　4-11 トレンチからは、須恵器甕 (25) が出土した。(25) は体部片であり、盛土中から出土した。外面は平行タタキ、内面は当て具の痕跡が残る古墳時代後期のものである。詳細な時期は不明であるが、前山 B371 号墳に伴うものであり、その築造時期に近いものと考えられる。

前山 B368 号墳（4-15 トレンチ）出土土器　4-15 トレンチからは弥生土器甕（26）・壺（27)、須恵器甕（28）が出土した。(26) は第 3 層、(27) は排土からの出土であり、弥生時代後期後葉の遺物である。(26) はＶ様式形甕の口縁部であり、端部にキザミ目を施すものである。(28) は、埋葬施設の埋土から出土した。甕の肩部であり、外面は平行タタキが残る。内面はナデ調整により仕上げる。

花木園東部地区隣接地（4-13、4-14 トレンチ）出土土器　4-13 トレンチからは土師器高坏（29)、須恵器甕（30）が、4-14 トレンチからは弥生土器壺（31）・甕（32)、須恵器高坏（33）・甕（34）が出土した。いずれも、南北方向に流れる溝（遺構 1）に伴うものである。(29) は、高坏の脚柱部である。坏底部が厚く、古墳時代中期から後期の所産とみられる。(30) は甕の口縁部であり、口縁端部は上方に拡張し、外面に突線を巡らせる。(31・32) は弥生時代後期中葉の所産である。いずれも細片である。

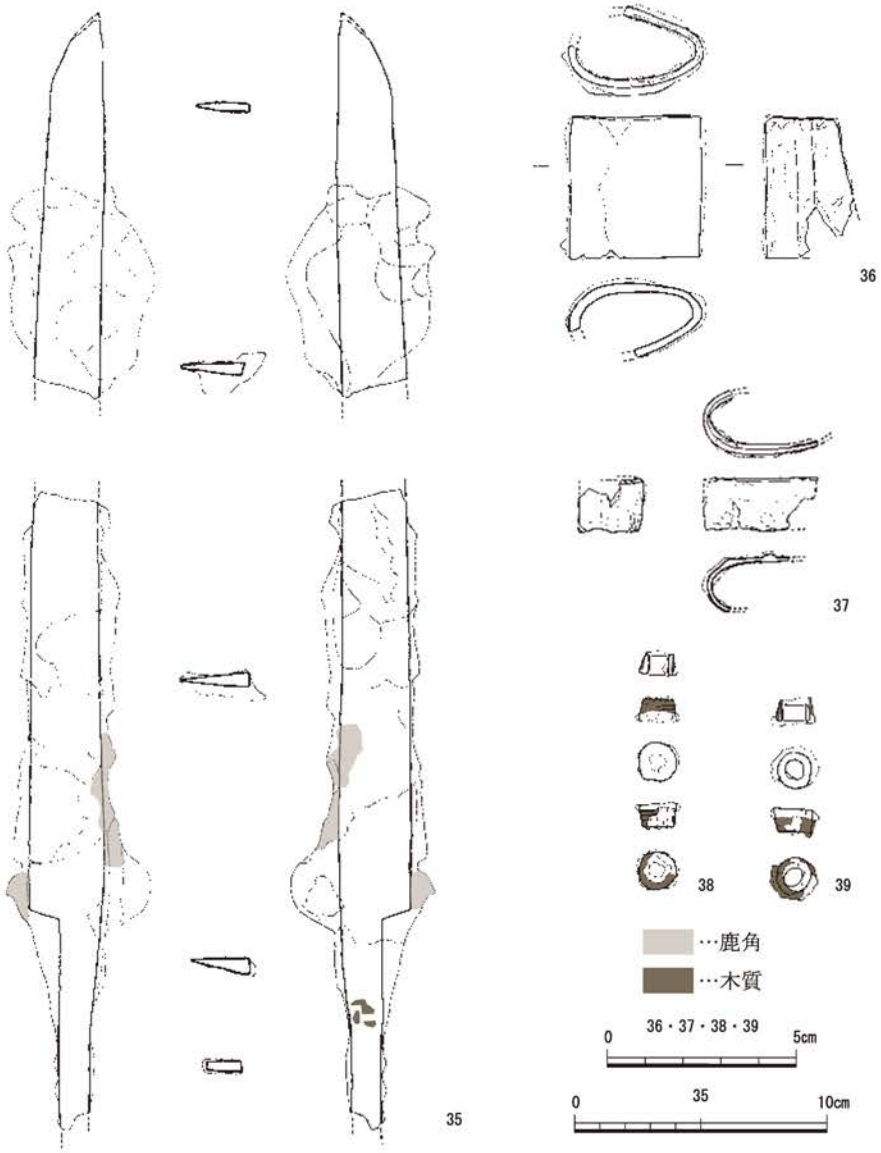


図 93　武器（鉄刀・刀装具）実測図（鉄刀 S=1/3・刀装具 S=1/2）

（33）は無蓋高坏の坏部、（34）は壺の口縁部であり、古墳時代後期のものである。

（2）武器（図 93・94）

武器（鉄刀、刀装具、鉄鏃）（35 ～ 46）は、前山 B370 号墳（4-2、4-17 トレンチ）から出土した。（35 ～ 45）は、前山 B370 号墳の横穴式石室の玄室床面から出土した。また、（46）は周辺埋葬施設の埋土内から出土した。以下では、種類ごとに報告する。

鉄刀・刀装具　（35）は、鉄刀である。玄室床面から原位置を保っており、茎から切先まで遺存した状態で出土した。切先の先端、刀身の一部、茎尻を欠損する。切先と刀身との接点が認められなかったため接合を行っていないが、出土状況からは切先と刀身の間にはさほど欠損はないとみられ、復元長 45cm以上とみられる。最大幅 2.7cm、最大厚 0.55cm、刀関幅 2.85cm、茎幅 1.6cmである。関形状は斜角関となる（臼杵 1984）。把及び鞘の一部に鹿角及び木質が遺存し、鹿角装であったとみられる。なお、茎部分には、目釘孔は確認できなかった。

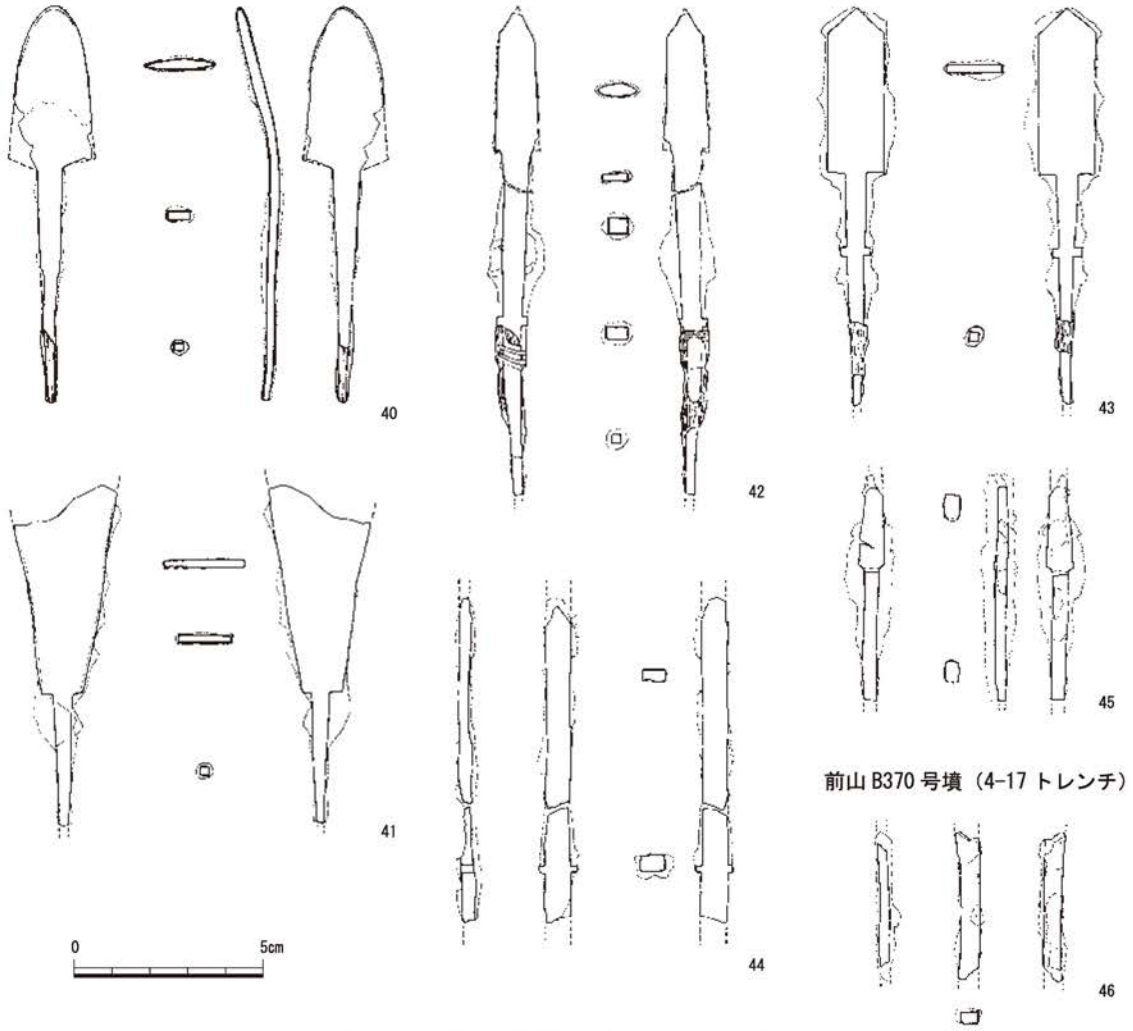


図 94　武器（鉄鏃）実測図（S=1/2）

（36・37）は鉄刀装具であり、出土位置から同一の装具とみられる。（36）は長く、上端がすぼまるため、鞘尻金具とみられる。鍍金などは確認できなかった。（37）は、鞘口金具であり、鋲を縁に沿って巡らせるものである。

（38・39）は刀装具の鳩目金具とみられる。鳩目金具は、把頭の中心部分に開けられた穴に両側から差し込む円筒状の金具である。鍍金、金銅板は認められず、鉄製である。片側がすぼまり、上端は外側に折り返す。（38）は直径 1.1cm、（39）は直径 1.1 ～ 1.3cmを測る。ともに側面に木質が付着し、把の木質とみられる。

（35）は鞘及び把に鹿角が確認できることから、鹿角装と判断できる。また、（36 ～ 38）の刀装具は鉄製であるが、鳩目金具の存在から装飾付刀装具の存在がうかがえる。

鉄鏃　（40 ～ 46）は鉄鏃であり、短頸鏃（40・43・45）及び有茎系鏃（41）、長頸鏃（42・44）に区分できる。（40）は長三角形の鏃身部をもち、鏃身部の関は角関である。残存長は 10.6cm、残存幅2.0cmを測る。鏃身部は折れ曲がるが、人為的な折り曲げ鉄製品かどうかは不明である。（41）は方頭形の鏃身部をもち、角関である。（42 ～ 44）は茎に棘状関をもつ。（42･43）は圭頭形（五角形）の鏃身部をもち、棘状関の下部には木質が付着する。（40）は長さ 10.65cm、幅 1.5cm、（42）は長さ 12.5cm、幅 1.1cm、を測る。（44）は、長頸鏃の頸部とみられる。（45）は断面方形の茎をもち、

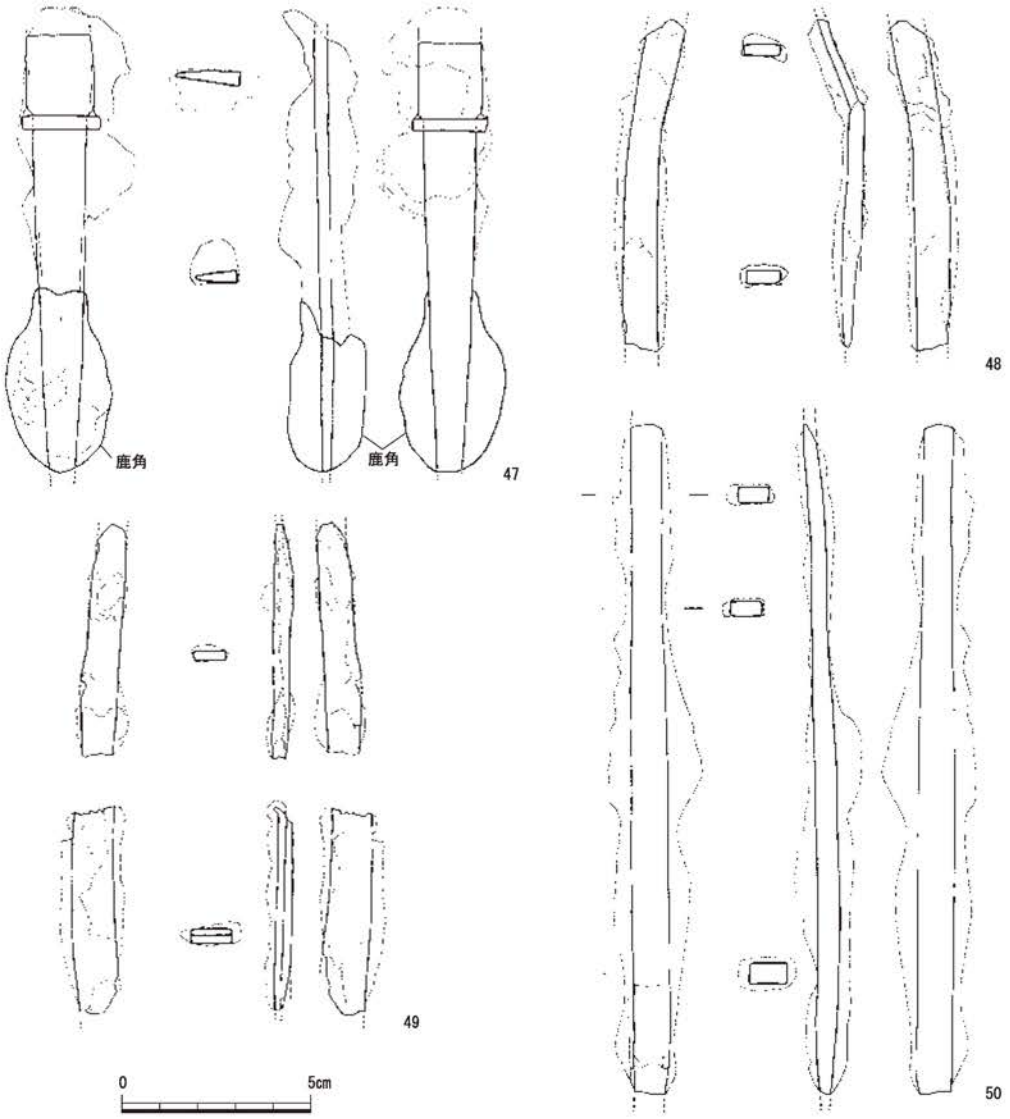


図 95　工具（鹿角装刀子・鉄鉇・鉄鑿）実測図（S=1/2）

関は台形関となる。

鉄鏃は方頭形の鏃身部をもつ短頸鏃や、茎に棘状関をもつ長頸鏃が存在しており、後期 2 段階（TK43 型式期）に位置付けられる（水野 2013）。

（3）工具（図 95）

工具（鹿角装刀子・鉄鉇・鉄鑿）（47 ～ 50）は、前山 B370 号墳（4-2 トレンチ）の横穴式石室の玄室床面から出土した。

鹿角装刀子　（47）は、鹿角装の把をもつ刀子である。鹿角は長さ 5.8cm、幅 2.8cm、厚さ 1.8cmの範囲で遺存する。両関であり、把縁に装具をもつことから、装飾をもつ刀子とみられる。刃部の大半と茎尻を欠損し、残存長 12.2cm、刃部幅 1.8cm、茎幅 1.4cmを測る。

鉄鉇・鉄鑿　（48 ～ 50）は、鉄鉇であるが、先端が欠損するため鉄鑿の可能性もある。（48）は図面上端に向かって折り曲げ、やや右にも曲がる。（49）は出土地点が同じであり、同一個体とみられる。2 片が銹着しており、本来は 2 個体ものとみられる。反りが認められないことから、

鉄鑿の可能性もある。(50) は図面上端に向かって細くなり、弱い反りが認められる。残存長は17.9cm、幅 1.0cm、厚さ 0.6cmを測る。

（4）その他鉄製品（図 97）

その他鉄製品（51 ～ 54）は、前山 B370 号墳（4-2 トレンチ）の横穴式石室の玄室床面から出土した。(51・52・54) は、土壌水洗で得られた。

その他鉄製品　不明の鉄製品を一括した。武器の装具または馬具の可能性もある。(51) は厚さ 0.15cmの鉄片であり、端部の一部が残存する。(52) は 3 方向の端部が遺存し、上端が広くなる形状となる。(53・54) は、片面に漆状の付着物が認められる。ともに弱い反りを有する。馬具の鞍の州浜形・磯の一部である可能性がある。

（5）馬具（図 96・98）

馬具（縁金具・覆輪・鞍金具・雲珠・辻金具・花形飾）(55・57 ～ 70) は、前山 B370 号墳（4-2 トレンチ）の横穴式石室の玄室床面から、縁金具（56）は羨道から出土した。

縁金具　(56 ～ 60) は縁が直線またはわずかな湾曲しか認められないことから、鞍の縁金具または州浜形・磯の一部とみられる。ただし、幅や鋲の大きさが異なるものもあり、別個体の可能性も残る。鋲はいずれも平面形が円形のものである。(55・56) は鋲を 0.4cm間隔でとどめるもので、鋲頭は扁平である。縁金具の幅はともに 0.5cmである。(56) は裏面に木質が付着する。(57・58) は、鋲頭がやや盛り上がり、直径 0.4cmである。(57) は断面に湾曲が認められ、湾曲した部位に用いられたとみられる。また、(58) は金銅板を巻き付けていることが確認できる。縁金具の幅は (57) は 0.6mm、(58) は 0.4mmである。(59) は、縁金具が剥離した鉄地金銅張の板である。縁金具の左右に地板が続くことから、州浜形・磯の可能性がある。縁金具の剥離面については、幅約 0.7cmと他の縁金具よりも幅広である。(60) についても、鉄地金銅張の縁金具の左右に地板が続くため、州浜形・磯の一部の可能性がある。縁金具の幅は 0.6cmである。半球形で直径 0.4 ～ 0.5cmの鋲頭を用いて地板ごと留めるものであり、他の縁金具の鋲とは異なる。

覆輪　(61・62) は鞍の山を覆う覆輪であり、鉄板を逆 U 字形に折り曲げる。(61・62) は幅 0.8 ～ 1.1cm、厚さ 1.2 ～ 1.4cmを測る。形状は直線的であることから、鞍の側面部分であるとみられる。(62) は鞍の山に触れる内側には漆の付着が認められており、鞍は木製で漆塗りであったとみられる。

鞍金具　(63・64) は、鞍金具である。(63) は、鉄板の先端に釘を打ち込んだものである。刀剣または刀子の目釘の可能性もあるが、釘の長さが 1.7cmであることから、鞍金具の脚の先端部分に釘を打ち込み、鞍の木質部に絡めるものとして考えた。X 線撮影では、釘頭などは認められなかった。(64) は、鉄地金銅張の鞍金具の輪金と脚である。断面円形の輪金と脚を別造りとするもので、輪金の先端部分に脚を折曲げ巻き付けるように取り付ける。輪金は刺金をもたないものである。脚の一部に座金具とみられる鉄片が付着する。輪金の平面形は左右に張り出し、中央に屈曲点をもつものである。輪金は長さ 6.5

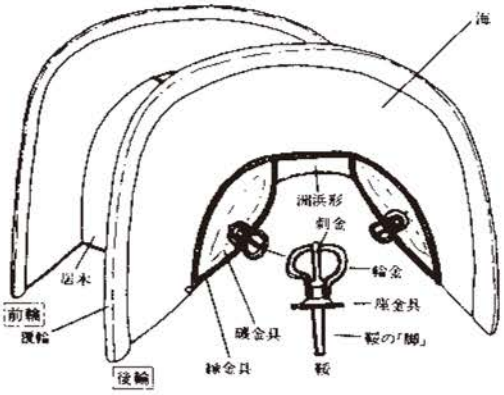


図 96　金属製鞍の部位名称（宮代 1996 より）

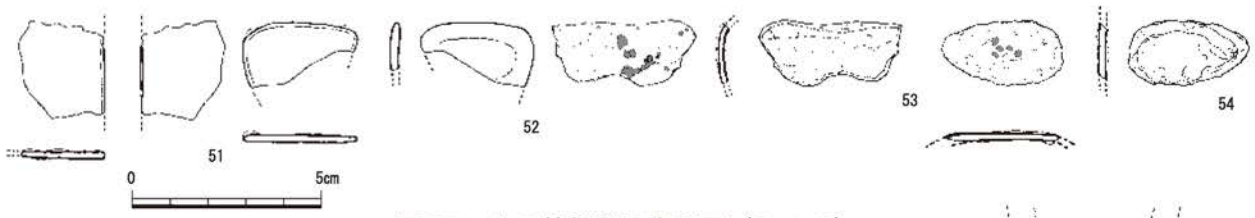


図 97　その他鉄製品実測図（S=1/2）

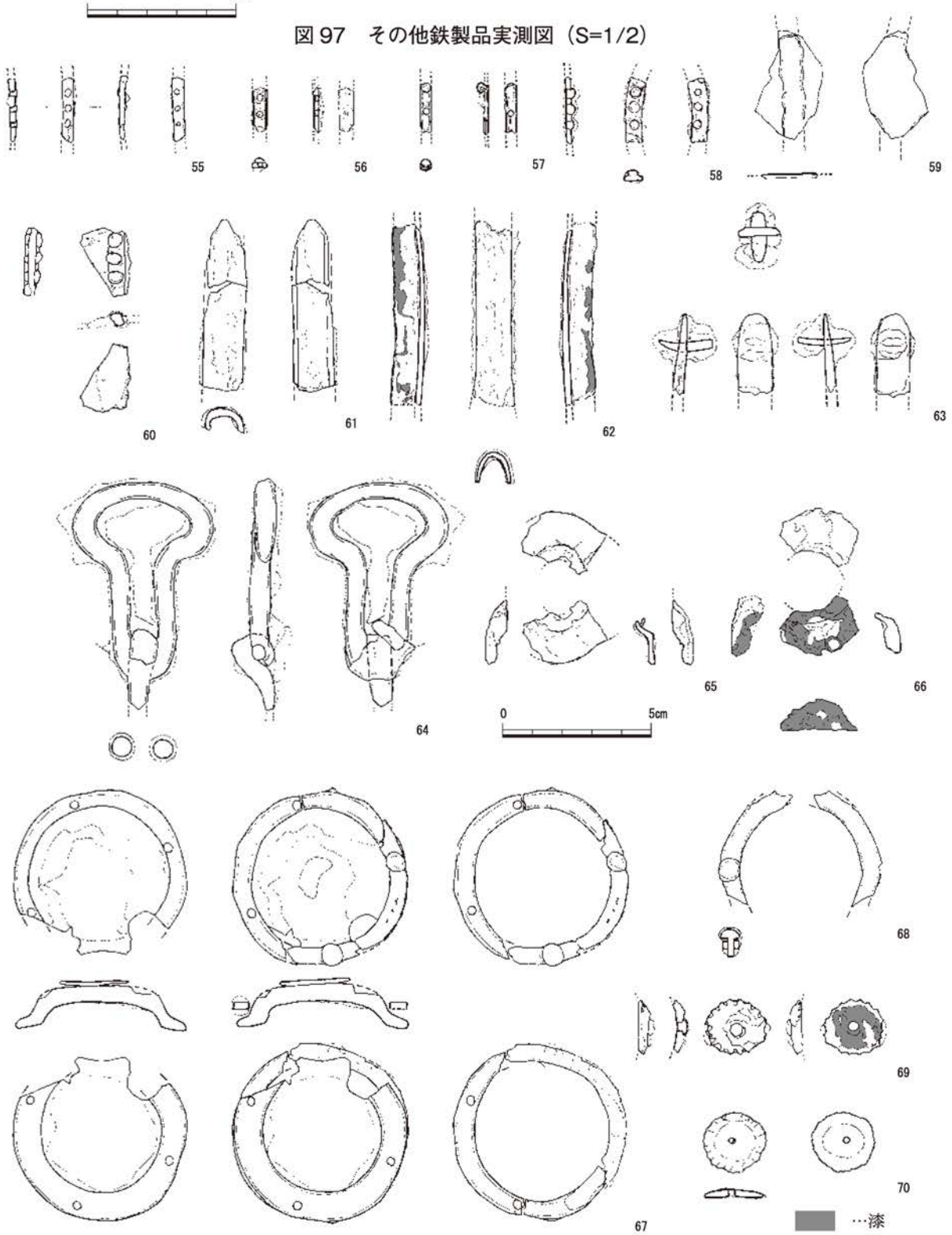


図 98　馬具（緑金具・覆輪・鞍金具・雲珠・辻金具・花形飾）実測図（S=1/2）

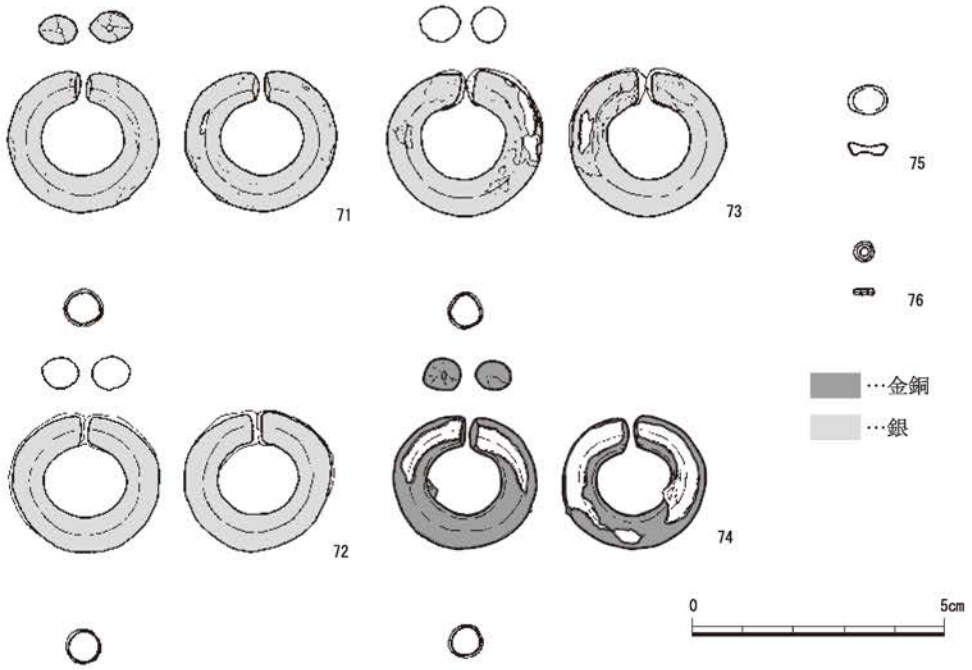


図 99　装身具（耳環、空玉、滑石臼玉）実測図（S=2/3）

cm、幅 4.65 cm、厚さ 0.65cmを測る。

鞍金具は輪金と脚を別造りとし、刺金を欠くものであり、金属製鞍の編年で第Ⅳ期（MT85 型式期～ TK43 型式期）に位置付けられる（宮代 1996・1997）。

雲珠・辻金具　（65・66）は、平面円形であり中央部がわずかに盛り上がるものである。雲珠よりも小さいことから、辻金具と判断したが、鞍金具の座金具の可能性もある。（66）は表面に漆が厚く付着し、銹着により表面は不明瞭である。

（67・68）は雲珠であり、脚部を持たない「無脚雲珠」である（宮代 1998）。（67）は、やや扁平な鉢部の周囲に縁部を被せる。縁部には、頭部が半球形に盛り上がる直径 0.7 ～ 0.8cmの鋲が 4 箇所認められ、鉢部とともにとどめる。鉢部の直径は 5.85cm、厚さは 1.6cm、縁部の幅は 0.7 cmである。鉢部には金銅板が張られ、縁部にも金銅板を巻き付けることから鉄地金銅張となる。表面には鍍金が認められる。鉢部への装飾や隆起は認められず、無文である。頂部には花形飾が付着した痕跡が認められるが、（69･70）との接合は出土状況からは確認できなかった。（68）は、鉢部を欠損する縁部である。表面に鍍金が認められ、金銅板を巻き付ける。鉢部の裏面には有機物の付着したような痕跡が残る。

これらの無脚雲珠はⅢ期（MT15 型式期）以降に出現するものとみられるが（宮代 1998）、下限はⅥ期（TK209 型式期）まで存続する。個体差が大きく編年的な位置づけは不明瞭である。

花形飾　（69･70）は、雲珠の頂部や鞍に鋲で装着される花形飾である。（69）は長さ 1.85cm、幅 2.2 cmの横長のもので、花弁を削り出す。頂部には、半球状の頭をもつ直径 0.5cmの鋲を打ち付ける。表面には銀張が、裏面には漆が確認できる。（70）は長さ 2.05cm、幅 2.1cmのものである。右下に銀張が認められる。鋲は遺存しないが、頂部には釘孔が認められる。

（6）装身具（図 99）

装身具（耳環・空玉・滑石臼玉）（71 ～ 76）は、前山 B370 号墳（4-2 トレンチ）の横穴式石

室の玄室から出土した。（71・72）は、近接する位置から出土した。（75・76）は、土壌水洗で得られた。

耳環　（71～74）は耳環であり、内部は中実である。（71～73）は銅芯銀張耳環である。（71）は幅3.0cm、長さ2.8cm、断面横の厚み0.8cm、縦の厚み0.7cmである。開口部の先端は、それぞれ尖らせる。（72）は3.0cm、長さ2.8cm、断面横の厚み0.7cm、縦の厚み0.7cmである。開口部の先端は錆により不明だが、X線写真からは平坦である。（73）は幅3.1cm、長さ2.9cm、断面横の厚み0.7cm、縦の厚み0.7cmである。開口部の先端は平坦である。銀の薄板が剥離し、銅芯が認められる。（74）は銅芯金張耳環であり、一部、金の薄板が剥離し、銅芯が認められる。幅2.9cm、長さ2.6cm、断面横の厚み0.7cm、縦の厚み0.7cmである。開口部の先端は、尖らせる。いずれの耳環も幅2.4cm以上で断面の厚み0.45cm以上の大型品に区分され、岩橋千塚古墳群ではTK43型式期以降に主体となる（石丸ほか2021）。

空玉・滑石臼玉　（75）は鉄空玉、（76）は滑石臼玉である。（75）は潰れて扁平となるもので、幅0.75cm、長さ0.6cmである。滑石臼玉の（76）は、幅0.4cm、長さ0.4cm、厚さ0.1cmである。1点のみの出土となる。

第4節　まとめ

（1）発見された古墳の評価（図100）

第4次調査の結果、岩橋千塚古墳群の前山B地区では2箇所の丘陵尾根筋上において古墳4基を発見した。前山B368、B369、B370、B371号墳の各古墳の概要は次のとおりである（第24図）。

前山B370号墳　前山B370号墳（4-2、4-17トレンチ）は、万葉植物園北の尾根筋上に位置する平坦面上で発見した。墳丘は、石室主軸上において東西端の墳丘裾を検出し、直径20mの規模を有する円墳であることが判明した。墳丘の大部分は岩盤削り出しにより築造し、上部及び墳丘外周部は盛土を行う。

また、埋葬施設は岩橋型横穴式石室であり、石室は東方向に開口する。削平等により側壁上部から天井部は欠失するが、玄室及び玄室前道、羨道、羨道前庭、墓道、墓道前庭が確認された。玄室は主軸長約2.6m、主軸幅約1.95mを測り、中規模の横穴式石室に区分できる。石室は、羨道、玄室の形に沿って岩盤を掘り込み石室掘形とする。石室掘形は主軸長6.4m、主軸幅約3.6m、深さ約0.8mであり、石室掘形に沿って壁体を積み上げている。玄門及び羨道には高さ0.24～0.26mの仕切石をそれぞれ設け、玄門仕切石、羨門仕切石とする。岩橋千塚古墳群内で確認される仕切石としては、高さがある点に特徴がある。前山B370号墳の横穴式石室は、羨門に板石を埋め込み立てており、玄門にも原位置を保たないが化粧石とみられる板石が出土していることから、岩橋型横穴式石室の変遷では4c型式（TK43型式期）に該当する（萩野谷2019）。また、横穴式石室の西側では、周辺埋葬施設を検出した。横穴式石室の玄室床面に用いられる川原石を用いて壁体の一部を構築しており、横穴式石室よりも後出するものとみられる。

玄室床面上の遺物の遺存状態は良好であり、原位置をとどめる副葬品も存在する。玄室床面からは武器（鉄刀・刀装具・鉄鏃）、工具（鹿角装刀子・鉄鉋・鉄鑿）、その他鉄製品、馬具（縁金具・覆輪・鞍金具・雲珠・辻金具・花形飾）、装身具（耳環・空玉・滑石臼玉）が出土し、馬具や武器、装身具の出土位置にはそれぞれまとまりが認められる。後述するとおり、副葬品の遺存状態が良好であり、金銅装馬具（鞍・後繋のみ）及び鹿角装刀、鉄製装飾付刀装具をもち、中規模墳にお

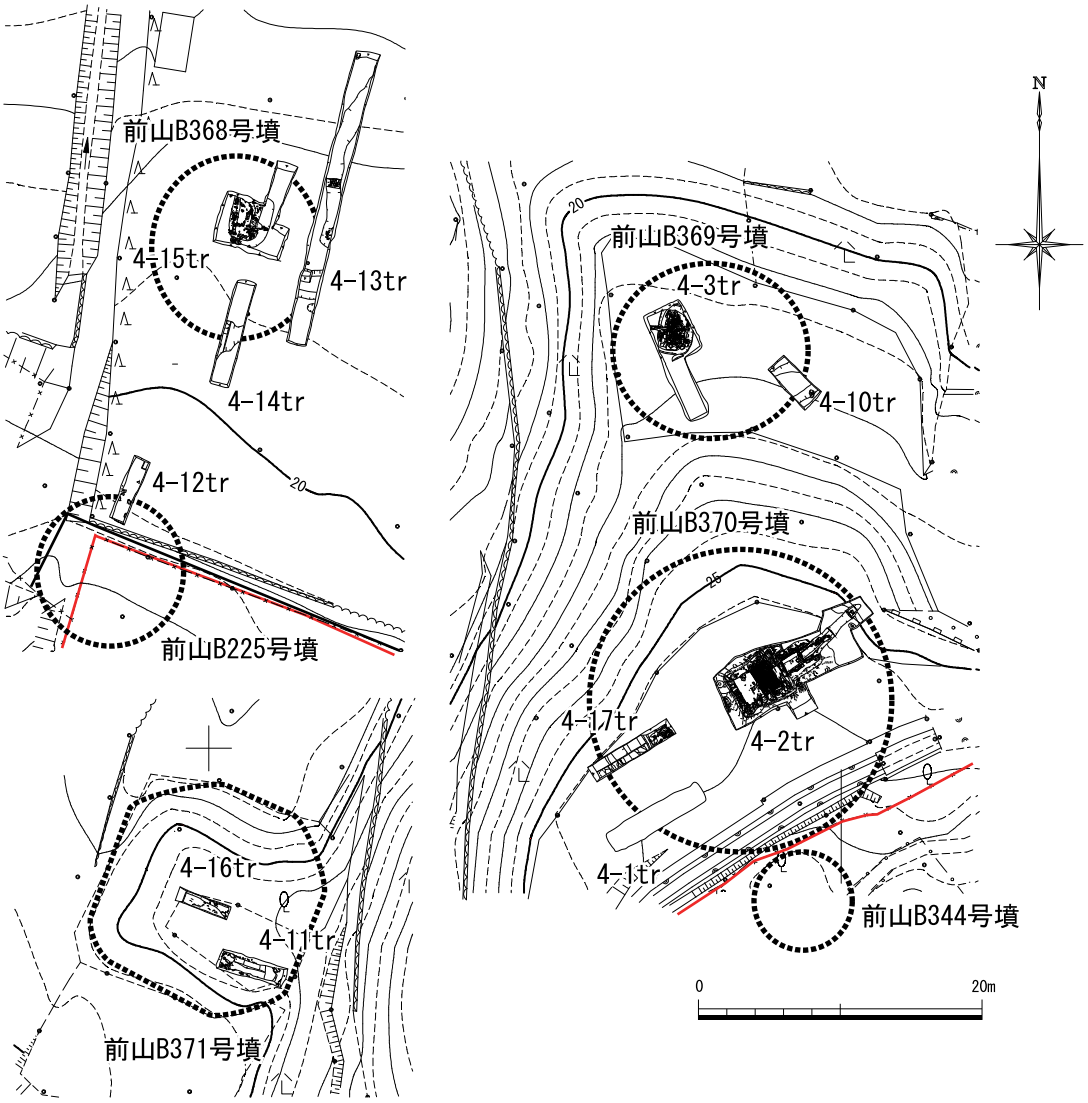


図 100　前山 B 地区古墳墳丘復元図（S=1/500）

ける副葬品組成を良好に示している。

副葬品、特に武器と馬具の編年からは、次のとおりに位置づけられる。鉄鏃は方頭形の鏃身部をもつ短頸鏃や茎に棘状関をもつ長頸鏃の存在から後期 2 段階（TK43 型式期）に位置付けられ（水野 2013）、馬具の鞍金具は輪金と脚を別造し刺金を欠くものであり、第Ⅳ期（MT85 型式期～ TK43 型式期）に位置付けられる（宮代 1996・1997）。このため、前山 B370 号墳の築造時期は須恵器の型式では TK43 型式期に位置づけられ、岩橋型横穴式石室の編年とも齟齬はない。このため、本古墳は、岩橋千塚古墳群における岩橋型横穴式石室、出土土器、副葬品の相互の編年研究の一つの交点となる。

前山 B369 号墳　前山 B369 号墳（4-3 トレンチ）、周辺（3-10 トレンチ）では、前山 B370 号墳の北尾根筋において横穴式石室と古墳に関連するとみられる溝を確認した。横穴式石室の玄室は主軸長 1.2 ～ 1.3m、主軸幅 2.1m を測り、T 字形石室となる。石室は玄室の形に沿って岩盤を掘り込み、掘形に沿って壁体を積み上げている。壁体は、平積みを基本とする。床面は川原石と結晶片岩の板石を敷き詰める。玄室内からの遺物の出土は認められなかった。羨道は主軸上で 2.3m の長さで検出し、幅は 0.6m である。玄門付近に框石を設け、玄室と羨道を区画する。周辺

の 3-10 トレンチでは、幅 2.4 ～ 2.6m の溝 1 条を検出した。南側の肩部からは結晶片岩の板石 3 石が並び、周囲から須恵器蓋坏・短頸壺が出土した。また、溝の中央部分では須恵器坏蓋・坏身・壺・甕・提瓶、土師器片が多数出土しており、これらは TK43 型式期の所産である。この溝は前山 B369 号墳に近接しており、古墳に関連する遺構と考えられ、これらの遺物は前山 B369 号墳の築造時期を示すとみられる。

前山 371 号墳　前山 B371 号墳（4-11、4-16 トレンチ）は、万葉植物園北の尾根裾から西側に張り出した東西約 12.5m、南北約 10m の方形状の高まりに位置する。埋葬施設は検出していないが、4-11、4-16 トレンチにおいて墳丘盛土とみられる盛土層を確認した。盛土層の分布範囲と周辺地形から、前山 B371 号墳は東西 12.5m 以上、南北約 10m の墳丘が復元できる。墳丘からは古墳時代後期の須恵器甕が出土した。

前山 B368 号墳　前山 B368 号墳（4-15 トレンチ）では、花木園東部地区の尾根筋の延長上で埋葬施設とみられる石積とその掘形を確認した。埋葬施設の詳細は不明であるが、東西約 1.2m、南北約 1.8m の規模をもち、横穴式石室または竪穴式石室と考えられる。埋葬施設は基盤層を掘り込み掘形としている。この付近では、昭和 57 年に苗木移植中に須恵器有蓋台付壷・蓋・短頸壺が出土しており、前山 B368 号墳から出土した可能性がある。今回の発掘調査においては、築造された時期を判断する資料は出土していないが、これらの資料については有蓋台付壷が TK43 型式期に、蓋・短頸壺が TK209 型式期に該当し、当古墳の築造時期を示す可能性がある。

発見された古墳の評価　前山 B370 号墳については、直径約 20m の円墳であり、横穴式石室の玄室は主軸長 2.6m、主軸幅 1.95m を測ることから、中規模の円墳であると評価できる。また、副葬品は金銅装馬具（鞍・後繋のみ）及び鹿角装刀、鉄製装飾付刀装具をもち、中規模墳における副葬品組成を良好に示している。これらの点から前山 B370 号墳は、前山 A 地区及び前山 B 地区における有力古墳の一つであり、付近の万葉植物園並びに花木園地区の古墳群の中での中心的な古墳として位置づけることができる。

また、その他、3 基の古墳も隣接する特別史跡指定地内の古墳との築造の関連性がうかがえる。前山 B369 号墳、前山 371 号墳は、万葉植物園の北に延びる尾根筋とそこから派生する高まり上に位置し、前山 B370 号墳とともに、特別史跡指定地における万葉植物園北付近に存在する 10 基の古墳（前山 B338 号墳～前山 B347 号墳）との地形の連続性及び小支群としての同一性でとらえることが可能である。また前山 B368 号墳についても、花木園東部地区の丘陵尾根が北に張り出しており、特別史跡指定地に存在する 4 基の円墳（前山 B221 号墳～前山 B225 号墳）との小支群としての同一性が認められる。

以上のように発見された 4 基の古墳は、周辺の古墳を含めた地形の連続性、中小規模の円墳が密集して築造される群集性、支群構成の同一性から、特別史跡指定地の前山 B 地区の古墳と同一であると位置づけることができる。このため、これら 4 基の古墳についても、特別史跡指定地の各古墳と同様に保護を図る必要がある。

（2）副葬品からみた前山 B370 号墳と階層性（表 6）

第 4 次調査の結果、前山 B370 号墳については中規模墳であることが明らかとなった。玄室床面には、原位置をとどめる副葬品も存在している。前山 B370 号墳の石室埋土は大きく 2 層に区分でき、玄室は近現代、中世以前と大きく二時期の堆積を示す。石室埋土下層は中世以前に埋没していたため、近現代における盗掘をさほど被っておらず、玄室床面の遺存状況は比較的良好で

あると考えられる。岩橋千塚古墳群では明治・大正期に盗掘を受け、副葬品の様相が不明である古墳が多いが、副葬品の内容が明らかな点は前山 B370 号墳の特徴といえる。

このため、先述したとおり、前山 B370 号墳は、岩橋千塚古墳群内における岩橋型横穴式石室、出土土器、副葬品の相互の編年研究の一つの交点となる。さらに、墳丘や石室の規模から推定できる中規模墳の副葬品組成の一例を示すと位置づけることができる。

前山 B370 号墳の副葬品の組成は、武器（鉄刀、刀装具、鉄鏃）、工具（鹿角装刀子･鉄鑿･鉄鉇）、その他鉄製品、馬具（縁金具・覆輪・鞍金具・雲珠・辻金具・花形飾）、装身具（耳環・空玉・滑石臼玉）である。

武器のうち、鉄刀は把・鞘に鹿角が認められ、鹿角装刀と考えられる。一方、刀装具は鞘尻・鞘口金具とともに把頭の装飾に用いられた鳩目金具が出土しており、いずれも鉄製であるが装飾付刀装具と考えられる。また工具は鹿角装の把、把縁金具をもつ鹿角装刀子とともに鉄鉇・鉄鑿が認められる。また、馬具は鉄地金銅張の雲珠、鞍に関わる縁金具・鞍金具、鉄地銀張の花形飾が出土しており、鍍金・銀張が良好に遺存するものも認められる。しかし、銜や引手、鏡板など轡が出土しておらず、鞍（縁金具・覆輪・鞍金具）及び尻繋（雲珠・辻金具）に関わる馬具のみの出土である点で実用的な馬具への偏りが認められる。また、雲珠も無脚雲珠であり、杏葉や馬鈴が出土していないことなども装飾的な要素が少ないといえる。さらに装身具は大型の銅芯金銅張及び銀張の耳環が出土しているが、玉類の出土は滑石臼玉１点のみで極めて少なく、ガラス玉の副葬などは認められない。以上の傾向は、玄室の西半側の床面直上が未調査であることに起因する可能性もあるが、床面上の遺存状況を最大限に評価すれば、前山 B370 号墳の副葬品組成の特徴であるといえる。

表６　岩橋千塚古墳群における馬具副葬古墳と副葬品

古墳名	墳丘規模	墳形	埋葬施設	時期	馬具									金銅・銀製品＊	刀剣	出土
					杏葉	轡		鞍		尻繋		鈴具・吊金具	その他			
						銜・引手	鏡板	鐙	鞍・鞍	辻金具	雲珠					
花山6号墳	49	前	横	TK47									金銅金具片	○		発掘
大谷山 22 号墳	68	前	横	MT15	○											発掘
井辺前山 6 号墳	49	前	横	MT15	○	●		●		●	○				●	発掘
花山 33 号墳	33	前	横	MT15		●						●				発掘
大谷山 6 号墳 横穴式石室	25	前	横・竪・箱	MT15			●					●				発掘
前山 A58 号墳	19.6	前	横	MT15		●	●									発掘
井辺前山 36 号墳	—	円	竪	MT15		●	●					●			●	発掘
大日山 35 号墳	86	前	横	TK10	○	●	●	●	○	○	○	○		○		発掘・水洗
寺内 18 号墳 （前方部横穴式石室）	28.5	前	横・横・箱	TK10		●	●									発掘
岩橋字大岩谷				TK10	○					○	○	○		○	●	採集
天王塚古墳	88	前		MT85	○		○		○			●		○冠・飾履	●	発掘・水洗・採集
将軍塚古墳 （前山 B53 号墳）前方部	42.5	前	横・横・箱	MT85		●	●									発掘
群長塚古墳 （前山 B112 号墳）	30	前	横	MT85								●			●	発掘
井辺前山 32 号墳 北方石室	12	円	横・竪	MT85		●							●		●	発掘
伝土手形塚				MT85				●	●	○	○	●		●	○銀象嵌	採集
山東 22 号墳	28	円	横	TK43		●	○		●	○	○	●		○冠	○銀象嵌	発掘
大谷山 16 号墳 横穴式石室	20	円	横	TK43					○ 縁金具	○			鉄製鋲金具		○金銅	発掘
前山 B370 号墳	20	円	横・箱	TK43					○	●	○				□・●	発掘・水洗
前山 B220 号墳 （K-4 号墳）2 号石室	17	円	横・横・竪	TK43		●									●	発掘
前山 A13 号墳	16	円	横	TK43		●	●			○	○?	●	鎖		●	戦前発掘
井辺1号墳	42	方	横	TK209								●		○	○金銅	発掘
伝花山			横	TK209		●	●				○					採集

首長墳　●鉄装または不明　○金・金銅・銀装　□鹿角装　＊耳環を除いた装身具

岩橋千塚古墳群の副葬品は、上位の古墳には馬具・耳環の副葬が認められ、金銅装馬具はより上位の古墳に限られる。また、首長墳には、金属製玉をはじめ豊富な種類と量の玉類が認められることがすでに指摘されている（瀬谷 2016）。

しかし、前山B370号墳の馬具の存在は、必ずしも首長墳に金銅装馬具を副葬するわけではなく、中小規模墳にも金銅装馬具が副葬されることを示す。このため、前山B370号墳をはじめとした岩橋千塚古墳群の副葬品の内容について、馬具副葬古墳に限定し、馬具の組成、刀剣、金銅製品の有無を中心に改めて検討した（表6）。

各時期の最大級の規模をもつ首長墳とそれ以外の古墳は、盗掘により副葬品の全容が明らかでない古墳も多いが、比較を行うと次のような傾向が新たに判明する。馬具は首長墳から中小規模墳まで幅広く副葬されるが、首長墳では轡から鞍、尻繋まで馬具一式に装飾を伴う杏葉が伴うのに対し、それ以外では轡のみ、鞍と尻繋のみといった馬具の部位に偏りが認められ、装飾をもつ杏葉や馬鈴などの出土が認められない。そして、小規模墳では金銅装馬具の副葬が少ないという傾向が認められる。また、刀剣は幅広い階層から認められるが、特にTK43型式期以降は首長墳には金銅装や銀装、銀象嵌の装飾付刀装具を副葬するのに対し、中小規模墳では鉄装または鹿角装の装飾付刀装具の副葬が認められる。そして耳環を除いた金銅製品の装身具については、首長墳には飾履、冠などが副葬される傾向がある。これらの点から古墳時代後期後葉以降、馬具の組成、刀剣、金銅製品の副葬からみた階層差は、より明瞭となるといえる。

このように、新たに判明した前山B370号墳の副葬品は中規模墳の様相を示しており、岩橋千塚古墳群における中小規模墳の階層性に関してより詳細な検討を広げることができる資料と評価できる。

【参考文献】

石丸　彩・岩本　崇・金澤　舞・瀬谷今日子・ 中西瑠花・仲原知之・馬場彩加 2021「和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群 出土品について（2）―銅鏡及び耳環、玉、陶質土器―」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第42号　和歌山大学紀州経済史文化史研究所

石丸　彩・金澤　舞・瀬谷今日子・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加 2022「和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群 出土品について（3）―伝土手形塚出土の馬具及び鉄刀、銀象嵌大刀、鉄鏃、胡籙、両頭金具、その他鉄製品―」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第43号　和歌山大学紀州経済史文化史研究所

臼杵　勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号

大野嶺夫 1981「紀伊風土記の丘万葉植物園出土の黥面埴輪について」『和歌山県埋蔵文化財情報』15　財団法人和歌山県文化財研究会

奥村　薫 1996「岩橋丘陵採集の須恵器について」『和歌山地方史研究』29・30　和歌山地方史研究会

瀬谷今日子 2016「岩橋千塚古墳群における副葬品の様相」『岩橋千塚とその時代－紀ノ川流域の古墳文化－』平成28年度秋期特別展図録　和歌山県立紀伊風土記の丘

萩野谷正宏 2019「岩橋千塚古墳群における横穴式石室の展開過程」『古代学研究』219　古代学研究会

廣瀬　覚 2021『6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究』奈良文化財研究所

水野敏典 2013「鉄鏃」『古墳時代の考古学4　副葬品の型式と編年』同成社

宮代栄一 1996「古墳時代の金属製鞍の研究－鉄地金銅装鞍を中心に －」『日本考古学』第3号　日本考古学協会

宮代栄一 1997「島根県上島古墳出土馬具の再検討－古墳時代の鞍金具の多変量解析－」『島根県考古学会会誌』第14集島根考古学会

宮代栄一 1998「「無脚雲珠」の型式学的研究－その用途をめぐって －」『土曜考古』第22号　土曜考古学研究会

和歌山県教育委員会 2023『和歌山県埋蔵文化財調査年報－令和3年度－』和歌山県教育庁

和歌山市教育委員会 2016『和歌山市内遺跡発掘調査概報』平成26年度　和歌山市教育委員会

和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所 1976「花木園東部地区の古墳」『紀伊風土記の丘年報』第3号

表７　遺物観察表１

土器・埴輪

報告書番号	古墳トレンチ	遺構層位	種類	器種	法　量（cm）			残存率（部位）	形態・技法	胎土	色調（土色）	備　考
					口径	器高	底径					
1	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-A 区	埴輪	円筒埴輪	(4.9)	(5.5)	1.6	5% 以下	突帯貼り付け、外面板状工具によるヨコハケ・タテハケ、内面ナナメハケ	密 1 ～ 3mm 大の石英多量 1mm 以下の～ 1mm 位のチャート中量	内面 : 明赤褐 5YR5/6 外面 : 明赤褐 5YR5/6 断面 : にぶい赤褐 5YR5/4	
2	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室拡張区 石室掘形 流入土	埴輪	円筒埴輪	(27.1)	(6.4)	-	口縁部 16%	口縁端部ナデ、内面ナナメハケ後、一部ヨコハケ、外面はタテハケ後、ヨコハケ	やや粗い 0.2 × 0.5cm の片岩、1.5cm 以下の灰色、長石を少量含む	内面 : にぶい橙 5YR6/4 外面 : にぶい橙 5YR6/4 断面 : 灰褐 7.5YR6/2	反転復元
3	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室拡張区 石室掘形 流入土	土師器	壺	-	(2.5)	-	5% 以下	口縁端部欠損、外面ナデ、内面ヨコナデか	密 0.5mm 以下の長石を微量含む	内面 : 明赤褐色 2.5YR5/6 外面 : 明赤褐 5YR5/6 断面 : 明赤褐 5YR5/6	口縁端部欠損
4	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区 2-B 区	土師器	皿	11.9	2.6	5.2	70%	口縁部内面から体部外面にかけヨコナデ、体部外面から底部ユビオサエ＋ナデ、内面は板状工具によるナデ	密細かい石英少量最大 3mm 位のチャート微量	内面 : 明赤褐 2.5YR5/6 外面 : 明赤褐 2.5YR5/6 断面 : 明赤褐 2.5YR5/6	
5	前山 B370 号墳 4-17 トレンチ	周辺埋葬施設	須恵器	高坏	(9.5)	(3.8)	-	坏部 30%	内外面回転ナデ、外面体部から底部にかけ回転ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り	密 2 × 2mm 以下の黒色粒微量含む	内面 : 暗赤褐 2.5YR3/2 外面 : 暗赤灰 10YR3/1 断面 : にぶい赤褐 2.5YR4/3	反転復元
6	前山 B369 号墳 4-3 トレンチ	遺構 8	須恵器	坏身	(12.1)	(2.4)	-	口縁部 10%残	内外面回転ナデ	やや粗 1mm 以下の長石を多量に含む	内面 : 灰 N4/0 外面 : 灰 N4/0 断面 : 暗赤褐 10R3/2	反転復元
7	前山 B369 号墳 4-3 トレンチ	第 2 層	須恵器	甕	-	-	-	5% 以下	外面に平行タタキ後スリ消し、内面に当て具痕	やや粗 3mm 以下の長石を多量に含む	内面 : 灰 N6/0 外面 : 黒 N2/0 断面 : 灰赤 7.5R4/2	
8	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏蓋	14.2	3.8	-	80%	体部外面から内面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り	粗 1/9 × 0.6cm の片岩 1 個、4mm 以下の片岩、赤色斑粒を多量含む	内面 : 灰 N5/0 外面 : 灰 N5/0 断面 : 灰 N4/0	
9	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏蓋	(14.4)	(3.9)	-	50%	体部外面から内面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り	粗 3mm 以下の長石を少量、1mm 以下の赤色斑粒を多量に含む	内面 : 灰白 N7/0 外面 : 灰 N6/0 断面 : 灰内側 4/0・外側 N5/0	
10	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏蓋	(14.4)	(3.4)	-	天井部 30%	口縁部外面より内面回転ナデ、底部内面回転ナデ後ナデ、体部外面から底部回転ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り	やや粗 2.5mm 以下の石英、長石を多量に含む	内面 : 灰 N5/0 外面 : 灰 N5/0 断面 : 灰 N5/0	反転復元
11	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏蓋	14.1	3.6	-	80%	底部外面付近自然釉付着、内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り	密 1 ～ 3mm の長石中量	内面 : 灰白 5YR7/1 外面 : 灰白 N7/1 断面 : 褐灰 7.5YR4/1	外面に溶着痕あり
12	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏蓋	(13.3)	(2.6)	-	口縁部 14%	体部外面から内面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	密 1mm 以下の長石、赤色斑粒を微量含む	内面 : 灰 N4/0 外面 : 灰 N4/0 断面 : にぶい赤褐 5YR4/4	反転復元
13	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏蓋	(14.2)	(2.6)	-	5% 以下	体部外面から内面回転ナデ、外面底部回転ヘラケズリ	密最大 2mm 位の石英微量細かい長石少量	内面 : にぶい黄橙～灰 10YR6/3 ～ 5Y6/1 外面 : 灰 5Y6/1 断面 : にぶい黄橙～灰 10YR7/3 ～ 5YR6/1	反転復元
14	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏蓋	14.3	(4.0)	-	70%	体部外面から内面回転ナデ、体部外面から底部回転ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り	粗 2mm 以下の長石、赤色斑粒を多量に含む	内面 : 灰白 N7/0 外面 : 灰 N6/0 断面 : 暗赤褐 5Y4/1	
15	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏身	(14.1)	(3.1)	-	口縁部 20%	受部に重ね焼痕跡有、受部から体部外面にかけて自然釉付着、体部外面から内面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り	密 1 ～ 2mm の長石少量	内面 : 灰白 5Y7/1 外面 : 灰白 7.5Y7/1 断面 : にぶい黄橙 10YR7/2	反転復元
16	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏身	(14.3)	(2.7)	-	口縁部 20%	受部に重ね焼痕跡有、体部外面自然釉付着（灰かぶり）か、体部外面から内面回転ナデ、体部外面から下回転ヘラケズリ	密 1 ～ 2mm の石英少量	内面 : 灰白～黄灰 2.5Y7/1 ～ 2.5Y6/1 外面 : 灰白 N7/1 断面 : 灰褐 7.5YR6/2	反転復元
17	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏身	(14.3)	4.0	(5.4)	口縁部 15%	体部外面から内面回転ナデ、体部から底部外面回転ヘラケズリ、ロクロ回転反時計回り	密最大 5mm 位の石英微量 1mm 位の長石少量	内面 : 灰白 5Y7/1 外面 : 灰白 7.5Y7/1 断面 : 灰黄 2.5Y7/2	反転復元
18	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏身	(14.0)	(1.9)	-	口縁部 20%	体部外面に自然釉付着、外面回転ナデ	密 1 ～ 2mm の石英少量	内面 : 灰 7.5Y6/1 外面 : 灰 7.5Y6/1 断面 : 灰 7.5Y6/1	反転復元
19	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	坏身	(13.2)	3.5	4.1	40%	体部外面から内面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、ロクロ回転時計回り	密 1 ～ 2mm の石英？少量	内面 : 灰白 N7/0 ～ 5Y7/1 外面 : 灰 N6/0 断面 : 灰白 5Y7/1	反転復元
20	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	壺	(14.3)	(4.5)	-	口縁部 7%	内外面に自然釉。内外面回転ナデ	やや粗 1mm 以下の長石と多量に含む	内面 : 灰白 N7/0 外面 : 黒～灰白 N2/0 ～ N7/0 断面 : 表面灰 N6/0 内部灰 N4/0	反転復元
21	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	甕	(15.9)	(3.5)	-	口縁部～ 肩部 30%残	口縁端部ナデ、頸部外面タタキ後カキメ、口縁部から頸部内面回転ナデ、体部内面に当て具痕	密 1mm 以下の長石を微量含む	内面 : 灰 7.5Y6/1 外面 : 灰 7.5Y6/1 断面 : 灰 7.5Y6/1	反転復元
22	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	短頸壺	-	(2.8)	-	体部 10%	体部内面から外面まで回転ナデ、体部外面カキメ	密 0.5mm 以下の長石を微量含む	内面 : 灰 N4/0 外面 : 灰 N5/0 ～ N4/0 断面 : 灰 N6/0	反転復元
23	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	短頸壺	-	(4.6)	体部 最大径 (13.8)	体部 12%	内外面摩滅のため調整不明瞭	密 1mm 以下の赤色斑粒を微量含む	内面 : 浅黄橙 10YR8/3 外面 : 浅黄橙 10YR8/3 断面 : にぶい黄橙 10YR7/2	反転復元
24	前山 B369 号墳 周辺 4-10 トレンチ	遺構 1	須恵器	提瓶	-	(12.4)	-	30%	肩部外面に自然釉付着、体部外面に回転するカキメ。	やや粗 1.5mm 以下の赤色斑粒を多量に含む	内面 : 灰白 N7/0 外面 : 灰白～灰 N7/0 ～ N4/0 断面 : 灰白 N7/0	
25	前山 B371 号墳 4-11 トレンチ	断ち割り 盛土下層	須恵器	甕	-	-	-	5% 以下	体部外面に平行タタキ及びカキメ、内面に当て具痕	密 1mm 以下の長石を微量含む	内面 : 灰 N4/0 外面 : 灰 N4/0 断面 : 表面灰 N6/0 内部暗紫灰 5RP3/1	

報告書番号	古墳トレンチ	遺構層位	種類	器種	法量（cm）			残存率（部位）	形態・技法	胎土	色調（土色）	備考
					口径	器高	底径					
26	前山 B368 号墳 4-15 トレンチ	第 3 層	弥生土器	甕	(13.1)	(1.7)	-	口縁部 10%	口縁端部にキザミ、口縁部に黒斑みられる。外面はハケによる調整か	密 0.5mm 以下の赤色斑粒石英微量含む	内面：にぶい橙 7.5YR5/4 外面：灰褐～にぶい橙 7.5YR6/2 ～ 5YR6/4 断面：灰褐 7.5YR4/2	反転復元
27	前山 B368 号墳 4-15 トレンチ	排土	弥生土器	壷	(18.0)	(1.2)	-	口縁部 8%	口縁部に貼付竹管文（円形浮文）、内外面摩滅のため調整不明瞭	密 1mm 以下の長石を微量含む	内面：褐 7.5YR4/3 外面：明赤褐 5YR5/6 断面：明赤褐 5YR5/6	反転復元
28	前山 B368 号墳 4-15 トレンチ	埋葬施設埋土（北側）	須恵器	甕	-	(3.9)	-	5% 以下	外面に自然釉、外面は平行タタキ、内面は回転ナデ	密 2.5mm 以下の赤色斑粒を少量含む	内面：灰 N5/0 外面：灰白～灰 N8/0 ～ N5/0 断面：灰 N6/0	
29	花木園東地区隣接地 4-13 トレンチ	遺構 1 埋土黒褐色	土師器	高坏	-	(7.5)	-	脚部 50%	脚部外面ハケ、脚裾部はハケかち、坏身内面ナデ、脚部と杯身の接合部分に接合痕有、脚部内面にシボリ痕有	密 1mm 以下の長石を多量 石英、赤色斑粒を少量含む	内面：赤 10R4/6 外面：明赤褐 2.5YR5/6 断面：灰黄褐 10YR4/2	一部反転復元
30	花木園東地区隣接地 4-13 トレンチ	遺構 1 埋土黒褐色	須恵器	甕	(34.2)	(4.7)	-	口縁部 10%	口縁端部内面に自然釉付着、内外面回転ナデ	密 1mm 以下の赤色斑粒を少量含む	内面：灰 N4/0 外面：灰 N4/0 断面：灰白 N7/0	反転復元
31	花木園東地区隣接地 4-14 トレンチ	遺構 1 埋土	弥生土器	壷	(19.5)	(1.2)	-	口縁部 5%以下	口縁部に貼付竹管文（円形浮文）、内外面摩滅のため調整主明瞭	密 1.5mm 以下の赤色斑粒を少量含む	内面：橙 5YR6/6 外面：明赤褐 5YR5/6 断面：橙 5YR6/6	反転復元
32	花木園東地区隣接地 4-14 トレンチ	遺構 1 埋土	弥生土器	甕	-	(2.7)	(4.0)	底部 30%	底部ドーナッツ底、外面平行タタキ、内外面摩滅のため調整不明瞭	やや粗 5mm 以下の赤色斑粒を多量に含む	内面：橙 5YR6/6 外面：橙 5YR6/6 断面：橙 5YR6/6	反転復元
33	花木園東地区隣接地 4-14 トレンチ	遺構 1 埋土	須恵器	高坏	(9.6)	(2.7)	-	坏部 10%	口縁部外面から内面に自然釉付着、内外面回転ナデ	密	内面：灰 N6/0 外面：暗灰 N3/0 断面：灰 N6/0	反転復元
34	花木園東地区隣接地 4-14 トレンチ	遺構 1 埋土	須恵器	甕	(20.2)	(4.8)	-	口縁部 10%	口縁端部から内部にかけ自然釉付着、内外面回転ナデ	密 1mm 以下の赤色斑粒を少量含む	内面：灰 N6/0 外面：灰 N5/0 断面：灰 N4/0	反転復元

表 8　遺物観察表 2

武器

※金属製品については保存処理前の計測値

報告書番号	古墳トレンチ	遺構層位	種類	細別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 g	特　徴	備考
35	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室拡張区床面	武器	鉄刀	(40.0)	5.8 断面幅 2.7	0.55	-	切先先端及び刀身一部、茎尻欠損、目釘穴は確認できない。鞘及び刀装具の一部に鹿角が遺存する	
36	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-B 区床面	武器	刀装具鞘尻金具	3.8	3.5	2.3 断面厚さ 0.2	16.48	鞘尻金具。上端はすぼまる	
37	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-A 区床面	武器	刀装具鞘口金具	1.4	3.0 側面 1.8	1.8	2.45	鞘口金具。鋲 2 個が残り縁に沿って巡らせる	
38	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-B 区床面	武器	刀装具鳩目金具	(1.05)	(1.1)	(0.7)	1.02	鉄製の鳩目金具、側面に木質が付着する。	
39	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-B 区床面	武器	刀装具鳩目金具	1.1	1.3 断面幅 1.1	0.8	1.00	鉄製の鳩目金具、側面に木質が付着する。	
40	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	武器	鉄鏃短頸鏃	10.65	2.0 断面幅 1.5	0.25	-	鏃身～茎。鏃身部は長三角形、一部に欠損。茎に矢柄（木質）残る。弱く折れ曲がる。	
41	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	武器	鉄鏃有茎鏃	9.0	2.65 断面幅 2.15	0.25	-	鏃身～茎。鏃身部先端及び茎先端は欠損。鏃身部は方頭形（五角形）。	
42	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	床面　玄室 2-B 区	武器	鉄鏃長頸鏃	12.5	1.25 断面幅 1.1	(0.6) 断面厚さ 0.5	4.29	鏃身～茎。鏃身部先端及び茎先端は欠損。鏃身部は圭頭形（五角形）。茎関の形状は棘状関となる茎関付近に矢柄（木質）、その上から口巻き（樹皮）が一部に残る。	
43	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室床面	武器	鉄鏃短頸鏃	14.4	2.1 断面幅 1.5	0.25	-	鏃身～茎。鏃身部先端及び茎先端は欠損。鏃身部は圭頭形（五角形）。茎関の形状は棘状関となる茎関付近に矢柄（木質）、その上から口巻き（樹皮）が一部に残る。	
44	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	武器	鉄鏃長頸鏃	(8.6)	(1.1) 断面幅 1.0	(0.7)	8.17	頸部～茎関、茎の一部。茎関の形状は棘状関となる	
45	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室拡張区床面	武器	鉄鏃短頸鏃	(6.0)	1.3 断面幅 0.5	1.0 断面厚さ 0.7	6.79	鏃身部～茎、鏃身部、茎先端はいずれも欠損。鏃身部の形状は不明。	
46	前山 B370 号墳 4-17 トレンチ	周辺埋葬施設	武器	鉄鏃長頸鏃	(3.9)	(0.8) 断面幅 0.7	(0.7) 断面厚さ :0.4	2.14	長頸鏃の茎部分	

工具

報告書番号	古墳トレンチ	遺構層位	種類	細別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 g	特　徴	備考
47	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室北 2-A 区床面上層	工具	鹿角装刀子	10.8	6.2 断面 1.75	0.4	-	鹿角装の把をもち、両関の把縁には装具をもつ。刃部の大半は欠損する	
48	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室拡張区奥壁付近床面上層	工具	鉄鉋	8.7	1.8 断面幅 1.1	1.5 断面厚さ 0.4	14.03	刃部・柄部の先端は欠損。上端に向かって折り曲げる	
49	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室中央セクション床面上層	工具	鉄鉋または鉄鑿	6.2 5.5	1.7 断面幅 1.6	0.7 断面厚さ :0.6	6.78 10.06	刃部・柄部の先端は欠損。２片が銹着しており、本来は２個体ものとみられる。反りが認められないことから鉄鑿の可能性もある	
50	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	工具	鉄鉋	17.9	2.45 断面幅 1.0	0.6	-	刃部先端は欠損。図面上端に向かって細くなり、弱い反りが認められる	

その他鉄製品

報告書番号	古墳トレンチ	遺構層位	種類	細別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 g	特　徴	備考
51	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	その他	武器または馬具	2.6	2.25	0.15	-	端部の一部が残存する。	
52	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	その他	武器または馬具	1.75	3.0	0.15	-	３方向の端部が遺存し、上端が広くなる	
53	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室	その他	武器または馬具	(1.8)	(3.9)	(0.1)	3.09	漆が付着。弱い反りを有する。馬具の州浜形・磯の一部か	
54	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-A 区床面	その他	武器または馬具	(1.7)	(3.2)	(0.15)	3.15	上部の一部に漆が付着。弱い反りを有する。馬具の州浜形・磯の一部か	

馬具

報告書番号	古墳トレンチ	遺構層位	種類	細別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量g	特　徴	備考
55	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	馬具	縁金具	2.1	0.5 断面幅 0.4	0.4 断面厚さ 0.3	0.6	部位不明、鋲が 3 個、いずれも径 0.2cm 平面円形、断面形状から頭部は欠損か	
56	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	羨道床面	馬具	縁金具	(1.5)	0.5	0.15	0.52	部位不明、鋲 2 個、径 0.3cm 平面円形、断面形状は半球形。	
57	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	馬具	縁金具（鉄地金銅張）	(1.7)	0.4	0.4	0.30	部位不明、鋲 2 個、径 0.3cm 平面円形、断面形状は半球形。もう一つの鋲は頭部欠損。金銅板を巻き付ける	
58	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	馬具	縁金具	(2.1)	0.6	0.4	1.10	縁部に鋲 3 個、頭部は径 0.3 ～ 0.4cm でいずれも平面形状は円形。	
59	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	馬具	縁金具 磯・州浜形	3.65	2.2	0.1 ～ 0.2	-	縁金具が剥離した鉄地金銅張の板である。縁金具の左右に地板が続くことから、州浜形・磯の可能性がある。縁金具の剥離面については、幅約 0.7cm と他の縁金具よりも幅広である	
60	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室前壁付近床面	馬具	縁金具 磯・州浜形	(2.3)	(1.7) 断面幅 1.4	0.6	2.39	縁金具の左右に地板が続く。鉄地金銅張である。縁金具の幅は 0.6cm である。半球形で直径 0.4 ～ 0.5cm の鋲頭を用いて地板ごと留める	
61	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	馬具	覆輪	3.65	1.55 断面幅 1.5	0.9	6.13	鉄板を逆 U 字形に折り曲げる。	
62	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	馬具	覆輪	(6.3)	1.6	0.2	11.41	鉄板を逆 U 字形に折り曲げる。鞍に触れる内側には漆の付着が認められる	
63	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-B 区床面	馬具	鞍金具 脚	(2.7)	(1.6)	2.2	6.25	鞍金具の脚部。鉄板の先端に釘を打ち込んだものである。脚の先端部分に釘を打ち込み、木質部に絡める	
64	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	馬具	鞍金具 輪金・脚（鉄地金銅張）	7.8	5.3	0.65	-	鞍金具の輪金と脚である。断面円形の輪金と脚を別造りとするもので、輪金の先端部分に脚を折曲げ巻き付けるように取り付ける。輪金の平面形は左右に張り出し、中央に屈曲点をもつ。鍍金あり	
65	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-A 区床面	馬具	辻金具座金具	2.2	2.85	0.7	2.82	平面円形であり中央部がわずかに盛り上がるものである。辻金具か。鍍金あり	
66	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室中央セクション床面上層	馬具	辻金具座金具	2.0	2.6	1.1	3.65	平面円形であり中央部がわずかに盛り上がるものである。辻金具か。漆が付着	
67	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-B 区床面	馬具	雲珠（鉄地金銅張）	5.85	断面幅 0.7	断面厚さ 1.6	-	無脚雲珠。やや扁平な鉢部の周囲に縁部を被せる。縁部には、頭部が半球形に盛り上がる直径 0.7 ～ 0.8cm の鋲が 4 箇所認められ、鉢部とともに留める	
68	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-B 区床面	馬具	雲珠（鉄地金銅張）	3.8	6.2	鋲頭径 0.65 鋲長さ 0.9	4.49	雲珠の縁部。上部に金銅装一部残る。縁部に断面半球形の鋲頭が付着する	
69	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	馬具	花形飾（鉄地銀張）	1.85	2.2	0.55	2.31	横長のもので、花弁を削り出す。頂部には、半球状の頭をもつ直径 0.5cm の鋲を打ち付ける。裏面には漆が付着する	
70	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 2-A 区床面	馬具	花形飾（鉄地銀張）	2.05	2.1	0.2	-	横長のもので、花弁を削り出す。頂部には直径 0.3cm の釘孔がある	

装身具

報告書番号	地区	遺構層位	種類	細別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量g	特徴	備考
71	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-B 区床面	装身具	耳環 銅芯銀張	2.8	3.0	0.7 × 0.8	20.85	銅芯銀張耳環であり、内部は中実である。開口部の先端は、それぞれを尖らせている	
72	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-B 区床面	装身具	耳環 銅芯銀張	2.8	3.0	0.7 × 0.7	19.81	銅芯銀張耳環であり、内部は中実である。開口部の先端は、平坦である	
73	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-A 区床面	装身具	耳環 銅芯銀張	2.9	3.1	0.7	22.64	銅芯銀張耳環であり、内部は中実である。開口部の先端は、平坦である。銀の薄板が剥離し、銅芯が認められる。	
74	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室拡張区床面	装身具	耳環 銅芯金張	2.6	2.9	0.7	19.23	銅芯金張耳環であり、一部、金の薄板が剥離し、銅芯が認められる。開口部の先端は、尖らせている	
75	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-A 区床面	装身具	空玉	0.6	0.75	0.1 ～ 0.2	-	潰れており、現状は扁平	
76	前山 B370 号墳 4-2 トレンチ	玄室 1-A 区床面	装身具	滑石臼玉	0.4	0.4	0.1	0.01	穿孔径 0.2cm で扁平な臼玉	

第７章　調査成果のまとめ

（１）分布調査の成果

既往の調査と今回の分布調査の成果により、岩橋千塚古墳群の特別史跡未指定範囲のうち、大谷山地区・大日山地区・井辺地区・寺内地区・前山Ａ地区・前山Ｂ地区において、新規確認古墳83基を含む総数239基の古墳を確認した。また、7基の古墳で埋葬施設を新たに確認した。

新たに8基の古墳を確認した大日山地区では、複数の造り出し付円墳又は双円墳の可能性がある古墳の存在や、谷部に位置する古墳の分布が明らかになった。また、古墳で大日山35号墳南東側平坦面で円筒埴輪底部片を含む多数の埴輪の散布等を確認した。

井辺地区では、古墳の分布が丘陵裾付近に集中していること、さらに今回の調査において新たに15基の古墳を確認したことで古墳の分布密度が高くなること、これらの古墳に墳丘背後の丘陵部分を切断するように削り出した古墳が多数認められることを確認した。

寺内地区が位置する岩橋山塊の南斜面は、これまで北斜面と比較して古墳の分布が希薄になると考えられていたが、今回の調査において寺内地区で新基確認古墳59基を含む152基の古墳が尾根筋上に分布していることを確認した。このうち複数の古墳において井辺地区と同様の墳丘背後の丘陵部分を切断するように削り出した古墳がが認められた。また、新たに横穴式石室5基を確認したほか、寺内40号墳・41号墳・42号墳・43号墳等のように墳丘が良好に残存し未盗掘の埋葬施設が残されている可能性が高い古墳が複数存在していることも確認できた。

前山Ａ地区、前山Ｂ地区においても、確認した古墳の多くで石室の石積みの一部を確認することができ、古墳の分布並びにその遺存状況を確認することができた。

この他、分布調査を行った全ての地区において、地形及び岩盤の露出状況から石切場の可能性のある地点を複数箇所確認することができた。

（２）井辺１号墳の調査成果

井辺１号墳は、井辺地区の丘陵裾付近に立地する7世紀初頭の大型方墳で、墳丘規模は、南辺35m、北辺16m、側辺30mを測る。また、終末期の王権中枢の有力墳墓に認められる墳丘前面の基壇を有し、この基壇の平坦面は南北幅6m、東西42mで、周溝を含めた古墳全体の大きさは南北50m、東西42mになることが判明した。墳丘は前面が4段築盛である一方、背面は墳丘背後の尾根をカットして1段となる。旧地形の斜面を活かし、前面の装飾性が高くなるように設計され、加えて、墳丘が急傾斜で構築されていることや、前面の基壇の存在も相俟って、墳丘は平面規模の数値以上に視覚的な大きさを誇る。

井辺１号墳が位置する岩橋山塊南斜面の井辺地区及び寺内地区の古墳では、背面をカットする築造方法や選地など井辺１号墳との共通性が認められることから、井辺１号墳の築造を契機に周辺に古墳の築造が展開する状況が想定された。岩橋千塚古墳群では、6世紀前半に首長墓が築造される前後の時期に、周辺で中・小型古墳の築造が盛行することが確認されているが、終末期においてもこうした岩橋千塚古墳群での古墳築造の展開が踏襲されていることが確認された。

（3）寺内 18 号墳の調査結果

寺内 18 号墳は和歌山市森小手穂に所在し、大日山から南に派生する尾根の稜線上の標高約 48m の地点に位置する。発掘調査の結果、基壇上に 1 段築盛の墳丘を構築する全長約 31m、墳長約 27m の前方後円墳で、基壇面及び後円部墳頂には埴輪列が巡り、前方部基壇上には、埴輪列と墳丘裾の間に据え置かれた須恵器大甕と、須恵器と土師器を入れて埋め戻した土器埋納遺構が確認された。

埋葬施設は、後円部及び前方部の横穴式石室に加えて、新たに前方部東側に箱式石棺を確認した。

出土埴輪の製作技法や形態的特徴、出土須恵器の型式、後円部横穴式石室の石積の特徴から寺内 18 号墳は 6 世紀前半に築造されたと推定される。

6 世紀前半には、寺内 18 号墳と同様の墳長 20 ～ 30m の前方後円墳が、大谷山地区、大日山地区、前山 A 地区などに分布しており、今回の発掘調査において寺内 18 号墳で確認された円筒埴輪と石見型埴輪からなる埴輪列、土器埋納遺構、一墳丘に横穴式石室と箱式石棺が埋葬施設に用いられる事例は、こうした同時期の同規模古墳に共通した様相として見出すことができた。

（4）前山 B 地区の調査成果

和歌山県立考古民俗博物館（仮称）に伴う試掘確認調査では、前山 B 地区の丘陵尾根節及び丘陵裾において、前山 B368 号墳・B369 号墳・B370 号墳・B371 号墳の 4 基の古墳を新たに確認した。

前山 B370 号墳は、直径約 20m の円墳で、横穴式石室玄室床面からは、金銅装馬具及び鹿角装刀子、鉄製装飾付刀装具等が出土した。横穴式石室の型式や副葬品から 6 世紀後半に築造されたと推定され、副葬品や墳丘規模から、付近の万葉植物園並びに花木園地区の古墳群の中で中心的な古墳に位置付けられる。また、前山 B369 号墳・371 号墳は、地形の連続性から、前山 B370 号墳と同様に万葉植物園北付近の古墳と同一の支群として捉えることができ、前山 B368 号墳も花木園東部地区の小支群の一つとして捉えることができるなど、今回確認した 4 基の古墳はいずれも、これまで確認されている前山 B 地区の古墳との関係の中で位置付けることができた。

さらに、前山 B370 号墳から出土した豊富な副葬品からは、6 世紀後半以降の馬具、刀剣、金銅製品の副葬にみる階層性が明らかとなった。

（5） 特別史跡未指定範囲における古墳の分布と位置付け

岩橋千塚古墳群の大谷山地区・大日山地区・井辺地区・寺内地区・前山 A 地区・前山 B 地区のうち特別史跡未指定範囲の分布調査の結果、各地区の古墳の分布状況や墳丘及び埋葬施設の遺存状況、各地区の特徴を確認することができた。発掘調査成果からは、これまでの特別史跡指定範囲の調査において確認されていた古墳の立地や墳丘の構築技術、副葬品及び出土埴輪と共通する特徴が見出せ、新たに 6 世紀前半の小型前方後円墳にみられる共通性、6 世紀後半の中・小型古墳の展開、7 世紀初頭の首長墓及び中・小型古墳の展開を確認することができた。これらは、岩橋千塚古墳群全体での古墳の展開と変遷、階層構造を理解する上で重要な資料となると評価できる。